

東方付喪録

もち羊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷のどこかでとある付喪神が目を覚ました。

本来生まれるはずもなかった梓外の存在である彼女は、幻想郷という梓の中でなにを成したのか。

この物語は後々に編纂される付喪貼の一端でもある。

これはどこかで歯車が狂った幻想郷のお話。

原作とは違う点多々あるかもしれませんが、お許しを。

目次

Second Time.

蓮の花

1

116季 星と春と火の年

池

5

蓮華

12

117季 日と夏と水の年

幻想の管理者

21

吸血鬼異変

24

館の主

31

侵入者

40

大図書館司書

44

解呪

52

破壊の姫君

57

友達なんだ

66

運命

76

異変の終幕

80

118季 月と秋と木の年

招待

90

名前と遊びと

101

紅霧異変

110

闇を司る妖怪

115

幻と現と嘘

124

湖上の妖精と大妖精

133

紅の門番

146

知識と日陰の少女

154

霖と咲と妖	275
魔法の森の騒乱	267
代理役	259
故き友	249
紫の記憶	241
昏睡混冥	232
白玉楼	225
119季 星と冬と金の年 春の章	
Who are you.	219
綺麗な夜空	205
スカーレット・デビル	188
紅霧の王	178
瀟洒なメイド	165

幽人の庭師	285
春雪異変	293
隠されている怪物の正体	303
リベンジャー	314
Dual.	323
幽々子の記憶	341
友達って思ってたんだ	350
死生有命	354
死界と密度	366
ブレイバー	374
思い出の結界	385
蓮華の追憶	401
雪溶け	412

萃香の記憶	421
閉話 悪魔の所業	
墮落しきった吸血鬼	437
何をしでかすか分からない悪魔	
447	
家に帰りたい魔女	455
遊び疲れの紅魔館	466
119季 星と冬と金の年 宴の章	
鬼の証明	476
さいきよーの実力	486
噂	497
人の鬼退治	505
萃う。抱く。想う。	518

白狼天狗	532
天狗部隊	545
清く正しい鴉天狗	560
鬼の狂宴	581
妖怪の皮を被ったナニか	595
小悪魔ミスチーフ	607
フォーオブアカインド	617
正義の味方	631
覚醒	644
ホームクルス	660
宴の前に	676
終わらない因果	684
思いつきり	694

負けてたまるか

—

偽者の饗宴

—

717 707

Second Time.

蓮の花

——己を抑えることと、多く喋らずにじつと構える事は、あらゆる束縛を断ち切るはじめである。

これは、偉大な世尊の教えだ。

今も世尊は多くの人を言葉で導き、律するよう説いている。

そして私はその教えを、世尊のおわす竹林精舎でひっそりと聞いている。

嗚呼、素晴らしき教え。

しかし世尊は自分を崇めたり讃えたりすることを好まない。

『たった一人しかない自分の力で生きる』

それが世尊の最もな願いであり、望み。私達が果たすべきこと。

けれど私はなにも出来ない。だって花だもの。生物としては、生きてはいない。

……生の定義など、私みたいにあやふやで不明瞭なものだけだ。

何度も何度も死を繰り返し、何度も何度も生を繰り返し返した。

しかしそこに器が加わる事はなく、思念そのものとして。生物の抱く念、思慕、思索、

望み、それらを媒介にして存在し続けた。

もし私に生物として命があつたならば。

その命は世尊ではなく、自らの為に使つた。

もし私に手があつたら。

その手は誰かを救う為に使つた。

もし私に足があつたら。

その足は幾多の場を駆け、救い求めし者を捜した。

私は人ではない。世尊の力か、はたまた奇跡か。ただの花に意思が宿つただけの存在。今まではこんなことは無かつたのに、何が変わったのだろうか。

蓮華。世尊の教えに沿つた花。

池の縁で泥にまみれた私を、世尊が拾つて美しい花瓶に差してくれたその日から、私の心は世尊にのみある。

けれど私に命はない。

だけでもし……もしもだ。本当に命が出来て、動けるようになって、喋れるようになって、なつたら……私は『世尊』に伝えたい。感謝を。

今まで架空に近い存在としてしか生きれなかつた私に、姿を与えるキツカケを作ってくれた世尊に想いをぶちまけたい。

……世尊は敬われる事を嫌う。

だから、敢えてこう呼ぼう。

『ブツダ』に、いつか伝えたい。

私は、花という束縛を断ち切りましたよ……と。

ふふ……いつかそんな日が来るのが楽しみだ。

——あれ？　なんだか眠くなってきた。

あ、そうだった。私の地下茎、そろそろ折れそうだったんだ。もう脆いし、拾われてからかなりの時間が経ってるもんね。

私の意思是、どこに行くんだらう。ブツダが怖れたように、この意思があったことも気づかれず、そのまま忘れ去られていくのだろうか。

病も死も老も、花の私にはないけど。でも失って、裏切られて、忘れ去られていくのは物でも人でも同じ。

もし忘れ去られても。もしこの意思が無くなったとしても。私は必ず、自分の意思で今を生きる。

それがブツダの教えだから。

でも。

でも一回くらい、私の想いをブツダに伝えたかったなあ……………。

人間になりたかったなあ……。

私の意識はそこで途切れ、最後に覚えている光景は、私が花瓶から垂れ下がりに落ちていく光景だ。

ここから先の終着点は知らない。

闇に揉まれ、忘れ去られ、その先の樂園まで。

どんな場所に行くかも、どんな世界かも。

私のそのものがあるのかも。

なにも、分からない。

池

116季 星と春と火の年

「う……あ……え……」

激しく喉が渴く。水という命を欲す。鉄のような味が口の中の奥底まで広がって、じんわりとした痛みが喉を焼く。

手を伸ばせ。足を動かせ。生きるために全てを使え。

かきむしるが如く地面を掻き、生を掴もうと何度ももがく。足をばたつかせても、腰に力が入らない。芋虫みたいに身体を引きずって、やつとの思いで進む。

そして少しだけ顔を上げると、ひんやりとした冷たい感触にパチャパチャと顔に跳ねるなにか。

それは私が愛して止まない水だ。生きる源でもある。

「えうう、……あ、んぐんぐ、ヒュ、ぷふあ……」

大量の水がこちらに寄せられる度に、水が鼻孔を塞いで息を詰まらせる。けれどそれは生きるために些細な事へと置き換えられ、私は恥も外聞もなく獣のように水を啜つた。

涙が溜まり、溢れ落ちていく。助けを呼びたくても、何故か心が否定する。自分の力だけで生きろ……と。そういつているかのように。

私がそうやって独りで啜り泣いていると、後ろから重い声が響いた。

『主か、池を荒らす者は……』

「えっ！　なに今の声、誰?!」

驚いて辺りを見回す。誰かがいるって事実から来る安堵と、得体の知れない声による恐怖がごちゃ混ぜで、逃げるなんて気持ちさえ無かった私は大声で声の主を問い質した。

『この池は神聖なる池。それを飲む愚行、冒瀆した主には万死に値する。大人しく腹中で眠れ』

ばか正直に問い質しても、状況が好転するわけでもないのに。

そうして告げられたのはあからさまな死刑宣告。

私の頭は真つ白になって、パニックのまま逃げ出した。

「——っは、っは、っは」

ナニかが追いつけてくる。足音からして、かなりでかい。

木と木の間をスルスルと抜けていき、合間を縫ってたまに方向転換をしながら逃げていく。

それでも、声の主は迷わず私を追ってくるのだ。

木を掻き分け、地を蹴り、恐怖の正体が少しずつ、少しずつ近づいてくる。

走りに慣れていない私の足はすぐに悲鳴を上げて、肺は新鮮な空気を求めようと過剰に稼働し痛みを発する。

「誰か……たす……だめだ、声が……っは……っは、声が出ない……なんで……」

——死になさい——

息も絶え絶え。視界も歪む。口内に競り上がる吐き気を我慢し助けの声を上げようとすると、ストッパーが掛かっているみたいに上手く声に表せない。

——死になさい——

ということは……誰も助けに来てくれないというわけだ。

——死になさい——

背後に気配を感じた。危険とかそんな柔なもんじゃない。まさに死の気配だ。

——死になさい——

あ、終わった………っって思った瞬間、すごく時間が延びて、遅くなつて、恐怖を感じる心さえ無と化した。

けれど生への執着は止まらず。

無と化した死への恐怖と、生への執着の矛盾。

それを埋める為に、私は「界を結んだ」。

『ぬっ小癩な……』

生と死。それら相反する二つの矛盾を解き、絶つ為に内側は生。外側は死と設定し、界を結んだ。

結界は一度界を解かない限り永続的に機能し続ける。だから私がうっかり界を解かない限り、この結果内は安全というわけだ。

そして私は立っている事さえままならなくなり、緑豊かな大地に倒れ込む。

自分がなにをしたのか分からぬまま、意識は消えていく。

危なかった。かなりだ。この小娘、なんとという術を。

大蝦蟇の池を荒らした者を、いつぞやの青い妖精かと思いきや高を括っていたのが裏目に
出たか。

この小娘の桃色の髪、その髪に添えられている蓮の花。通常の蓮よりかなり小さく、
そして異質だ。

こやつ……付喪神か。それも物ではない。花……いやもつと奥底の、なにか異質で恐ろしい物を器として憑いておる……。

多くの魂を看取つてきた我にとつて、この小娘の正体を暴くことは簡単だった。

付喪神とは本来器物……容器や物につく霊のような存在で、怨念から渴望……善から悪までの激しく強い願いや思いで付喪神になる物が多い。そして付喪神になる条件は様々である。

逆に草花や自然そのものに憑く存在を妖精という。それに当てはめるならばこやつは妖精となる。けれど、違うのだ。こやつからは生への執着が感じ取られてしまった。

妖精は元来死に戻りを体現しておる。妖精自体、生そのものだからだ。故に、こやつから死の恐怖と生への執着が感じ取られたのはおかしいことである。

さらば妖怪の可能性もあるが……魂の抛り所が違う。この小娘の魂の抛り所は、実体ではなくなんらかの器だからだ。

大蝦蟇となった身、こんな経験は初めてだ。

この小娘がやったことは、まさに死を与えること。内と外で生と死を分け、内にいる自分には生の状況を固定。外にいる我らに死の状況を固定させたのだ。

このままでは危ないと思つた我は、簡易的なものが自分も結界を張り、その死の状況という限定的な条件を閉じ込めたのだ。

力もまだまだ未熟故に死といつても少し寿命が減ったくらいだが、これが更に力を付けていくと……どうなるか分からない。

今のうちに葬るのが最も吉だが、生に守られている小娘には今の我では手が出せぬ。

ここは報告か。

幸いこの大蝦蟇の池の祠に祀られるは名居守の一族。彼ら天人は死を追い返す存在であるので、最悪名居守様らに助力を頼もう。もしこの小娘が怪物にでも、英雄にでも成ったとしても……その危険性は変わらないのだから。

(ふう……妖の存在が弱まってきた今、こんな異例に出会うとは。妖怪の賢者はどうお考えなさるかおう)

そして、大蝦蟇は元いた池に戻っていった。

蓮華

界を解こう。

「おーい……おーい……」

「んう、んんん、う……」

なんだか気持ち悪い。頭がくらくらして、目が回る。

あれ？　そういえば私はあの後どうなったんだろう。えっと、確か池でなにかに追いかけて、殺されそうになって、えっと、えっと、思い出せない……。

私は殺されちゃったのかな？　なんだかひんやりするし……。

「おおおおおおおーい!!! 聞ーこーえーるー?」

「びぎい!!」

耳もとで大声が響いて、思わず飛び退く。

「誰!? 誰!? えっ 誰!」

「あつ、やっと起きた!」

そこには青と白のドレスを着た、ちっちゃい女の子が元気そうに私の周りではしゃいでいた。

そしてそんなことよりもつと驚く事が。

なんと私生きてる！ 五体満足、なにも失ってない！

もしかして……この子が助けてくれたのかな？ それならお礼しなくちゃ。

とにかく、私はまだこの子の名前すら知らない。だから、最初は自己紹介。

「ねえねえ、貴女名前は何て言うの？」

「あたぃー？ あたぃはチルノって言うんだ！」

「へー、チルノって言うんだ！ 可愛い名前だねっ！」

「ありがとう！ それで、あんたの名前はなに？」

「私？ 私ほえつと……」

そう言えば私の名前ってなに？

記憶が無くてうやむやにしていたけれど、私って一体誰なんだろう？

「私の名前は……ごめん、無いの」

「名前無いの!? ……じゃああたぃが付けてあげるね！」

そう言っと思いきり笑顔を見せてくるチルノちゃん。女である私でも、見惚れてしま

うような笑顔だった。

「えーと……えーと……ん？ 頭に付けてるのつてそれ蓮華？」

チルノちゃんに指摘されて頭を触ると、なんと小さな蓮の花がちよこんとかんざしのように差されていた。私はその蓮の花を見て、なにか心の奥底が満たされるような、それでいてどこか懐かしい感覚に襲われた。

「じゃああんたの名前は蓮華ね！」

「蓮華!? ……うん、うん、すつごく、すつごく良い名前だよチルノちゃん！ ありがとう!!」

そう言つて私はチルノちゃんに抱き着いた。お礼の言葉を身体でも表現したかったからだ。けれど、それは叶わなかった。

「痛っ……」

彼女に触れた途端、寒さと痛みが走つた。それは凍傷に似た痛みで、よく見たらチルノちゃんの身体からは冷気が出ている。

「あつ、ごめんね蓮華！ あたいの体……冷気でおおわれてるから……」

「いや全然大丈夫、うん！ ……それでチルノちゃんは私を助けてくれたの？」

「え？ あたいは蓮華のこと助けてないよ？」

「あ、そうなんだ、ごめんね」

気不味い空気が流れる。今の所チルノちゃんは悪い人ではなさそうだし、取り敢えず

はこの怖い場所から抜け出す道を聞こうかな。それと、私が今いるこの場所のことも聞きたい。

私がチルノちゃんに勇気を出して要望を伝えると、チルノちゃんは笑顔で了承してくれた。……良い娘だあ。

草木生い茂る、暗くて幻想的な森を抜けていく。歩いている時に分かった。ここは私
が知っている世界じゃないって。だって、水滴の滴る葉っぱの元である枝の先にいるの
は、蟻螂や芋虫といったただの虫ではない。

ベッコウトンボ。

現在の日本では既に絶滅危惧種となっており、今ではもう姿を見ることさえ難しく
なっている。

……あれ？　なんで私こんなこと知ってるんだろう。ま、いいや。気にする事でもな
し。今はこの森の外がどうなってるかの方が先決だ。

「それで、この場所はなんて呼ばれているの？」

「んーここは大蝦蟇の池って呼ばれてるんだ。あたいはさつきの池でよく蛙を凍らせて
遊んでるんだけど、あそこの主がとつても短気で、一匹でも凍らせたら怒るのよ！」

「いやそれはチルノちゃんが悪い気が……」

ぷりぷりと可愛く怒るチルノちゃんが言うには、ここは大蝦蟇の池というらしい。と

いうことは、さっきの声はその主の方だったのかも知れない。じゃあ私を見逃してくれたのかな？ ……うーん、考えても分かんない。今度謝っておこう。

「そろそろ大蝦蟇の池を出るわ。蓮華は…どこに行きたいの？」

「どこって言われても、私はまだここら辺りの場所を知らないから…」

「じゃあ霧の湖に来なよ！ あたい、そこに住んでるからさ！」

霧の湖？ っつて場所に、チルノちゃんの家があるみたい。そしてその申し出はとても嬉しかった。家も自分の存在もなにも分らない私にとつて、腰を落ち着ける場所があるのとないのとは勝手が違う。私はチルノちゃんについていく事にした。

草木生い茂る植物の宝庫。それは陽さえも隠し、暗く沈んだような雰囲気を出している。

しかしそのような思いも、霧の湖に来てからはまさに霧散したのだ。

まず目に付いたのが深い深い霧。チルノちゃんはそんな事など気にせずぐんぐん先に進んでいくが、先も見えぬ私からしたら不安しかない。

もし近くに怪物でもいたら。もし近くに危険な場所でもあったら。チルノちゃんが目の前にいるのに、そんな考えがなくなる事はなかった。

「ここがあたいの家、『かまくら』だよー！」

しばらく歩いただろうか。チルノちゃんが突然駆け出し、私も置いていかれないよう

駆け出した直後、チルノちゃんの背に私の鼻が当たり悶絶。何故いきなり止まったかというと、どうやらチルノちゃんの家に着いたかららしい。

氷で造られた半円状の山のような家。チルノちゃんが言うには、それはかまくらと言うらしい。中に入ってみると、幾分寒くなく熱が閉じ込められているのか少しだけ温かい気もする。家具らしい家具は見当たらず、氷漬けの蛙や氷で造られた枕、底に穴の開いたバケツ等が転がっているだけだ。

座つて、と促されて私は氷の床に腰を下ろす。かなり冷たい。

「んーと蓮華はどこから来たの？」

「それが……分かんない。私、記憶を失っているみたいで……」

「じゃあ『幻想郷』の事も知らないの!？」

「げ、幻想郷……?？」

初めて耳にした単語なのに、どこか懐かしい響き。私は幻想郷の事をどこかで知っていたのだろうか。でも記憶が無いし、考えても分からない。

「知らないんだつたら、『幻想郷』について教えてあげるわね!」

意気揚々と意気込むチルノちゃん。彼女が言うには幻想郷とは『博麗大結界』と『幻と実体の境界』によって囲まれた世界の名称で、今いるこの場所も幻想郷であるという。

『博麗大結界』ってどこかで聞いた気がする。どこだったっけ。『幻想郷』の時みたい

に、またはや懐かしい気分にも襲われるが、その出所がどこなのか思い出せない。なんだかとても気持ち悪いな。

「チルノちゃんは何で霧の湖に住んでるの……?」

「あたいが霧の湖に住んでるのは、あたいがさいきよーって事を証明する為よ!」

「……例えばどうやって?」

「あたいの『冷気を操る程度の能力』でこの湖を凍らせちゃえば、きつと皆があたいをさいきよーって認めるはずよ!」

「え、あの湖を凍らせるの!? ……ちなみに今の進行状況は?」

「ゼロよ!!」

ハッキリと断言された。それってまだなにもやってないって事だよね……。

「あー! 蓮華ったらあたいが霧の湖を凍らせるなんて出来ないって思ってるでしょ!」

「お、思っていない思っていない、絶対思っていないよ! ……ちよつと無理があるなあーとは思ったけど」

「思ってるじゃん!」

チルノちゃんが憤慨した。完全に口を滑らせてしまった私が百分悪いんだけども……そうだ!

「ねえねえチルノちゃん！」

「……なによ」

「私も手伝つて良いかな？ 霧の湖を凍らせるの。そうした方が、幾分か作業効率も早くなるだろうし、何よりもチルノちゃんがさいきよーだつてことが通常よりも早く認められるよ！」

「……ほんとに？」

「ほんとほんと!!」

チルノちゃんに私の思いが届きますようにと願いを込めて見つめる。どれくらい時間がたったのだろうか、とうとうチルノちゃんが折れた。

「もー仕方無いわね。分かったわ。蓮華をあたいの子分にしてあげる！ そして、あたいのさいきよーとなる軌跡を側で見しておくのよ！」

「うん！」

何故かチルノちゃんの子分になっていたけれど、気にしない。チルノちゃんと仲良くなり、チルノちゃんのお手伝いが出れば、私は満足なのだ。

そう思っていたその時、湖の方から爆音のような物凄い音が聞こえた。

「なにになに!!? なにが起こつたの!?!」

急いでチルノちゃんと外に確認しに行くと、なんと濃かった霧が薄らいでおり、湖の

中心には紅い血のような洋館がそびえ立っていた。

「チルノちゃん、霧の湖にあんな立派な洋館って建っていたっけ？」

「……建っていなかったわよ。ま、気にせず湖を凍らせましょ！」

「気にしないの!？」

全くもってこの事態に動揺していないチルノちゃん。私よりも数段大人で、大物になる予感がする。

自分となった私は、親分であるチルノちゃんには逆らうべきではないと思い、チルノちゃんの手伝いを始めた。

心の奥底に生まれた、とある充足感の正体からは目を逸らして。

117季 日と夏と水の年

幻想の管理者

その妖怪は独りぼっちだった。

能力故か神にも匹敵すると言われるほどの、例外そのもの。

賢者と言われ、幻想郷を愛し、境界を統べる彼女——八雲紫は、現在幻想郷で起きている騒動にその聡明な頭を抱えていた。

彼女の持つ能力『境界を操る程度の能力』で幻想郷を形作った際に生じる不祥事については、ほぼ予想の範囲内であったが、今回の転移騒動は完全に予想外であった。

「幻想郷はなんでも受け入れる。それはそれは残酷な話……だけれど、これは少し困った事態になったわね」

幻想郷のほぼ中心に位置する霧の湖。そこに転移してきた『紅魔館』と呼ばれる洋館。その紅魔館に住まう吸血鬼どもが幻想郷で燻っていた妖怪達を焼き付けて、今まさに幻想郷に革命を巻き起こそうとしているのだ。

別に改革自体は紫の預り知らぬこと。最初は気にも止めなかった。けれどその改革が、あの館の主が頂点へと君臨する為の足掛かりだと知ったときには、愕然とする他無

かった。

幻想郷の支配。

幻想郷とは妖怪が楽園として住まう場所でないといけないのであって、そこらの妖怪が頂へと君臨し支配する場所ではないのだ。

紫は早急に対策を練るため、一大勢力の一つである妖怪の山の天狗らにこの事態を知らせるも、彼らは不可侵を敷いており積極的に解決はしない模様。友である伊吹萃香も所在は不明。幽々子も仕事が忙しく手を貸せる余裕は無いとか。博麗の巫女もまだ幼く、スペルカードルールもまだまだ考案中であるが為実践に出すのは拙い。

(はあ……私が出るしかないようね)

眠気を押し殺し布団を出る。もう少しで冬だと言うのに何故私がかんな重労働をせねばいけないのか。それもあの吸血鬼どものせいだ。全ての怒りをぶつけてやろう。自分が日和つて一年も様子見を決め込んでいた事は、言外にも匂わせない。

「藍ー」

「御呼びでしょうか紫様」

紫が軽く式神の名を呼ぶと、紫の式神である八雲藍はどこからともなく姿を現した。

「私がない間、結界の管理をお願い」

「承知しました」

もし相手が一度の打倒で大人しくなりそうであれば、スペルカードルール普及の為に尽力してもらおう。

逆に、もし相手が一度の打倒でも懲りずに逆らおうとするのであれば、その時は………

「幻想郷の土に、その首を埋める事になりそうね」

そう言つて不敵に笑う独りぼっちのスキマ妖怪。

けれども彼女が操る力は万力に匹敵す。

はたや吸血鬼。自分の主の力で葬られるであろう館の主には同情を隠せない……と従者である藍はほくそ笑んだ。

紫は扇子を取り出し、なにもない空間に一振り。すると亀裂が生まれ、紫特有の不気味なスキマを生み出す。

「あ、そうだ藍。今日の夕飯は蝙蝠の丸焼きになるかもね」

そのような冗談とも言えぬ微妙なラインを突いてくる笑顔の紫。藍は従者として「感染症の危険等があるためやめて下さい……」としか言えなかった。

吸血鬼異変

「ふうー。この一年でかなり凍らせたよねえ」

あれから一年。私が見る限り、霧の湖の三分の一程度は凍らされた自信がある。まあ私自身はお手伝いと効率性をあげるための計算くらいしかしていない。実質上頑張り続けていたのはチルノちゃん、もう一人の妖精のお蔭だろう。

「うん！ これもあんたのおかげよ、蓮華！」

「ええ!? チルノちゃん、私も手伝ったよ!」

「ごめん大ちゃん忘れてた」

チルノちゃんに忘れられていた不憫な妖精、大ちゃん。正式な名前は大妖精と言われている、霧の湖を私達が凍らせている際に迷惑だと怒鳴り込んできて、チルノちゃんに呆気なく返り討ちにされた挙げ句強制的に子分にされるといふなんとも悲しい結末を迎えた可愛い女の子だ。

緑髪を後ろに結んでポニーにしている彼女がいるのといかないのとは作業効率が格段に違ったので、チルノちゃんの判断は正しいっちゃ正しいのだが、迷惑だという物凄く正当な理由で注意しに来た彼女を働かせるのは、とても申し訳なかった。

「チルノちゃん、大ちゃんを忘れちゃダメだよ。大ちゃんの瞬間移動があつたからこそ、私達はこんなにも早く霧の湖を凍らせれたんだから。そんな彼女をしつかりおだてて利用しなくちゃ！」

「うんそうだった！　ありがとう瞬間移動！」

「私の存在意義瞬間移動だけ!?　あと蓮ちゃん私のことそんな風に思ってたの!？」

「冗談だよ大ちゃん」

「冗談に決まつてるじゃない、瞬間移動」

「チルノちゃん、私の存在をしつかり認めてえ〜！」

涙目になって抗議する大ちゃん。流石に可哀想になつてきたので、ここら辺を潮時にする。

ここ一年で変わった事と言えば、まず私の身長が伸びた事か。以前はチルノちゃんと同じくらいの身長だったのに、既に目線はチルノちゃんを超えてしまった。ついでに私の頭に咲いている蓮も少しだけ成長している。

そしてこれが最もな変化だが……なんと私の能力がある程度判明したのだ。キツカケは私が妖怪に襲われそうになったときだが……それは後述で良いだろう。

チルノちゃんと大ちゃん曰く、『界を結ぶ程度の能力』。簡単に言うくと、条件を定めた結界を創る事が出来る能力だ。私自身まだまだ妖力も未熟で、簡単な結界しか結べない

が、それでもかなり強い能力だ。

「……蓮ちゃんの結界は万能よね。だって条件を満たす者以外入れないんだもの」

そして大ちゃんが指したのは、私がかまぐらの周りに張った結界の外。そこには数匹の妖怪が、今まさに私達を食らおうと結界に歯を立てている様子があった。現在の結界の条件は、内が有用。外が無用だ。私達に必要、有益な存在以外はこの結界を通さないのである。

しかも結界を張っている間は妖力を維持し続ける必要はなく、張る際には自分の妖力を消費しない燃費の良さ。エコって大事だと思う。

「それより、今日はなんだか妖怪が多いよね」

「蓮ちゃんもそう思う?」

「うん。このままじゃ新鮮な水が飲めない」

「気にするところそこなの!？」

「あたいが後でかき氷を作ってあげるわよ!」

「チルノちゃんに至っては全く気にしてない!」

項垂れる大ちゃん。けれど水が主食の私にとっては、水が飲めない事は死活問題なのである。命を大事に。

隣で氷を削り始めるチルノちゃんを横目に、私は湖の中心にそびえ立つ洋館に目を向

けていた。突然あの館が現れて以降、嫌な予感が止まらない。何故だか感じるのだ。目を背けたくなるような、血生臭い雰囲気だ。

「蓮ちゃん、あの館が気になるの?」

チルノちゃんが作ってくれた時期外れのかき氷を食べながら、大ちゃんが私に話しかけてきた。

「うん……なんだか嫌な予感がしてさ……あ、このかき氷美味し」

チルノちゃんが作ってくれたかき氷を一口含む。甘さ控えめの苺味で彩られたかき氷は、何よりもあの館を想起させる。

「蓮ちゃん……気になるのなら、ちよつとだけ行ってみる?」

「え、良いの!」

「あたいも行くわ!」

かき氷を全員分作り終えたチルノちゃんも、同行してくれる事になった。実際あの館の近くは凶暴な妖怪もいて、湖水結の大きな障害にもなっているのだ。

「じゃあチラツと、チラチラツとちよこつとだけ見てこようか」

私の同意と共に、大ちゃんがチルノちゃんと私の手を掴む。これは全員で瞬間移動するための前動作だ。私はこの瞬間が少し苦手なので、目を瞑っておく。

「じゃあ飛ぶよー! ……えいつ」

世界が反転したかのような感覚に襲われ、込み上がる吐き気を抑えていると、いつの間にか館の門前に着いていた。

「館に着いたよ！」

ヤバイ、我慢していた吐き気が一気に込み上げてきた。これは瞬間移動をする度に経験するのだが、どうも慣れない。

うええええと私がえずいていると、大ちゃんがいつもの如く心配してきた。やっぱりこの娘は優しいなあ。癒されるよ。

「大丈夫？ 蓮ちゃん……」

「うん大丈夫大丈夫なんくるないさー」

「なに言ってるか分かんないけど、ほら蓮華、さつきと乗り込むわ！ この館の連中に、あたい達がさいきよーだってこと知らしめるのよ！」

「ええ!! 私と蓮ちゃんの会話じゃ、ちよつとだけ見て帰るって手筈だったんじゃ……」
大ちゃんも驚いているけど、私もビックリだ。いや別に私もちよつとだけ中に入ろうかなーとは思ってたよ？ でも近くに来てみると分かる。これアカンやつや。

私の警告センサーって言うのかな？ それが警鐘を鳴らしてるよ。さつきからずつとね。多分中には思いもよらぬような化け物や化け物や化け物なんかがいるはずだ。うんきつとそうだ。そうに違いない。というわけで帰ろーつと。

「チルノちゃん、私忘れ物したから帰りまぶぶぶぶぶ」

「蓮ちやああああああん!? 溺れてる、溺れてるよ!」

私が帰ろうと後ずさつたらそこは既に湖でしたまる。……つて助けてええええええ

!!! 水は主食だけど、泳げる訳でもないし、なにより私飛べないから! 死んじやう!

死んじやう!

「待つてて蓮ちゃん! 今助け——」

「私の手に掴まれ、妖精」

そして溺れて足掻いている私の前に差し出された大きな手。必死な私は咄嗟にその手を掴む。すると、まるで鯨にでも引つ張られたような大きな力で引き上げられる。

「ゲホツゲホツ、その、ありがとうございま——」

私がお礼を言おうとすると、口へひとさし指を当てられて途中でどもつてしまう。

「いや、礼は要らないよ。それと今からこの場所はとても危なくなる。あなたみたいな妖精は避難してなさい」

私の事を妖精だとも思っているのか、その人は諭すように忠告をした後、優しく私の頭を撫でてくれた。

これは惚れる。この名も知らぬ女性が、とても格好よく見えた。そう思えるほど、その一連の動作が板に付いていた。

「紅美鈴、参る！」

彼女が堅牢な門を肘で軽く押したかと思うと、門を支える壁ごと大きく空中に舞った。

「つ、強ー……」

私が呆然としている内に、紅美鈴と名乗った女性は館に向かつていく。

「ねえねえ蓮ちゃん、今の人格好良かったね〜」

「うん……つてチルノちゃんは？」

「あれ？ チルノちゃん？」

ま、まさか。まさかまさか。そう言えば私が溺れている時に、彼女だけなんのリアクションもなかった。一年で分かった事だが、チルノちゃんは決して友達を見捨てない友達思いの子だ。ノーリアクションなんてありえない。ということは導きだされる真実は一つ。

「チルノちゃん……まさかもう館に入っちゃった？」

館の主

ヴラド……と。我は吸血鬼の真祖からあやかつてそう名づけられた。

18世紀半ばから始まつた産業革命。イギリスから始まつた技術革新により、科学を元とした時代が幕を開けた今、我ら吸血鬼の居場所は無かつた。

それは19世紀になつても収まらず、徐々に人間は恐れの対象を無くし、我らの地位を脅かした。

もうどうすることも出来ぬと気づいた時には、時既に遅く。人間の革新の魔の手は、我ら吸血鬼の首もとまでの侵入を許す。齡400にも満たない幼い我が子らは幼稚で、それでいて我の力の及ばせぬ範囲まで力を伸ばし続けていた。

妻が亡くなつてから何百年経つだろうか。お前が生きていたならばと考えぬ日はいつだつてない。

もう人には勝てぬ。……と認めねばいけない。けれど、我の心中を渦巻く闘争本能とプライドがそれを許さない。

そして我が子の妹の方は力の使い方も未熟で、危険度も振りきれている。

懸念は懸念を呼び、我はどうとう強硬策へと出た。まずは自らの屋敷に潜む鼠の駆除

ないし、我以外の者の隷属。そして産まれたばかりの我が子の妹の方である、フラン
ドール・スカレットの幽閉。姉と大図書館の司書は最後まで反抗していたが、首に繫
がる隷属の枷で黙らせた。

そして最後……噂にも聞いていた、古今東西の妖が集まる幻想郷への転移である。

館と子孫、使用人らと使い魔全ての転移は骨が折れるが、不可能ではない。我は人を見限り、幻想郷への転移を成功させる。

ここには強き種族もいるらしいが、幻想郷に敷かれた大結界の効果により力が弱まっている者らが大勢いた。我はそのような境遇の者を扇動し、革命を起こすつもりだ。

時折無粋な妖がこちらを観察しているが、手を出さぬなら対策を打たずとも問題ない。もし手を出したとしても、あの程度なら勞せず組敷けるだろう。

時は一年経ち、そろそろ革命の時。

幾多もの妖を従え、此度この幻想郷に吸血鬼の恐怖を充満させよう。

先ずは私の館に忍び込んだ虫どもを始末するでしょう。既に館内に侵入を許しているのは二匹。妖精が一匹と妖が一体。そして門前から侵入したのが妖精一匹と……誰だコイツ。妖怪でもなく妖精でもなく、最も存在が近いのは付喪神だが、本質は少しだけ違う。……まあいい。妖力は雑魚のそれに近く、少しの神力も備えているが、それも微量だ。気に止める存在でもない。

我は王の椅子に控える使い魔の狼の頭を撫でる。

なんとも平和な夜だ。嵐の前の静けさとはこの事だろうか。

「今日は良い日だ……」

「ええそうね」

「スコル、侵入者を殺せ。コイツは私が相手取ろう」

スコルと呼ばれた狼の使い魔は、自らの影に姿を潜ませ消えた。侵入者を追っていたのだろうか。

「あらあら、私のような少女ではダンスの相手にご不満かしら」

一年前から監視していた妖怪が、姿を現す。思っていたより見た目は若く、思っていたより飄々としていて、思っていたより……脆弱だ。

「ぬかせ。老練な大妖怪よ。それで、何用か？」

「それは洒落かしら。それとも……本気？」

「洒落に見えるか？」

「ふ、ふふ。悠久の時を過ごした吸血鬼様は、思ったより視界がお狭いようで。良い治療処でも紹介致しましょうか？」

ソイツは扇子で口元を隠し、薄く笑う。胡散臭い言葉は、コイツの為にあるかのような笑いようだ。

「それで大妖怪よ、気は済んだか？ 我は本当に分からないのだ。王たるべき我を、そのような脆弱な力でどうかしようとしてしているその精神が」

「あら、他者の精神など計れるものではありませんわ」

「クツクク、貴様がそれを言うか」

「言いますとも。何故なら私は一妖怪。他との距離は毎度の如く気を使っております故」

「どうもダメだ。話を逸らされ奴のペースに乗ってしまふ。これでは時間稼ぎをされているだけだ。早急に決着をつけねば。」

「ふむ、罅があかん。早々殺しあおうぞ」

「奇遇ですわ。私も元からそのつもりでしたの。……ですので、このような贈り物を」

そして、驚嘆。奴が口元から扇子を下ろした矢先、ナイフの刃先が既に目の前まで迫っていた。

「ぬおっ！ ……くく、面白いな」

「椅子からは動かぬよう。忠告は致しましたわ」

瞬間、両端にリボンが結ばれた、内部に幾つもの目玉がこちらを覗く亀裂が姿を現す。それらは私の座る椅子を囲むように開いており、その目玉が向く先から向く先へと死角は一切ない。

だが、その程度。なにをやつてこようと我には無意味。我は片腕を刃に変え、奴に斬りかかった。

するとなんとという事だろう。我の腕が跳んだのだ。断面は綺麗で、なにかの道具を使つて斬つたかのような歪なものではない。そしてついで飛来するのは、目玉から放たれた鈍色に光る銀の弾丸。

我は華麗な足のステップで全てをかわすと、そのまま奴の顎に向かつて蹴りを放つ。……がしかし、そこには奴の姿はない。我の足は空を切ると思われた矢先に、腹へと重い痛みが走る。

それは杭。出所は足下の亀裂からだ。本体もここから姿を消したのだろう。

そう感づくと、耳元で囁くような声が聞こえた。

「《全てを二つに別ける物》」

その声が聞こえた時、身体が軽くなった。そして下半身から抜けていく、回転する剃刀のような物体。

擬態。

思い浮かんだのはこの単語。

擬態とは他の物に似せること。この大妖怪は弱者に己を似せていたようだ。こんな簡単な事も分からぬとは。我も惚けたものよ。

下半身と片腕を失つてなお、私の心中は穏やかだった。何故ならこの妖が強敵だから。私の闘争本能全てを余すことなくぶつけても、しかと受け止めてくれるだろうと確信したから。

「くふふ、ふ、ハツハハハハハハハハハハ！」

「驚きすぎて我を失つたかしら？」

「愉快愉快、実に愉快。この攻勢、不利にあらず。最も望んだ攻勢なり。然れば長年熟し続けたワインを飲み干すより甘美！」

「……《至るところに青山あり》」

スキマがヴラドの頭上に現れ、何本もの卒塔婆をその脳天に突き刺すが、ヴラドはこれと言つてダメージを受けた様子はない。

これではダメか……と脳内で悪態をつく紫。彼女自身、この一年をぐうたら寝て過ごしていた訳ではない。とつくにヴラドもとい吸血鬼の弱点は把握済みである。杭や卒塔婆の先にはニンニクを塗り込み、聖なる力も付与済み。銀の弾丸に至つては避けられたが、まだ弾薬は数十とある。十字架は揃えていないので杭で代用した。

それでも尚、ヴラドは倒れない。吸血鬼の耐久力を紫は侮っていた。

(罅があかないのはこっちの方ね)

スキマにより切断したヴラドの右腕も既に完治しかかつており、《全てを二つに別け

る物』で切り取った下半身も、半分以上再生している。

(細切れか……なにか日の光を当てるか……)

思考に意識を寄せたその瞬間、紫はヴラドを見失ってしまふ。

「……………ツツ！ 《ラプラスの魔》！」

瞬時にスキマが全方位同時展開。目標のヴラドをサーチするが、見当たらない。

「一体どこに……………いえ、まさか……………っ！」

「まさかのまさかだ。吸血鬼は影に潜む。足下には気をつけた方が良いでしょう。」

眼を爛々と輝かせたヴラドが、紫の足下に広がる影から顔を覗かせる。突然の事態に固まる紫。舌舐めずりをしながら、図体の割に素早い速度で近接。鋭利な爪を紫の首もとに食い込ませ……………ることは出来なかった。

「……………あ？！」

ヴラドの腕は途中から消えてなくなり、そこには澄ました顔の紫が軽く笑みを讃えていた。

「残酷な方法を思いついたわ。それはそれは素晴らしい方法よ」

ヴラドの視界が闇に包まれる。それは闇と形容するにはあまりにも不気味な空間だった。

「……………少しだけネタばらしをしてあげる」

どこからともなく声が響いた。それは紫の声であろうが、発生元が分からないというだけでこれだけ不気味に映るものなのか。

《ラプラスの魔》とはフランスのとある数学者、ピエール・シモン・ラプラスによる提唱された超越存在のことよ。彼が言うには、全ての物質の力学的状態と力を解析出来る知能があれば、その知能を持つ存在には未来さえ見通せるらしいわ。まあ、今に至っては不確定性原理によって否定されているけれど」

「……それがどうした」

ヴラドにとつては、そんな意味も分からない理屈よりも今の状況を教えてほしかった。紫はそれを理解していないのか、理解して尚なのか、ヴラドを焦らすように話を続ける。

「私の使う《ラプラスの魔》は、自動で特定の動作を行う機能と、ある程度の観測能力を持った式の一種。貴方の腕が消えたのも、その内よ。もし私から一定範囲内に物体が近づいたら、自動でスキマを展開するようプログラミングされているの」

「それで……？」

「貴方の腕が伸びきった直後、再度プログラミングが働くの。それはスキマの収束。いわゆる境界の断裂ね。空間と空間を隔てる境界が閉まったことにより、中にあつた貴方の腕は跳んでしまったってわけ。ネタばらしは分かっちゃおうと意外と単純よね。私

も私で演技するのは疲れたわ」

わなわなと肩を震わせるヴラド。そんな姿を見て、紫は笑いが止まらなかつた。

「ふ、ふふふふ、貴方が今いる場所を教えてほしいの？」

「——ッ！ さつさと私の居場所を教えろこのババア！」

「あら口が悪いわね。そんな貴方には首からごろん♪」

スキマが閉じられた。この行為によりヴラドは理解するはめになる。

ここはスキマの中だと。そしてその境界は……ヴラドの首だ。

「話している最中に、両腕両足陰莖全臓物全てにスキマを開いたわ。これで自由自在に貴方を殺して、甚振つて、苦痛に顔を歪ませられる。ではまず窒息から行きましょうか」

その一言がキツカケだった。ジョキンと気管が切られた音が、耳目に響く。

ヴラドに訪れる地獄は、まだまだ始まったばかりだ。

侵入者

紅美鈴。彼女が紅魔館を襲撃したのは他でもない。自らが管理する霧の湖に我が物顔で陣取り、周囲の妖怪に迷惑を掛けていた事に憤慨した。それだけである。

温厚な彼女は最初はこういうこともあるだろうと我慢はしていた。けれど他の妖怪を扇動し、今夜幻想郷を襲撃しようとの噂を聞いてしまったら、飛び出さずにはられなかった。

水の上を気で固めて渡り、着いたのは血で塗られたかのような紅色の館。そんな異質な空間が広がっている中、目に止まったのは更に異質な光景だった。

「妖精……?」

緑髪と桃色の髪 of 妖精と思わしき人物が館の前にいたのだ。桃色の髪 of 妖精が勢いよく後ろに下がり、そのまま湖に落下した。パニックに陥っているのか、飛行を忘れて溺れているようだ。

なにか考えるよりも私の足は駆け出していた。助けようとする緑髪の妖精を遮って、代わりに手を差し出した。

「私の手に掴まれ、妖精」

「ゲホツゲホツ、その、ありがとうございま——」

「いや、礼は要らないよ。それと今からこの場所はとても危なくなる。あなたみたいな妖精は避難してなさい」

礼は本当にいらなかった。私はただ目の前で溺れていて、放っておけなかっただけ。もし私が見ていなければ、助ける事さえなかったのだから

大きくそびえ立つ堅牢な門の前に立つ。これなら肘撃くらいで崩せるだろう。

「紅美鈴、参る！」

足と腰に捻りを入れ、最小限にまで簡略化した踏み込みの後に肘撃が放たれる。その威力は妖怪そのものの筋力と合わさって、まさに大砲のような威力を発した。当然それをまともに受けた門は無事であるわけがなく、天高く舞うのを視線の端で確認した。

門を破った先で確認できたのは、大量の魑魅魍魎。数多の妖怪が荒れた庭園を闊歩している光景だ。

「忠告します。あなたたち、即座に退きなさい」

敢えて丁寧な物言いが気に障ったのか、一つ目の筋骨隆々な妖怪が近寄ってくる。

(警戒しなすぎだ……そこは私の間合いだぞ)

強い踏み込み——地面に靴痕が残る程の震脚で即座に接近。間髪入れずに靠撃を実行。相手の体勢を崩し、がら空きになった足下を足先で打ち込む。浮いた相手にはそ

のまま下突きを叩き込んで地面に沈める。

それだけの一工程を近くで見た魑魅魍魎ども。場が意気揚々としたものから静寂へと様変わりした。

「殺されたい者、気絶したい者、閻魔殿に会いたい者、全員掛かってこい。嫌ならば道を空け、自分の棲みかに帰れッツ！」

大声で一喝。それだけで集結していた妖怪達は、ぞろぞろと門から出ていった。興が醒めたのかもしれない。

けれど全員つて訳じゃない。幾つかの力が強い妖怪は残っていた。

「あなた達は帰らないのかしら？」

『ぐふ、ぐはあ。笑わせてくれる、小さき者よ。我は蛇の王。これしきの脅し、怯むわけがなからうて』

それに釣られ、他の妖怪も砕けた笑いを浮かべる。これほどの妖怪程度、遅れをとるわけがない……と、驕りが垣間見えそうだ。

(馬鹿め。私は忠告はしたぞ)

『取り敢えずは頭蓋を砕こうか、それとも……その綺麗な脚から喰らうてやろうか！』

目にも止まらぬ速さで、蛇の王とやらは私の脚に食らいつこうと地を這う。それを跳躍で回避。自身の気を操り気血を脚に運搬、脚を硬質化。踵落としの要領で両足共々叩

き込む。

『いでえ！ てめっ——』

「穿弓腿」

片手で身体を支えながら、天に向かって蹴り上げを放つ。蛇の王とやらの顎が上がった際に狙い、相手の落ちてくる位置エネルギーを利用した発勁を見舞った。

その一連の動き、動作、全てが綺麗であるにも関わらず、その殺傷力は計り知れない。現に蛇は白目を剥き、そのまま地に伏してしまった。

『ぐ、くそ……』

他の妖怪が歯を噛み締める。

美鈴は強い。その認識が改まったからだ。

「今なら逃げても見逃すよ？」

『な、なんだとお！ 我ら気高き妖怪に向かって、そんな愚弄を申すか！ 貴様、生きて返さん！』

「うーん、逃げれる時は逃げるべきだと思うけどなあ」

そして数分後、庭園には妖怪らの気絶した山が築かれていた。

大図書館司書

紅魔館内にある大図書館の司書、パチュリー・ノーレッジ。彼女は今横にいる青髪の妖精を見てげんなりしていた。

「これも、これも、これも、たつくさん本があるわね！ この中にあたいがさいきよーになれる本は無いの？」

「無いわよ。それに有ったとしても、あんたみたいな妖精じゃ読むことさえ叶わないわよ」

パチュリーは頭を抱えていた。どうにかしてこのアホ妖精を追い返せないかと。

「ねーねー！ この本、あたいが凍らせようとしても凍らないわ！ とつても不思議ね！」

「私が本に魔法を掛けているからよ。ほら、満足したでしょ？ 私は今日忙しいの。さっさと出ていって」

パチュリーは親友のレミアアとの相談の元に、今夜隷属の呪いを解こうと試みているのだ。紅魔館の主ヴラド・スカーレットは、数多もの妖怪を集めてこの幻想郷を襲撃しようとしているらしい。隷属の首輪を掛けられていれば、それに駆り出される事には有

無を言うことさえ出来ない。どうにかしてパチュリーは、親友と共に自由を勝ち取りたかった。

(レミイ……ちよつと無理かも)

心の中で弱音を吐くのは幾度目だろうか。今回はアホ妖精のせいだが、当の妖精はそんなパチュリーの気持ちさえ分らない。

「ねーねー！ 色んな言語で書いてあるけど、これなんて書いてあるのー？」

「それは魔法言語よ。はあ……ほら、冷気を操るのならこんな本はどうかしら」
そう言つて手渡されたのは一冊の本。

「ぜ、ぜぜ、『絶対温度』？」

「冷気を操るなら、その本を読めば幾分か今後の役に立つかもしれないわよ。その本はあげるから、もう帰つて二度は言わないわよ」

「はーい！ これであたいのさいきよーへの道が一步近づいたわー！」

パタパタと冷気を降らせながら、図書館から出ていくアホ妖精を尻目にパチュリーは再度作業に取り掛かる。

「はあ……レミイ、居るのは分かっているわよ」

「よく分かつたわね。流石パチエ」

パチュリーが座る机の下から出てきたのは、この館の主であるヴラド・スカーレット

のご子息、レミア・スカーレット。『運命を操る程度の能力』という聞いて反則のような能力を持つているレミアだが、使ってみてと言って使ってみて見せた場面を一度も見たことが無い。

「居るのは分かっていたけど、まさかそんな所から出てくるとは予想出来なかったわ」

「これもまた運命よ。それでパチエ……解析は済んだ？」

「掛けられている魔法の種類と、その解き方まで分かったわ」

上出来じゃない、とパチユリーを褒めるレミア。だがパチユリーは険しい顔をしたままだ。なんせ掛けられている魔法や解き方が分かったとしても、全てが解けるかは話が別だからだ。

それに、問題はまだあった。

「レミイ、聞いて。この隷属の首輪には四つの魔法が掛けられているの。一つは隷属。二つは伝令。三つは絶命。そして最後が、これらの内一つでも解いた形跡を感知した途端に、ヴラドへと情報がいく感知の魔法よ」

「へえ……パチエは幾つ解ける？」

「もって一つね。この短期間ではこれが限界よ」

「それじゃあ感知の魔法を解こうにも……」

「そう。隷属は解けないからこの首輪を外す事は出来ないわ。隷属を代わりに解いたと

しても、ヴラドに信号が行ってすぐさま絶命の魔法でも発動するでしょうね」

パチュリーの頭を唸らせる原因はこれであった。一つしか解けない。それもなにもこの隷属の首輪がかなり強力な魔法で出来ているからだ。レミリアによると、ヴラドの妻が作ったものらしい。なんとも端迷惑な夫婦である。

「じゃあ……フランは。フランはどうやって助けるの！ 私、見たのよ……フランが地下牢の中で一人お腹を空かせているのを……」

（お腹を空かせていたのは、レミイがフランのご飯を落としたからでしょ……）

レミリアの顔には悲壮が漂っていた。それもそうだろう。自分の妹が産まれた時から幽閉され、それを直に見ていたのはなにを隠そう、レミリアなのだから。

「……最悪、悲観することはないわ。幻想郷にはきつと強力な力を持った妖怪がいるはず。その中の誰かがヴラドを倒してくれれば……」

「パチュエも知ってるでしょ……お父様の実力」

パチュリーもこの紅魔館の図書館司書をする身、何度もヴラドの力を見てきた。破壊力の点で言えばフランドールに軍配が上がるが、ヴラドは吸血鬼にあるべき弱点という弱点が無いのだ。直射日光の下でも一日くらいは活動でき、流水やニンニク、聖水や炒り豆さえ無力化されてしまう。銀を含んだ武器であってもだ。

そして、特徴的なのがその再生能力。腕を切っても下半身を飛ばしてもものの数秒で

元通り。それは脅威以外の何物でもない。

(私達にはどうしようもないって言うの……?)

目先も、背後も真つ暗闇。レミリアと想いを共有しても、それは緩和されることはなく。ただただ無意味に時間が過ぎていった。

「ちよつ、チルノちゃん! まつ、待つて!」

「待たない!」

「ええ!」

二人が暗くのし掛かる未来に憂いでいると、突然図書館の扉が吹き飛ばされた。

(今度は誰……?)

頭痛がした。目眩がした。埃も酷いので喘息もあつかした。次々と起こる急展開。今日に限つてなんて厄日だと思ふ時間さえない。

砂埃が地を這う中、そこから出てきたのは華人服とチャイナドレスを合わせた服装を着る、燃えるような赤髪の美少女だ。

赤髪の女性はキョロキョロと辺りを見渡すが、特に用は無かつたのか入つてきた場所から帰つていく。

「ちよちよちよちよつと待ちなさい!」

病弱である事を忘れて、パチュリーは駆け出していた。

あなたは誰？

あなたの目的は？

無意味に扉を壊したの？ バカなの？

頭の良いパチュリーの事だ。掛けるべき言葉と選ぶべき疑問は既に選出し終えてい
る。けれども、彼女の本音はその中にはない。義務化しロボットのような模範的疑問
と、それを聞く口はいつもの如く發揮されるはずだった。

「お願い……私達を助けて……」

口から出たのは、それだけだった。どんな顔をしているか、今の自分には分からない。
産まれた時から魔法使いとして生を受け、幾度も魔を探究し、探求し、親友を授かり、苦
難が訪れ、そこから抜け出る術もない自分を何度呪った事か。

レミイだけでもいい。彼女をこの呪いから解き放ちたいと望んでいた。

「私達、ずっとこの首輪を付けられて隷属されているの」

「……………」

「この館の主、ヴラド・スカーレットを倒さないとこの首輪は解けないわ」

「……………」

「凄く身勝手な願いだって言うのは重々承知。でもお願い……私達を助けて」

「パ、パチエ……」

レミリアが駆け寄った。

見ないで欲しい。こんなみつももない姿は、あなたにだけは見られたくないから。

「……そのヴラドって方はどこにいるか分かりますか？」

「多分、お父様の事だから最上階よ」

「分かりました。私に任せなさい」

優しくそう答えてくれた人の顔を見ようとしたけれど、何故か視界がボヤけて見えな
い。

「あー、えつと……可愛いお顔が台無しよ。ほら、これで拭いて」

手渡されたのはなにかの布。これで顔を拭けと言うことだろうか。私を手間取つて
いると、代わりにその人が顔を拭いてくれた。視界が晴れてどんな人かと思えば、ただ
の優しそうな人だった。背は高いけど身体は華奢で、どこに扉を吹き飛ばすような力が
あるのか分からない。

「さて……お邪魔が入ってきましたね」

すぐさま反転、近くの本棚に近寄っていく。

「わわわ、待って！ 私達は敵じゃないよ！ ね、チルノちゃん」

「大ちゃん、あたいを止めないで。あの人はあたいをさいきよーだつて見定めてこつち
に来たのよ……ということ、あたいにちよーせんする気ね！」

「なわけないよ!!」

「その妖精二人、ちよつと頭を低くして」

命令通り頭を低くする大妖精。チルノは頭を上げようとするが、力ずくで押さえている。

風が難いだ。妖精二人の背後に近づいて、今まさに襲おうとしていた狼を、美鈴は蹴りで一蹴したのだ。

大妖精にとつてここまで速い蹴りは見たことが無かった。無かった故に……思考が追いつかず、代わりとして冷や汗がどつと背中を濡らす。

影から姿を現した狼。その目は紅く輝いており、殺意も十分。すぐさま首もとを食いちぎろうとしてもおかしくはない。

「私、ワンちゃん大好きなんですよ。しっかり遊んであげるの、掛かってきなさい」
美鈴の一言が始まりだ。そして、終わりでもあった。

美鈴の首もとに向かって跳躍する狼。それを美鈴は腕を廻して軽くないなし、空いた顎へ掌打。更に胴体へ三連撃を叩き込み、流れるような動作で尻尾を掴んで地面に振り下ろした。

キヤイン、とひ弱な悲鳴をあげ、狼は影に溶けるように消えていった。

解呪

「ひいひい！ 二度も助けて下さりありがとうございます！ ありがとうございます！」

「なによ、あたいならもつと速く倒せたわ！」

騒ぐ妖精二人を尻目に、美鈴はパチュリーとレミアに振り返った。

「今の妖怪、なんだか分かります？」

「……多分、お父様の使い魔ね。それを倒すなんて、凄いなと思うわ」

「いえいえ、それほどでも」

照れる美鈴に対して、パチュリーは静かに彼女を観察していた。魔女としての洞察眼、それは他人の保有する魔力量までも把握できる。

（……魔力がほぼ無い。妖力も少ないみたいだし）

驚くべき事は多々あるが、自分の弱味を見せてしまった関係上それを深くつつく事は、パチュリーは愚策だと断じた。

「その、あの、美鈴さんとそこのお二方は知り合いなんですか？」

緑髪の妖精が赤髪の彼女に聞いた。どうやら狼を倒して見せた彼女は、美鈴という名前らしい。覚えておこう。

「いや、知り合いじゃないよ。ちよつとカクカクシカジカで」

「いや分かんないです」

「そこにいる二人ともに隷属の首輪が嵌められていて、それを助ける為にボスの居場所を聞いていたところだつて!？」

「チルノちゃんなんで分かるの!？」

「どうやらあのアホ妖精、一部始終でも見ていたのかもしれない。ということはあるの恥ずかしい光景も見られていたのだろうか。確かそう言えば、美鈴が扉を破壊する前にこの二人の妖精の声が聞こえたような……」

「でもその隷属の首輪って言うんですよね。それって首に付いているんですか？」

「ええそうよ。ほら」

レミイが自身の首に付けられている首輪を妖精に見せる。細く美しい首に、鬚髯の装飾がされた禍禍しい首輪があるのはとても不釣り合いだ。

それをまじまじと見ている妖精。なにか思いついたのかアホ妖精に人の首ほどの氷柱を作らせる。

「うーん、こうすればどうかな？」

妖精がレミイの首輪に手を触れる。

すると一瞬の間を置いて、レミイの首から先程の禍禍しい首輪が無くなった。

「あ、出来た！」

「え？」

「え」

いや、ちよつと待って。全く理解が出来ない。え、今なにが起こつたの？

見たところアホ妖精が作つた氷柱に、私達が嵌めていた首輪が嵌められている。ここから考えられる事は、一瞬で全ての魔法と呪いを解いて氷柱に被せたか、なんらかの能力で氷柱に移したか。氷柱に移した理由から、後者か。

「あ、そちらの方のも外しますよー」

「あ、え、うんよろしく」

そして妖精が私の首輪に手を触れた途端に、レミイの時と同様首輪が消えて氷柱に移される。

妖精を侮っていたけれど、こんな能力を使う奴もいるのね。少し舐めていたわ。

「これで二人の問題は解決しましたね。では私はこの館の主にちよつとばかし文句を……」

「あたいもいくー！」

「ちよつとチルノちゃん！ 迷惑だよ！」

彼女らはヴラドの元へ向かうようだ。では私達はフランのところへ向かうとしよ

うかしら。横にいるレミイを見ると、早くフランの元へ行きたくさうにうずうずしている。

そんな時、緑髪の妖精が声を掛けてきた。どうやらなにかを捜しているようだ。

「すいません、えっと、私くらいの身長で桃色髪の女の子を見ませんでしたか?」

「いえ、見ていないわ。それとあなた……名前は何?」

「私に名前はありません。強いて言えば大妖精ですよ。……そうですか、見ていませんか。蓮ちゃんどこに行っただらう。迷ってないかなあ」

大妖精と名乗る妖精は、蓮ちゃんなる人物を捜しているようだった。首輪を解いてくれたお礼として、もし見かけたら声を掛けておこう。その旨を伝えると、ありがとうございませう、と大きく頭を下げてお辞儀した。あのアホ妖精と違って礼儀正しい子なのだと分かる。

「レミイ、それじゃあ行くわよ」

「うん、分かったパチエ」

「あのーすみません」

今から良いところなのに、それを邪魔するが如くまた声が掛けられた。声を掛けてきたのは先程の美鈴と呼ばれている人物。

「館の最上階ってちよつと分からないので、どちらか案内してくれませんか?」

……その要望に、私はレミイと目を合わせる。レミイの目は強かった。それは今まで見たことも無いほどに。

はあ。私が折れるしかないようね。頑張つてねレミイ。フランを、あなたの妹をしつかり連れ戻すのよ。フランの能力なら、首輪の魔法を解除する必要もないものね。

レミイにそれは伝わったのか否か。けれど彼女はしつかりと頷いてくれた。

私の親友ほど頼もしい存在はいない……と、こういうときに強く思える。

破壊の姫君

誰か助けて下さい！ なんでもしますから！

窓も一切ない紅い館で一人ごちる。私が溺れた騒動から少し時を進め、門の中にととう侵入した時は気絶するほど驚いた。なんと明らか強そうな妖怪がぞろぞろと大人しく門から出ていったのだ。すわっ！ これはヤバイ。なにかあるぞ！ と思つて中の様子を大ちゃんと呼うと、案の定やばかった。

なにかヤバかったつてそりやああれですよ。私を助けてくれた格好いい女性が、沢山の妖怪をちぎつては投げ、掴んでは殴るを繰り返していたんですよ。ええ、そりやあもう目を疑いましたね。私、別世界に来ちゃったかな……つて。

まあそれが真実だ、トゥルーだ、と現実逃避をして赤髪の妖怪さんと合流。館の中に入った訳ですよ。そりやあね、私こういうときは好奇心旺盛でね？ ついつい誘われちゃったわけですよ。あ、なんか凄く嚴重な扉があるーつてね。

私自身こういうときは樂觀的になりました。どうせあの真面目な大ちゃんや赤髪のお姉さんがいるんだし、あの二人は私がいけないことにとつくのとうに気づいているだろうと。

現実には全然気づいていなかったんですけどね！

更に先へ進んで暗い暗い地下への階段へと差し掛かった時、我に還りましたわ。あれ、私迷子じゃんってね。

迷子の名誉奪還秘技の一つである『元来た道を遡って、親を捜す』って行為。実行したけどどこにもいませんでしたね。泣きそうになったよ。

それで今は迷子の名誉奪還秘技のもう一つの技、『同じ場所に留まる』を行っているわけですが、一向に大ちゃん達捜しにこないね。もう私のこと忘れちゃった？ 友情ってそんなに薄いものだった？ そしてとうとう痺れを切らし、最終奥義である『取り敢えず先に進むか』を選択しているわけ。

一応可視と不可視の条件を付けた結界を張っているわけだけでも、この地下への階段めちやくちや怖い。なにが怖いつて、一段一段踏み締めるごとにカツーンと響くの。明るくて大勢でいるときはそんなこと気にならないけど、一人の時はめちやくちや怖い。もうこれダメだ。足がすくんじやう。お家帰りたい。

あーあーあーあー！ 一人でモノローグっぽいことやってても超怖いー！ もうあれだ。自分の目に結界張るか？ いやでも失敗したら怖いな。私は基本チキンである。怖すぎて自分の性格が崩壊してる気がするけど、気ーにーしーなーいー。

そうだ、歌でも歌おう。多少怖さは揺らぐはずだ。

あるー日ー、森の中ー、アルプス一万尺ー、歩こおー!

いや自分でも音痴って分かるわこれ。しかも歌詞が意味不明だし。

うへえ、とうとう階段降りきつちやったよ。この先灯りないよ。直進ルートだよ。絶対なにか出るよ。なんだかダツシユするべきだと使命感が湧いてきちやったよ。

スーパー蓮華ラン、開始だね!

「うペああああああ!!!」

奇声を上げながら長い長い通路を駆け抜ける。暗いし怖いし私のテンションもおかしいし。というか息切れ激しいし。私こんな体力無かったつけ。ヤバイ、運動しなきゃ。

恐怖から視線を下にして歩いていると、壁にぶつかる。どこかのことわざで、猫も歩けば棒に当たると言うし。あれ? 猫だったかな? まあ良いや、さてさて特になにも無かったことだし、帰りま「誰?」ぎいやあああああああああいやああああああああああお助けええええええええええ「きやつ、ちよつと、いきなり大声を——」ええええええ! 食べないでええええええええええうべべべべべべべべべべガク。

悲しきかな。意識がブラックアウトしていく。床に向かって倒れていく中、私は気づいた。

壁かと思つてたら、あれ大きな扉やん……。

辞世の句がそんな悲しい一言にならないように、と祈るばかりである。

ハッ、シユワット！ 目を醒ますと、周りは人形、人形、人形しかない事に気づく。どうやら私は怖さのあまり気絶して夢を見ているようである。

その証拠に、ほら。大きな天蓋付きベッドの上で、煌めくような黄色の髪をショートにした女の子が今なお可愛い熊さんのお人形を引きちぎって遊んでいる。……つておいおい、私の見る夢結構物騒だね。ここのところストレスが溜まっていたのかもしれない。

いや待てよ。ここは夢の中ということは何してもOKじゃないか？ うんそうだが、きつとそうに違いない。ということでも私も混ぜてく。

「あら？ あなたもお人形遊びするの？」

「うん！」

女の子がやるかどうか聞いてきたけど、すかさず『はい』。有無を言わさない『はい』。女の子は嬉しそうに近くの人形を渡してくる。よし、これをギツタンギツタンに……あ

れ？ よく見ると繋ぎ目がある。

「そのお人形、一回私が壊しちゃったの」

「あ、だから繋ぎ目が……」

「お名前を教えてください？」

「私の名前？ えーつと、蓮華だよ」

「じゃあ蓮ちゃんね」

わーい蓮ちゃんブームだー。ぶつちやけ蓮ちゃんってあだ名を気に入っている私がいる。ハッ、これって……恋？

「じゃあ、あなたのお名前は？」

「私の名前はフラン。フランドール・スカーレットよ」

「じゃあフランちゃんね！ よろしくー！」

友達三人目、ゲットだぜ！ このままいつて、私はフレンドマスターを目指してやる……。

そんな事はさておき、フランちゃんは次々とお人形を引きちぎっていく。はらわたの代わりである綿が、無惨にもベッドの上へ散乱していった。

「ねえねえ蓮ちゃん」

「なーにー？」

「なんで人間って人形じゃないのかな？」

おつ哲学か？ まさかこんなに幼い子が哲学を営むとは。いやちよつと待て。ここは私の夢。いわば私の精神世界。ということはフランちゃんは幻であり、私が創った存在でもあるのだ。無から有は作り出すことは出来ない。ということは、彼女の存在は私の妄想と経験、性格から生み出されている事になる。彼女が哲学を営むのは、私の妄想世界という性質上当然なのかもしれない。

結論、私って頭良い！

「うんうん、なんで人間が人形じゃないのか……。それはね、人間が心を——」
「だって人間はすぐ壊れるもの。人形だったら良かったのに。人形だったらすぐ直せるしね」

「——へ？」

まてまてまて、ウエイト。ちよつと論点というか話の軸ずれてない？ あれ？ 意外と私って話通じない子だったつけ。

「壊しても壊しても壊しても壊しても壊しても収まんないの。つまらないの。楽しくないの。この人形も……とつてもつままないツツツ!!」

彼女が強く人形を握る。すると耳が痛くなるような破裂音が部屋一杯に響いて……。フランちゃんが握った手を開くと、そこには木端微塵となった人形の成れの果てがあつ

た。

「あれ、ちよ、ええ……?」

「ねえねえ蓮ちゃん……」

あ、これヤバイ。なんかヤバイ。というか今思った。これ絶対夢じゃない。夢だったらこんなに冷や汗かかないもん。

「蓮ちゃんは人間? それともお人形?」

「妖怪です。………多分」

「じゃあ殴るね!」

「なんで!」

「だって妖怪って強いんでしょ?」

「そりゃあ強い妖怪はいると思うけど……弱い妖怪もいるわけ。当然殴られて無事じゃない妖怪も「えいつ」あべし! ……ってちゃんと話聞いてよ!」

地味に痛い。なにこの子。俗に言う反抗期ってやつ? やだ怖い奥さん。無闇に暴力振るうのはいけないことだって親から習わなかったの!?! まあフランちゃんの親の顔見たことないけど。

「あれ? 目ごと潰したハズなんだけどなあ……。蓮ちゃんって目、ある?」

「失礼な! ちゃんと二つ、顔に付いてるから! ホレホレくホレホレく」

「ずびし」

フランちゃんを目潰し。蓮ちゃんに効果はばつぐんだ。

「目が、目がある。ちよ、ほんとに痛い！ これ絶対充血したって、いやほんとだよ？」

「なんで壊れないの？ 蓮ちゃん不思議♪ キヤハハハハ」

いや笑いすぎだろ。こちとら目がめちやくちや痛いんだぞ？ 乙女の顔が台無しな

んだぞ？

むかしむかし誰かが言った。左の頬をぶたれたらアッパァ。目潰しされたらやり

返しなさいって。

ということとで怒りの目潰しくらえええええ!!!

「おりゃあー！」

ひとさし指と中指をフランちゃんの目に突き刺そうとすると、目に刺さる前に掴まれ

た。あらやだこの子、動体視力スゴい。

「そうだ！ 目が無かったら本気で殴れば良いんだ！ よし、どーん」

「ちよ」

身に残る防衛本能が発動でもしたのか、使いたくなかった結界を使用する。それも最

近使えるようになった生と死の結界を。

マズイ！ このままだとフランちゃんが死んじやう。

発動する結界を止めようとしたけど、これまでの運動不足が祟ったのか全く間に合わなかった。

外は死。内は生。そう指定した結界はいつものように展開し、必ず生の状況下にいれる私にはフランちゃんの拳は届かないはず……だった。

「これ邪魔！」

パリンと音がして結界が破られる。あれ？ ——と拍子抜けする暇もなく、私の顔面にフランちゃんの拳がめり込んだ。

友達なんだ

ああ、壁ってこんなに柔らかいんだ……。

壁を突き抜けながらそう思った。

いやこんなどうでも良いことは頭から排出。特筆すべき点はフランちゃんのパンチ力だ。こりやあ世界狙えますぜ兄貴イ。

というかなんで殴られたの私。あまりに理不尽過ぎじゃない？

ねえねえ神様、DMって知ってるー？ 痛みを快感に変えられる方々の事を言うんだよお。つてんなわけあるか。超痛いわ。鼻血もドバドバ出てるし、眼球からも出血したのか視界も真っ赤。多分三半規管もやられた。だつて意識あるのに立てないもん。……ごめん結構適当。このセリフ言ってみたかっただけ。

くそ、友達かと思つたら敵だった。なんて悪女。まさに悪魔。この鬼畜。あ、なんだかふわふわする。現在ふわふわタイム入ったよこれ。

「ぐ、ぐふ……負傷と治癒の結果」

外は負傷。中は治癒。顔を主に治療中。

完全治癒まで掛かる時間は目測、予測で12秒。

うん！ 余裕で数回殴られちゃうね！

どうしようかなあ。一つだけ打開策はあるけど、あの結界は結構殺傷力あるからなあ。生死の結界よりエグイと思う。だって死の状況って言ったって、死にやすいつてだけでなにもされなければほぼ無害だし。それに対して、もう一つの結界はほぼ確実に機動力を奪える。というか下手すりゃ簡単に人を殺せる。

力は強いと思うけど耐久力があるかどうかは分からないし、フランちゃんのような幼い子は傷つけたくない。よって希望としては傷つけず無力化したい！

砕けた扉の破片から、砂埃と共にフランちゃんに姿を現す。背には虹色の宝石を付けた羽を広げて。パツと見なんの妖怪か分からない。それよかフランちゃんってきれいだなあ。

「あ、生きてた。やっぱり妖怪って頑丈ね！」

「ちよつとー、まずはいきなり殴った件に関して質問したいんですけどー」
「なんで殴つちやダメなの？」

こてんと首を傾げる姿、超可愛い。けれどこの小悪魔に騙されてはいけない。油断したら最後、昭和のガキ大将といじめられっ子のような関係になってしまう。ここはしっかりと自分の意思を伝え、主張することが大事だ。慈悲は無い。

「まず殴る以前に妖怪として人として、倫理ってのが大事で——」

「倫理なんて習ってないから知らない」

「うびー！」

話に興味がないのか、問答無用で殴ってきた。私は避ける為に咄嗟に結界を解いたが、まだ顔に痛みが残っていて、その痛みがこれが現実なんだと脳に理解させる。脳があるか知らないけど。

「話は聞くものだよフランちゃん」

「そう。私は常識も習ってないから知らない」

「あびー！」

完全に話を聞かないモードのフランちゃん。話に興味がないというより、これは私に興味がないパターンだ。うわ悲しい。私のなけなしのコミュニケーション能力では、フランちゃんに意識を傾けさせる事さえ出来ないのか……！

そして彼女の世界を狙えるパンチを二発ともかわす私。逆にこれってスゴくない？ 私の回避能力も世界狙えるんじゃない？

「ふっふっふ。フランちゃん、私にはその拳止まって見え「うりやつ」あべぱつ！ ちよ、ちよちよちよ、タンマ、タンマ、私にひと度時間をくだ「ていつ」うぺあ」

全然避けれてなかった。というより、もろに腹と顔に食らった。しかしそれは幼女のパンチ。初速も遅く、くらった私でも数m吹っ飛ばされて血を噴き出す程度しかダメー

ジが無い………つてめちゃくちゃダメマジ入つてますがな。誰だよ幼女のパンチつて言つた奴。出てこいよ。あ、私じゃん。

ピクピクと痙攣する私。ギャグ漫画表現であつてほしいけど、そんな都合の良い展開じゃなかった。

クソ、傷つけずに無力化なんて甘い考え持つんじゃないやなかった。翼から見るとフラッシュは妖怪。多分死にはしない。よし、本気出すか。

「身体ピクピクしてるー面白ーい♪」

「う、うう……」

本気出すと言つてもまず立ち上がるところからだ。身体中が重く、息もし辛い。くそ。くそ。こんな幼女にバカにされていて良いのか私！ 立つんだ、立つんだ、立つんだ、立つんだ、立つんだ！

足に、脚に、腰に、腕に、魂に力を込めて立つ。口の中に広がる血を、唾として吐いた。鼻の中は仕方ない。身体中痛いなあ。でもだんだん慣れてきたよ。

流れ出る血は幾つ流したのである。

流れ出る痛みは誰が付けたのである。

流れ出る怒りは、慈しみは、誰が消せるのである。

ああ、素晴らしきかな。世の条理。

血も、痛みも、怒りも、慈しみも。全てが合わさって、私が出来ているのだから。容赦なんて要素はない。私は心を鬼にして界を結ぶ事を決意した。

……フランちゃん、すぐに止血して治療してあげるから、ちよつとだけ我慢してね。かなり痛いから。

「蓮ちゃんって凄いいよね。今まで一番遊べる相手だわ。でも長い時間部屋の外にいると、お父様にもお姉様にも怒られちゃうし、そろそろ殺そうかな」

「大丈夫、二人には見つからないよ。小刻みにして隠しておくから」

「……それはどういう意味かしら？」

「そのままの意味だよ」

「へえー。面白いこと言うね。うん、気に入った。私のお人形にしてあげる。斬り刻んでも四肢をもいでも臓物を食らいつくしても生き続ける……そんな存在にしてあげるわ!!」

フランちゃんがどこからか炎の剣を取り出した。いやそれを炎と形容しても良いものか。熱くもない。暑くもない。けれど全てを焼く。まさに破壊を体現したかのような剣だ。

では私も対抗しよう。フランちゃんの破壊に対して、私は結界。結界には二種類あつ

て、空間上にその効果を顕すものや、障壁として展開出来るものまで。チルノちゃんのかまくらに張つてある結界は、後者の障壁展開型だ。

そしてもう一つ、分かっている事がある。一年考察をし続け、答えを出した解。

結界で最も反映されるのは、結界内の条件だ。生死の結界だって、結界外には死にやすすくなる状況、場合を与える可能性があるという効果に対して、結界内では生の状況を確定させる事が出来るのだ。

そこから導き出されること。それは、結界とは現在ある世界に上書きをして、新しい世界を作る事ではないということ。

そう。結界とは、世界を切り取つて自分だけの固有領域を創ることであり、拡大解釈をすれば一つの世界を創る事でもある。

上書きなんて脆いものではない。まさに結界内とは私のものであり、私が神として存在出来る世界。

外と内で生じる齟齬。さて、これらが合わさった時に、とある一つの結界は絶大な威力を発揮するのである。

「フランちゃん、ごめんね。私は貴女のお人形にはなれないの」

「うん？　なんで？」

「だって私とフランちゃんは名前を教えあつて、一緒に遊びあつた。そう、友達、友達よ」

「へえ、じゃあ蓮ちゃんもフランは友達ね。で、それがどうかしたの?」

「……友達は人形じゃない。人間でも、妖怪でも、神でもない。両雄同士が認めあった、特別な関係。どんな種別でも関係ない、身分差もない、生死も存在しない、特別な言葉の結界だよ。お互いが認めあって友達になれば、そこに上下関係も遠慮もなく、片方が死んでも友達という結界はほどこけない」

「じゃあ友達ならフランのお願い聞いてよ」

「じゃあ友達なら断らせてよ」

「面倒ね。友達って」

「面倒で不純物な関係を背負うからこそ、その間に情や怒り、慈しみや規律が生まれるんじゃないかな」

フランちゃんが構えた。私を殺す気だ。話し合いによる和解は無理……か。

「そんな不純物、私は要らない。必要ない。孤独はもう慣れたの。私がすることは一つだけ。全てを破壊して、蓮ちゃんをお人形にすることよ。戯れ言も喋らない、悲鳴を奏でるだけのお人形にね!!」

「私は離さないよ。だって友達だもん。もし近づいてきたら、フランちゃんがどんな姿でも、どんな種族でも、どんな妖怪であったとしても、優しく抱き締めてあげる」

「やってみなさいよっ!!」

コマ送り。頭に過った言葉。多分フランちゃんは私を殺すために全力で全速力を出した。

それがフランちゃんの想い。フランちゃんはこの一瞬だけだけど、私の事をしっかりと考えている。どうやって殺そうか。友達って何。蓮ちゃんと友達になりたかったな。どうしてこんな事に。

この極限状態。フランちゃんの想いは強く、深く、私に突き刺さってきた。私も友達として、彼女に応えねば。

そして私はとある結界を、三つ作り出した。それはフランちゃんの両足、炎の剣を持つていない方の腕に展開され、その威力を發揮した。

「——あれ？」

フランちゃんの両足、片腕がまるでハムの加工工程の如く、綺麗に切断されたのだ。

私が張った結界。それは『動作と固定の結界』。内部は固定で外は動作。

通常、人間でも妖怪でも筋肉や魔力を通してストッパーなるものが存在する。身体の許容限界を超えぬよう、いつでも機能している便利な能力。

結界内に入ったフランちゃんの両足片腕は、結界内の条件である『固定』に従って、動きを一切止める。しかし外は動作を強要した。それによって起こる齟齬。いわばストッパーの許容限界までも超えてしまうのだ。

ストッパーが壊れたら後は簡単。千切れるだけである。よってフランちゃんの超高速と突然の固定という条件が合わさって、フランちゃんの両足片腕は切断されたのだ。

まあフランちゃんの全身を覆って固定する手もあったけれど、相手の全身に作用するために相手は止められるだけの魔力も必要で、フランちゃんは力が強いから部分的に展開が精一杯。

でも、まだまだ。私はフランちゃんの想いに応えたいとは言えない。

即座に切断された三ヶ所に二重の結界を張る。流血と止血の結界。負傷と治癒の結界だ。三ヶ所の同時展開に加え、更に六つの結界を展開した私には妖力など残っておらず、フランちゃんの攻撃をかわす事は出来ない。

フランちゃんの炎の剣が、私の右肩に入っていく。豆腐に針を通すような、そんな感触だ。一瞬他人事のように思っていた。血は蒸発し、肩には激しい痛みも加わるが、私は歩みを進めた。

どんな物が突き刺さっていても関係ない。だつてさつき約束したもん。

私はフランちゃんを抱き締めた。

戸惑いと困惑、そして何故避けなかったのかと疑問が浮かび上がっているその表情。まさに泣きそうな顔であったフランちゃんを、思いきり抱き締めた。

「ね、ほら。言ったでしょ。抱き締めるって。これが私とフランちゃんの、友達の証だ

よ」

この世界に元から悪人で生まれてきた存在なんて存在しない。妖怪も人間も、元は赤ちゃんみたいに素直で純粹だったのだから。それが周りの環境、場合によって善にも悪にも変化していく。

それにさ、フランちゃんみたいな綺麗な涙を流せる女の子が、悪人や狂人なわけないのさ。

私と抱き合っている彼女は、今だけは妖怪や人間、神でもなく。ただの寂しがりな女の子で………

私の友達なんだ。

運命

胸騒ぎがした。それも飛びつきりの胸騒ぎ。……なにか拙い事があったのかもかもしれない。早くフランの所へ向かわなきや。

レミリアは館の中であるにも関わらず、羽を広げて飛翔した。

フランが幽閉されているとされる地下室までもう少し。

レミリアは朝昼晩の三食をよくフランの元へ持っていつている。給餌係とも言われるそれは、妹の為ならばと思ひ積極的に引き受けていた。

フランの部屋は人形で溢れていて、常に暗い。明るさに関しては吸血鬼の弱点上仕方がない所はあるが、人形の方はレミリアには受け入れる事は出来なかつた。

可愛い人形ならば、レミリアも気に入っていた。可愛い人形ならば。

部屋に溢れ返っているのは、いずれもはらわたが引き出されている人形達。それも禍禍しい物から、人の内蔵が入っている物まで様々だということだ。

気が触れている……と周囲には言われているが、その言葉を聞きたびにレミリアは言いようもない不安と憎悪に心中が満たされる。

誰があの子を幽閉したと思うんだ。

お前らはフランと接したこともないくせに。

勝手な事を言うな。

494年も幽閉されていたフラン。産まれた時からずっと、あの地下室で独りぼっち。それが勿体無くて、悲しくて、姉としてとても複雑な気分だった。

「フラン……無事でいて」

後は次の曲がり角を曲がるだけで、地下室に続く通路が見える。レミリアは一分の望みを賭けて、曲がり角を曲がった。

「お姉様！ 蓮ちゃんを……私の友達を助けて!!」

途端に呼ばれたのは、お姉様という一人の人物しか呼び名。まさかと思つて近寄ると、そこには地下室にいるハズのフランが、私と同じくらいの女の子を抱き抱えていた。よく見ると、フランの方も片腕と両足を怪我している。だが吸血鬼の治療力で治癒は始まっているようだ。血が飛び散っていないのが不思議だけど。

「……ッ！ フラン、なにがあつたの。説明して！」

「それが、私のせい、私のせいなの！」

顔を泣き腫らして出てきた言葉は、『私のせい』。直感的になにがあったのかを理解できた。それに、抱き抱えられた女の子の肩には、レーヴァテインが突き刺さっているではないか。

顔も至るところが血濡れで、腹部には大きな打撲傷。そして厄介な事に、今もなおレーヴァテインが女の子の肩を焼いていて、女の子の肩の肉は今にでも千切れそうだ。

「フラン、貸しなさい。お姉ちゃんがなんとかしてあげるわ」

フランから女の子を受けとる。血の気が引いていて、すぐに処置を行わないと拙い事はすぐに分かった。

「……フンッ！」

レーヴァテインの刺さる肩を、根本ごと切断。血が吹き出るまでに、刹那の猶予が与えられている。吸血鬼とは、鬼の力と天狗の素早さを持った最強の種族。刹那の猶予など、レミリアにとっては十分過ぎる時間だ。

肩に刺さっているレーヴァテインを抜き、切り口を焼く。肉を焦がす匂いが辺りに広がるも、血は出なかった。初めてやってみたが、意外と上手くいったようだ。

取り敢えず化膿や失血は避けた。これ以上の処置は私には出来ない。近くに有能なメイドが入れば……と思わんばかりである。

「フラン、落ちて着いて。致命傷は処置したわ。これで一応大丈夫だとは思う。そして、お

姉ちゃんになにがあつたのかをゆっくり説明してくれないかしら？」

フランは泣きながら、何度も頷いた。

494年、一度も地下室以外で関わらなかつた二人。姉妹の溝は深く、修復にも時間を要するだろう。しかし、この日を境にしてそれももう終わる。

姉妹の邂逅。それは望んだ形ではなかつたけれど、二人の心に少しばかりの安息をもたらした。

異変の終幕

「あら、遅かったわね」

館の最上階。ヴラドが居るハズの部屋には当のヴラドの姿はなく、代わりに大人びた美女が一人佇んでいた。

その妖怪の正体に、パチュリーとチルノ以外の人物が驚嘆と畏怖の声を上げた。そのあふれでる妖気。自らの強さと妖怪としての自負に満ち溢れた、堂々たる姿。けれど口元に浮かぶ怪しき笑みは絶えない。

美鈴はその妖怪を知っている。

大妖精は、その妖怪について聞き及んでいる。

曰く、賢者。曰く、幻想郷の母。曰く、最強の妖怪。

全てが噂の域を出ないデマだと思っていた認識は、彼女の姿を一瞥しただけで正しいのだと思い知らされた。

八雲紫。幻想郷に住む者らが、一度は聞いたことがある名。

「……幻想郷の賢者様が、いったい何用でここに？」

美鈴が緊張の抜けきらない声音で聞いた。

「賢者がこんな屋敷に居てはダメかしら？」

「いえ、そんな事は……」

「そうね……役者が足りないわ。呼び出しましょう」

彼女が話を止め、扇子を何も無い空間に一筋振るう。すると、そこから二対の可愛らしいリボンが現れ、徐々に距離を空けていく。間には一本の黒い筋。紫が合図すると筋がぱつくりと開いて、中から三人の少女が飛び出してきた。

「レミイ……！ それに妹様……！」

「蓮ちゃん!? 腕が……」

「蓮ちゃん！ あんた達、蓮ちゃんになにをしたあー！」

三者三様の驚きを見せる。その中にはチルノも入っていた。

チルノは激昂する。それもそうだ。いなくなつた蓮華をいざ見つけたら、なんと腕を切断され身体中血塗れの傷だらけだったからだ。お世辞にも頭が良いとは言えぬチルノ。友達を傷つけたのは、レミリアとフランだと決めつけるにはさほど時間は掛からなかつた。

……そしてそれは隣にいる大妖精も同じである。彼女の方は幾分か落ち着いてはいたが、シヨックは隠せない。

「蓮ちゃんを離せえーっつっ!! 『ヘイルストーム』!!」

それ故、普段チルノの制止役を買って出ている大妖精の反応が遅れた。チルノは身体中に電を纏わせ回転。小規模の竜巻を生み出す。しかもその竜巻は、チルノお手製の固い電入りだ。常人がくらえばひとたまりもないだろう。

……常人ならば。

「きゅつとしてドカーン……」

フランがチルノの竜巻の目を握り潰す。その一工程で儂くも竜巻は消散してしまった。それでもチルノは諦めず突貫する。フランもチルノに応じ、レーヴァテインを取り出そうとしたところ、レミリアらを呼んだ張本人である紫自らが制止の声を掛けて、一旦この戦いは終幕となる。

「待った。私は子供のお守りに来たわけではないの。それでは要点だけ告げるわね。……この館の主は私が葬ったわ。よってこの時点で、王はそこにいるレミリアよ。異論はないわね？」

「へえ……私の名前を知っているのね」

「下調べ済みですわ。それで、話はこれだけではないの」

……紫の口から告げられた父親の死。不思議と喜びも達成感も、ましてや落胆さえ抱かなかつた。胸中にあつたのは、まあこんなものかと少し納得する感情。元からレミリアも、父親が幻想郷という数多の森羅万象が跋扈する地を治められるとは思っていない

かったからだ。

少し前までと考えが違う気もしたが、レミリアはそんなこと気にしない。思ったもの、言ったもの勝ちである。

レミリアが話の先を促す。

「現在の幻想郷は、妖怪の力の弱体化が顕著に窺えるの。人と妖の共存。そこから来た食わず食われずの関係。元来妖怪とは恐怖の象徴でなければいけないのに、その恐怖が人間の深層心理から薄れてきているの」

「それで、私達はどうすれば良いのかしら」

「話が早くて助かるわ。……今から約一年後、この幻想郷で異変を起こしてほしいの。それも特別なルールを用いてね」

レミリアは心底おかしいと思った。幻想郷を、はたまた妖怪の為に尽力するこの妖怪が、まさか自分から異変を起こせと言っているのだから。しかしその方法は、幻想郷の新参ものである自分達こそ一番利用がしやすく、理由が付けやすいが為だろう。

「で、そのルールとは？」

「スペルカードルールというものですわ。詳細は後ほど」

「それで……その異変は誰が解決するのかしら？」

「ふふ、まさかそこまで思慮が及んでいたとは。少しレミリア・スカーレットを侮ってい

ましたわ」

八雲紫の舐め腐った態度に少し機嫌を悪くさせるレミリア。しかし怒ってはいけない。紫がしているのはお願いではなく要求。

今回の騒ぎを起こして、今後とも幻想郷に居住したいのであれば……という脅しをかけてきているのだ。

それに彼女が明確にした幻想郷の問題点。そこから彼女の考えている事は、ある程度推測は出来る。

「……『博麗の巫女』。そう呼ばれている人間がこの幻想郷にいるの。その子に異変を解決してもらおうわ」

レミリアの頭の中で、予想できた事が確信へと変わった。

ようは妖怪代表として、彼女は命じているのだ。あまり危険性はないが、かなりの迷惑が掛かるくらいの異変を起こして、妖怪の危険性と恐怖を人間達に呼び起こせ。そして博麗の巫女を使ったマッチポンプで、人と妖怪の関係を元に戻せ……と。

「それは殺してはいけないのだろうか？ 人間相手に、なんとも不自由な戦いを強いるものだな」

「いいえ、流石に殺してはいけないけれど存分に負かして貰って構わないわ。逆にその方が良いかもしれないわね」

「ほう……ならば精一杯戦うとしよう。その博麗の巫女とやらを殺さない範囲でな」
「ええ。存分に」

用は済んだとばかりに、紫は自らが作ったスキマに入っていく。そして目を細めながら、悪戯をする子供のように告げた。

「戦うとは言ったけれど、貴方達が行うのはごっこ遊び……だけれどね」

レミリアは聞かなかった事にした。今だけは言葉遊びなどをしていいる暇と余裕が無かったからだ。

いつだって世には理解できぬ者がいるのだと、自分に納得させてその件を終わらせる。

背後で、パチエが回復魔法をさっきの少女に掛けている。フランも妖精も、その様子を魅入っていた。

レミリアはその様子を一瞥した後、王がいなくなった椅子を一度撫でる。そこはシミで一杯で、長年椅子が泣き続けたかのように汚かった。

「今日は良い夜なのかしら……」

もう少しで月が沈み始める頃、一人呟いた。そのぽつりと口から出た一言を聞いている者は、気配を消していた美鈴以外いなかった。

「きつと素晴らしい夜ですよ。今日は月も綺麗ですし」

「そう、……そうなのかもしれないわね」

499年間、泥の中を這いずり回っているかのような気分だった。時には苦しみ。時には泣き。時には絶望もした。そんな苦痛の499年間が、こんなに簡単に解き放たれ自由になってしまった。

これで良かったのだろうか。私達は、本当に救われたのだろうか。それは多分……永遠に分から「分かりますよ」

美鈴が心を見透かすような一言を放った。

レミリアはその横顔に、一瞬釣られてしまう。

ああだめだ。これではこの妖怪のペースに乗せられてしまうのではないか。

けれど口からはなにも出てこない。

「分かりますよ。きつと。救われたって思う日が必ず来ます」

「そ……それはどんな根拠よ」

「勘です」

「勘……!? ふ、ふ、ふふふアハハハハ！」

「な、なんで笑うんです?」

期待してた。同時に侮蔑しようとしていた。そんな確定的な根拠などあるはずもない未来の出来事に、この赤髪の妖怪がどんな解答を出すか。どうせ手垢だらけの偽善で

取り繕うのだと。そう予想していた。

それが勘。勘で答えたと言うのだ。それが笑わずにはいられるか。

初めてだ。そんな事を言った奴は。そして、納得もしていた。未来は確定など絶対しない。だからこそ未来を信じる為には、同じように不確定の根拠で信じねばなるまい。この妖怪の一言は、ある意味最も的を獲ていた。

「妖怪、名前は？」

「まず相手に名前を聞くときは、自分からですよ？」

「む……そうだったな。私はレミリア・スカーレット。夜の王よ。では妖怪、再度聞くぞ。貴様の名前は？」

「おお、初対面時より王の風格が付いてきましたね。これはしつかりと答えねば。……

私は紅美鈴。この湖の管理人です。本日は私の家の上に勝手に転移してきた貴女方へ、文句を言いに来ました。私の家を返してください」

「それは困った……。流石に私と言えど、館ごと転移するほどの魔力は持っていない。そうだなあ……代わりを用意するというのはどうかな？」

「家次第です」

「貴様、身体は頑丈か？」

「頑丈ですとも」

ここまでで、ある程度の関門は超えた。美鈴の方も既に分かっていることだろう。これから私が告げる言葉を。その自信満々な顔を見れば分かる。

「では、この紅魔館の門番……をやってくれないか？ 部屋も、食事も用意しよう。それに「ええ、喜んで！」……返答が早いわ。これじゃあ台無しじゃない」

「良いじゃないですか。それで、私はレミリアの事をお嬢様とでも呼べば良いですかね？」

「ん。慣れないけど、まあ良いわ。それと……」

美鈴が首を傾げた。クソ。これも分かっている癖に。ならば逆に堂々と言ってやろう。下手に出れば美鈴の思う壺だ。

「美鈴、私の友「分かりました！ 引き受けましょう！」……だから返答が早いってば!!」
「ふふ、レミリアお嬢様は可愛いですね。では今後とも、門番として、友として、宜しく願いますね」

そう言つて、美鈴は照れ臭そうに笑いながら握手を求めてきた。私は一瞬逡巡した後、手を握る。

その手はとて、温かかった。

「ねえお姉様！ 蓮ちゃんが目を覚ましたよ！ 早く、こつちこつち！」

反対の手をフランに握られ、私は蓮ちゃんと呼ばれる人物を中心とした輪の中に入れ

られる。当然握手をしていたため、美鈴も一緒だ。フランに促され、私と美鈴はその場に座った。

ふと横を見る。

隣でフランが喜んでいた。

隣で美鈴が微笑んでいた。

向かいでパチエが満足げだった。

妖精二人は、蓮ちゃんやらに泣きながら抱きついていった。

蓮ちゃんもやらも、笑っていた。

皆が皆、なにかに満たされていた。

……なあんだ美鈴の奴。貴女の勘、当たるじゃない。

「……今日はつくづく良い夜ね」

「……？ なにか言いましたかレミリアお嬢様」

「……いいえ。なんでもないわ」

今日くらいは私も笑おうかしら。……なんてね。

118季 月と秋と木の年

招待

やつべー。超憂鬱だ。どれくらい憂鬱かっていうと、私の頭の上に咲いている蓮の花がだれるくらい憂鬱。

事の発端は例の吸血鬼異変が終わって一ヶ月後。なんと紅魔館の現主であるレミリアから招待状が届いたのだ。内容はなんだったつけか。えーっと、ああそうだそうだ。

確か『人間を拾ったの。それもとっても可愛い娘よ！ 賢いし吸収も良いしうちの館のメイドに教育しようと思うんだけど……あなたも見に来ない？ 勿論チルノと大ちゃんも一緒よ！』との内容だった。

その手紙に対して、いつの間にか私やチルノちゃん、大ちゃんとも仲良くなって、紅魔館の主はコミユル豊富で将来が楽しみだなーと老人の如く感想を述べていたら、気づいたら夜になってたの。

いや嘘とか超能力とか、そんな高尚なものじゃない。もつと、そう、うん。まあ正直言うとう普通に寝てただけだね。完全に夜までグースカピーときたもんで、約束をすっぽかしてたってもんよ。

その……謝ったよ？ 真剣に土下座までしたさ。フライングまで頑張ったさ。けどね、約束をすっぱかして謝りに行ったときのレミリアの泣きそうな顔が、頭から離れんわけよ。

それで冒頭に戻るんだけど、実は今日もまた招待状が届いたんだ。内容は今年に起こす異変の打ち合わせについて。これは私が気絶してたから後で聞いたんだけど、どうやらこの幻想郷を統括するお偉いさんの命令でやらねばならぬらしい。紅魔館も大変だなと思いました。

そして手紙には寝坊するなどの文面も書かれていて、あ、これ行かなアカン奴や……と感じて大ちゃんとチルノちゃんと共に、現在紅魔館へ向かっている途中です。

霧の湖は既に半分近く凍らせていて、歩いて紅魔館に迎えるほど進捗した。それと身長も5cmほど伸びたのである。多分今は135cmくらいかな？ チルノちゃんが私を見上げるようになり、妖精の中でも比較的高身長の大ちゃんも超えてしまった。どうやら私の中に眠る成長期ってやつは、まだまだ暴れたりしないようだ。

ぶつちやけ湖を凍らせているついでに気づいたんだけど、霧の湖って意外と小さいのね。昼間に湖を覆う霧のせいで凄く大きく見えていたけど、よく見てみたら一周するのに一時間も掛からないくらいの大きさだ。

「はあ……ふう……今年の夏も暑いねえチルノちゃん」

隣で額の汗を拭う大ちゃん。その可愛い容姿余つてかとても絵になるう！

反対にチルノちゃんは少し疲れている様子だ。まあ夏だもんね。氷の妖精には辛いモノがあるよね。でも暑いなあくらいで済ませるチルノちゃんって、結構凄いなと思うんだよね。

私？ 私は三人の中で一番バテてるよ。うわ情けない。

なんやかんやてんやわんややっている内に、立派な館の前に着く。今日も門番の美鈴さんはグースカピーだ。あれ？ なんだかデジャヴが。

「美鈴さん？ おーい美鈴さん」

「はいはい起きてますよ」

いやどこのボケ老人だ。

「取り敢えず通つて良いですかね」

「既にお嬢様から許可は頂いております。中へどうぞー」

美鈴が門を開けてくれた。吸血鬼異変から一年近く経つた今、美鈴も門番としての意識と板は付いてきたと思う。それに、彼女も毎日楽しそうだ。

門から入ると、館の入り口までに大きな庭園が広がっている。その庭園は初めて来た時のような荒れ果てたヒヤッハーの面影はなく、色とりどりの花が咲き乱れる綺麗で落ち着く空間となっていた。

この庭園を管理しているのが美鈴というのだから、彼女が普段寝ているだけではないと分かる。

庭園の周りでは妖精メイドがばたばたと飛び回っており、そんな妖精メイドに対して仕事に精を出しているなあと感じる。これを社畜と言うのかもしれない。

「あの子達、大変そうだけど楽しそうね。あたいも混ざろうかしら」

なんだか嫌な予感がするからやめてください。お願いします。

「ダメだよチルノちゃん！ 確かに楽しそうだけど、あの子達の仕事を私達が奪っちゃダメー！」

「むー大ちゃんはケチね！」

「ケケケケケケ、ケチ!? な、なによチルノちゃんったら！ このアホンだらー！」

私を挟んで喧嘩するのやめてほしいなあ。結構切実に。いやね？ 別に良いと思うよ喧嘩くらい。でもさ、なんか寂しいじゃん。私蚊帳の外でさ、なんかぼっちみたいじゃん！

いや待てよ。じゃあ私も喧嘩に参戦すれば良いんじゃないかな？ おつ、名案湧いてきたよ。さあ構って構って、私を構って。

「フッフッフ。貴様ら、私を挟んで喧嘩とは良い度胸じゃな——」

「あんたらいつもうるさいわねえ。フランが起きるわ、静かになさい」

あ、レミリア参戦。そして終息。なんと紅魔館の主は鶴の一声を使えるようだ。そして私は参戦出来ずシヨボーンである。泣いてなんかないんだからねっ！

それにしても、レミリアは一体どこから現れたのだろうか。ある程度動体視力に定評があるともつばらの噂である私でさえ、彼女の速さに追いつけなかつたし見えなかつた。

レミリアを見てみると、改めて吸血鬼の強さを実感させられる。そしてたまに感じる彼女の言動の幼さに、この娘も年相応なんだな……と実感させられる。

「さあ、今日は異変について語り合しましょう。私の部屋まで案内するわ。着いてきて」「あーい」

レミリアに導かれ、私達は紅魔館の中に入っていく。

「あれ？ 紅魔館ってこんなに広かつたっけ？」

「あら言つてなかつたかしら。……いえ、あなたは以前寝ていて来ていなかったわね。これは咲夜の能力よ」

うぐ、痛いところを突いてくる。霧の湖の深さ以上に反省してるから、もう私のウィークポイントを弄らないでくれえー！ 私のライフはもうゼロよ……。

「ふふつ、冗談よ。私はもう気にしていないから」

「……………なんかごめんさい」

笑えねえー！ 全然笑えねえー！ 笑えば……良いと思うよ、なんて思えねえー！

とにかくなにか返さねばと思つたけど、私の数少ない語彙力ではレミリアの満足する返答は出来ぬと思い、取り敢えずもう一度謝つておいた。

そのままチルノちゃんと大ちゃんを含めた四人で会話していると、レミリアの部屋らしき場所に着く。その部屋はこの紅魔館の一番高い部屋で、一番端の部屋だ。

内装は館とおなじような赤色で統一されており、柔らかそうなソファが中央の机を囲んでいたり、天蓋付きのベッドがその奥に置いてあつた。

なんとまあ豪華なお部屋。私も住みたい。居候させてもらいたい。ペットとしてでも良いから住ませてもらいたい。プライドなんて三食昼寝付きの条件の前に置いてきたわ！

「じゃあ適当に座つて。美鈴や咲夜、パチエとフランとはもう打ち合わせ済んでるから、後はあなた達だけなのよ」

「ひやつぶー！」

許可が下りたと思いきや、すぐさま天蓋付きのベッドに飛び込んでいくチルノちゃん。うん。分かる。その気持ち凄く分かるよチルノちゃん。私もそのベッドに飛び込みたい気持ちで一杯なんだから。

「ちよつとチルノちゃん!? レミリアさんまだ話してるよ!？」

「……チルノには大ちゃんから言っておけば良いわ」

「え!? それで良いんですか?」

え、なにそれズルい。私もベッドに飛び込んだらこの堅苦しそうな会話から抜け出せるかな。

「……蓮はダメよ。しつかりここで話に混ざりなさい」

「……………はい」

どうやらレミリアには私の魂胆がお見通しだったようで……私は大人しく彼女の言いつけに従った。

ソファに座ると、先程までなかったお菓子類と紅茶が置いてあった。なにより紅茶に關しては、今まさに入れたたと主張するように波紋が立っていた。

「え!? あの、その、この紅茶はどこから……?」

「はあ……あの子ね。もう、悪戯好きなんだから。咲夜、姿を現しなさい」

彼女が両手をパンパンと打ち鳴らすと、どこからともなくメイド服に姿を着飾った、十歳ぐらいの可愛らしい女の子が現れる。綺麗な銀髪をたなびかせる女の子は、メイドとして完璧な所作でお辞儀をした。

「大ちゃんは知ってると思うけど、この娘が咲夜よ。……ありがとう咲夜、下がってなさい」

無口で無表情なメイドはレミリアから一言命令が下ると、私の目の前で消えるように姿を消した。

「え、今のつて……瞬間移動?」

瞬間移動に反応したのか、大ちゃんがこちらに勢いよく振り返る。いや大ちゃんの事ずつと瞬間移動つて呼んでいた事あつたけど、今のは違うから。咲夜ちゃんの事について聞いてたから。うん、勘違いだと分かつて顔を赤らめる仕草、超可愛い。

「いいえ、咲夜は時間を操れるのよ。この屋敷の広さが外観と合わなかったのも、咲夜の能力の延長線上に空間操作があるからだわ」

「と、時を操るの!?! 最強じゃん!」

「えー、さいきよー!?! どどここー! さいきよーがどこにいるの!?!」

さいきよーに反応したのか、チルノちゃんがベッドの上からこちらに勢いよく振り返る。いやチルノちゃんの事ずつと、必ずさいきよーになれるよつて励ましていた時期があつたけど、今のは違うから。咲夜ちゃんの事について聞いてたから。うん、勘違いだと分からず右往左往する仕草、超可愛い。

「ま、仲良くしてあげて。彼女は無愛想に見えるけど、意外と感情豊かなのよ?」

「お幸せにしてあげてください」

もうね、レミリアが咲夜を語る姿は既に主従関係というよりは家族みたいな感じだつ

たね。

微笑ましいと思うと同時に、少し羨ましく感じた。

話は議論というより説明に近いもので、着々と時間は過ぎていった。なんでも紅い霧を幻想郷中にばらまいて、人間達を困らせようという内容らしい。もしこの霧を吸引したとしても少し体調が悪くなるだけのようで、彼女なりに安全面も考えていたようだ。「それで私達はどんな場所に待機していれば……」

「それなら既に決まっているわ。霧の湖でチルノと共に巫女を迎え撃てば良いの。どんなルールで戦うかは後で教えるわ」

「分かりました……」

「あれ？ 私は？」

「蓮は適当に待機しといて」

「はい」

若干私の扱いが雑なような気もするが、逆に考えればそれだけ自由に行動できるといいうわけだ。よし、良いこと考えた。

私が自分の神がかり的な発想にやっついていっていると、レミリアがこちらを見て息を吐いた。……なにか凄く、バカにされた気がするう！

「それで、本題はこれからよ。……実は今回の異変にはとても深刻な問題が一つあるの」突然神妙な面持ちになったレミリアを見て、私達は喉仏を鳴らす。これだけしつかり考えられていて、安全面も異変の範囲、理由も問題なんて無さそうに見えたが……一体どんな問題があるというのか。

「深刻な問題ってなんですか……？」

レミリアは少し間を置いた。とても言いにくい内容のようだ。静寂が包む空間に汗の落ちる音だけが響いた。

「問題……それは……」

やっとレミリアが口を開く。ああ、息苦しい。なんて言われるのか、どんな難題が待っているのか。考えるだけでとてつもない不安に襲われる。早く、早く、と心臓が早鐘を打ち、レミリアの次なる言葉を無意識の内にせがませた。

そして、告げられる衝撃の問題。

「なんと……異変の名前が決まっていないのよ！」

「へ？」

「え？」

それはなんとも気の抜けた問題であつた。

センスがあるとは言えないので、取り敢えず様子見。

「えーっと、異変の名前……ですよね？」

「そう、異変の名前よ」

「過去の文献とかから拾ってはこれないんですか？」

「……………っ!! 大ちゃんは頭が良いわね。盲点だったわ。じゃあちよつとパチエからそれらしき本を借りてくる」

「あ、私も行って良いですか？」

「良いわよ」

大ちゃんとレミリアは二人揃って、パチユリーが管理する大図書館へ向かっていつてしまった。残されたのはチルノと私一人。

特に会話する事もなく、ただただ時間だけが過ぎていく。これが世に言う『暇』って時間だ……………!

赤霧異変、悪魔城異変、デビ☆ミス……………。

あーやつぱりダメだ。私のネーミングセンスがぶつ壊れてやがる。

その時、ベッドごろごろが飽きたのかチルノちゃんがようやく口を開いた。

「もう『紅霧異変』で良いんじゃない？」

「それだ」

多分この時のチルノちゃんには、ネーミングセンスの神様が宿っていたと思う。

「紅霧異変……紅霧異変……ね。意外と良いネーミングじゃない。流石チルノね」

「当然よ！　なんとたつてあたいはさいきよーなんだから！」

現在私達はレミリアの部屋を出て、紅魔館のエントランスホールに来ている。エントランスホールはかなりの大人数を収容出来るほどの大ききで、元はこの場所でパーティーでも開いていたのだろうか。今は赤い絨毯が敷いてあるだけの簡素な空間で、たった四人だけがこの空間にいると、なんだか空虚感が胸を通り抜けるように感じた。

「で……レミリアはなんでここに私たちを呼んだの？」

「蓮はスペルカードルールって知ってるかしら？」

「ううん、初めて聞いたよ」

「そう……じゃあ二人は？」

チルノちゃんも大ちゃんも同じように首を振った。レミリアを除いて、このエントランスホールにスペルカードルールを知っている者はいないというわけだ。

「スペルカードルールって言うのは、異変を起こした際に異変を解決しに来る巫女との戦いで用いられるルールよ。まあ……あの賢者の思惑通りでいくと、スペルカードルールを巫女だけではなく、この幻想郷中に広げるつもりね。だから今のうちに知っておくと得よ」

「厳密に言うところ……スペルカードルールとはどんなルールなんですか？」

確かに。それは気になるところだ。

「スペルカードルールっていうのは、『弾幕ごっこ』と呼ばれる遊びで使われるルールよ」
「だ、弾幕ごっこ？」

習うより慣れろだわ、と言ってレミリアは浮き上がった。それも天井すれすれまで。

「じゃあ今から弾を放つわ。飛んでもよし。応戦してもよし。避けてもよしよ。じゃあ始めるわね。当たったら失格よ」

え、ちよつと待って!?

私の思考が追いつかぬままに、レミリアは弾幕を展開し始めた。

放たれた弾幕は三種類。青色の大小の弾と、紅い満月のような弾だ。小さい弾から大きな弾になるにつれ速度は遅くなっていて、その場に留まるように出来ている。

突然の奇襲に反応できたのは私、チルノちゃん、大ちゃんの三人の内、二人だけ。当然、反応できなかったのは私である。

しかも私は飛べないので、三次元的に展開される弾幕にはすこぶる相性が悪い。というかレミリアの放つ弾幕は、少しずつ確実に逃げ場を潰してくるのだ。私は避ける事さえ叶わず、自分に向かってくる弾のほぼ全てを被弾する。

「あべっ！ ちよっ！ うびっ！ タンマ、タンあぎやつ！ ちよちよ、助け、あびい！」
弾幕に使われる弾はレミリアの包括する魔力、妖力から造られていて、当たると地味に痛い。というかマジで痛い痛い！ なにこれごっこ遊びじゃないじゃん！ 普通に虐めじゃん！ ちよっ死ぬから！

そろそろ私の限界が近づいてきた時、唐突に弾幕が止んだ。

「……蓮、これは弾幕を避ける遊びよ？ 当たりに行く遊びじゃないわ」

「避けようとした結果がこれなんだよ……私を労ってレミリアたん」

「あなた初対面の頃から性格変わったわね。はあ……確かにどんな人妖でも得手不得手はあるわ。仕方ないわね。じゃあ蓮は端で見学してて。体験できない分見て覚えてもらうしかないんだから、しっかりと観ておきなさいよ」

「大丈夫よ蓮！ あたいが蓮の分まで頑張ってくるから！」

「無理しなくて良いんだよ蓮ちゃん……」

「ありがとお皆あ……」

レミリアのご容赦により、なんとか地獄の弾幕から逃れることに避ける成功する私。

その後の二人のフオローがありがたいと同時に、私が情けなく思えてくる。くそお、いつか挽回してやるからな……。

残ったチルノちゃんと大ちゃん、弾幕ごっこが再開される。

弾幕ごっこ。それはごっここと形容されているが、その実ごっここと形容するには勿体無いほどの完成度、戦略性、機転が必要となってくる。それは単純ながらも奥深く、容易そうでも難易度は苛烈を極める。

しかし、ただ難しいだけではないのだ。弾幕ごっこの真の魅力……それは弾幕の質でも量でも難易度でも戦略性でもない。弾幕ごっこの本質とは、遊びとはかけ離れた美しさにある。

レミリアが弾幕を展開した。たったそれだけの行動なのに、そこには綺麗で美しいと感じるなにかがあった。そしてもっと美しさを感じる為には、実際に見て、感じて、避けて、受けなければ分らない。

一つ一つの弾にも緩急や道筋の工夫がされており、レミリアがあれらの弾を全て考えて撃っているのならば、あれだけの弾幕を張るのにどれだけの努力が必要なのだろう。

反対にチルノちゃんと大ちゃんは、その綺麗な弾幕をまるで蝶々が舞うように華麗に避け続けていた。そしてたまに反撃を行っている。

この対比。弾幕を張るものと避ける者。その間に混じり合う、意思と意思。そのごっ

こ遊びという枠組みのなかで、なにか特別な……そう、少女達の意味や思念みたいなモノが感じられた。私みたいな観戦者であっても……だ。

これが弾幕ごっこ。これこそが、弾幕ごっこ……！

ごっこのようでごっこではない。美しさを求め、遊びの原点でありながらも、遊びの最先端。

「凄く……綺麗だなあ」

自然と口から漏れていた。いや、逆。漏れていた事も気づかぬほど、弾幕ごっこに魅入っていた。

そしてそのままチルノちゃんと大ちゃんは弾幕を避けきり、レミリアの敗北で弾幕勝負は幕を下ろした。

「ふう……流石に疲れたわね」

レミリアが大量の流れる汗を拭った。ぶっちゃけ忘れてそうだけど今は夏。紅魔館の中も幾分か涼しいが、暑いことには変わりなく、弾幕ごっこという大変な運動を行ったレミリアが大量の汗を掻くのも仕方ないことだろう。

「どう、レミリア。あたいの勝利よ!!」

「はいはい調子に乗らないの。今のは普通の弾幕よ。私はまだスペルカードを使っていないもの」

「そのスペルカードって……」

「ええ、今の弾幕に使用する……いわば弾幕の型のような物を閉じ込めたカードよ」

「へえ……じゃああたいらもそれを……」

「そう、弾幕ごっこをするにはスペルカードを作って撃たなきゃいけないわ」

「ということはチルノちゃんらが体験したレミリアの弾幕は、いわゆるお試し。体験版に近いものだったということね。」

レミリアの説明は続く。

「本当の弾幕ごっこは、撃つ役の人が最初にスペルカードを宣誓し、全てのスペルカードを使いきる前に避ける者を三回被弾させる事で勝利。避ける者は逆に全てのスペルカードを避けければ勝利となるわ。今のチルノと大ちゃんみたいにね」

「じゃああたいらもスペルカード作るー!」

「ふふ。言われなくてもチルノや大ちゃん、蓮も異変に携わる者としてスペルカードを作ってもらうわ。作り方の基本も教えてあげる」

「そうして、私を含めた三人のスペルカード作りが始まった。完成するには二日の時を要したという。その間、フランちゃんとも会えて私はご満悦である。」

「そして少しだけ時は進み、七月の末に差し掛かる頃。レミリアの指から発生する紅い濃霧が幻想郷を覆い始める。それは一ヶ月もかからず、幻想郷を覆い尽くした。」

紅霧異変が始まったのだ。

紅霧異変

幻想郷は予想以上に騒がしい日々をおくっていた。

夏の訪れを感じたのか、人妖共々どこか心が浮かれているようだった。

そんな全てが普通な夏。

辺境は紅色の幻想に包まれた。

博麗の巫女と呼ばれる少女は、自らの勘を便りに異変解決に動く。

魔法を探求する普通の少女は、自ら異変へと飛び込んで行った。

湖は、一面妖霧に包まれていた。

普段ならば霧で包まれているハズの湖も今宵はどこかがおかしく、どこか違和感を感じた。それもそうだ。湖の中心に、場違いな建物が鎮座していたのだから。

妖霧の中心地は、夜の月明かりも相まってかぼんやりとその姿を見せていた。

空を治める月でさえ、妖霧のお蔭で紅く肥大しているように見える。

もしこの異変の仕業が自然災害ならば、どれだけ助かったのだろう。自然災害ならば、そこに知恵が介入することは無いであろうから。

飛んで火に入る夏の虫。

誘われる虫のように、霧の中を進んでいく少女達。

そして見つけたのだ。

霧の正体を。

異変を起こした犯人を。

昼も夜も無い館に、「彼女」はいた。

〜紅霧異変概要〜 人里の記録より

最近、幻想郷に紅い濃霧が発生した。それは一ヶ月も経たない内にみるみる幻想郷を侵食していき、その勢いは博麗大結界から外の世界へ漏れ出てしまいそうなほどだ。

その霧を吸引または長時間身体を晒し続けた人里の人間達は、総じて体調を崩し家から出られない状況が続いていた。

日光も遮られた人々はこの異変を危惧し、博麗神社に住む異変解決を生業とした博麗

の巫女に、この異変の解決を一任することにした。

そして場所も変わり魔法の森。霧雨魔法店……と店に立て掛けてある看板に書かれた、こじんまりとした小屋。そこに一人の少女が、此度の異変を察知していた。

「……つたく、この妖霧のせいで良い素材が手に入らないぜ。これは魔理沙様の出番か？」

霧のせいで視界も悪く、魔道具作成の為の素材が集まりにくい事を憂いた魔理沙は、独自に異変解決へと赴いていく。

「八卦炉よーっし。箒よーっし。さて、素材集めがてらにいつちよ異変解決でもしてきますか！」

帽子の中に八卦炉を入れて、魔法の森から一人の魔法使いが飛び立った。

そして——異変の中心地である紅魔館。

「レミリアお嬢様、博麗の巫女が動き出しましたよ！」

「ぶはっ！ ……えっもう!? うっそ、早くない?」

美鈴の唐突な報告に、優雅なティータイムを過ごしていたレミリアは紅茶を嘔き出してしまふ。

「ちよつと、お姉様汚い!!」

「お嬢様、紅茶が垂れております。どうぞ拭き物を」

咲夜が主人であるレミリアに、タオルを渡す。レミリアは口から溢れた紅茶を綺麗に拭き取ると、フランと一緒だったことを思い出したのか、顔を先ほどまでの慌てふためいたものから威厳のある顔つきに戻す。しかしフランから向けられる視線は、先ほどの視線と未だ変わらぬままだ。

「じゃあ皆、配置について。台本は覚えたわよね？　ぶつつけ本番、リハーサル無し。カンプなんて用意されないから、心して掛かりなさい！」

レミリアの号令により、美鈴、フランは予め決めておいた場所へ戻っていく。咲夜はティータイムに使った食器を、時止めで対応していた。

レミリアは王の椅子を優しく撫でる。その椅子には一年前のようなシミや汚れは一切なく、新品同様のような有り様だった。つくづく自分の従者は有能だと思う。

「さて、始めましょう。紅い霧が幻想郷を全て覆うまで、博麗の巫女は私を止められるのかしら。ふふ、血沸き肉踊るような弾幕「ごっこ」にしたいわね」

咲夜はまさに悪魔のような笑みを見せる我が主を、じいっと見つめていた。見つめられている事に気づいたレミリアは、咲夜が私自身に見惚れているのだろうと勝手な解釈を心の中でしているが、実際は全く違った。

（お嬢様のお召し物……紅茶のせいで変色しちゃった。後で洗わなきゃ……）

この咲夜、主の服が変色していることについて、後でその汚れをどうやって落とそう

か……くらいにしか考えていないのである。

汚れにも気づかず、一人浮かれているなんとも間拔けな自分の主を見つめながら、
夜は指定された待機場所に向かっていった。

異変であつても、危機が訪れても。

幻想郷はどこもかしこも日々騒がしいのである。

闇を司る妖怪

博麗の巫女である博麗霊夢は、早速森の上空を飛行していた。それは異変の元凶を退治するためである。

夏の暑さゆえに人里離れた古道具屋からかつぱらってきたおんぼろ扇風機で涼んでいたところ、なんと人里の責任者である里長が博麗神社まで依頼してきたのだ。

内容はこの紅霧の原因を突き止め、もしそれが自然現象でないのならば解決してきて欲しい……と、確かこんな感じだった。最初は渋った霊夢だったが、何度もおだてられ、仕舞いには報酬金をちらつかされた辺りから霊夢の目の色が変わった。

安請け合いも安請け合い。霊夢は今でも少量の報酬金で了承してしまったことを後悔していた。しかし既に終わったこと。今は異変の解決に集中することにしたのだ。

霊夢には行く宛などない。通常ならば聞き込みや情報集めなどをするべきだが、霊夢は自分の勘を信じて飛び回っているのだ。結果的に、その勘は当たっていた事が後々分かることだが。

森の上空も、果てしないほどの濃い霧で覆われていた。視界も悪く、先行きも見えない。

「まったくこれじゃあ、お洗濯も出来ないじゃない……」

異変の最中であるのに、洗濯物の事を考える霊夢。メンタルは大物のそれである。

そんな霊夢が、突如動きを止めた。霧の中。視線の先に、陽炎のような揺らめくにかがいたからだ。

それは漆黒そのものだった。その他全ての色を排除した黒き球体は、霧の中を直進し一直線に霊夢の方へ向かってきたのだ。

ぼやぼやとまるで蜃気楼の如く朧気に揺れる球体。それは霊夢の前で突然止まった。
(なにかしら、これ)

霊夢はまだ齡十に達したばかり。危機感や恐怖、不安より好奇心が勝る時期であった。子供の好奇心とは時に残酷であるが、恐怖を与える存在に恐怖を抱けないことこそが、最も残酷である。何故なら、恐怖を与える存在とは一様に危険である。その存在に恐怖を抱けないことは、まさに準備もせず登山をするようなもの。降りかかる恐怖に、危機に、暴力に、死に気づけない、まさに最も残酷だ。だがそう思うのはその光景を見ている者だけであって、当事者からしたらどこ吹く風である。

霊夢がその綺麗な指先で、シャボン玉でも触るかのように優しくそつと触った。その瞬間、霊夢の視界は全て闇に包まれる。

「……………ツツツ!!? な、なによこれ!」

闇。闇。闇。どこを見回しても闇。全てが闇。まるで自分だけが世界を切り取られて、その世界に閉じ込められたかのような……。

言いようもない不安が背中を駆け巡る。霊夢にとつて、初めての危機感であった。そして、遅すぎた危機感であった。

「闇なら……照らせば良いのよ」

霊夢は持参しているお札を一枚取り出し、それを軽く放った。するとどうだろう。お札に書かれている文字が青白く光りだし、お札自体が素早く回転し始めた。簡易的な灯りのような物である。霊夢は灯りがついたことに幾分か胸を撫で下ろす。どうやらここは世界が切り取られた絶海の孤島ではなく、いつも自分がいる幻想郷のどこかなのだ……と。ということとは、この闇は何者かの……十中八九妖怪の仕業だと見当がつく。

「出てきなさい、あんたが妖怪だつてのは調べがついてるのよ!」

「そーなのかー。それで、あんたは食べても良い人類?」

「きやつ、……いきなり出てこないでよ!!」

「ええ……」

自分から呼び出しておいて、なんという理不尽だろうか。あまりの横暴に、妖怪であり捕食者の立場である妖怪でさえ困惑の表情を浮かべた。

そして現れたのは可愛らしい女の子。白黒の洋服を着こんだ赤目で黄色髪のパツ、左

側頭部には赤いリボンのような札が巻きついている。ルーミア……という名前の、里の人間には有名な妖怪であった。

「それで、何か用？ 無いんだったらさっさとこの闇を晴らしてよ」

「ふーん、そんなに晴らして欲しいんだ？」

「ええ。だってこんな暗闇の中じゃあ、あなたの素敵なお顔も見えないもの」

「口説いてる？」

「世辞よ」

だよねつとルーミアは嘆息した。

闇を操る妖怪である自分を見て怖気づかない人間は初めてだ。それ故に、興味が尽きない。気づいたら舌戦。終わらぬ探りあい。身体を駆け巡る高揚感。そう、これだ。この頃退屈だと思っていたのは、この感覚が足りなかったからなのか。

「ひひっ、ねえあなた。うーんそうね、巫女さんはスペルカードって持つてる？」

「星の数ほど持つてるわ」

「あらなんてロマンティック。……じゃあ私とちよつとだけ暗闇デートしない？」

「食人趣味は間に合ってるわ」

「趣味じゃないわよ、生きるためよ」

「そんな事どうだって良いの。弾幕ごっこでしょ？ スペルカードは三つ、残機は一ね。」

さつきと始めるわよ」

「嫌だなあ。話の聞かない人は。……食べるまでの過程を縮める愚か者は、美味しさに至るまでの過程を知らない」

「あなたさつき、生きるために人を食べるって言ってなかったっけ？」

「食べるにしても、不味いものは食べたくない。これ、誰にでも宿る食への欲求じゃないかな。さ、弾幕ごっこ開始だよー」

「はあ……。あんたはソクラテスでも見習った方が良いと思うわよ」

霊夢は頭を掻いた。

全く……調子を持つてかれる、と霊夢は思った。妖怪なんて一部の例外を除き皆がエゴイストだ。それに付き合わなければいけない人間の気持ちも考えて欲しい。だが、そこにこそ理性が本能を凌駕した人間の持ち得ない魅力というものがあるのだろうか。

ましてや、人を食べるとの行為。カニバリズムと揶揄されるこの行為は、どこの文化、歴史を紐解いても禁忌とされる。同族殺しとはそれほどまで狂った行いなのだ。故に、同族は同族を殺すことに抵抗感、畏怖が生まれる。本能に、そう洗脳されているからだ。

種族の繁栄を一番とする本能からすれば、それは自らの行うべき行為とはまた逆の行為であるわけで。そりゃあ恐怖するわな。

だからこそ、ルーミアは妖怪なのだろう。人の忌避感、恐怖感、畏怖感を刺激する恐怖の象徴なのだろう。

霊夢は背に仕舞っておいたスペルカードを三枚取り出した。ルーミアもそれは同じで、霊夢は素早く決着を着けるために、敢えてスペルカードを宣言せずに待つ。

「あれ？ 宣言しないの？」

「宣言せずとも十分よ」

「なにか狙いが？」

「いえ、優しさよ」

「ひひっ、闇符『デイマーケイション』」

ルーミアを中心に、赤青黄の三色を用いた弾幕が展開される。一つ一つの弾は混じりあい、交差し、ハの字型の弾を作り出す。

霊夢は全神経を避ける事ではなく、近接の為のルートを決めるために使った。別に弾幕ごっこのルールには、撃つ役を攻撃してはいけないなどというルールなんて無いのだから。

というよりも、霊夢はこの勝負に真っ向で挑んでは勝てぬと思ったのだ。ルーミアの能力で霊夢の視界は暗闇で包まれている。唯一の光源は、自分の札とルーミアが放つカラフルな弾幕のみ。こんな状況じゃ、もし黒色の弾幕なんて放たれてしまったら、流石

の霊夢でも避けられる自信はない。

(一発で決める……容赦はしないわ。怨まないでね、食人妖怪)

幾多もの層に分かれる弾幕を掻い潜り、次の層を超えればルーミアの目の前……というところで、ルーミアは更に弾幕を増やした。

放たれたのは霊夢を狙う青い弾。

(くっ、このタイミングで……!?)

ばら時かれるように連続して放たれる霊夢狙いの弾。範囲は広く、まるで自分に近づかせないように放たれる弾幕だった。

霊夢は一時撤退を余儀なくされるも、ルーミアの弾は執拗に追ってくる。

回避。回避。回避。時として上空に逃げ、時として高度を落とす。緩急をつけながら虎視眈々と隙を待つ。

だが、ルーミアは攻撃の手を決して緩める事はなかった。

「月符『ムーンライトレイ』」

突如ルーミアが手をかざす。霊夢はなんだか嫌な予感……というよりも、自分の中の勘が警告を発した。

その勘があつたからであろう。ルーミアの両手から発せられた目で追えぬ青白いレーザーを、かする程度で避けられたのは。

「くうっー！」

「弾幕ごっこだからって、怪我しないってわけじゃないわよー」

「そんなことつ、知ってる、わよ!! —— 霊符『夢想封印』ッッ！」

青白いレーザーと色鮮やかな光弾がぶつかりあい、互いに打ち消しあう。

その隙に、霊夢は急加速。牽制用の弾幕と二本のレーザーを掻い潜り、再度近接まで持ち込む。だがルーミアも負けていない。レーザーを振り回し、霊夢を近づけまいと応戦していた。

この時既にルーミアは霊夢の狙いが分かっていた。自分がこの暗闇を利用した弾幕を撃つ前に、近接して早期決着を着けようとしているのだろう。

(ふふ、可愛い子じゃない。博麗の巫女って)

元から自分はそんな弾幕を放つ気など更々ないし、逆に負けるつもりで勝負に挑むハズであった。しかし噂に聞いていた博麗の巫女を見て、自らの欲求が抑えられなくなり、今こうして応戦しているのだ。

妖怪と人。そこには圧倒的格差がある。強さという格差が。人と妖怪を近づけさせず、身近に感じさせるとして幻想郷の賢者が編み出したスペルカードルールという決闘法。そこには異変を起こしやすく、それでいて人との強さの格差を、遊びとして有耶無耶にする狙いがあるのだろう。

それでも弾幕ごっこは怪我をするし、最悪死ぬかもしれない。でも、楽しいのだ。

ルールを定める事によって、脆い人間でさえも自分達と同じ領域に立てる。

ルールを定める事によって、人は自らにチャンスを課せる。

ルールを定める事によって、命かけずとも戦いの臨場感を味わえる。

それが弾幕ごっここの良き点であり、妖怪と人との強さの格差を埋める最もな妥協点だ。

それに、ほら。私が必死こいて応戦しているにも拘らず、博麗の巫女は私の弾幕を掻い潜り既に目と鼻の先だ。

だから止められないんだ。だから楽しいんだ。

妖怪である私でも、たった一人の人間に負けてしまうのだから。

「喰らいなさい!! 霊符『夢想妙珠』っ!!」

闇の中でもハッキリと見える輝き。

私の闇じゃあ、こいつの光を陰らせる事は出来ないみたいだ。

私の意識は、視界が目映くような色に埋め尽くされた後、黒く塗り潰された。

幻と現と嘘

魔法の森の中を、箒に跨がって進んでいく魔理沙。向かう先は魔法の森の向こう、霧の湖の中心に位置する紅い屋敷だ。

どうにも近くで浮いていた妖精達に聞いてみると、あそこから紅い霧が出ている事を見掛けた妖精が多々いるみたいだ。

(どうもその場所が怪しそうだな……)

魔理沙が頭の中で異変について考えていると、どこかで爆発音が聞こえた。

普通、日常で聞くはずもない音。魔理沙という人間はどうやら非日常が好きなので、それは本人も自覚している事だった。だからこそ、なおのことたちが悪い。

(ちよつと向かってみるか)

誘われるように音がした方向へ向かっていくと、そこには一人の少女が倒れていた。

魔理沙が思っていた事態とはまた違った事で、普段の横暴な態度は鳴りを潜め、つつい自分に似合わぬような行動をとってしまふ。言うならば、人助けだ。

「お、おい、あんた大丈夫か？」

「い、痛いようう」

桃色の髪に背丈は小さい。私くらいだろうか？

どうやら泣いているみたいで、流石の私でも放っておくことは出来ず、魔法の箒から降りて近寄る。ぎよつとした。なんと女の子の左腕が、肩から先無くなっているのだ。だがおかしいことに血は出ていない。そして気になったのは、女の子の頭にかんざしの如く差してある綺麗な蓮の花だ。

「おい、どうしたんだ？ なにかあったのか？」

「うつつうつつ、お姉ちゃん誰え？」

「私は霧雨魔理沙。魔法使いだぜ！」

「魔法使い？ だったら魔法が使えるの？」

「ああ、そうだぜ」

「じゃあ、あっちにいる幽霊倒してきてよ。私のお母さんその幽霊に襲われて……うつつうつつ」

「そうか……お母さんが襲われているのか。その割に静かじゃねえか？ 襲うためにあんな爆音まで出しておいて……なあ妖怪」

「……………」

実は気づいていた。こいつが妖怪だということ。しかし妖力も魔力も一切悟られないのは凄いと思った。腕も切断面が綺麗過ぎるし、なにより包帯も巻いていない。ま

るで怪我してますよと主張するかのように不自然だ。

それにもう一つ。まず健全な母親だったら、こんな危険な森に娘一人を連れてこないさ。

「……あくバレちゃったか」

「結構不自然な点は多かつたぜ？ それじゃあ演者になれないな」

「取り敢えず魔理沙ちゃんだけ？ ここ、通れば良いよ。博麗の巫女が来る前に一度テストプレイを試みたんだけど、この有り様じゃ無理かな……」

「博麗の巫女？」

その言葉は聞き捨てならなかった。

博麗の巫女。博麗大結界を維持する要でもある、博麗神社の巫女をその総称で呼ぶ。現博麗の巫女である霊夢とは、幼い頃からの付き合いだ。今では親友と呼べる間柄と言っても過言ではない……はず。

この妖怪の言っている事が本当ならば、その霊夢が今日ここを通るといふことだろうか。そしてこの妖怪は、そんな霊夢を騙し討ちしようとしていた……と。

まあ、あの霊夢がこんな簡単な悪戯に引っ掛からないと思うが、憂いは断っておきたい。

「さてさて、私は忙しいからまたねー」

その妖怪は、その場を後にしようとしている。アイツが来る前に、なんとか引き留めて退治せねば。

「ちよつと待った!」

「え……何?」

ソイツは動きを止めた。第一関門は通ったな。

「最近広まった幻想郷の決闘ルールくらい知ってるよな?」

「弾幕ごっこでしょ? 知ってるよ」

「じゃあ私とその弾幕ごっこを興じてみないか?」

「やだよ。私弱いもん」

何言ってるんだコイツ。妖怪がただの人間より弱いわけがないだろうに。さては……私を油断させようとしているのか。

「ハッ、生憎その手は通じないぜ。私を油断させようとするなら、もっと上手い手を使ってくれ」

「美味しいお手々ならもう無いからね」

妖怪が手が生えてない肩をフリフリと振った。

「上手い手ってそういう意味じゃないからな?」

「……とにかく、私は戦いたくないの」

「そりゃ困るぜ」

「あー、ひよつとしてバトルジャンキー?」

妖怪がなにか可哀想な者を見るような、そんな冷やややかな目で見てきた。おいおい、そんな熱い瞳で見つめないでくれ。

「ジャンキーじゃないさ。お前のこれから起こす悪戯が問題なんだ」

「……巫女さんに随分とご執心だね」

「自覚、しつかりあるじゃねえか。さてさて弾幕ごつこと行こうぜ?」

「私の能力は『界を結ぶ程度の能力』。縁も界の内よ。結ぶ事も、絶つことも可能。貴女と巫女の縁、絶つてあげようか?」

「おうおうそりゃ怖い。初めて友達になる経験と達成感を二度も味わえるとは、良い能力じゃねえか」

「……もう決めた。なんか凄くムカついたし、ここでちょんけちょんにしてやるよ!」
「ははは、先に訂正しとけよ? ちょんけちょんじゃなく、消し飛ばすつてな。私の攻撃くらつて、それでもそんな軽口叩けるんなら、弱くないと思うぜ?」

さて、私は魔法の箒に跨がり飛び上がった。妖怪の方はなにを思っているのか、飛び様子はない。意外とアイツ、私の事舐めてるのかもな。だったら後悔してくれば良いんだが……私のマスタースパークをくらった後でな!!!

「二気に決めさせてもらうぜ? 恋符『マスタースパーク』」

八卦炉を取り出し、ありつたけの魔力を注ぎ込む。光が八卦炉の中心に集まっていき、影が引つ張られてくる。熱も、力も、光も集め終わったとき、一瞬の閃光が走った後に、マスタースパークは放たれた。

光の奔流。そうとしか形容できない程のパワーと威力。近くにあつた太い大木もその力の前に屈し、枝の先に止まっていた小鳥達は大慌てで空の果てに逃げていく。

「ハッハア! 弾幕は、パワーだぜ!!」

それだけの力を示しても、奴は逃げない。戦かない。目も瞑らない。

……心底私のマスタースパークを侮っているようだが、その魔法はどんな妖怪にでも通ずる特殊な魔法だ。例えば自分がどんな力を持っていたとしても、その力はマスタースパークに触れた途端霧散する。

その事を教える義理もないし、避けもしない奴が悪い。弱いかどうかは知らないが、存分にその魔法の威力を、パワーを味わいやがれ。

——光の奔流が終わった。

残ったのは抉れた大地と砂煙のみ。どうやらあの妖怪は消し飛んじまったみたいだ。……はあ、意外と呆気なかったな。

私はマスタースパークで開けてしまった魔法の森を見ながら、その先にある霧の湖を

見据えた。夜であるからか、霧はかかっているようだ。そして確かに見える。場違いな紅い館。月明かりに照らされて、ぼんやりとその姿が浮かび上がっている。

(あそこが異変の元凶か)

館を目的地と見定め私が飛び立とうとすると、その時なにかが私を通り抜けた。

「な、なんだ!?!」

周りを見渡すと、遠くになにか膜のような物が張られている事が確認できた。私を閉じ込めた……ってわけか。

「おい、私を無視するったあ随分な余裕だね?」

「なんだ、生きてるじゃねえか」

「そりゃあ生きてるさ。生きたいもの」

砂煙から姿を現した、軽口を叩くそいつの周りには、さつきと同じような膜が幾重にも張られていた。もしやあの膜で身を守ったのかもしれない。なんだ、十分戦えるじゃねえか。

「それと魔理沙ちゃんにはこれをプレゼント。

界符『夢想反射鏡』

奴がスペルカードを宣言する。すると、奴の手の平に小さな膜が出来た。

「この結界の中にはねー、私が神力を使って発生させた一つの弾があるの。これをこの

増加と減少の結界の中に入れておくと……ほら、もう64倍だよ」

「おいおいおいまさか……こいつ、その結界の中で圧縮し続けた弾を一気に解放させるのか。今では64倍と言わず、既に結界内は弾で埋め尽くされて一片の隙間もない。」

「じゃあ行くよ。これだけの弾が貴女を襲うなんてまさに地獄さながらじゃない?」

「待って待って待ってツ! ほんとにそれを放つのか!? おいおい、それじゃあ弾幕ごっこじゃないじゃないか。美しさを競うのに、殺傷能力を競ってどうするんだ?」

「だがソイツは結界を緩める気もなく、すぐさまその結界を解き放った。」

「じゃあねー、可愛い魔法使いさん」

「ちよつ、まつ——」

途端、目を焼くような閃光と爆発。——がしたかに思えた。

「瞑った目を開けてみると、そこはさつきと同じ風景。爆発は? 結界は? 弾幕ごっこは? 様々な疑問が頭を駆け巡っていた私だが、下にいる奴の声で我に帰る。」

「ごめーん、今の全部嘘なんだー!」

「……………は?」

「まず私、妖力とか無さすぎて弾作れないから、スペルカードも持ってないんだ」

「……………」

「それに、最初の境界は『幻と現の境界』って言って、中にいる人に幻を見せる事が出来るんだよね。だから魔理沙ちゃんが魔法を放った辺りから、全部幻ってわけ」

「……………れ、れれ」

「いやーそんなに驚くとは思わなかったからつい……。いやほんとごめんね?」

頭を掻きながらさもしてやったりといった顔をする奴に向かつて、私はもう一つのスペルカードを唱えた。怒りのスペルカード宣言である。

「魔符『スターダストレヴアリエ』えええええ!!」

「ぎゃああああああああ!!」

星の魔法が私の周りを飛び交い、全てが奴に向かつていく。突然のことに面食らったのか、ソイツは避ける事もせず弾幕の嵐に沈んでいった。

「……………ふう。さて、先に進むか」

スツキリした私は帽子にかかった埃を払いのけ、意気揚々と屋敷の方へ進んでいった。

湖上の妖精と大妖精

風が冷たくなった。夏の蒸し暑い環境ではあり得ない、風の冷たさだった。

なにかが額に飛んできたので、思わず目を伏せる。額に当たった物。それは雹であった。

「……季節でも間違えたかしら」

発生源は恐らく霧の湖。しかも自分の勤は、その湖の中心を指し示していた。

急がねば。先程の食人妖怪のお蔭で随分と時間を食った。かなりのタイムロスだ。早く神社に帰って涼みたいのに、これでは異変解決に勤しむ真面目な巫女ではないか。

そして食人妖怪との弾幕ごっこで思い知った。人と妖怪との圧倒的な差を。これを埋めるには、私達はどんな手を使えば良いのだろうか。

意表を突くか、奇策妙計か、それまた別の手か。いや、やめよう。私に考える事なんて向かない。今まで感覚でやって来たのだ。これからも感覚で行こう。それが私にとってベストだと思う。

「あー！ やって来たな博麗の巫女!!」

「ちよつとチルノちゃん、いきなり喧嘩吹っ掛けるのは不味いよ……!」

「……なに、あんたら」

目の前にいるのは青色と緑色の妖精。緑色の妖精の発言から察するに、もう片方の妖精はチルノという名前らしい。どちらも妖気、魔力共に然程なく、これならば食人妖怪の時のような失態は犯さずにすみそうだ。

「あたいはチルノ！ それでこっちは大ちゃん！ 紅白の巫女、さいきよーのあたいと正々堂々勝負しろお！」

「あ、一応私も……」

「弾幕ごっこでしょ？ 良いわ、時間も掛けたくないしスペルカードは三枚、残機は一枚ね。面倒だし二人同時に掛かってきなさい」

「じゃあ早速くらえ！ 凍符『パーフェクトフリーズ』」

チルノが最初のスペルカードを宣言する。

凍符『パーフェクトフリーズ』。小さめのカラフルな小弾を無造作に放ち、それを途中で一時停止させる。そして頃合になると、また別の軌道で動き始める……といった、予測が難しい弾幕となっている。しかも弾を止めた際にチルノから追加の弾幕も放たれるお蔭で、逃げ場を見つけたと思ったら突然弾が動き出して被弾するといったことも珍しくない弾幕だ。

けれど無造作故に運否天賦で避けられたり、気づかぬ安置が出来たりと穴は多いはず。

よって油断さえしなければ、耐えきえることは容易である。

問題はもう一匹の方だ。今のところ大ちゃんとやらはおろおろと困惑しているだけで、動く様子はない。だが彼女の行動次第で、こちらの状況が有利にも不利にも傾く可能性は否めない。

だがそんな思惑も杞憂に終わる。

チルノの弾幕が終わったのだ。考え事をしていたら既に時間切れとなっていたようで、グレイズにもならなかった。

弾幕を見てもそうだけど、やはり粗いわね。スペルカードルールが制定されたのも最近だし、私は制定されたその日から魔理沙と共に弾幕ごっこを興じていた。経験という意味では、私の方が上なのかもしれない。

「あわわわわ……」

「くっそー、全部避けられたか……。でもあたいのスペルカードはまだ二枚もあるのよ！」

「ああそう……。でもあんたの力量じゃ私には勝てないわよ」

「な、なにおう!? だったら今度はこれだ！ 氷符『アイシクルフォール』」

次のスペルカードが宣言される。

チルノがひし形弾を左右に放つ。それは扇状に展開されたかと思うと、それは歯車

が合わさるかのように重なりあい、混ざりあい……もし逃げなかったら、すりつぶされてしまうように感じた弾幕だった。しかし扇状に展開するという性質上、チルノの正面が安置となってしまう。

「あら？　目の前がお留守よ？」

霊夢は即座にその弱点を見抜き、チルノの目の前まで近接。安置へと身を置く。

だがそれは、チルノによって誘導されている事に違いはなかった。

「掛かったな紅白っ！　くらえ！」

チルノが腕を一字に振った。すると普段の弾より高速で放たれる幾つもの特殊な弾が、霊夢を襲う。だが霊夢はそれさえも予測の範囲内だった。

弾幕が単純よ、と呆れるように目を瞑りながら言った。それはチルノからしたらバカにしているように取れたが、霊夢は結果的に躲したのだ。

言葉では侮っているようにもとれる霊夢の言葉だが、それは少し違う。目を瞑っていたとしても躲せるからこそ、無駄を嫌う霊夢は目を瞑るのだ。それはえてして煽りや侮りを生ませる結果となっているのだが。

「もう止めておきなさい。お山の猿はどれだけ強くとも、猿である事は変わりないのよ」
「あたいは猿じゃない！」

チルノがムキになって弾幕を放つが、焦りを生んでしまったのか狙いがどんどん離れ

ていく。その度に、瞳へ涙が溜まってきた。

あたいはさいきよーなんだ……！ と、何度心の中で反芻しても、紅白の巫女はするりと自分の弾幕を回避していく。彼女は自分をバカにしているのだと。彼女は自分を舐めているのだと。今の状況を見て、そう思うしかないのだ。

刻一刻と時間が迫っていく。もう時間切れまで二十秒も無い。このスペルカードが終わってしまったら、残りの枚数は一枚となってしまう。紅白の巫女のスペルカード三枚分を全て避けきらなければ、勝ちほぼ無いのだ。

(うう、あたいはさいきよーなんだ……！)

悪態をつくも、状況は変わらず。ただ躲し続けている巫女が自分を攻撃してこないのは、本当にその必要が無いのだと。

そして、とうとうその時がきた。時間切れだ。弾幕は手の平から消えて、目の前にいる当の紅白は、目を開いた。

「もう終わったの？ 退屈だったわ」

「ぐ、ぬぬぬぬ」

歯ぎしりをして睨み付けるも、紅白はどこ吹く風。まるであたいの存在さえ感知していないような、どこか別次元にいる奴と喋っているような、そんな虚無感が再来した。

「あんた……チルノだっけ？ いや、名前なんてどうでも良いわね。どうせ覚えなないし。」

あんたの失敗点、それはまず相手を追い詰めようとしていない。ここが一点ね。それと次に、戦略性がなくかなりおぎなり。そんなんじや当たるものも当たらないわ。これが二点目ね。三点目は……」

「な、なによ！　じゃああんただったらもつと上手く出来るって言うの!？」

「出来るわよ。あんたなんかじゃ真似できない弾幕も、簡単に撃てるわ」

「う、ううう……」

ぼろくそだった。巫女の目にはあたいの姿はさぞかし滑稽に写っただろう。大ちゃんと蓮ちゃんとレミリアと、ついでにフランとめーりんと一緒に二日も徹夜して考え、検証し、弾幕として昇華させた。あたいの努力の結晶を、思い出をそうやってぼろくそに言わないで欲しい。

でも、あたいは無力だ。巫女の言う通り弱いんだ。だから言い返せずにただ泣いているだけなんだ。

「チ、チルノちゃん大丈夫……?」

大ちゃんが寄り添ってくれた。

優しく……触れてくれた。

「ごめん、チルノちゃん。私、なにも出来なくて……。チルノちゃんが頑張って戦ってるのに、端で震えているだけで……」

なんで大ちゃんが謝るんだろう……。あたいが弱いからいけないのに。あたいが弱いからなにも出来ないのに。なんで、なんで……。

「だからチルノちゃん、私も一緒に戦うよ。もう怖くない。チルノちゃんと一緒だから、私は戦える」

「大ちゃん……」

「茶番は終わったかしら。今からスペルカード宣言をするわ。後学として見ておきなさい」

そしてとうとう、紅白が初めてスペルカード宣言をした。でも、今なら大丈夫な気がする。だって大ちゃんがついてるもん。

「行くわよ……。夢符『封魔陣』」

どこからか大量の護符が霊夢に集まっていく。中央に集まったかと思うと、次に護符が散開し、大きな円を作っていく。たったそれだけで綺麗だ……と思った。ほんのり明りを放つ護符が規則正しく動いていて、すぐさま尾を引くような弾幕を更に展開する。途中途中に霊夢が放つ弾も混ざっていて、しかも霊夢を囲む護符のせいでこちらは近づく事が出来ず、防戦一方となってしまう。

そしていつの間にか囲まれてしまった。霊夢が放つ護符はまるで意思を持っているかのように動いて的確にあたい達を追い詰めていく。

逃げ場の先には護符。背後も護符。そして間を潜るように弾が向かってくる。

上手い。綺麗。難しい。強い。

霊夢は、あたいの持っていない物を沢山持っているんだとその時確信した。だから、あれだけの口が叩けるのかもしれない。

「チエックメイトよ、妖精」

霊夢がぼそりと呟くと、霊夢を囲っていた大質量の弾幕を、そのままぶつけてきた。

「……………大ちゃん」

「うん」

やることは分かっている。このあたりより強い巫女に、少しでも噛みついてやるんだ。

そして、あたり達は消えたんだ——。

霊夢が嘆息する。

背後に気配を感じたからだ。牙を尖らせた、危険な気配。自分の弾幕は今ので使ってしまった。今ので妖精二匹を仕留めるのには十分だと自信を持って。よって少しだけ反応が遅れたのだ。

「雪符『ダイヤモンドブリザード』」

「花符『グラスランドウインド』」

「チツ……」

それは無造作に放たれた弾幕ではなかった。

大ちゃんとかやはまるで風と花が舞うような、自然そのものを表現した弾幕を。

チルノのほうはまるで雹。天から降り注ぐ雹の嵐のようだと。

チルノの弾幕が雨のように降り注ぎ、回転しながら迫る大ちゃんとかやらの弾幕に対応が遅れる。結果、二回ほど服にかする事になった。

弾幕ごっこは怪我をしないなんてルールはない。尖った雹は容易く私の服を切り裂き、鎌鼬のように迫る弾幕は、服を一闪、鋭い傷をつけていく。

「くっ、霊符『夢想封印』」

色とりどりの大きな光球が、私の周りを時計回りに旋回する。幾つかを守りに置いて、その中の光球を一つだけチルノらに飛ばすが、瞬きをする内にパツと消えてしまう。まるで逸話の妖精話。幻のようで、蜃気楼のようで。

そしていきなり背後に現れ、再度弾幕を放ち始める。

(二人同時に強くなる……ね。息の合った、良いパートナーじゃないの)

頬に一闪。服を一闪。脇腹を一闪。二の腕を一闪。

血が出るが、気にしない。

チルノと大ちゃんは止まらない。止める気などもうないのであろう。チルノにとってこのスペルカードが最後。無論、全てを出し尽くして来るはずだ。

「やあああああ!!!」

「はあああああ!!!」

苛烈になっていく弾幕。激しくなる気迫。二人の弾幕が、最高潮に達する。その都度躲し続ける事が困難になっていき、当然集中力も上がるが息も上がる。グレイズなんてほぼ当然で、被弾しそうにもなるがなんとか感覚で避け続けている。

残り時間は十秒と無い。けれど今の三人の間では、十秒がとてつもなく長い時間に感じた。まるで十秒と超えて一分。十分。一時間……と。深く、深く集中の波に飲まれていくにつれ、その時間は延びていく。

もう夢想封印なんて意味はない。突っ込もう。勘が告げている。今だ、行け! ……と。

鼻先を、眼前を飛び交う弾幕。驚異であるそれらは、私が加速していく毎に、視界から消えていく。

身体を捻り、身体を傾け、傷をつけながらも加速することを止めない。

翔べ。もつと先だ。早く、速く。

手を伸ばせばもう届く。届け。届けえ!!

「届けえっ!!」

そして、消えた。私の手が掴んだのはただの空気だ。行き場の無い掌が空を彷徨う。

だがそこで諦める訳にはいかない。二人のパターンを把握しろ。時間が無いことは分かっているハズだ。決着を着ける為に最も当てやすく、最も視角が届かない場所。私
がさつき、被弾しそうになった場所。

それは——背後だ。

「うっらああああ!!」

運と勘と勝敗を賭けて、私は振り向き様に持っていたお祓い用の大幣を投げつけた。

そしてコツン、と音が聞こえたと思うと、突然弾幕が止んだ。背後には、驚いた顔のチルノと大ちゃんがいた。被弾……という意味ではあまりに稚拙な決着だが、私は賭けに勝ったのだ。

「あたい達の……負け？」

「ええ、そうよ」

「負けたんだよ……チルノちゃん。私達、頑張ったけど、力及ばなかったみたい」

そんな事はなかった……と、そう胸を張れる。第一私の体は至るところから血が出てボロボロなのに、彼女達には傷一つない。

「そっか……。やっぱり勝てなかったんだ……」

「でも、チルノちゃんは頑張つて……」

「勝負は勝負。私の勝ちよ。それ以外に結果は無いわ」

敢えて厳しく。さつきも、今回も、二人の妖精のコンビネーションからチルノの底力まで、恐ろしいほどの才能を垣間見た。私は優しくないからこんな言い方しか出来ないけれど、それでも期待してるのだ。

「大ちゃん、帰ろう。それで、また挑もう」

「……うん、うん！ チルノちゃんなら、今度は絶対に勝てるよ！」

「うん……」

チルノは肩を持つてもらいながら、とぼとぼと湖の方へ戻つていこうとした。そんなに元気がなさそうで、私としては不服だ。良い勝負をしたのに、凄く勿体無い気がしたのだ。

でも、今更慰めの言葉を掛けてもそれは逆効果だろう。だから、ちよつとだけ……。

「チルノ、大ちゃん！ 自信がついたら、またいらつしやい。……いつでも受けて立つわよ」

その言葉を聞いて、チルノは振り向きハッキリと言った。

「そんなの、あつたり前よ!!」

「チルノちゃん……」

悔しがる様子も見せず強がるチルノを見て、少しくらいは名前を覚えておこうかな
……って思った。

それくらい、彼女達の瞳は強かったのだ。

紅の門番

箒で湖を横断するが、特になにか変わった様子はなく、呆気なく湖の中央にそびえる館に辿り着いた。

異かと疑うべきだろうか。しかし実際なにもなかったのだから、警戒心を持ち続けるのも滑稽というもの。

「えーっと、どこか開いている窓はくつと。あれ？ この屋敷、窓が一つも無いじゃないか」

これは困った事になった。いつもの如く、どこか窓から忍び込もうと思っていたのだが、どうやらこの館には窓が無いようで正面突破しか道はないようだ。

(チツ、正面突破はガラじゃないんだけどな……)

大人しく引き返し大きな門の所へ戻ってくる。洋風建築で、凝った装飾品もないただの堅牢な門。まあそれだけだったら、一番良かったんだけどなあ。

門の横には、一人の綺麗な女性が佇んでいた。壁に背を預け、目を瞑って寝ているようだ……なんだか嫌な予感がする。ここは一旦距離をとって、取り敢えず先手必勝だ。

『マスタースパーク』

大きな光が集まっていき、それらは色を形成していく。優しい若葉色のものから、激しい赤色まで。八卦炉から放たれたと同時に、それは徐々に外側へ押し出すように広がっていく。

湖が割れた——と錯覚するほどの極太レーザーが、湖の水を巻き上げながら進んでいく。その圧倒的な大質量は遠くからでも見えるほどで、湖の上空で妖精達と戦い終えた博麗の巫女もそのレーザーを察知、視認した。

直線的に進むマスタースパーク。

当然門を守る門番……美鈴も、その存在に気づいていた。だが彼女にはどうする術もない。近接戦闘ならば分からないが、弾幕ごっこは苦手の部類に入るのだ。

「はあ……。弾幕ごっこは私の負けで良いですよ。けれど、門番の仕事は最低限果たさせてもらいます」

魔理沙との距離は数キロ先までのぼる。あちらは空中。こちらは地上。一応少しだけなら飛べるとはいえ、ほぼ無制限に飛べる方が有利なことに変わりはないだろう。故に、なにもしなかった。

まず門番とは積極的に戦う役職ではない。守れば良いのだ。今回は、侵入者を通すことになりそうだが。

マスタースパークが迫る。既に紅魔館に大穴を空けそうな勢いと質量を持つて。

気を集めていく。全身から。自然から。地面から。大気中から。集められた気は、張り巡らせる事でその部分の強化に使えるのだ。

足に気を巡らせる。支え。

脚に気を巡らせる。重し。

腰に気を巡らせる。重心。

腹に気を巡らせる。源。

腕に、指先に気を巡らせる。技巧。

息を吐いた。空気は逃げるが気は逃げない。

マスタースパークが紅魔館に接触するギリギリ。両手をかざす。向かってきたマスタースパークに、かざした両手が沈んでいった。

途端、焼けるような痛みが両手を襲う。予想以上だ。そしてこれでもう私は被弾した。弾幕ごっこはこれで敗北という言い訳が出来る。

気を浸透させて行く。痛みを無視して浸透させ続ける。そして、掴んだ。マスタースパークを形成する魔力の素を。

「ふうー、フンツツツ!!」

捌く。捌く。捌く。出来るだけ外側に逸らしていく。空気を掻き出すように受け流

し、全身を使つて方向を変えていく。

気を浸透させているお陰で、触れる筈もない魔力の素をなんとか固形化出来ているが、圧倒的な質量には勝てそうにもない。だから、少しでも良い。少しでも先端の向く方向を変えるだけで良い。

「く、うう、ああああああ!!!」

気を手繰れ。拡大解釈を続けるのだ。

そして、とうとう先端を逸らした。ここからはキツカケと道を作つてやれば良い。

「フシユツツツツ！」

折れ曲がる軌道。今度はこちらからアクションを加える。後続する光に刺激を与え、方向を前方の光に合わせるのだ。後は流れ作業に近い。根気と我慢の勝負である。これはどちらも得意だ。

そして最後の光を捌ききると、様々な色の残像を残した尾が綺麗に湖の上に浮かび上がる。これだけで芸術的だと表現しても、お釣りが来るくらいだ。

私は限りなく圧縮した体感時間を体験していたせいかな、疲労が私の腰を折った。力なくへたれこむ。

すると、肩で息をして呼吸を整える私に影がかかった。それは箒に乗る少女の姿だ。

聞かされていた博麗の巫女とは服装が違うし、特徴も一致していない、魔女のような

格好をした少女。多分この少女は自ら異変を解決しに来たのであろう。

「……私はもう動けません。今この門を超えたとしても、私は疲労で気づかないかもしれませんが」

「じゃ、遠慮なく行かせてもらおうぜ。……裏口とかはあるのか？」

「あっち」

この少女なら、なんとなく探し当てるような気がした。案内なんてする余裕も余地も無し。彼女なら別にどうなっても構わないし、今くらいの魔法が放てる実力があるのならば十分だ。

ということ、私は寝させてもらおうかな。昨日の夜から緊張でほぼ眠れていない。今が咲夜さんに気づかず眠れるチャンスだ。

「ねえ」

声が降ってきた。その声は凜として透き通るような声で、つい上に振り返るとそこには当の巫女がいた。聞かされた通りの風貌。この少女が正真正銘博麗の巫女か。

名前は……たしか博麗霊夢だったはず。

「……なんですか？ 私の腕は今こんな状況なので、弾幕ごっこは遠慮願いますよ」

さっきの魔法で焼け爛れてしまった両手をぶらぶらと振り、自分が戦えないアピールを必死に伝える。

霊夢はそれを一瞥するが、すぐに目線を逸らした。目線の先は、既に紅魔館に向いているのだ。

「紅い霧はここから出てるの?」

「さあ? お嬢様に聞いてください」

「この館のお嬢様が犯人なのね」

「ハハッ、末端妖怪である私にはさっぱり」

「嘘ね。あなた強いわ」

この巫女、誘導尋問巧いなあ。話していくと、こちらがどんどんボロを出してしまう。妖怪と相對することに慣れてるって印象だ。

しかしよく見ると、そんな巫女の身体には幾つもの切り傷が刻まれている。血が出ている箇所もあるようだ。痣の形や、指先に見える震えから、多分チルノの弾幕でも味わったのだろう。

弾幕ごっこを望んでいないのは私だけではない。この少女も、また望んでいないのだ。消耗を抑えたいから——というのが最もな理由だろう。

「お褒めに預かり結構。そして、ようこそ紅魔館へ。この館は悪魔でも神でも巫女でさえも受け入れます。さあどうぞ、お入りになってください」

「やけに素直ね、怪しいわ……。まあ手間は省けるし、別に良いんだけど」

「あ、そうだ、館に勤めるメイド長にはお気をつけを。油断していると、切り傷がもつと増えるかもしれませんよ?」

「うっさいわね。そんなこと分かつてるわよ」

博麗の巫女はお喋りを止めて、門を軽々と超えていく。ああ、やっと私の役目は終わった。今年の博麗の巫女は結構曲者だった。妖怪退治を主な仕事にする役職柄、その素面は激情家から面倒臭がりまで極端になりやすい。心の芯が強いのだ。

幻想郷にはかなり前から住み着いているが、霊夢のようなタイプの巫女は初めてだ。まるで空気と喋っているよう。……だが、その性質こそが巫女を弱音も吐かずやっつくコツなのもかもしれない。

「はあー、お嬢様大丈夫かなあ。ちゃんと台本通りに、そしてアドリブにもしっかり対応出来るかなあ」

あのお嬢様の事だ。いざ巫女と対峙したかと思うと、緊張と上がり性で頭が真っ白になり、セリフを忘れてあたふたしながら最後に噛んで終了……とならぬ事を祈るばかりである。

いや、お嬢様を信じよう。私は今は従者だ。主人を疑って良いはずがない。この紅霧異変も既に折り返し地点。

異変の終幕まで、残り時間は少ないだろう。けれど見守るしかない。上手くいくよう

に……と願うしかない。だがどんな結末になろうと、あの巫女と黒白の少女。そしてお嬢様や妹様、咲夜さんの良い刺激になる事は、間違いないだろう。

知識と日陰の少女

この異変はテストプレイ。

幻想郷を治める賢者から、その意図を読み取った。彼女の懇意にしている博麗の巫女。人里の噂によるとつい最近代替わりをしたらしく、現在は博麗霊夢という人物が巫女をやっているらしい。

確か今年で年齢が10になるほどの幼き少女。八雲も相当大事に育てていたのである。しかしその弊害か経験が浅く、まだ修行中の身であるとのこと。

八雲は博麗霊夢に経験と自信を付けさせたのだ。こんな大掛かりな異変を起こして、実はマッチポンプでした……なんて事がばれぬよう、私達紅魔館勢に徹底的な監視を付けて。

人里に行き、存在が割れぬように。

異変の前に問題を起こし、素姓が知られぬように。

……まあ、私やレミイに至っては自分の分身を作ったり、または錯覚を利用した幻影を作る事も可能なので、人里から漏れ聞こえる噂や情報を難なく取得出来た。あの賢者がこちらの動向に気付いていないとは思えないけれど……敢えて何も言わないのであ

ればこちらも都合がいいもの。

さて、問題が一つある。私達は、博麗の巫女が異変解決に来た場合のシミュレーションは既に済んでいる。しかし、それ以外の者が異変解決に動いた場合は、どう対応するべきか聞いていないのだ。ここは各自アドリブで……という事だろうが、面倒なことこの上無い。

「ねえ、素性も知らぬ輩の対処って面倒だと思わない？」

「げえつ、気付いてんのかよ……」

数ある本棚の間から、少女が出てくる。リボンが付いた黒色のつばの広い帽子を着用し、黒系の服に白いエプロンといった魔法使い然とした格好だ。

私はもしもの時に備えて、適当な本に偽造した魔導書を広げる。今日は喘息の調子も良く、ある程度の全力を出せそうだ。常備薬は使わなくても良いだろう。

「さあ、掛かってきなさい……って何をやっているのかしら？」

「物色中。……へえ、色んな本があるんだなあ、後でさつくり持っていこう」

「止めなさい」

この魔法使い、なんて恐ろしい事を言うのだろうか。まさか目の前で泥棒発言とか、どうも精神がとことん歪んでいるようだ。

「今なにか失礼な事を思っただろ……」

「気のせいだと思っわ」

紅魔館の地下に存在する大図書館。そこには数千、数万近くの本が収められている。元はこの紅魔館の主であったヴラド・スカレットが趣味で集めていた物であり、後に私の父親が司書となった暁として多くの本を集め始めた事から始まる。童話や御伽噺から、パンドラや禁忌と名の付くような危険な魔導書までそこに溢れ返っているのが現状だ。

「侵入者兼泥棒さんに名前を聞くのはおかしい話だけど……あなたの名前を教えてください？」

「おう、良いぜ。私の名前は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ！」

「そう……こちらにも一応名乗っておくわ。私はこの大図書館の司書、侵入者ぶつ殺すガールよ」

「そうかそうか侵入者ぶつ殺すガールか……って中々物騒な名前だな。あんたの親のネーミングセンス、疑った方が良いと思うぜ？」

「嘘よ」

「だろっな」

戯れはこのくらいにして、弾幕ごっこを始めよう。侵入者について規定は無いけれど、とにかく激しい歓迎でもしておけば良いだろう。

「おつ、もう弾幕ごっこでもするのか？」

「ええ、無駄話の余裕は無いもの」

「じゃあ私の火力溢れる魔法を見せつけてやるとするか！」

「魔法……？」

「あ、図書館司書は魔法なんて知らねえか。じゃあとっておきの魔法を体験させてやるぜ」

魔理沙が箒に乗って中天に浮いた。帽子の中からミニ八卦炉を取り出し、いつでも使えるように構えた。どうやら戦闘準備が整ったようだ。

パチュリーには理解が出来なかった。こんな年端もいかぬ少女が魔法を使う事に。

この少女は魔法使いではない。まだ人間だ。そんな漂う木の葉のような存在が、私達魔女、魔法使いが数千年の時間を使い研究し、最適化し、長い時間を掛けて実用に至った魔法という存在を、こんな少女が私に見せる？

冗談でも笑えない。しかも魔理沙が取る構え。片手は箒、もう一方の片手は八卦炉を握るその戦闘態勢。まさかとは思うが……その八卦炉に魔力でも込めて大きな光線でこの辺りを焼き払う……といったような、そんな稚拙な技をまさか魔法と呼び披露するのではないだろう。

「魔理沙……だったわね。まさかその八卦炉から放つレーザーを、魔法なんて言わない

わよね?」

「……もしそれを魔法だと呼んでいたら?」

「魔法そのものを馬鹿にしたとして、あなたを殺す気で弾幕ごっこに興じてあげるわ」

「魔法だぜ」

「そう、死になさい。日符『ロイヤルフレア』」

既に詠唱を終わらせておいた大魔法を放つ。

大量の弾が曲線状に広がる。そしてすぐに収縮し、また広がる動作を繰り返す。それを幾つも重ね、まるで太陽のフレアのような様子を醸し出すのが日符『ロイヤルフレア』である。

「おわつ、たあ! いきなりキツイ弾幕を放ってくるな、最高だぜ」

隙は大きいがとにかく弾の数が多く、変則的でいて規則的な弾の流れを何度も重ね合わせることで、対象者の逃げ場を徐々に奪い、ミスを誘う。

「二応言っておくけど、スペカは三つ。被弾は一回だけよ」

「じゆう、ぶん、承知だ、ぜ! ……つとと、あぶねえなおい」

「喋る余裕が有りそうね」

少しだけ癪だ。

パチュリーは魔理沙が逃げ場を選びそうな場所をある程度推測。少し弾の流れを変

化させた。すると、魔理沙の動きが忙しなくなる。

「ちよ、今なにか操作したか!？」

「気のせいだと思うわ」

弾の流れを、時間配分を計算しながら少しずつ変えていく。残り二十秒。弾と弾の間の密度を変更、速度に緩急を追加。更に数を増やしていく。

数百年と生きた魔女である自分。人生の全てを魔の探究に捧げたパチュリーにとって、スペカの改造改変など容易い事であった。

「く、恋符『マスタースパーク』」

魔理沙が弾幕の隙間を縫って、持っている八卦炉から極太のレーザーを繰り出す。

その反撃は既に予測済みだ。パチュリーはスペカの終了時間を見極め、転移の魔法を使った緊急離脱でマスタースパークを躲す。

「大妖精の技術がこんなときに役に立つなんてね」

「くそつ、躲したのか!」

「今のも魔法よ。大大大先輩の魔法を見て、しっかり学びなさい」

「ハッ、ラーニングは得意なんだ。技を盗まれても文句は言うなよ?」

吸血鬼異変が終わったのちに、件の大妖精が披露した転移の術を独自に私が考察、研究の結果生み出された転移の魔法。この少女に模倣されるとは思えないけれど、本当の

魔法を体験してもらうには丁度良いかもしれないわね。

「クソ！ 当たれ、当たれ！」

「八卦炉をそんなに乱暴に扱ってはいけないわ。贋作とはいえ、元はと言えば天界の神聖な炉なんだから」

まずこんな若い少女が、八卦炉のような物騒な物を持つことがおかしいのだけれど……。これを作った人物は魔理沙の事を思ってたのか、それとも……。

「余所見してる暇はないぜ！ 喰らえ、魔符『スターダストレヴアリエ』」

「……魔法、使えるじゃない。まだまだ拙いけれど。弾幕ごと押し潰されなさい、月符『サイレントセレナ』」

魔理沙が七つの魔方陣を自らの周りに展開し、星形の弾幕を渦巻くように放つてくる。

そして私は対抗するように、お得意の高速魔術詠唱で月符『サイレントセレナ』を唱えた。

展開した魔方陣の数は、魔理沙の魔方陣の数倍。自らの周りから、魔理沙の頭上、直下、左右に張り巡らせる。

出てきたのは鋭利で素早い弾。それに加えて、一つの魔方陣から発現する弾幕の密度は、魔理沙のスターダストレヴアリエと一線を画する。

「ぐつ、くあ、くそつ、こりや退散だ」

「逃げ続けるばかりね。それでは進歩しないわよ」

「被弾するよか良いだろう」

「そうね。恐怖に向かつて一步進むのは、誰しもがたたらを踏むもの。良いわ、好きに逃げなさい。逃げられるならね」

波状攻撃を仕掛ける弾幕とは別に、こちらから別の弾幕を放つ。

魔理沙も上手く回避していくが、放たれた弾の中の一つが魔理沙の箒の先に当たった。

「うわっ、つとー！」

バランスを崩す魔理沙。そこに全魔方阵を集中させて、一斉放火を加えた。

魔理沙が吼える。その声に同調したのか、魔理沙の持つ八卦炉が火を噴いた。まるでジェットエンジンの如く射出された火は、有り余る勢いを持って魔理沙に十分な程の加速を与える。

しかし上には私の魔方阵。弾幕の嵐に突っ込むかに思われた魔理沙だが、強引に身を振り、反転し、屈み、弾幕を躲していく。

「はあ……時間を稼ぐのは上手いようね」

「それは誉め言葉だつてことに、私はしーっかり気付いてるからな」

「すぐにその減らず口を閉じさせてあげるわ」

「こつちだつて後一枚スペカが残ってるぜ？ 良いのか、消費させなくて」

「どうせ能なく撃つだけでしょう。それとも私が驚くような魔法でも見せてくれるの？」

「ああ、見せてやるさ。……しつかり受け取りやがれ」

……残念だが、その口車に乗るつもりはさらさら無い。私の月日以外の全ての属性を使つた最高の魔法で決着を着けてやる。

「こちらも見せてあげるわ。魔の真髄とも呼ぶべき魔法を」

「私が先手だぜっ!!」

突如、視界を圧倒的な光量が包む。

「なっ!? なによこれ——」

「マスタースパークの、放つ直前に光が集まる習性を利用しただけさ。こつちこそ残念だが、私は魔法を完璧には使えない。だから、今はこんな手品に頼るしかないわけだ。まあ——てめえはその手品に敗れるわけだが」

「くつ、火水木金土符『賢者の——」

「遅い! 八卦炉全出力、魔砲『ファイナルスパーク』ツツツツ!!」

見えない。何も見えない。まさかこんな手を使うとは思わなかつたわ。

魔導書で影を作っても、光が溢れて目を焼く。正確な座標を必要とする転移魔法はこんな時に使えない。

———はあ。受け入れよう。私が魔理沙の突飛な行動に考えが及ばなかった事が悪いのだ。

「魔理沙……………」

「喰らええええええええええ!!」

「私の負けよ」

その一言は魔理沙に聞こえたかどうかは分からない。けれど、魔理沙の放ったファイナルスパークは逸れたのだ。……私の目の前で。

光の奔流が細くなり、視認できないほどになると、撃った本人である魔理沙が笑いながら近づいてきた。

「へへ、やっと負けを認めたな」

「ええ、流石にあの出力の魔法をくらえば、私でもただでは置かないもの」

「ま、あの魔法は虚仮威しなだけだな」

「はっ。」

虚仮威し……………？ ということは、まさか……………私の目の前で突如逸れたのは……………。

「その顔を見ると気付いたみたいだな。そう、あの魔法は相手を驚かせる為に偶然出来

たドツキリ同然の手品さ。な、言っただろ？ てめえはその手品に敗れるわけだが――

――……つてな」

私は呆然としていた。どうやら一本取られたらしい。

「じゃあ勝者の特権として、蔵書をちよつとだけ拝借しておくぜー」

プライドが傷つけられたからか、はたまた自分より幼い魔法使いに一本食わされたシヨツクからか、私は大図書館の本が盗まれていくのを見ていることしか出来なかった。

瀟洒なメイド

「意外と広いわねこの館」

まさか館の大きさが、外と内で違うとは誰が想像しただろうか。玄関を抜けると中央に回る魔方陣が設置されたエントランスホールがあつた。見る限り全てが赤で統一された内装は趣味が悪いにも程があるが、一転してみると統一性を極めた美ともとれる。

余つた護符で傷口を縛りながら、窓の少ない通路を進んでいく。しかし幾度も幾度も進んでも、何故か通路の終わりが見えない。逆に引き返すと、今までの努力がなんだつたのかと言えるくらい簡単にエントランスホールへと戻れた。

これは……。

「そこね」

護符を飛ばす。靈力でコーティングされた護符は、唯の紙とは思えない硬さを誇る。

天井に刺さると思われた護符は、何故か途中で不自然に逸れ、地面に落ちる。

そこはなにもない空間の筈であつた。しかし靈夢が護符を飛ばした場所だけ、空間が歪んでいる。靈夢が目で促すと、その場所からメイド服を着込んだ銀髪の少女が現れた。歳は靈夢と同じくらいの十歳。そして彼女は、人間であつた。

「……よく気付いたわね、褒めてあげるわ」

「お褒めの言葉なんて要らないわ。それより物かお金が欲しいわね」

「あなたはお嬢様の敵？」

「お嬢様が誰かは知らないけれど、もしこの異変を起こした奴がそのお嬢様だったら、私の敵ね」

「そう……」

「確証は無いし、あんたの大好きなお嬢様の潔白を示したいのなら、私をお嬢様のところに案内してくれない？」

銀髪のメイドが首を捻る。心底私のお願いの意味が分かっているような表情だ。

「私が敵に案内するのは、冥土だけよ」

「今時のメイドは大変ね。お嬢様とやらの為に血生臭い仕事までやらなきゃいけないなんて、同情するわ」

「同情してくれるなんて優しいのね。けれど私にとってお嬢様とは全て。どんな命でも完遂するのが私の流儀よ」

「いつか破綻するわよ」

「時間や空間は破綻しないわ」

話し合っても無駄なようだ。彼女の瞳には強い光が灯っている。意思を曲げようと

しない……ある意味頑固で、ある意味強靱な精神の光が。

「取り敢えず通路を戻してそこを退きなさい。退かぬならあんたも敵とみなすよ」

「あらあら、かの有名な博麗の巫女とやらは頭がお花畑なのかしら。私とあなたがいつお友達になった？」

「じゃあ敵ね。真剣かお遊びか選ばせてあげるわ」

「あなたの好きにすれば？　まあどちらにせよ……勝ち目は無いでしょうに」

「それはあんたの方でしょ」

満ちる間際の波のように、警戒心を感じさせず接近する。

私は人の動向、視線を感じることに思いの外得意だ。博麗神社を何者かが監視しているような、被害妄想染みた感覚を覚えたのはかなり昔。いつかその正体を暴こうと躍起になっていたら、いつの間にか覚えていた自分だけの視点、感覚。その人の意識はどこに向いているのか、その人から見える視界の範囲は。

意識がハッキリとしてきた年頃から、博麗神社でその感覚を養い続けた日々。それもこれも、自分が見られている、監視されているという根拠の無いなにかから来た物だ。今ではその視点、感覚は勘として昇華され、意識せずとも感じ取れる新たな武器となった。

靈気に包まれた護符が拳に巻きつき、目の前のメイドの腹に重い一撃を加える。

その時のメイドの顔と言ったら、腹を抱えて笑ってやりたいくらいだ。まるで意識外から加えられた攻撃は、油断をするしないの前提を崩し、緊張から来る筋肉の強ばりを無効化した。

「ぐっ、うあ……」

「ふん！」

距離を取るためと、追撃として更に鳩尾へ鋭い蹴りを放つ。だが咄嗟に反応したメイドが、腕をクロスさせ庇ったことで追撃は失敗してしまった。

「……流石、博麗の巫女」

「驚いているところ悪いけど、今ので実力はハッキリしたでしょ？ 遊びじゃない限り、

あんたに止めを刺すことだって出来たんだから」

「遊び……ね。確かに手加減をしている場合じゃなかったわ」

「へえ……じゃああんたは奥の手でも持つ——」

『ルナクロック』

——時が止まった。

咲夜は不機嫌であった。何故自らが仕える主が、こんな少女に負けなくてはならないのだと。

異変解決にどんな奴が来るのかと思えば、自分と同一年くらいの子。数百の時を生きる主に、こんな輩が勝つてはならない。

飢餓で飢え死にそんな所を保護してくれた主であり、母様が負けてしまうのは、どうしても納得がいかないのだ。

今回の異変は母様の意向とは違う、云わば付き合いのようなもの。幻想郷に移住する上で必要なごますり。けれど、幼い私にはそんな事分らない。純粹だからこそ、母様の勝利を純粹に願う。

そこに不純物など無いに等しく、例え母様に教えられた私のやるべき事と行動が違ってしまっていたとしても、私は博麗の巫女を母様のおわす場まで連れていかない。行かせない。決して。

咲夜以外生物としての機能を全て停止させられた世界で、咲夜はナイフを配置している。

必ず博麗の巫女に勝つために、抜け道も作らない。だが死ぬ程度ではない。良くて重傷。

けれどこれは弾幕ごっこを知らしめる為に行われた異変。死亡しては不味いため、重傷程度で終わってくれるのはこちらとして嬉しいところだ。

「……さて、時間を動かしましょう」

——時間が動き出す。

「——てるのかし……………ふうん」

霊夢の周りには、総ての死角を埋めるようにナイフが設置しており、矛先は当然全て霊夢だ。

「さて、遊びでいられるかしら」

「それが奥の手……………————だつたら嘗めてるとしか言いようが無いくらい救われないわね」

「なんだと？ ……ふん、戯れ言を聞くつもりはない。串刺しにでもなつて焼かれなさい」

咲夜の合図と共にナイフが動き出す。まるで霊夢がとても強い磁石で造られていて、ナイフの鉄の部分がそれに反応し即座に吸い付くように、矛先は霊夢に向かっていった。速さは然程ない。けれど数は人を限りなく殺傷しても有り余るほど。

「ナイフをどれだけ近づけたとしても、当たるとは限らないのよ。『夢想封印』」

色とりどりの光弾が霊夢の周りを旋回し、次々とナイフを弾いていく。ナイフは銀製だが、これといって特別な能力は無く、ただ普通に頑丈なだけである。故に、霊夢の放つ夢想封印に対して決定的な打撃は与えられず、沢山あったナイフが撃ち落とされていく様を、咲夜はただ突っ立って見ていることしか出来ない。

「……じゃあ次、幻幽『ジャック・ザ・ルドビレ』」

時が止まり、また動き出す。この行為を霊夢は知覚できないが、勘として何となくだが、限りなく正解に近い答えを頭の中で出し終えていた。

(空間を操る能力なのは間違いないわね……)

咲夜が赤い大弾と大量のナイフを、直線上に何個もばらまく。霊夢を的確に狙ってくる両方は、次々と霊夢の逃げ場を無くしていく。

しかし霊夢はこれ程以上に落ち着いていた。それは今までの激闘から来た精神的余裕か、または侮りから来る絶対的勝利への自負感か。

けれどこうなってしまうた霊夢は強い。自らの直感と勘を信じ、弾幕の隙を見つけて抜けていく。針の穴を通すようなグレイズにも、顔色一つ変えない。

霊夢の調子が良くなる事に比例して、咲夜の心境は穏やかではなかった。霊夢が躲し続ける毎に焦りがぼつぼつと湧き出し、飽和点に達するとミスを誘発させられる。

その繰り返し。繰り返しだ。

いつの間にかナイフは一本を残して全て放ち終わっており、その結果はこれ以上続行不可だと咲夜自身に深く訴えかけていた。

霊夢は愕然とする咲夜を無視し、通路に向かって再び歩き始める。

「ちよつ、ちよつと待って！」

「……………」

霊夢は振り向かない。

既に戦う力を持たぬ者に、無理矢理力を振るいたくなかったからだ。霊夢は理解していた。自分の力は妖怪退治や異変解決の為に使われるのであって、しようと思えば抵抗さえ出来ぬようになってしまふ少女に振るうべき力ではないことを。

「……………待ちなさいよ……………ツツ!!」

だから、振り向かない。振り向いてはいけない。振り向けば、彼女の意思を尊重せねばならないから。あの瞳に宿る、自殺願望に近い忠誠心に付き合わねばなくなるから。

「待って……………まっ……………つて!」

—— 咲夜は親の顔を知らない。産まれてから一度も見たことが無い。気付いたときには捨てられていたからだ。

母の乳の味も、父の逞しい掌の感触も、咲夜は感じたことがなかった。

幼いながらも知恵を振り絞り、生きるために盗みをした。生きるために命を奪った。生きるために泥をも啜った。

人の誇りを貶めて、獣と化した。けれどそんな生活も数年で尽き、保護されるまでは

ゴミ箱を漁ったり、捨てられていた廃棄物や虫なんか口に入れてみた。……味は最悪だったけれど。けど、生きるために必死だった。

人間とは脆く儂いもので、そんな生活を何年も続けていた咲夜の体は限界寸前であった。そして魔法の森を抜けてすぐ、咲夜はとうとう飢えて倒れてしまう。

『ふんふんふーん♪ 今日漫画最新刊の発売日♪ ……あら？ 何これ……つて人間じゃないの!？』

咲夜の人生上、咲夜に掛けられる声とは罵詈雑言を極めたものばかり。死ねだの消えろだのはもう聞き飽きている。そんな咲夜にとつて、その声音に懸けられた想いがどんな物か分からなかった。けれど、理解にし難いものである事は確かである。

その声は、今までの誰とも違ったナニかを孕んでいたのだから。

そして咲夜は大きな館に連れて帰られ、体を念入りに洗われ、視界が滲むような美味しいご飯を食べるはめになる。

まるで犬だ。餌を与えられた程度でなつくなんて。けれどそんなプライドを二の次にしてまで、その“家族”は暖かかった。

温い温床は、咲夜を出しまいと足を引っ張り続ける。けれど、それに浸かり続ける。そんな道を、咲夜は選んだのだ。

どんな困難が降ってきてても、美鈴を。妹様を。パチユリーを。私を拾って、育ててく

れた母様を。この暖かい関係に浸りながらも、護りたいって思えたからだ。

「……………奇術『エターナルミーク』」

「……………忠告よ、足掻きは止めなさい」

「だが断るわ。その先にいるのはお嬢様。お嬢様を守らない従者はいませんことよ」

「いるかも知れないわ」

「それは従者じゃないわね」

「あつそ」

太腿のホルスターに収納してある、最後のナイフを手取る。体術も何もない適当な構え。だが覚悟だけは一流のソレだ。

「行かせないわ、お嬢様の元に」

「じゃあ無理矢理通るだけよ。そのお嬢様の元まで」

咲夜が地を蹴る。慎ましさも有ったもんじゃない、必死な走法。

霊夢は振り返った。応えるために。

咲夜はナイフを、武器を握ったのだ。自分の覚悟と共に。これに応えねば、流石に会ったばかりの他人と言えど失礼ではないのか。そう思った霊夢は、陰陽玉を呼び出す。

陰陽玉。博麗神社に飾られていた神性に溢れる物体で、霊夢といえどまだ完璧に使い

こなせていない。危険なので弾幕ごっこくらいにしか使用していないが、それを抜きにして霊夢は呼び出した。

この行為が指すものは何なのか。

霊夢は陰陽玉から小弾をばらまいていく。

対して咲夜は、自前のナイフで一つずつ最小限に弾を捌いてく。

徐々に近づくお互いの距離。そして霊夢の陰陽玉と咲夜のナイフがぶつかった。

これに制したのは陰陽玉の方である。咲夜のナイフの刃先を粉々に砕き、弾く。

だが咲夜は諦めない。ナイフが無くなれば、次は自分の体を使えば良いのだ。

鋭い回し蹴り。

霊夢、直感で後方に下がりがり躲す。しかし冷や汗は滲み出た。

今の咲夜は必死だ。忠誠心から来る想いが、自らの身体を動かす原動力となつていく。

陰陽玉と直感を盾にして防ぎ躲す事を何度も行うが、相手方の息が切れる様子はない。それもそうだ。地獄を何度も見続けながらも生きようともがき続けた咲夜は、逃走用の為とはいえ体力もかなり鍛えこんである。

霊夢も常人を超える身体能力が有るとはいえ、地力の差は歴然であった。

「……………ッ！ どう、かしら……………少しはここから引き返す気になつた？」

「残念、私は強情なのよ！」

「それもいつまで続くのかしらね！」

拳が、蹴りが、流れが鋭くなつていく。咲夜が流れに乗り始めたのだ。鋭いながらも芯を捉えてくるその一撃は、云わずもがな重い。霊夢は防戦一方であった。

「さて、そろそろ終わらせてあげるわ」

「余計なお世話よ」

霊夢は陰陽玉を前面に出し、刹那の時間稼ぎを行う。その間に行ったのは、護符による拳のテーピング。それは拳のみならず肘までに及んだ。

「そんな玩具、時間稼ぎにもならない。ここにくたばれ！」

陰陽玉を越え、防御を捨てた霊夢に向かつて、咲夜は全体重を乗せた手刀を放った。

これをくらえば確実に昏睡は免れないであろう、そんな一撃。

それを霊夢は、護符を巻きつけた左手で受け止めた。

雷が骨を貫く。……そんなイメージが湧くほどの痛み。文字通り、咲夜の手刀は貫いたのである。霊夢の左前腕を支える橈骨とうこつと尺骨しゃくこつを。

その時、感觸と同時に咲夜は勝ちを確信した。その瞬間に浮かび上がる勝利までの方程式と、陶酔感。

陶酔感に溺れたのだ。だから気付かなかつた。陰陽玉はまだ役目を終えていない事

に。

「結構固いわよ、それ」

「……え？」

突如、陰陽玉が高速回転。そして急速に霊夢の手元へと戻っていった。その軌道上に、咲夜はいたのだ。陶酔感が心を占める中、陰陽玉の存在に気付く事は至難であろう。小気味の良い音が通路に響き、メイドと巫女の対決が決着した。

紅霧の王

(ヤバイヤバイヤバイヤバイ)

この紅魔館の主であり現当主であるレミリアは、今まさに窮地に立たされていた。

(な、ん、で、こんなときに博麗の巫女が来るのよ)

レミリアは今、王の間の入り口付近で、レミリアを探す博麗の巫女と黒白の魔法使い然とした少女を観察している。

「そろそろ……出てきても良いんじゃない、お嬢様？」

「いるいる、悪気が走るわこの妖気。何で強い奴ほど隠れるんだ？」

(いや出れないから。なんかそんな雰囲気だけど、流れ完全に見失っちゃってるから私か)

こんな事になったのは数分前まで遡る。

『うー。なんで来ないのよ』

レミリアは退屈していた。博麗の巫女が来たとの一報を受け、いざ準備したのは良い

ものの、中々その博麗の巫女とやらが来ない。時間稼ぎをする自分の従者が、それだけ優秀だという事実でもあるのだが、それはそれこれはこれ。

実際レミリアはすることが無いのだ。頭の中ではどんな展開に持っていこうか、どんな格好いいセリフを言おうか、なんのスペカを使うかの思考がごちゃ混ぜになっており、結果思考の進行は遅い。

『あー、なんだか催して来たわね。えーつとおトイレはーつと』

そして彼女が用を足すために台本を置いてその場を離れ、戻ってくるとそこには二人の少女がいた。

一人は頭に大きなりボンを巻いた、紅白の巫女服を着込んだ少女。

もう片方は黒い服に白いエプロンを着込んだ全く知らない少女。

ここでレミリアの頭は急速回転し始める。

——台本置いといたままだ………と。

「なあ霊夢、ここにそのお嬢様とやらはいないんじゃないのか？」

「いや、絶対にいるわ。きつと隠れているだけよ。私の勘が告げているもの」

「そりゃあ霊夢の勘は当たるけどよう……流石に今回は………ん？ こりゃあなんだ？」

その時魔理沙は、王座の横に置いてある何かを発見した。拾い上げると、それは一冊の本のようなもの。タイトルは紅霧異変と書かれている。

「えつと何々？ 紅霧異変を起こす吸血鬼の王レミリア・スカーレット。彼女は大変聡明で、今後の幻想郷の行く末を憂いていた………つてなんだこりゃ」

「——だめええええええ!!」

二人が入ってきた入り口から、大変聡明な吸血鬼が飛び出してきた。顔は半泣きである。

紅霧異変台本。通称レミリアの落書き本。主に咲夜と美鈴が編纂し、パチュリーが検閲した、紅霧異変の大まかな流れを予測し記録された本であったが、レミリアがこれではダメだと無駄に手を加え、無駄な才能を発揮し、一冊の小説のようになってしまった哀れな台本でもある。

日がな退屈なレミリアにとって、小説を書いていたこの一時は唯一の時間潰しであった。それ故に何度も改稿し、何度も読み直して修正を加え続けた結果、完成度も高い本

が出来上がってしまったのだ。弾幕ごっこそつちのけである。

しかしそこはレミリア。思考だけは通常の人間度合いとほぼ一致しており、その本を他人に公開する事に対して恥ずかしさの感情は持ち合わせている。だからこそ王座という、いざと言うとき以外ではあまり滅多に入らない場所に隠しておいたのだ。

それが見つかり読まれてしまう……ということとは、自分が書いた自己陶醉の塊である痛いポエムを親の前で朗読される以上の苦痛。しかも親しい者ならまだしも、拾い上げたのは全くの他人。どのようなセリフを、口上を述べるかなんてもう頭の中に無かった。

とにかく必死、台本を取り替えそうと必死である。

「やつと現れたわね。探したわよ」

「ふん、人間が。そのような傷だらけの身体で私に抗おうと？ ……どうやら骨も折れているようじゃないか。帰りな、今日は気分が良いの。だから見逃してやろう」

（帰ってください!! 全然気分良くないから！ 現在進行形で悪くなってるから！）
レミリアが不遜らしく霊夢を追い返そうとする。だが霊夢は応じない。その瞳は、退くことなんてしない……と強い意思を感じさせるようにレミリアを見据えていた。

「てめえがこの紅い霧の元凶……ってわけか？」

黒白の少女が少し詰め寄った。手には先程の台本が握られている。

「ふん、愚問だな。吸血鬼は霧状化が出来る。ここまで来れた能は褒めてやるが……」
の館の持ち物を置いて逃げ帰った方が得策だぞ？」

（その台本を置いて、一旦帰ってくださいます！）

レミリアの必死な懇願は届かず。

「一応聞くけど……なんでこんなことをしたの？」

「フツ、ご存知吸血鬼は日の光が苦手ですねえ。この紅霧に覆われた幻想郷なら、私達が堂々と活動出来るでしょう？」

「それで迷惑してる奴がいるんですけど」

「幻想郷は弱肉強食だろう？ 弱い方が悪いんだ」

「だったら異変はすぐ解決出来るわね」

「ほう、私が弱い……と」

「欠点のある方が、魅力的よ」

レミリアは焦っていた。これ戦う流れや……となんとなく理解できたからだ。

正直今回の異変は負けることが確定している。だからこそ、レミリアには勝とうという強い意思自体無いのだ。実際日の光なんて、日傘さえ差せば無効化出来る。

そしてそんな弾幕ごっこよりも、気がかりな事が一つ。黒白の少女が持つ台本だ。あれを取り返したい。どうにかして他人に見られる前に、あれを隠匿せねば。

焼き払う……という選択肢も存在する。けれどあの台本はレミリアの最高傑作。情があるのだ。その情のお蔭で、レミリアは強硬策に出られないでいる。

(くううう！ 察しなさいよその黒白お！)

歯痒い。なんとも歯痒い。後悔先に立たず。今更もう遅いのだ。

「……そういえば、この本はなんなんだ？ 見たところなんか色々書かれているようだが……」

魔理沙が中身を閲覧しようとした時、言いようもない熱が込み上がってきた。

察しろ！ ……と。

見るな！ ……と。

やめて！ ……と。

沸き上がる怒りと熱。レミリアの身体から、怨嗟の昂りが巻き起こっていた。完全に逆ギレである。

「貴様ツ！ その本に触れるなツ！」

「おおつとと。こりやなんか琴線に触れる代物だったか？」

吠えるレミリアに対して、魔理沙はおどけてみせる。そして魔理沙は、信じられない言葉を口にしたのだ。

「そうだな……弾幕ごっこで私に勝てたら、返してやっても良いぜ？」

「……………」

それは魔理沙や霊夢らからしてみれば、異変解決の一環。ただの建前に過ぎない。けれどレミリア側からしてみれば、それは居住とプライドを賭けた究極な二択であった。

もし勝てば、幻想郷の賢者である紫との約束を破る事になる。異変にて負ける……との約束が。そうなれば、レミリア達に幻想郷の移住は許されない。

紅霧は害が少ないと言つても、脅威として認識してもらうが為に、霧を構成する妖気に多少の毒性が混じっている。霊夢らが駆けつけに来る速度はかなり速かった。そこは良い。悪いのは駆けつけるまでの期間だ。

紅霧は既に幻想郷中を覆い尽くし、すぐにでも結界を突き破りそうになるまで充滿している。このままでは幻想郷の存在自体が危うい。

流石の紫もまさか一ヶ月以上も異変を放置しておくとは思ひもよらず、よって昨日の夜に彼女の式である藍から連絡が届けに来た。

『一度で終わらせて下さいませ』……との文面で。

レミリアは震え上がった。さしずめ前門の悪魔、後門のスキマである。

レミリアは選ばねばならない。家族か、自分の羞恥心か。

「うーんそうね、じゃあ私から行っても良いかしら？」

「チツ、仕方ねえなあ……。霊夢、後で甘味奢れよ？」

「賽銭の中身具合ね」

レミリアが気付いた時には、既に霊夢と魔理沙が弾幕ごつこの準備をしていた。無言を肯定と捉えたのだろうか。

(なんで勝手に進めてんのよ!!)

心の中で悪態をつくも、そんな事お構い無しである。

そして、レミリアからすれば今更霊夢の事などどうでも良い。台本を持っている魔理沙しか標的に映っていない。そしてそこで閃いた。圧倒的な打開策を。弾幕ごつこで負けながらも、日記を取り戻す方法が。

「クツクツ、ふふふ」

「……頭でも狂ったかしら?」

「いやいや、滑稽でなあ。私は吸血鬼。人間とは比べものにならない程の力を持つ」

「……で?」

「貴様は理解力も乏しいのか。二人で掛かってこい……ということだ」

そう、これがレミリアの考えた打開策。弾幕ごつこ中、先に魔理沙から台本を強奪。その後、残った霊夢に負ければ良い作戦だ。

確率論でいくと、その作戦の成功率は糸のように細い。しかし、頭の麻痺した今のレミリアでは、これ以上の打開策が思い浮かばなかった。

この作戦に今は縋るしかないのだ。

「へっ、随分と舐められたもんじゃないか。霊夢、私も手伝うぜ」

「……好きにすれば良いわよ。だから甘味は無しね」

「そんな！」

乗りおる乗りおる。さながら今のレミリアの心境は悪代官。まず第一関門は突破だ。

このままゴールまで突っ切るしかレミリアの道はない。

「それで……名前はなんだっけお嬢様？」

「そう言えば言っていないかったな。私は紅霧の王であり、この紅魔館の現当主、レミリア

ア・スカーレットよ」

「私は博麗霊夢。今からあんたを倒すから、覚えておいた方が身のためよ」

「ついでに私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ」

各々の自己紹介が終わり、三人は空中へと戦う場を移す。

「ふふ、貴女達、今夜はこんなに月も紅いから、本気で殺すわよ」

「ええそうね。こんなに月も紅いのに……」

「楽しい夜になりそうね」

「永い夜になりそうね」

「涼しい夜になりそうだな」

今、紅霧異変を止めようとする人間と、それを阻止する吸血鬼との戦いが、始まった。霊夢は陰陽玉を。魔理沙は八卦炉を。レミリアはどこから取り出したのか、紅く光る長い槍を。

三者が武器を手を取った——その時である。

「ちよつとお姉様！ 誰も人間来ないんだけど!!」

王座の間、その入り口で、溺愛する自分の妹がこちらに向かって怒りを露に叫んでいた。

スカーレット・デビル

レミリアは驚いていた。

まさかのまさか、この人間二人はフランのいる地下室を無視して、こちらに来たのか……と。

フランは不満を隠さずにレミリアへ詰め寄った。

「お姉様、人間がこっちに来るはずだーって言ってたのに、ちつとも来ないじゃない!!
しかもお姉様の所には二人も来てるし……」

「あ、あのねフラン、お姉ちゃんもそういうつもりじゃあ……」

「誰も来ないのつまんないつまんない、つまんないっ!」

フランが拳を握る。その掌には、目があった。誰の目か——そんな思考に至る前に、レミリアがフランの腕を押さえた。

が、予想以上にフランの力が強い。

「ちよ、フラン、やめな——」

「きゅっとして、ドカーン!」

突如、紅魔館王座の天井が崩れ去った。大小入り雑じった瓦礫が紅き月を隠す。

靈夢と魔理沙はそれを早めに察知し退避、レミリアは持ち前の素早いスピードで瓦礫をすり抜け、紅き月が綺麗に映る霧の湖に場を移した。

脇にはフランが抱えられており、あの一秒にも満たない時間で回収したのだ。

「仕切り直し……ね。レミリア。妹が居るところ悪いけど、叩き潰すから」

「お姉様、私もやるー♪」

レミリアはフランを見た。

どこまでも澄んだ瞳。使用人に、気が狂っている……なんて言われていた妹とは思えないくらい純粋な瞳だ。

今回の異変、最も積極的に参加しようとしていたのはフランだ。レミリアはフランに負い目があるが、フランもなにかレミリアに思うところがあるのかもしれない。

フランもなにかしようとしていた事には違いない。

レミリアは猛省した。彼女の意思を、想いを尊重しなかった自分はなんて愚かだろうか。

確かに、行動が読めないフランと共闘すれば、レミリアが台本を奪える可能性はほぼ無くなるだろう。けれど妹の意思を筈にするというのなら、どれだけ情がある台本だとしても、どうでも良いんだ。だって彼女こそが、レミリアの最後の家族だから。

「ええ、フラン、共に戦いましょう」

「へっ、これで2対2。丁度フェアってわけだ。吸血鬼狩り、一体だけじゃ少ないと思っ
てたぜ」

「ハッ、その減らず口、すぐに消し炭にしてやろう」

「おうおう、吸血鬼で妹想いなお姉ちゃんは怖いなあ」

「……スペルカードはそれぞれ三枚。残機はそれぞれ二よ。文句はあるまい?」

「ないわ」

「ないぜ」

「ないよー」

レミリアはフランを離し、目を瞑った。

幻想郷という新天地。そこは地獄では非ず極楽であった。不安、焦燥、絶望、苦痛、諦
め。それらは何度心に抱いただろう。……今まで食べたパンの枚数くらいかもしれな
い。

今は妹であるフランは解放され、友は救われ、門番と友になり、従者だけれど、新た
な娘のような存在が出来た。

走馬燈……とは違ったなにか。それは今までの地獄と比較して浮かび上がった極楽。

この異変で全てを終わらそう。過去の禍根も、全て。ああ、ぶつけてやるさ、幻想郷
を管理する賢者のお気に入り。魅せてやるさ、魔法使いのような少女に、吸血鬼の恐

怖を。

そして取り返してやる、黒歴史。

レミリアは目を開け、言葉を紡ぐ。

「先程の発言、訂正しよう。夜は成る物ではない、馳せる物だ。良い夜は共有できない。各々が見る夜は違うのだから。自分が綺麗だと思えば、その夜は綺麗になる。夜とはエゴよ。自分だけの物。誰の物でも無さそうで、誰の物にでも出来る。ねえフラン、あなたはどんな夜が見える？」

「私には……綺麗な星が見えるよ。すっごく綺麗な星が二つ!!」

「あら、妹が貴女達人間に見とれてるわ。妬いちやう。……それに、星は見る場所によって二律背反よね。如法暗夜では輝き、暗き宇宙では醜き。まるで人間よ」

「なんだ、痛いポエムか？」

「魔理沙、来るわよ」

霊夢が魔理沙に注意を促す。レミリアとフランの目は、爛々と紅く輝いていた。

「……さて、終わらせましょ。貴女達との運命」

「あんたとの運命なんて、こっちから願ひ下げよ!」

瞬間、四人がそれぞれ飛び立った。お互いが好き勝手に湖の上で弾幕を張り巡らせていく。

「冥符『紅色の冥界』」

最初に仕掛けたのはレミアアであった。細長いひし形状の小さい弾がレミアアの周りに配置されていき、丸い虫籠のような形を作り出す。

籠の全長は数十mにも及び、そこから溢れ出た弾が直線上に飛ぶ。そして幾つかその弾が射出されたかと思うと、一気に籠が解き放たれ、交差するような軌道で全ての弾が飛んでいく。

「結構密度が薄いんじゃないか？」

水を切りながら軽々と避けていく魔理沙。しかし侮つてはいけない。レミアアの弾幕は放たれた後にすぐさま虫籠を形成、再度同じ手を仕掛けてくる。その姿は、紅い龍がレミアアの周りを旋回し、守護しようとしているかのような。

そして危険なのはレミアアだけじゃない。

「キャハハハハハ！ 禁忌『フォーオプアカインド』」

フランが四つに分身した。それは残像や幻影なんかで片付けられるほど、紛い物じゃない。まるで本物だ。本物が四人現れたのだ。

「おいおいおいおい!!! うっそだろ!」

交差する弾幕。直線的な弾幕。霊夢、魔理沙狙いの弾幕。逃げ場埋めの弾幕。速度の速い弾幕。無差別な弾幕。

一生に経験するかどうかの様々な弾幕が、暴れ、うねり、襲いかかる。
「くうあつ!!」

「霊夢!」

まるで雪崩や津波を思わせる圧倒的質量と数の暴力に、霊夢が飲まれた。

その様子を見ていたレミリアが鼻を鳴らす。こうなることは分かっていた……と、予定調和を見ているかのような視線を向けるレミリアは、明らかに霊夢と魔理沙を見下していた。

「……人間、残機が二で助かったわね」

「ハッ、霊夢はまだまだこれからだぜ?」

「いつまで続くのかしらね、そのやせ我慢は」

見抜かれている――。

事実、魔理沙は打開策なんて思いついてもいなかった。ただの感情論や根性論で物言っていたのだ。

(しっかし相当キツイな……)

フランの四人分の弾幕に加え、レミリアの確実に逃げ場を無くす弾幕。安置が出来たと思ったら、次の瞬間にはそこは危険地帯となってしまう。

彼女達は誘導しているのだ。自分達を。掌の上で踊る猿を見るかのように。

「靈夢、大丈夫か？」

肩で息をする靈夢に声を掛ける。靈夢の負担は大きい。なんせ、さっきの雪崩のような弾幕を一人で引き寄せているからだ。

自分のいる場所が何故密度が薄いのか……その理由は、意外と簡単だった。親友が身体を張っていてくれた”からだ”。

「……ありがとう、魔理沙。もう大丈夫よ。さて、今度はあいつらに一泡吹かせましょつ！」

やせ我慢だ。そう思った。

靈夢はそんなに檄を飛ばすような奴じゃないからだ。いつも自分勝手に厳しくて、裏ではそうじゃなくて、靈夢は年相応の優しい子だけど、自分を律し続けている真面目な奴だつて事も知ってる。

「靈夢……ちよつと休んでくれ。今の身体じゃあ無理はいけなないぜ」

「はあ？　なんであんたに指図されなきゃいけないの？」

靈夢が怒った。これも珍しい。

「靈夢……頼むから……私の顔を立てさせてくれ」

「だつたら………やられないでよ」

靈夢が私を心配した。これもまた珍しい。

「へへ、靈夢、私が隙を作ってくるから、靈夢はその隙に乗じて一発頼むぜ」

もう靈夢の表情なんて見ずに、私は飛び立った。ああ、こっぴどかしい。全く靈夢のやろう、初めての被弾で弱気にでもなってるのかね。

……チツ、靈夢にはそんな顔は似合わねえっつーの。

「オラオラ吸血鬼どもお！ 博麗の巫女に代わって、私が相手だあ！」

フランとレミリアが獯猛に笑った。レミリアの方は、内心で狂喜乱舞にまで達している。

「人間さん一人じゃあ」

「私達に」

「勝てないよ」

「出直してきな！」

「……妹さんよ、一人ずつ頼むぜ」

「そんなことより人間、貴様一人が私とフランに敵うとでも思っているのかしら？ もしそうなら、貴女の頭の中身はさぞ楽しそうね」

レミリアとして、台本の事は吹っ切れているが取り返せるならば取り返したい。フランが参加した時、手から離れたチャンス。それが今、自ら目の前に来たのだ。狂喜乱舞する他あるまい。

「お花畑つてのは否定しないが、よく見てみるとベラドンナの花が咲いてるかもしれないな」

「君子危うきに近寄らず。でも貴女は危うくなさそうね」

「君子？ どこに居るんだ？」

「紅符『スカーレットマイスタ』」

近距離。魔理沙はスペルカード宣言を予期していたが——何故か一向に弾幕がない。弾幕がちらりとも見えたら、手の内に握り込んでいた八卦炉でマスタースパークをぶちかます気でいた。

（弾幕……撃たないのか？）

「憐れね。決意の表れか……戦意の昂りか……。視界が狭まっているわよ」

レミアアが横を指した。冷や汗が額から頬へ伝う。恐る恐るレミアアの指し示す方へ顔を向けると、まさか……という思いが現実となった。

いつの間にそこにあつたのか、迫るのは大小の紅い弾。魔理沙は衝撃に身構えた。

人の力など、妖怪にとっては取るに足らず。魔理沙は些細な防御を敢行するが、避けなければ意味もない。

当たる——。当たる——。当たる——。痛い。

箒に跨がっている為に、その衝撃を緩和する物は何も無い。強いて言えば、逆に支え

が無いことで、途中から衝撃を受け流せた事だろうか。

もし全ての弾が当たっていけば、身体の前に心が折れていた事だろう。

落ちていく。まっ逆さまに湖へと。

咄嗟に霊夢を見た。アイツはいなかった。

——ハハッ、霊夢の奴、分かっているじゃないか。

「ぐううう、箒、来い！」

痛みを堪えて魔法の箒を呼ぶ。魔法の箒は離れた主の声を聞き取ったのか、すぐさま急旋回、魔理沙の臀部の下に現れる。

「へっ。始まったぜ、逆転劇」

笑いが止まらない。上手くいった。そう、私はどうせ当て馬。囷にさえなりやしな
い。けれど……本命の存在を一時的に忘れさせる事は出来る。

「禁忌『レーヴアテイン』」

四人のフランが弾を一直線に列べ、巨大な紅き剣を形どる。私はその中の二人くらいは巻き込めれば上出来だな……と思いつながら、スペルカードを宣言した。

「喰らいやがれ、恋符『マスタースパーク』」

食らいつけ、一矢報いろ、この吸血鬼の鼻を明かしてやれ！

八卦炉から放たれたマスタースパークは、レミリアの鼻先を掠め、フランの分身三体

を飲み込んだ。レミリアの目が見開かれる。相当驚いたようだ。

「人間舐めんなよ蝙蝠が」

「吸血鬼と蝙蝠を並べるんじゃない」

「あーあ、三人のフランいなくなっちゃった。……まあいつか！ フランは一人で十分だもん！」

まだだ……まだ足りない。

奴等にまだ一矢報いてねえ。

汗が吹き出る。

熱い。熱い。闘志が身体の中を駆け巡る。沸騰した血液が肌を焼く。眈々とした瞳で吸血鬼姉妹を見据える。あいつら、まだ余裕の表情をしてやがるんだ。……そりやそうだろうな。二人とも、まだ二枚目のスperlカードの途中。だがたつたそれだけで、私達の残機を半分減らせたんだから。

私達にもう後はない。スperlカードは残り二枚で、霊夢は三枚。一見有利そうに見えるが、反撃もありなのがこの幻想郷のスperlカードルール。あいつら姉妹がどれだけの速度を出せるかは知らないが、一つだけ分かる。

妹を脇に抱えて脱出したときのレミリアのスピード。その速さは霊夢や私の目では追いつけない程だった……と。

ああ、やつぱりこうするしか方法はないんだ。結局無傷で勝てる……なんて甘つちよろい考えや成功例なんて存在しないもんさ。

「……………ま、手品くらいでも火力はあるだろう。魔砲『ファイナルスパーク』」

八卦炉を後ろに設置し、そのスペルカードを宣言した。途端、火力の推進力を受け、箒が加速を始める。

「突っ込んでくるの？ ……どうなっても知らないわよ」

レミアアが宣言したスカーレットマイスタ。それは、レミアアを中心にして時計回りに回転する弾幕。端から見ると紅い竜巻のように見れるそれは、弾幕の密度がかなり高く、生半可なテクニクでは中央にいるレミアアの元へ辿り着けそうにもない。

……だがそんな事なんてどうでも良い。不安なんて列べ始めたら、切りがないからだ。進むには、前を見る。進むための道を見る。

道はある。これは脱出不可能の弾幕ではない。レミアアが考え、レミアアが実践している弾幕なのだ。レミアアはコンピュータじゃない。どこかに彼女の盲点……隙が隠れているはずだ。

近づけ。加速している私にブレーキはない。

止まるな。止まってはいけない。目を見開いて、考え続けろ……!!

「……………なに？」

レミリアは驚嘆した。台本を持っている帳本人である彼女を焚き付けて、残機を一つ減らせたのは良かった。だが、その後だ。自分の反射速度を脅かすほどの反射神経。着実に、着実にスカーレットマイスタを攻略していつている。

彼女は退かず、進む道を選んだのだろう。その目で一心に弾幕と向き合うと決めたのだろう。だからこそ、彼女にチャンスが訪れた。

スカーレットマイスタ三層目を超えた辺りだろうか。奇跡か、神からのご褒美か、レミリアまで一直線の道のりが一瞬だけ出来る。

これは、ズレだ。スカーレットマイスタも自動ではない。レミリアが考え、レミリアが操作している。そこに僅かなズレが生じ、今の隙を生み出したのだ。

数秒もない。だが魔理沙にとってその数秒とは、降って湧いた天の恵みの如く。

突っ込んだ。無理矢理。服の裾が弾幕に掠り、弾ける。弾に当たった帽子のつばが燃える。

沸騰するようだ。だが身体は熱を求めている。熱くなればなるほどに集中力は増し、視界は狭まるが明確な目標は見つけやすくなる。

レミリアだ。この渦巻く紅い竜巻の中で、ふんぞり返っているアイツだ。アイツに一発叩き込みたいんだ。

そして、スカーレットマイスタの十層目を抜け、残りはレミリアの周りを回る一層だ

け。

「人間さん、フランを忘れてないかな？」

割り込むように、フランが現れた。手には弾幕を固めた剣のような物を持ち、幼子が絶対に見せないような残酷な笑顔を見せていた。

「妹さんには興味は無いぜ？」

「人間さん、破壊される前なのに元気ね」

「元気じゃないとやってられないさ、魑魅魍魎が跋扈するこの幻想郷じゃあな」

「ふふ……人間さんはコンティニュー出来ないのに大変だね」

「ハツハツハ、だが挑み直したり試行錯誤するのは、人間さんのお得意分野だぜ？」

「……？ 違うよ。あなたが、コンティニュー出来ないのさ！」

フランが思いきり剣を振った。それは剣だが、剣に非ず。振った場合の切れ味なんて然程無いが、剣のあらゆる場所から全てを洗い流すような弾幕が放たれる。

魔理沙は頬を吊り上げた。計算通りだったからだ。

「誘導つてのは恐ろしいよなあ。魔符『スターダストレヴァリエ』」

星形の弾幕が魔理沙の周りに展開される。レミリアのスカレットマイスタも、フランの剣が放った弾幕も、みな全て一掃していく。一掃……というよりは、相殺か。

だが、それで良いんだ。私は全てのスペルカードを使ってしまったが、スペルカード

ブレイクまで約一分ある。

その一分さえあれば、守るものも無いレミリア達に近接することは可能だ。

私は更に加速を始めた。あの紅霧の王に目にももの見せてやる……との決意を持って。

「……向かってくるか、人間」

「ああ、向かってやるさ。私はせっかちなんでね」

距離はもう数mもない。時間が止まったように、遅く感じられた。脳が活性化でもしているのかもしれない。

掴め、チャンスを。掴め、奴を。掴め、勝利を！

「吸血鬼、見やがれ！ 人間の力って奴をな！」

1mを切った。こちらが一度攻撃を与えれば、奴等は被弾扱いになる。全部の力を、身体の底から各部に至るまで全て搾り取れ!!

——だが。

「茶番は終わりだ、——魔理沙。……台本は返して貰うぞ」

魔理沙の奮闘虚しく、レミリアの素早い爪撃により被弾。脇腹辺りの服を裂かれ、そこにを入れておいた台本はレミリアの手に渡った。

「良い戦いだったぞ、だが健闘は虚しく——なに？」

その時に魔理沙の口角が上がったのを、レミリアは見逃さなかった。

なにかがある。だがそれはなんだ？ なにを仕掛けてくるんだ？

魔理沙は無惨にも墜落していった。今のは杞憂だったのか、否か。だが魔理沙を脱落させたのは大きい。後は博麗の巫女だけ——待て。

待て待て待て。博麗の巫女……？

レミリアの背に冷たい汗が伝った。彼女は気づいたのだ。　「博麗の巫女をいつから見失っていた？」……と。

突然身体に悪寒が駆け巡った。

おかしい、おかしいのだ。魔理沙はこれまでの行動を見ても、奴はここぞというときに犬死にするような奴ではない。逆に知を働かせ奇策妙計を行うタイプだ。

では何故奴は突っ込んで来たんだ？ ……そこに意味があるからだろう。

ではその意味とは……？

答えは、背後から聞こえるスペルカード宣言で分かった。恐れられた疑惑が真になったのだ。

フランもそれに気づいたのか、咄嗟に背後を振り向く。だがもう間に合わない。

「霊符『夢想妙珠』」

見失ったハズの霊夢が、そこにいた。

気配など微塵も感じさせず、
霊夢は死神のように私達の残機を奪っていったのだ。

綺麗な夜空

魔理沙は墜落しながら、レミリアとフランの残機を減らす霊夢を見つめていた。

「箒、来い」

魔法の箒が、再度落ちていく魔理沙を拾う。魔理沙は負けたのだ。いや、異変解決から脱落したと言っても良い。彼女の役目はもう終わった。後は見るだけ、祈るだけ。親友が勝つ時を、その瞬間を。

「博麗の巫女、やるわね。私やフランにもその存在を気づかせないなんて！」

「あなたの目が節穴なだけじゃない？ ほら、言うでししよ、コウモリは目があまり発達していないって」

「だーかーら、吸血鬼とコウモリを一緒にしないで」

レミリアが吠える。かなりののご立腹らしい。霊夢は全く気にしていないみたいだが。

レミリアも、フランも、霊夢も、残りの残機は一つ。スペルカード数も、レミリアとフランの分を合わせれば互角である。だが……視界は二つと一つ。霊夢一人の状況では、さっきのような奇襲も使えない。

「霊夢……勝ってくれ」

ぼつりと漏れた一言は、今私が純粹に思った気持ちであった。

「……終わらせるわよ、吸血鬼。ついでに魔理沙の仇を取らせてもらうわ」

「ふんっ、弱者の負ける前のようなセリフだな」

「私は弱者じゃないから負けないわね」

「強者と無敗は違う。そんな貴女は、勝利という在りもしない幻想に酔いしれなさい！」
レミリアの声で再度弾幕ごっこが始まる。被弾したからか、両者慎重に機を窺つていて場は動かない。小弾は牽制程度には放つが、スペルカード宣言には至らないようだ。

緊張という言葉が一番似合う空間。

——もどかしい。そんな想いが零れそうだ。

その時、痺れを切らしたフランが不満を言った。

「あーやめやめ、やめようよ、こんな楽しくない弾幕ごっこ」

「……それもそうね」

フランには彼女の性格上、こんな静かで緊張するような弾幕ごっこなんて楽しくもなかった。フランの価値観は二つ。つまらないか、つまらぬかないか。今の状況は、つまらないに当てはまったのだろう。

「博麗さん、こうしますよ？ 今から私が最後のスペルカードを宣言するから、貴女が全部耐えきつたら貴女の勝ち。当たったら……ま、明日の夕食にでも会いましょう」

『耐久スペル』ね……良いわよ」

耐久スペル。その名の通り、耐え続けるスペルカード。相手が一分間弾幕を展開し、それを相手がスペルカードブレイクするまで耐え続ける。当然弾が当たれば残機は減るし、残り時間は動かない。逆に耐え続ける側は反撃を行ってはいけないので、本当の意味での地力が試される。

霊夢はフランの提案を同意した。よって、霊夢は弾幕を一分間耐えねばならないのだ。

正直、正気の沙汰ではない。霊夢も知っているはずだ。レミリアとフランの両方で、どちらの弾幕が過激だと聞けば、必ずフランの方に軍配が上がることを。

『フォーオブアカインド』、『レーヴァテイン』。たったこの二つを見ただけで、威力の強大さは分かる。そんなフランが耐久スペルを提案したのだ。必ず最も強いスペルカードを宣言してくるだろう。

「ふふ、博麗さんは495年の長さって理解出来る？」

「は？ ……そんなの分かるわけないじゃない」

「じゃあ分からせてあげる。私が495年味わった苦悩、苦しみを。QED『495年の波紋』」

フランが最後のスペルカードを宣言した。

その弾幕は、宣言者が何もない空間から円形に並んだ密度の高い弾幕を発射し、それらを構成する弾が鈍足である事によって、じわじわと逃げられる空間を狭めていく悪魔のような弾幕だ。

円形の弾幕は空中の様々な位置から次々と発射され、ある一定の距離を進んだ所で反射する。

まるでその光景は、水面の《波紋》のようだ。

最初の頃は悠々と躲していた霊夢。だが波紋の数が増えていく毎にその余裕は無くなっていった。

四方八方から迫り来る小弾。三次元的な動きを繰り返り広げるも、上下左右から反射してくる弾幕の前に、霊夢でさえグレイズを許した。

「くっ……………」

「ほらほらあ、もつと行くよー!」

波紋が増えた。増えて、増えて、増えて……。小さな水溜まりに雨が強く打ち付けるような。それほど激しい波紋。霊夢は被弾さえしていないが、身体中の至るところが破け、掠った場所からは血が吹き出る。

痛々しい。そんな言葉が似合う程の様相。見てる私でさえも、弱気になってくる。

やつぱり強かったんだ、フランは。

やっぱり霊夢でも勝てないんだ。

頭に一瞬だけ浮かび上がった二つを、なんとか飲み込む。もし言葉として口に出してしまつたら、本当にそれが現実になってしまいそうだったからだ。

耐久スペルが始まってから、まだ30秒しか経っていない……。

咲夜、美鈴、パチュリーらの三人は、数少ない紅魔館の窓から霊夢とフランの弾幕ごっこを見ていた。

「……フラン、楽しそうね」

「おや、パチュリー様がそんな事を言うとは……。明日は雨でも降りますかね？」

「雨ならよく降るでしょうに……。そんなに屋根付きの見張り小屋は要らないのかしら？」

「すいませんでした」

美鈴とパチュリーが冗談混じりの会話をする中、咲夜といえは会話にも参加せずに、弾幕を避け続ける霊夢の動きを凝視していた。

未だに痛む頭を押さえながら霊夢を睨み付ける咲夜の表情を見て、パチュリーは少し

だけ笑みを浮かべた。

「……そんなに悔しいのかしら、紅魔館のメイド長は」

「いえ、先の結果は私の未熟な力に因るもの。今度こそ負けません」

「そんなに硬くなくて良いのよ。もう少し肩の力を抜きなさい。例えばあんたのお母様にしているような行為を、私にしても良いのよ？ 私とレミイは永い付き合いだしね」

「……………ツツ!? な、何故それを……」

……咲夜がこつそりとレミアアの私室に行き、甘えているのを知っている。

実はパチュリーは自分の魔法を有効活用しようと、紅魔館の監視役まで受け持っている。とある日、深夜になり夜の帳が落ちる頃、自分の親友であるレミアアの私室に一人の影が現れたのだ。

あり得はしないけれど一応……と思ひ魔法で現場を覗くと、そこには天蓋付きのベッドの上で親友に抱き着き頭を擦りつける咲夜と、それを優しい瞳で見つめながら頭をなで続けるレミアアの姿があった。

甘いわツツツ!!! と、覗き見している自分の方が気恥ずかしくなり、それ以降は自主的に見ることを控えている。

しかし完璧で表情を表に出さないような咲夜でも、こんな一面があったなんて……と少なからず衝撃を覚えた。

「私は生まれながらの魔女よ？ それくらい知ってるわ」

「……………う、黙ってて、パチュリー様」

顔を朱に染めて、必死に言葉を取り繕う咲夜を見たパチュリーは、安心した表情を見せてそれ以上突っ込むことをやめた。今の咲夜は、さつきより少しだけ肩の力が抜けたように見えたからだ。

「……………これ以上語るのは無粋ね」

「えっ？ えっ？ パチュリー様も、咲夜さんも、なんの話をしてるんです？」

「ふふ……………秘密よ」

「えー！ パチュリー様、そりゃ無いですよ」

「美鈴、それ以上知ったら刺すわよ」

「あ、はい、すいません黙っておきます」

ナイフを仕舞い、咲夜は紅い夜空を照らす弾幕を見た。……………どうやら、霊夢は生き残ったようだ。

霊夢は肩で息をしている。疲労困憊と言った様子だが、私はあいつに飛び掛かりたく

て仕方が無かった。それだけ、自分の嬉しさを霊夢に伝えたかったのだ。しかしそれは叶わない。何故ならまだ弾幕ごっこは終わっていないからだ。

霊夢は生き残った。一切被弾せず、フランのスペルカードを生き残ったのだ。しかし傷は多く、無事ではない。

「……お姉様、後はよろしく」

去っていくフランの横顔を見たレミリア。驚嘆した。フランの顔が、悔しきで歪んでいたからだ。そんな表情、レミリアは見たことがない。心の奥底で、なにかが痛んだ。ちくつ、と。針で刺すように。それは少ないながらも、レミリアに到来した感情の発露。//初めて自分の妹にそんな顔をさせる事が出来た。事実による、嫉妬心から来るものであった。

だがそんなことレミリアは知らない。分からない。だからこそ、この感情から目を逸らす事しか出来なかった。それしか彼女には選択肢が無かったからだ。

「博麗の巫女、とうとう私達二人になったわね」

「ええ……やつとよ……」

「どうした？ 疲労困憊じゃないか。運動不足でも祟ったのかもしれないな」

「ちよつと、私のセリフ取らないでよ」

「ほう、今のが貴様のセリフ……だと」

「そう。未来の私があなたに発する言葉よ」

霊夢が自ら攻めた。霊夢とレミリアの間には、弾幕ごつこのルール以外阻むものは何もない。

固唾を飲む。線香花火のような閃光が、霊夢とレミリアの周囲で瞬く。あの光は、弾幕と弾幕がぶつかつ際に発生する光だ。

「さて博麗の巫女！ 私とあなたで残機は共に一つ。そろそろ決着を着けようじゃないか！」

「そうね。そろそろ勝利の美酒に酔いたいもの」

「幻か現かなんて、本人が気づく筈もない。勝利の美酒が幻ではないことを祈ることね」

「大丈夫、私はおぼろでも幻でもいける口だから」

「口だけにならないと良いわね。『紅色の幻想郷』」

レミリアが最後のスペルを宣言した。

異変はもうクライマックス。これで終わるだろう。

『紅色の幻想郷』。全方位の大弾を発射、展開の後に小弾が発生し、様々な方角へ向かつてその弾が飛んでいく……というなんとも運要素の多くが絡んだ弾幕だ。真正正銘、レミリアの最後の弾幕である。

打って変わって霊夢のスペルカードは残り二枚。その内の一枚は、実はもう使えな

い。

夢符『封魔陣』。そのスペルカードは、護符を召喚して発動する。一回使用する度にその護符は何百枚と使うし、護符は有限である。

そして、既に既存の護符は霊夢の止血、骨折した腕の支えとして使用されており、もう弾幕を発生させるほどの残りは無い。

よつて霊夢は、霊符『夢想封印』しかスペルカードは残っていないということだ。けれど……今の霊夢には必要無いのかもしれない。

魔理沙は見ていた。霊夢の様子を。

全ての弾幕を躲し、全ての正解ルートへ辿り着いている霊夢の姿を。

すげえよなつて思う。いつ見ても追いつける気がしない。

霊夢は浮いてるんだ。飛行とか空中につて意味じゃなく、俗世……つてよりは、意識的とかかなんというか。とにかく霊夢はなにかから浮いてる……つて感じるんだ。

さつきだつてそうさ。私が囿になったとき、霊夢はレミリアとフランの背後に一切の痕跡もなく近づけた。あの二人が油断していたつてもあるかもしれないが、意識も向けさせず後ろに立つなんて芸当、狙つて出来るようなもんじゃない。

……昔から見てきた。博麗という幻想郷の一角を担う大事な役目を一手に預けられながらも、飄々としている霊夢を。

……昔から見てきた。命を張ることさえ、表情も変えずにこなす霊夢を。

……昔から見てきたから、分かる。そんな霊夢の心情を。100%理解できるってわけじゃ無いが、ほんのちよつと、ちよつぴりだけ霊夢の気持ち分かる。その気持ちを考えると、霊夢も苦勞してるんだなって。勝手な同情をしちまう。

それと同時に、私なんかじゃ到底追いつけないくらい、霊夢は遠くにいるんだなあって。思いたくもないのに実感しちまう。

「霊夢！ いけ、いけ、もうちよつとだあ!!」

分かってるんだけどなあ……。

「そうだ霊夢、後少しでレミリアの所までいけるぞ！」

実感してるんだけどなあ……。

「おいしいおいしい！ 掠った事なんて気にすんな！」

つい、声を張り上げちまうんだ。

「うっさいわね魔理沙！ ちゃんと分かっているわよっ！」

「なんだとお!! 応援してやってる私に少しくらい感謝しろお！」

くそつ。くそつ。勝て霊夢！ そんな吸血鬼なんかコテンパンにしちまえ！

「あーもう、霊符『夢想封印』!!」

霊夢が夢想封印を発動した。鮮やかな光が霊夢の周りを巡回し、レミリアの弾幕を消

していく。

霊夢の攻撃はやケクソだ。魔理沙に煽られたせいなのかもしれない。しかしその顔は、楽しくて仕方がないと言った笑顔を浮かべていた。

「吸血鬼、喰らいなさい！」

「あんた、霊夢って言ったわね。……………あんた達の関係、少しだけ羨ましいわ」

そして、レミリアは霊夢の弾幕がこちらに迫って来ることを確認したのち、観念したかのように目を瞑った。

「負けたわね、私達」

レミリアがぼつりと呟いた。

「そうだね、お姉様」

レミリアを見下ろすフランが言った。

レミリアは現在、凍らされた霧の湖の上で、大の字になり横たわっている。

霊夢の弾幕に曝され、墜落したレミリアを救ったのはこの凍らされた湖だった。もし凍らされていないければ、流水が苦手な吸血鬼は溺れていた事だろう。

この時だけは、チルノに感謝した。

「ああ、綺麗な夜ね」

レミリアが見たのは、空。紅い霧が晴れ、その大きく黄金色の身体を晒す月が、頭上に浮いている。

「でも夜は共有できない。だって感じ方は個人に左右されるんだもの。だから私には夜なんて要らないわ」

「ん、なんで？」

問い掛けるフランを見て、レミリアは少しだけ表情を弛める。

「そんなの決まってるじゃない。フランや咲夜、パチエや美鈴達と共有できない夜なんて、私には必要ないわ。それにもっと必要な物は、既に持っているしね」

そう言って、レミリアはフランに笑いかけた。

「母……じゃなくてお嬢様、妹様、お夕食が出来ました！」

紅魔館から咲夜が大声を上げて二人を呼ぶ。

今夜のような、大きな満月が夜を照らす日。

二人の吸血鬼の後ろ姿が月の光に照らされ、朧のように霧の湖に浮かび上がっていた。

それはまるで、仲の良い姉妹のようで……。

紅に包まれた夜は、終わりを告げたのである。

Who are you.

突き抜けるような夜空が広がっていた。様々な等星が自らを誇示するその時間は、一種の幻想空間。排気ガスやらに汚染された現代では、あまり見られない光景だ。

私は身体を起こす。どうやら紅霧異変は、レミア達の負けという筋書き通りに事が進んだようで、辺りを包んでいた紅霧はもうどこにも見えない。

チルノちゃんも大ちゃんも、近くにはいない。まあどうせ、博麗の巫女とやらにフルボッコでも喰らったのだろう。というか、私の所に博麗の巫女は来なかつたんですけど。白黒の魔法使いしか来ていないんですけど。

それに今マズイ事が起こっている。どうやら私の服は、白黒の魔法使いの激しい攻撃によつて弾け飛んでしまったようだ。ハッキリと言おう、現在全裸である。

プライドとかその他諸々を捨て去つた私でも、流石に開けた森で全裸は恥ずかしいー！

その時、柔い風がおへそを撫でる。

「ひゃうんっ！……あ、ヤバイ、気持ち良くなつてきた」

流石私。恥ずかしいという気持ちを、ちよつとした気持ちの切り替えて開放感に変え

やがった。

って待って待って。流石にそれはどうかと思う。私は痴女じゃないんだ多分。くうう！ しかし夏だとしても夜風は肌に染みる。

腰まで伸びた長い髪を弄りながら、私はほてほてと歩き始めた。あつ痛い。小石踏んだ。

「ちくしよー、こんななんだつたら予備の服持ってくれば良かった」

「そうね、そんなところは昔の貴女と変わらないわ」

「だよー。全く、私つたら昔からおつちよこちよ……い……で……」

ってなんか声が聞こえたああああああ!!!

え、ちよ、今の誰だよ。Who are you? あれか、此の地に封印されしな
んちやらかんちやらとかか!!

考えられる可能性は幾つか。

一つ、迷い込んだ人間。

全裸を見られた恥ずかしさで死にます。

一つ、妖怪。

フルボッコのボッコボコにされて死にます。

一つ、封印されしなんちやらかんちやら。

死にます。

全部死んじやうじゃないかーもー！

取り敢えず、今の声の主は私に危害を加える気は無いのかもしれない。もし危害を加えるのなら、今ごろ私フルボッコのボッコボコだし。

そんな考えに思い至った私は、歩みを止める。

いる……。そう確信するほどの濃厚な気配。まずはあれだ。初印象が大事なんだ。第一声に気合いを入れる。出来るだけ私は敵じゃありませんよ〜というアピールをするんだ。そういうことを何て言ったっけ。ファーストコンタクト？

「ひ、久しぶりじゃないかあははははは。私がない間、なにか変わったことはあったか？」

……やっちゃまったあーっ！

完全にひきつってるじゃん！ 久しぶりとかどこの友達だよ！ なんて笑ってるんだよ！ 突っこみどころ、多すぎだあーっ！

私は心の中で吠えた。満月に照らされら狼の如く吠えた。

なんで私がこんな目に会わなきゃいけないんだよ。一体誰のせいだよ。って私の自業自得だったわ。何も言えないわ。

「……驚いた。まさか貴女、記憶が残っているの？ えっと、今の貴女は新しい蓮華……」

よね？」

えっ、ちよつと待って。全く話が分かんない。というかこの人あれじゃない？ まさかのまさか、人違いをしてるんじゃない？

あれだ、森の奥深く、超絶ビューティーな少女が裸で興奮していたと。そして私に声を掛けた人物……声からして彼女には、超絶ビューティーな少女の友達がいたと。あー、これは間違えても仕方ないわ。うんうん、私も、彼女も悪くない。これでグツジョブ。

「あ、あたたた、新しい蓮華？」

「ええ、忘れていないのなら、覚えているでしょう？ 桃色の髪、頭に差してある蓮の花、女性、ひ弱で脆弱そうな外見……。髪色は変わっていないけれど、まんま貴女の希望通りじゃない」

全然人違いちゃう。これ完全に私や。

それに……新しい蓮華？ 新しい蓮華ってなんだよ。私は私だよ。こんな奴が他に何人もいたら、困る人大勢だよ。

でも、なにか嫌な予感がした。予感というよりは確信に近い。確信を解くために、私は勇気を振り絞って背後を振り向いた。

……そこにはどこか懐かしい、夜なのに日傘を差した妖艶な美女が、空間の裂け目か

らその身を乗り出していた。

夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎて四季が巡り、春が来た。

そこはとある豪邸の庭園。風情のある自然が周りを囲み、さぞこの豪邸に住むものは位の高い者だろうと容易に想像が付く。

『これか、幽々子』

紫^死が大空に広がる中、庭の中央に植えられた桜の木の下で泣き崩れる紫と、首から赤い蝶を何匹も放つ幽々子がいた。幽々子の顔色を見るに、彼女は、もう……。

『これがあんたの見せたかった桜か』

ついてきた萃香も、彼女の紫^死に驚きながら、それでも満開の妖桜に魅とれていた。

『桜は綺麗だ……。だが、こんな花見は無いだろうに』

『おい、蓮華、ありやなんだい？』

萃香が指差した先には、雪のように白い魂が天へと昇っていく光景が見えた。高く。高く。魂の数は増え続け、一から十に。十から百に。

『この光景を美しいなんて言った日には、そら死に目になっちまうだろうなあ』
瞳を伏せる。

寒き冬は過ぎたが、私達に暖かき春は来なかった。

1119季 星と冬と金の年 春の章

白玉楼

「ねえ妖夢」

まほろばのように、美しく儂げな白玉楼の主が従者の名を呼んだ。

「はい、何でしようか幽々子様」

夕飯時。従者として彼女が好みそうな食事を提供する。勿論栄養価は偏っておらず、彼女が幽霊であるとしても決して変調にはなりそうもない食事だ。

「桜……咲かないわね」

「ええ、この立派な西行妖は決して咲くことはないでしょう」

彼女が言っているのは、冥界に存在する白玉楼。その庭園に佇む、立派な桜。

その桜……西行妖は、未だ芽吹きもせず上品な狐色を見せているだけ。

「花に染む 心のいかで 残りけん

捨て果ててきと 思ふわが身に」

「幽々子様……」

妖夢は箸を止めた。普段よく食事を行う主が、一切食事に箸を付けていなかったから

だ。

何か予感がした。嫌悪とも幸とも取れぬ、変革の予感が。

「妖夢、桜とは……人も妖も、霊も神でさえも見蕩れるもの」

「……………」

「それは好奇心も同じ。抱かない存在はいない。もし抱かぬ存在がいるのなら……その存在は毎日が退屈で仕方がないのでしょね。もしかしたら、退屈過ぎて死んじゃうのかも」

いつもそうだ。主の話の意図は読めない。けれど、意味はある。このおつとりしていで日和見のような雰囲気醸す主は、何も考えていなさそうでその逆。先の先、人が見渡せぬほどの先をその視界に映している。

「妖夢。好奇心が止まらないの。西行妖の下に何が埋まっているのか……。その真実をこの眼に映したくて堪らないの。妖夢は何だと思う？」

主が好きなの門答だ。今までの経験で分かる。主は私がどんな答を出したとしても、微笑みだけで何も言わない。明確な答なんて無いのかもしれない。一時の暇潰し……娯楽のような物なのかもしれない。

故に、私は特に悩まず、自分の思うがままに答を出すことにしている。

私の答が主の望む、望まないであろうと、答を出すということに、意味があるのだと

私は思っている。

「……何も、埋まっていなと思います。埋まっていたとしても、骨や泥を被った器物くらいでしょう」

「そう……そんな答もあるわね。妖夢、実は私、書架でとある古書を見つけたの」

その時の主は違った。いつもなら微笑むだけなのに、反応したのだ。……まるで落胆するように。

「その古書には、西行妖の下に眠る存在について言及されていたわ」

「そうなんですか……。意図を読み取れず申し訳ございません」

「いえ、責めてる訳じゃないのよ。ただ、親友に裏切られたかもしれないってだけ」

それは驚きだ。まさか冥界を治める幽々子様に、対等な関係である友人の存在があったなんて。私が庭師となつてから一度もご友人様を見たことが無い。てつきりいないことだと思っていた。

それに、今の主の姿はどこか疲れているような……寂しいと感じる姿をしていたのだ。そして主が言った、裏切られたかもしれない……に込められた真意とは。

「真意なんて事実以外の何者でもないわ。そうね……確かめましょう、この妖怪桜の正体を」

「確かめるって……土を掘るんですか？」

「……………？ 何を言ってるの、妖夢。そんなことするわけないじゃない」

ではどうするのか……………と言った疑問を呈す瞳で見つめたところ、意外な答えが返ってきた。

「咲かせるのよ……………桜を。それも六分咲きや八分咲きなんかじゃない。もつと、そう……………この庭が映えるほど満開に咲かせるのよ」

それは希望。確定や不確定なんかの理屈ではない。ただの机上の理論。空想的。幻想的。

ここは従者としてハツキリと言うべきだろうか。西行妖は決して咲かない……………と。

主がご存じかどうかは知らないが、西行妖には一つの結界が張られている。それも、かなり強固で難解な結界だ。この結界は誰が張ったのか……………それは分からない。けれどどこここまで強い結界を張ると言うことは、何か明かしてはいけない物が埋まっているのだろう。

「幽々子様……………しかし西行妖は今までに咲いた事など……………」

やんわりと優しく否定する。従者として、主の為に。だが、主は譲ることなどなかった。

「春を集めなさい。この寂しい冥界、春で満たせば西行妖も釣られて満開になる筈」

「春……………ですか」

「ええ、春よ」

春……しかし冥界には春は無い。あるのは閻魔が施した偽りの四季の術。

だからこそ、本物の春を集めるとしても集めるとしても地上に行くしか方法はない。けれど、もし春を集めたのならば……。

「地上の春はどうなるんです？」

「暖かい地上の方々には、少しだけ我慢してもらおう他ないわね」

「異変だと判断されれば、巫女が動きますよ」

「今のうちに動けなくさせれば良いのよ」

「物騒ですね」

「承知の上よ」

それはなんとも危険な賭けである。幻想郷の巫女の動きを封じ込める事。それ則ち幻想郷の賢者である八雲紫への謀反に近い。

決して温和な八雲紫でさえ、巫女への理不尽な攻撃は看過しないだろう。それ単体でさえ、異変になってしまうかもしれない。

「大丈夫、妖夢の考えていることは分かるわ」

「それでは……」

「妖夢、貴女は春を集めなさい。巫女は……私が優しく対応するわ」

背筋に悪寒が走った。主である西行寺幽々子は微笑みを見せただけだ。けれどその笑顔を見ると、何故だか不安になってきてしまふ。主が亡霊である以上、最悪の事態にはならないと思うけれど。

「分かりました。では夕飯が終わり次第、少し留守に致します」

「よろしくね、妖夢」

その後はつつがなく夕飯が終わり、片付けをした。

私室に戻り、お祖父様から授かった二振りの刀を腰に差す。

楼観剣と白楼剣。

迷いを断つ、命を奪う。

お祖父様から、迷いを断つことの難しさと命を奪う事への罪深さを習った。この二振りには、その意思が閉じ込められている。

「従者は主に従い、命を承り、時には進言し、迷い無く主の敵を葬る。……よし、行こう」

白玉楼から地上へと続く長き階段。殺風景を極めたその場所で、白き魂を連れた半妖が飛んだ。

——これは後で知ることになる。

あの時、主の微笑みが不気味に見えた理由。

それは、死を操る主自身がその死に導かれ、破滅へと向かっているような気がしたからだ。

昏睡混冥

冬至を迎え、肌を撫でる風が鋭利な刃物のように感じる。

外に出るだけでごりごりと削られていく精神力。

寒い。一言で表しても、宇宙の真理を理解したとしても、とにかく寒い。

博麗神社の巫女である博麗霊夢は、温い場所であまる猫のように、炬燵の中で冬を越そうとしていた。まるで冬眠する直前の、気だるげな熊のようである。

「おーい霊夢〜！」

霊夢は眉を潜めた。聞きたくもない声が聞こえたからだ。霊夢は炬燵の中に身体を深く被り、居留守を決め込む事にした。

母屋の扉が開く。バカ野郎、勝手に入ってくるな。

近づいてくる振動が床を伝って耳に。どうやら大人しく帰ってくれそうではない。霊夢はため息を吐き、観念した。

「おい霊夢！ ……つたく、居るなら居るって返事をしてくれよ」

「……………」

「返事しないから居ない……………って事にはならないからな？」

「もう、何よ魔理沙。こんな寒い日に。言っとくけど人里には下りないから。さぶいし」
魔理沙が残念な人を見るような視線を向けてくるが、無視。伊達に博麗の巫女をやつていない。こんなことに一々反応していたら、幾ら身体があつたとしてももたないのだ。

「霊夢、大変だぜ。凄いきのこが取れたんだ。ほらっ」

「……あら、それは凄いわね」

「ちゃんと見ろよ……」

霊夢からすれば、その猛々しく固そうなキノコ程度で神社に来たのか……と、キノコなんて興味範囲外でしかなく、逆にそれだけでこの寒い中を飛んできた親友に対して驚嘆を禁じ得ない。

「そういえば霊夢、腕は治ったか？」

「ああ、これ？ ……まだ半分よ」

霊夢が見せたのは、痛々しうに包帯で巻かれた左腕。紅霧異変の時に、容赦の欠片もないメイドにへし折られたのだ。まだ半年しか経たない今、霊夢の腕は未だ完治していなかった。

「……つたく、無理はすんなよ？ 只でさえ人里の希望、博麗の巫女様だからさ」

「魔理沙が心配するなんて珍しいわね。明日は雪かしら」

「もう雪降ってるからな……っつと」

霊夢とは反対側から炬燵に入る魔理沙。髪はうっすらと湿っていて、雪の中をかかなり速く飛行してきたのだと分かる。雪が付着していないのは、玄関でも落としておいてくれたのか。

霊夢が足を動かすと、魔理沙の足に当たる。それを挑発とでも受け取ったのか、魔理沙は霊夢を蹴り返した。負けじと霊夢も蹴り始める。

「ちよっ、霊夢、痛い痛い、このっ」

「なによあんた、客人の分際で、このこのっ、私の炬燵にすげすけと入るなんて、道徳を成長と共に置いてきたの？」

「道徳も道徳も私の前じゃあ消しくずさ。成長の方はまだまだするさ。第二次成長期に期待ってね」

仲良く会話しながらも、炬燵の中で行われる大乱闘は苛烈を極める。中の様子が見えないという状況の中、どのように相手へとクリーンヒットを見舞うか。それに尽きる。

むやみやたらに振り回しても良いが、その場合相手への隙を与える事となる。逆に慎重になれば、懐への侵入を許してしまう。このさじ加減が難しいところだ。

「えいっ」

「痛っ、ちよ、魔理沙！ あんた今脛を蹴ったわね!？」

「いやいやいや！ 蹴ってない、蹴ってない。気のせいじゃないか？」

「いえ、絶対に蹴った！ 私の眼は節穴じゃないのよ」

「犯人は私ですわ」

「あんたか?! ……つて誰よあんた」

いつの間にか霊夢と魔理沙を挟んだ場所に、空が溶けたかのような薄青色の、少々フリの付いた着物を着る肌の白い女性が炬燵の一隅を陣取っていた。

「私は冥界から来ました、しがない亡霊の西行寺幽々子でございます。以後お見知りおきを」

「お見知りおかないわよ。勝手に人の家へ入り込んできて、お賽銭の一つでも置いていくのが道理つてもんじゃない？」

「あれ？ この神社ってそんな風習あったっけか？」

黙ってるとの意味を込めて、魔理沙の脛を蹴る。声を上げずとも、少しだけ涙目になっっている魔理沙を見て、少しだけ落ち着けた。

「それで、亡霊が何の用？」

「……博麗の巫女、でしたわよね。貴女の事はよく聞き及んでおります。して……桜は好きでしょうか？」

綺麗に笑顔を見せる彼女を見ると、まるで吸い込まれるような感覚を受ける。もし吸

い込まれでもしたら、多分無条件降伏をしまいそうなほどに、それは魅力に溢れていた。

「質問は質問で返さないもんよ。……桜、桜ねえ。春は結構好きかな方よ」

「そうですか。それは良かった……」

「それで、あんたは何が目的なの？ 一挙一動なにか怪しいのよねえ」

「ふふ……もうおやすみの時期かしら。貴女には隙間が無いわね」

「どういふことよ」

「すぐに分かるわ。貴女も、私のお友だちも、すぐに夢の中。夢から醒めた時、貴女目の前には綺麗な桜吹雪が舞っている事でしよう」

「は？ なにを……言……つ……て……」

「瞼が、まるで数十キロの重石にのし掛かっているように。抗えない。拒否できない。マズイ……」

意識が沈んで行く。暗闇の中へ。ボヤけの中へ。

「おい、霊夢!? てめつ、なにをしゃがった!」

「魔理沙が吠える。その怒号は、霊夢の耳に届いているかどうか……」

「寒さで一番有り得るのは凍死かしら。震え、心拍数の低下、錯乱・幻覚、そして昏睡、死亡。今の彼女は昏睡って所かしら。良い夢を見て欲しいわね」

「てめえ!!」

魔理沙が八卦炉を構える。完全に幽々子を敵とみなした証拠だ。もし魔理沙がひとたび魔力を込めれば、すぐさま八卦炉はその凄まじい威力を持つてして幽々子を消し去るだろう。その事実を魔理沙は理解していた。……理解しているからこそ、魔理沙は撃てない。

「手が震えているわよ? そんなに寒いのかしら」

「お前、今何やったか分かってるよな? スペルカードルールなんて必要ねえ。今ここで殺してやる」

「残念、私は亡霊。既に誰かに先を越されてるわ。それに……殺に慣れていない貴女の凄みには圧が無い。欠伸が出ちやう」

何処からか蝶々がやって来た。今の季節にはあり得ない、幻想の蝶々。赤にも青にも紫にも見える不思議な蝶々は、羽ばたく度に色を変えていく。そしていつの間にか、数匹の蝶々が幽々子の近くに舞っていた。

「ではご機嫌よう、可愛らしい魔法使いさん。もし地上に春が来なければ……冥界で共に花見でもしましょう」

大量の蝶々が幽々子を包み隠す。そして蝶々らが離れたときには、そこに幽々子は存在せず。幽々子を隠していた蝶々も、役目を終えたかのように地面に落ちた後、光の粒

子となって消えていった。

「はあ？ 結局、一体、何が……ってそれよりも霊夢！ 起きろ、おい霊夢！」

魔理沙が勢いよく肩を揺さぶっても、霊夢は空を見つめ、返事もしない。寒い寒いと言いながら、よく相手をしてくれた霊夢の口は、だらしなく半開きのままだ。

嘘だ……と叫びたかった。起きろよ、朝だぞ……と冗談混じりに囁きたかった。

「う、うあ、ああああああ、ああ、あ、」

音もない霊夢を抱き締める魔理沙の背後で、一つの亀裂が空間を割った。

『西行妖、咲くのかしら』

『咲かないわ、きつと』

笑顔の美しい、右隣に並ぶ親友へと問うた。彼女は咲かぬと言い張るようだ。

『西行妖、咲くのかしら』

『咲かないほうが良いのさ、きつと』

気さくな神である、左隣に並ぶ親友へと問うた。彼女も咲かぬと口を揃えて言うようだ。

『西行妖、咲くのかしら』

『花より、酒さ。きつと此の世は酒の旨味と苦味で出来ている』

伝説の鬼である、目の前で着と共に酒を楽しむ親友へと問うた。彼女は眼前の酒しか見えていないようだが、実は先を見据えているようだ。

『私は……西行妖の満開姿を見れるのかしら』

『なんで見たいんだい？』

左隣の親友は問う。……確かに何故だろうか。

『分からないわ。けれど……何故かそこに使命感があるの』

そう、使命感だ。私は西行妖に使命感を求められているのだ。魂のようにふらふらと、まるで吸い寄せられるように私は近づいていく。

『おっと、ここから先は、あんたじゃ行けない』

鬼が、私の足を止めた。

『何故……？』

『だって、ここは夢じゃないか。あんたの……幽々子自身が見ている夢さ』

私の名が呼ばれた。だがその名が、自身の名前だと気づくのに数瞬遅れてしまう。

『私は……西行寺幽々子。じゃあ貴女達は……』

顔が分からない。黒い靄が三人の顔を覆って、当初の親友達とはまるで別人のような印象を受ける。

『私達は親友よ。貴女の親友』

『ああ親友だよ。親友。幽々子の親友』

『親友……私と飲み交わそう』

この人達はこんなに怖かったっけ？

いや、ここは私の夢。

私は彼女達を恐れている？

ああ、そういえば。

この人達、誰だったっけ。

紫の記憶

『蓮華、こっち、こっちよ！』

スキマで移動して、丘の入り口付近にいる蓮華へと呼び掛けた。

私の心は弾んでいた。久方振りの友人との再会。かなり昔からの付き合いであるからこそ、喜びは更なのだ。

『待ってくれ、紫。急ぐのは良いが萃香がまだだ』

町人娘の着物を着た蓮華は、至って普通の人間に見える。どうやら霊力、妖力、魔力、神力、それら共々を全て極限まで抑えており、常に緊張状態であるはずなのに一切そんな様子を見せない彼女には敵う気がしない。

私より永く生きる彼女。一体いつから存在していたのか。しかし、彼女が私より永く生きているお蔭で、私達は友になれたのだと思う。

生まれて初めての、最初の友達。近頃はとある鬼との関係にかまけているようで、相手にしてくれなかったのはとても悲しかった。

でもそんな日も今日で終わりにする。蓮華に伝えるのだ。私も新しい人間の友達が出来たよ……と。また一緒に遊ぼう……と。

『紫くまだー?』

『もうちよつと待つてて! 蓮華と萃香が来るから!』

新しい人間の友達である幽々子が、気だるげそうに急かした。

萃香と呼ばれる鬼はまだだろうか。早く来てほしい。

私達が今いるのは、西行邸の近くにそびえる高い丘。その頂点で、今夜流星が見えると言うのだ。たった四人での流星祈願会。四人と言っても種族は一人。だけど特別寂しくはない。

私達は友達という特別な結界で結ばれているから。

『ああ、すまんねえ、ひつく、蓮華え、飲み過ぎちった』

『萃香、紫達を待たせている。私の背に乗れ。その千鳥足じゃあ、丘を登るのにも一苦勞だろう』

『おつ、そりや助かる。……それと、今日は特別な日って聞いたんでね。特上の酒を四人前、持ってきたよ』

萃香が指をクルリと回すと、霧が現れ、その中から四人分の酒樽と酒器が現れる。どれも蓮華が聞き及んだ事しかない、まさに上物。蓮華と言えど、少しばかり口角が上がる。

『時は半刻も無い。飛ぶぞ』

『あいさ』

脚に力を込め、大きく踏み込む。常人が登るには一刻ほどの時間を要する、その大きな丘。蓮華と萃香がいた場所からでは、頂点まで見上げる事しか叶わない。

蓮華の踏み込んだ場所は陥没し、半径数十mに渡って亀裂が走る。それほどまでの跳躍。萃香を乗せた蓮華は、たったひとつとびで丘の頂点へと到着した。

『ああ、綺麗だねえ。下から上へと至る快感。最高だねえ』

『萃香、吐くなよ。……紫、すまない遅くなった』

『いえ、まだ時間はあるわ。こつちよ』

蓮華と背に乗る萃香を、私と幽々子で見つけたベストスポットへと案内する。

ベストスポットと言つても、何も特別な場所なんかじゃない。岩肌の少ない斜面に敷かれた草木の絨毯。空へと続く景色は、下に広がる町まで見渡せるほど開けている。

夜。宵闇とも例えられるほどに、夜という時間帯は恐れられている。しかし、今ならば、どんな怪異が来ようと。どんな災害が来ようと怖くは無いだろう。

恐怖そのものである妖。力の象徴である鬼。智恵を持つ人。万物を司る神。それら全ての種族が、今ここに集っているからだ。これほどまでに頼もしい四人はいないだろう。

『そろそろよ、紫。多分、そろそろ……』

『あつ、あれじゃないのかい！』

萃香が叫んだ。天へ向かつて、指を突き刺す。

四人が空を見た。天へと眼差しを向けた。

『綺麗……』

眩いたのは誰だろう。そんな事が気にならないほど、その光景は幻想的だった。

——大いなる星々が、濃淡のように染まった暗き空を埋め尽くす。

一つは筋を。

一つは軌跡を。

一つは光を。

神々しささえ感じるような光の瞬き。まるで夜そのものが回転しているかのように泳ぐ、天空の魚達。魚はその身を揺らすことは無いが、一様に列を作り、宇宙という海に逆らうように遊泳した。

今ここで並び、座っている四人には、境界など存在しない。星の下に集った、ただの酔狂な存在でしかないのだ。

『もし、星を掴めたら……なんて思ったことはないかい？』

蓮華が変な事を言った。星なんて掴める筈もないのに、そんな、絵空事を。

蓮華が続ける。

『掴めちやいけななんだ、星は。こうやって彼らの躍り狂う姿を、遠目で見るからこそ美しいのだから』

『確かに……美しいわね』

鬼も、妖も、人も、神も、結局は同じ。天へと浮かぶ、ただの石の塊に想いを馳せる。光とは、闇とは、調和とは、なんとも規則的で不規則的。相反しながら、調和を保っている。そこに境界が生まれ、界が生まれ、生命が生まれ、意思が生まれる。

これほどまでに美しい物など、あろうはずがない。あつてはならない。

情を疎む存在もいる。規律を嫌う存在もいる。けれど嫌うのならば、嫌えるのならば、そこに情や規律は存在しているのだ。

『ねえ、紫、蓮華、萃香』

幽々子が突然皆の名前を呼んだ。

『星は掴めないかもしれないけど……見ることは出来る。じゃあ、桜は？ ……桜なら見ることも、触ることも出来るわ。西行邸に植えられた西行妖。その下で、花見をしましょう。きつと、満足してくれると思うわ』

『へへっ、良いこと言うじゃないか、あんた。人間の卑怯な奴は嫌いだけど、あんたみたいな風情のある奴は好きだよ』

萃香が屈託の無い笑みで笑った。しかしその手には、持ち込んだ酒器が握られていた。酒樽から酒を一口よそい、口に流れるように持つていく。

酒を喉に流し込んだ後、萃香は幽々子に近寄った。

『どうだい、幽々子とやら。鬼と楽しむ酒宴など滅多な経験ではあるまい。あんたはこんな経験を逃す人間じゃないだろう?』

萃香が不敵に笑う。幽々子も幽々子で、負けじと酒をよそった。それは一口というよりは、あまりにも多い量。慌てて紫が制止の声を上げようとするが、幽々子はそんな事知ったことかと言わんばかりに、全て飲み干してしまった。

『良い飲みっぷりじゃないか。気に入ったよ』

『ああ……幽々子ったら。お酒、かなり弱いのに』

額に手を当てて、溜息を吐く紫。その懸念は当たっており、みるみるうちに幽々子の頬が朱に染まっていく。

『大丈夫よ、紫い』

『カツカツカ、酔いも酒の楽しみの一つさ。どうだい、紫も一杯いくかい?』

『はあ……頂くわ。こんな上等なお酒、滅多に飲めないもの。蓮華は、どうする?』

『私は……そうさな。もう酔っているよ』

『あら? いつ飲んだの?』

『いや、私達のこの関係にさ』

どうも今日の蓮華は変だ。いつもと同じように飄々としていないし、どこことなく口調も堅い。本当に酔っているのかもしれない。

『ハッ、蓮華、それは酔っているとは言わんさ。酔いとは醒めるもの。私達の関係はいつだつて醒めないだろう?』

『ああ、そうだったな。よし、私も少し頂こう』

蓮華も立ちあがり、酒をよそった。

天に遊漁が映るなか、私達四人は、酒を飲み明かした。……いつかこの関係は崩れてしまうのかもしれない。何より、幽々子は人間なのだから。寿命は妖怪や鬼よりかなり短い。

いつか彼女には死が訪れるだろう。いつか私は泣くことになるだろう。それは明日かもしれないし、ずっとずっと先なのかもしれない。

それを受け入れられるか……? と問われれば、答えは出せない。その時の私が、どんな行動を移すかなんて今の私には分からないもの。

しかし、今だけ。今だけこの享樂に浸らせて欲しい。ずっと一人ぼっちだった私にとつて、今のこの四人との関係は、どんな極樂よりも素晴らしい物なのだから。

『紫く、ほら、もっと飲め飲めくアハハ!』

『ちよつ、蓮華、あんたもう酔ったの?』

突然抱き着いてくる蓮華を回避できず、私は押し倒されてしまう。

私みたいな胡散臭げな女でも、こんな楽しみがあつて良いんだと享受出来る。

まさに今は、有頂天外。

酒と友が織り成す理想郷なのだろう。

故き友

その異変に気づけたのは、自分の式神である藍の一報からだった。

冬には眠りに付くのが、八雲紫の習慣である。それはとある理由からだが……何も知らぬ者達からは、ただ怠惰に寝ているとしか捉えられない。

よって彼女が眠る意味を知るものはごく一部であり、それを紫は良しとしている。

その秘密は、幻想郷の管理者である八雲の弱味そのものであり、幻想郷の弱味そのものである。だからこそ八雲は自分の誇りを売り、怠惰という不名誉を背負いながらも、幻想郷を管理し続けるのだ。

彼女の睡眠の大切さは、彼女の近しい者ならば知っている。故に、彼女を起こそうとする者は、相당한用事でなければ彼女の怒りを買うだろう。

それを知ってもなお、八雲藍は紫を起こした。それだけ性急に解決すべき事態であったからだ。

八雲紫はスキマの中を通り、博麗神社へと向かう。藍によると、冥界を治める亡霊姫西行寺幽々に襲われたというのだ。

——有り得ない、と普段ならば一蹴する内容だ。けれど今は冬。頭のキレる幽々子の事だ。私の力が一番弱まる時期に事を起こしたとも考えられる。

つい最近に起きた紅霧異変。これはスペルカードールの頒布と共に、幻想郷中に蔓延る強き力を持った妖怪どもを手懐ける為。そして、妖怪の恐怖を定期的に思い出させる為に、異変を起こしやすくする事が主な目論見だった。

異変を解決する役割である博麗の巫女が打倒されたと知られば、ただの笑いで済むのかどうか。最悪、幻想郷内での内戦になりかねない。

博麗の巫女は、最も強き存在でなくてはならないのだから。

紫の頭脳は智慧で溢れている。その能力に近いなにかは、無間に存在する闇の広さでさえ瞬時に求められるほど。この時の紫は確証はなかったが、なにか嫌な予感がすることも事実。よって紫は、今の時点から続く未来の可能性を求め続けていた。

まるで無限に続く数式のようなもの。そしてやっと、スキマの出口が見えた。答え合わせはすぐそこだ。

「靈夢!!」

普段取り乱さぬような紫が、声を張り上げた。

彼女がスキマを経て見た光景。それは、白黒の魔法使いに抱き抱えられた血の気の薄い博麗の巫女の姿であった。幻想郷の賢者である紫の頭脳は、すぐさま状況把握に努めようとフル回転し始めた。

心拍数や呼吸の有無を計ると、うつすらとだが聞こえる鼓動。まだ彼女は生きている。その事実が浮かんだ瞬間、紫は次の行動に移った。

「確か魔理沙と言ったわね……今から緊急処置を行うわ。その間に靈夢の身に起こった出来事を、詳しく説明して頂戴!」

「え、いや、あんた誰だ? それに、なんで私の名前……」

「今はそんな些細な事なんてどうでも良いの。早く言いなさい!」

紫の強い言動に、魔理沙は従わざるを得なかった。紫は神社の居間に靈夢を寝かせ、スキマを開く。

「式入力、検査。『ラプラスの魔』」

靈夢の周りに異形の眼が現れ、じつくりと観察するように靈夢を調べ始めた。

紫が魔理沙を見る。どうやら魔理沙に事の経緯を説明しろと言っているようだ。

「えっと、あ、そうだ。私は今日暇だったから博麗神社に来たんだが、その時霊夢は炬燵でのんびりしてたんだ」

「続けて」

（外傷は無いわね）

「それで、ちよつとだけじゃれあっていたら、なんかいきなり変な人が現れたんだ」

「……………」

（内蔵に異常もない。こんな綺麗な方法なんて…………）

「そいつが言うには、亡霊って奴で、えーつと名前は確か…………」

「西行寺幽々子」

「そう！ 確かそんな名前だ！」

「…………感謝するわ、魔法使いの卵さん。後はこちらで処置するから、帰って構わないわよ」

「いや、私もここに居させてくれ。霊夢の側に…………」

やんわりと魔理沙に向かつてもう用は無いと伝える。だが魔理沙はどう捉えたのか、頑なとしてその身を退かなかつた。

「…………ま、良いわ。ある程度検査は済んだしね。多分症状は凍死に至る間の昏睡状態。これならまだなんとかなるわ」

「なんとかなるって、どうやって」

「凍死に於ける最終警告は昏睡よ。実際ならここで手遅れだけど……幽々子の能力は『死を操る程度の能力』。いわば死に至るまでの疑似体験に近いわ。だから、昏睡と死亡の境界を弄ればなんとか命は助かる。けれど……永くはもたない」

「どれだけでもつんだ？」

「そうね……今は二月。もったとして6月。それ以上は霊夢の身体は耐えられないわ」
「……………ツ！」

魔理沙は愕然とする他無かった。霊夢の命はもう四ヶ月しかないのか。そんな理不尽が今霊夢を襲っているのか……と。

絶望、と言った表情をしている魔理沙に向かって、紫は安心させるように言った。

「元凶は決まっているわ。西行寺幽々子よ。彼女を打倒すれば、諦めて霊夢に掛けられた能力を解いてくれるんじゃないかしら」

「そう、なのか……？」

「信じなさい。盲信なさい。私達に確定はないわ。何故なら確定だと思ひ込む思考しかないもの」

魔理沙が口をつぐむ。紫は処置を終えたので、次の目的地に向かうために、スキマを使って羽毛布団を取り出した。この羽毛布団は自分が寝るためではなく、霊夢を寝かせ

る為だ。

炬燵をどかし、代わりに慣れた手つきで羽毛布団を敷き、そこに霊夢を寝かせる。まるでぐつぐつと眠っているかのような霊夢を見て、軽く髪を撫でた後、スキマを開いた。「霊夢を頼むわね。そして、どうするかは貴女次第よ。一応こちらから博麗の巫女の代役を立てておくから、彼女に相談しても良いわ」

そして魔理沙の視界から消え失せる。

残されたのは眠り続ける素敵な姫と、魔法使いだけだった。

冥界。幽霊から亡霊が集い、閻魔の裁判を終え、成仏もしくは転生が決まった霊たちがそれを待つ間過ごすところ……いわば待ち合い室のような場所でもある。

冥界にて待つ霊へ心身的負担を掛けぬようにとでも配慮されたのか、四季も存在する。

春には桜が、秋には紅葉が。その美しさのあまり、死者も成仏することを忘れてここに留まることも少くない。

冥界にある池の畔には、大きな屋敷が建っている。そこには噂によると、この冥界を治める亡霊が住んでいるらしい。

そして今宵、珍しくその屋敷へ客人が訪れていた。人ではない存在に向かつて客“人も相まつて人間にしか見えない。

「……久しぶりね。お茶でも飲む?」

冥界の主が、対面に座る客人に向かつて茶化すように聞いた。

「意外とお惚けね、幽々子。変わってないわ」

「あらあら、そんなに怖い顔をして、綺麗な顔が台無しよ?」

「そうね。夜更かしは美容の敵ですもの」

「ふふふ。紫……貴女の残り時間はいくつかしら。早く寝なくて良いの?」

痛い所を突いてくる幽々子に、紫は嘆息した。

「そうよ、幽々子は知ってると思うけれど、私には時間が無いわ。端的に言うとな焦ってるの。だから、早く博麗の巫女を戻しなさい」

「嫌……と言ったら?」

「残念に思うわ」

「そう……」

幽々子が目を伏せ、言葉をぼつりと漏らした。

「貴女……言ったわよね。西行妖は咲かないって」

「言った……わね」

「私はその言葉をずっと信じてきた。もしキツカケが無ければ……私はずっとそれを信じていたでしょう」

キツカケ、という言葉に首を捻る。まさか幽々子を唆した人物が、彼女の後ろにいるのか。彼女を殺そうとする存在が、どこかにいるのか。

紫は恐る恐る聞く。

「そのキツカケがなにか……聞いても良いかしら？」

「先代庭師……魂魄妖忌の書架を漁っていたら、とある古書を見つけたのよ。そこには西行妖の下に眠る存在についての示唆と、その封印の解き方について書かれてあったわ」

紫は内心で舌打ちを噛ました。聞いたことがある名であった。名前の通り、忌ま忌ましい奴であったと。

西行妖の下に眠る存在。それは、西行寺幽々子の生前の姿。彼女がその危険な能力を疎み、自尽した際に、私が境界を操って彼女を亡霊としての姿で定着させた。人と死んだ際に生まれる亡霊、その境界を操ったのだ。

そして、彼女の生前の姿を西行妖の下に封印した。蓮華の持つ『界を結ぶ程度の能力』で、解けぬ結界を張ったのだ。

亡霊にとって、生前の自分の死体が燃やされるか、又は自分が死んだ姿を見てしまうことは、死を意味する。だからこそ、幽々子が現世に留まる為には、彼女の目の届かぬ所に死体を保存する他なかった。

その時に、最も抵抗したのが魂魄妖忌だった。

彼は、もう幽々子を休めて欲しいと嘆願した。けれど彼女に宿る能力は、もし幽々子が輪廻転生をしたとしても幽々子を苦しめ続ける。その事を説明しても、彼は首を縦に振らなかつた。次第には、封印を施そうとする蓮華に向かつて斬りかかつたのだ。

彼ら半人半霊と私達妖怪は寿命が違う。人間よりは長けれど、妖怪よりは短いとされる半人半霊。半人半霊である彼は、『西行寺幽々子』としての救いを求めたのだろう。彼の仕える主は、『西行寺幽々子』以外にいないからだ。

結果的に彼の願いは聞き入れられなかつたのだが。

「幽々子、忠告よ。西行妖を咲かせてはならない」

「眠たそうな貴女に言われても、所詮は寝言よ」

「幽々子本当にお願ひ。咲かせないで、西行妖を。もし咲かせてしまつては……貴女が

……」

「貴女が……なに？」

「いえ……何でもないわ」

とにかく、もう時間が無かった。私はもう住み処に戻らねばならない。

「……幽々子、貴女は私の友が必ず止める。必ずよ」

「友……。蓮華か、萃香かしら。それとも貴女の新しいお友だち？ ……いえ、蓮華はも

う消滅しちゃったのよね。いつ頃彼女は生まれるのかしら」

「きつと驚くわよ。それを着に楽しみになさい」

「うふふ、久しぶりか……はたまた新しき邂逅か。それは楽しみね。それと紫……どれくらい永くなったの？ その睡眠時間」

「……私はいつもより眠たいから寝るだけよ」

「それが永遠にならないよう祈るわあ」

紫は手をフリフリと振る幽々子を眺めながら、スキマの中へと消えていった。

「ふふ、紫。貴女が眠るようになったのはいつ頃だったかしら」

タイムリミットは、大妖怪である彼女の身さえも蝕んでいた。

代理役

慣れない巫女装束に袖を通す。なんで腋の部分が無いのだこの巫女服は。絶対この服装をデザインした奴変態だと思っ。

というか片腕だとすつごく着込み難いんですけど。歯でおさえながら着ないと着れないんですけど。

「博麗の巫女の代わりって……あんたか」

目の前で着替えを覗く変態魔法使いを一瞥する。全く、こんなに年端もいかぬ少女が覗きなんて世も末よね。ぷんぷん！ ……あ、今自分でやって吐きそうになった。

「なんだい白黒魔法使い。そんなに目くじらを立てないでくれよ。私とあんたの仲間じゃないか」

「そんなに仲良くもないだろ……」

「酷い！ 私の服を脱がした癖に！」

「いや脱がしてねえよ!? 勝手な言いばかりすんな！」

「その割に……私の着替えを覗いてる癖に。このエッチ」

「じゃあ帰るぜ」

「待って待って！ 待ってください！ 寂しいから一人にしないで下さい！」

私は即座に土下座を敢行する。プライド？ 美味しかったよ。というかやつぱりこんな暗い神社に一人ぼっちって、絶対なにか出ると思うんだよ。幽霊とかゴーストとか魂が怨念化した奴とか！

「お前、妖怪だろ……？」

魔理沙にゴミを見るような目で見られた。気にしないし聞きたくないし聞こえない。「そりゃあ……一応付喪神らしいけどさ。それでもね、寂しいもんは寂しいし、怖いもんは怖いんだよ」

あーこれ決まりましたわー。私の渾身の土下座からの上目遣い。以前より身長も伸びて140台になったとしても、少女然であることには変わりはない。こんな美少女に健気そうな瞳で見つめられれば、どんな存在もイチコロよ！

それでも魔理沙はゴミを見るような目をやめなかった。あ、あれ？ 意外と効いてなかった。私の魅力が足りないだけかもしれない。それともあれか？ 魔理沙は博麗の巫女である博麗霊夢しか見えてないと。いわゆる百合主義だと。そういうことなのか？

くあー、こりや一本取られた。私の魅力が通じないなんて、おかしいと思っただよ。そうかそうか、魔理沙ちゃんはそっちだったか。

「いや、勝手な妄想してるところ悪いんだが、霊夢と私の関係は、ただの親友だぜ？」
「いやーあれでしょ奥さん、隠さなくても良いんですよ。抱いてるんですよ？ 禁断のこ「マスタースパーク」あべべべべべべ、熱い熱い、弱火地味に熱いから！ 私の綺麗な柔肌焦げちゃうから！」

私は魔理沙に傷物にされた肌を優しくさすりながら、魔理沙の方を見た。

「……で、私はこの代理について紫から何も聞いていないんだけど、理由の検討は付くかい？」

魔理沙に聞くと、少し間を置いた後に魔理沙の推測とここまでの経緯を聞かせてくれた。

取り敢えず八雲紫と西行寺幽々子って奴は胡散臭いって事だね！ これでQEDだ

！

「お前、ちゃんと話聞いてたか？」

「も、もももも、勿論さー」

あれだろ？ つまりアレがアレでアレって事だろ？ 結局アレってなんだったつけ。

「取り敢えず私はその冥界って所に行って、ちよつとばかしその主をぶん殴ってくる」

「え、マジで？ 物騒じゃね？ デコピンくらいにしときなよ」

「お前本当に妖怪か……？」

「またもや呆れられる。ふーんだ、もう慣れたもーん。」

「まあいいか。じゃあ私はちよつくら出掛けてくる。冥界の場所をあの変な女に聞くの忘れてたしな、大人しくしてろよ」

「あーい」

勢いよく障子を開けて箒に飛び乗り、雪降る白い世界の中に飛び込んでいった。かなり吹雪いていて、もう既に魔理沙の姿は見えない。

一人になったことで、話し相手がいない。分かりやすく言う暇だ。なにかしたいけど、大人しくしてろつて言われたしな。さて、どうしよう。………掃除でもするか。

博麗霊夢が使っているとされる博麗神社。よく見てみると雪降ろしもされていなし、掃除が行き届いていない箇所も多々ある。この光景を見て私の血が疼いた。掃除をしろ……と。

「よし、やるか」

まずは屋根の雪降ろしだ。私は意を決して障子を開け、外に出る。

外は当然吹雪に見舞われており、腋出しのちよい露出高めの巫女服ではこの吹雪に耐えられる防御力なんてほぼゼロに等しい。というか完全にゼロである。

「やっばやめよ」

私は障子を閉め、博麗神社にある炬燵を取り出し、中で丸くなった。最高である。も

う動きたくない。私は重石だ。

そういうえば紫は、なんで私に巫女代理を頼んだのだろう。もつと適任な奴は、この幻想郷のどこかにはいるだろうに。

紅霧異変が終わり、私は紫と初めて対峙した。いや、紫の方は久しぶり……と言っていたが。

その後、私はあつさりと言紫の事は知らないと言白状した。だってあれだもん。紫つたら人目見ただけで滅茶苦茶妖力あつたんだもん。多分嘘を憑いてたらぶつ殺されてたよ。

紫は妖力を抑えていたようだけど、私にはまるつとお見通しだ。

白状すると、紫は幾分か落ち込んでいた。多分あつちからしたら覚えていて欲しかったのだろう。……いや知らんがな。

それでも、彼女は言ったのだ。貴女は付喪神の性質・気質を持つからね——と。

彼女が言うには、彼女の友達に蓮華なる人物がいたらしい。なんとも幻想郷の基盤を作り、自らの命を犠牲にして幻想郷を世界から独立させた人物とのこと。私が付喪神だと思つたのも、その蓮華に聞いたらしい。次に生まれる時は付喪神だ——って。

いやそんな凄い人を私と重ねられても困る。だって私の心は楽に生きたいって想いで一杯だもの。

それに、私の名前はチルノが決めたのだ。同名という意味では合っているが、運命と

いうものを信じなければ私とその蓮華さんは全くの別人であろう。

いつか思い出せるわ、とは言われたものの、いつかなんて分からない。私は気楽に生きるのだ。自分の命を犠牲にするなんて絶対に嫌だ。……友達関係だったら命張るかもだけど。

べ、別に、あんたの為にやるんじゃないんだからね！

はあ……くそ、まずはこの寒さをなんとかしなきゃいけないんだよなあ。というか本当に寒くなってきた。炬燵、ちゃんと機能してるのこれ。

……なんだか寒さが尋常じゃない。絶対これ異変だよ。博麗の巫女出動だよ。

私はモソモソと炬燵の中から出る。すると雪が積もっていた。外に……ではない。博麗神社の母屋内に……だ。

「あ、やっと出てきた。やつほー、レティ・ホワイトロックさんだよ」

「いやどちら様？」

ついそう言ってしまったが、失礼だっただろうか。だが目の前で雪を纏いながら佇むレティ・ホワイトロックさんについて、私は一切知らない。完全に初対面だ。

「あれ、知らないのかい？ 春乞いで有名だと思ったんだけどなあ」

「春乞い？」

「春が早く来て欲しい人間が、博麗の巫女に頼んで私をボコボコにするんだよ。私、冬を

代表する妖怪だからね」

うわなにそれ可哀相。けれどそうなのか。レテイさんは冬を代表する妖怪なのか。

白いターバンを巻きながらゆったりとした服を着用という、明らか冬対策されていないのも、彼女が冬に強いからなのだろう。

「それで、今年もボコボコにされに来たの？」

「そんなマゾヒストみたいな……。いやーそれがね？ 妖精が煩いのよ」

「妖精？」

「そうそう。あんたの友達を名乗る、チルノって妖精。やたら絡んでくるから、何とかしてくれない？」

「なんとかか……って、この寒さで？」

「うん」

「鬼畜生か」

「鬼なんて伝説の存在と一緒にしないでよ。私はもつと優しいわ」

「優しいならこの吹雪止めてくれない？ 炬燵機能してないんですけど」

「嫌よ。というか無理よ」

「だ、だったらチルノちゃんにこう伝えておいて。『チルノの弟子、蓮華はチルノちゃんが最強だということ』を証明してきます！』って」

「あ、それ良いわね。簡単に乗ってくれそう」

私の咄嗟の言い訳にレティさんは納得したのか、じゃあ伝えておくわと言って帰ってくれた。

チルノちゃんが騙されやすい純粋な子だと知っていたのだろうか。悪い虫が付いたらぶん殴る自信はあるぞ。

まあそれはともかく、やっと寒い奴が帰ってくれた。これで炬燵の機能も戻り、再度暖まれる……………。

私は炬燵の電源を入れる。

だが付かない。

「あ、あれっ？ な、なんで？」

カチカチと何度捻っても、炬燵は付かない。これじゃあ私が温まる事が出来ないじゃないか。

蓮華の目の前がまっくらになった……………。

「……………というか絶対レティのせいだろ、これ」

恨みからか、そう呟かざるをえない蓮華であった。

魔法の森の騒乱

「つたく、さっつぶいなあ」

魔理沙は魔法の森付近を探索していた。冥界を見つける為に、まずはホームグラウンドを漁ってみようと思ったのだ。

あると確信するには可能性は薄いのが、情報の一つや二つあれば上出来だと。

しかし吹雪が酷い。今日に限って豪雪日だとしても言うのだろうか。霧のように視界を防ぐ雪の結晶。低気温からか身体も敏感になり、雹でも当たる日には最悪とごちるしかないだろう。

「チツ、空はダメだな。降りるか」

それは正しい判断だった。

魔法の森は鬱蒼と草木が繁り、豪雪の侵入をある程度防ぐ役割を果たしている。問題は道に迷ってしまうことだが、この辺りもよくキノコや素材を取りに来るので、魔理沙からしたら近所の散歩程度のものだ。

気の向くままに歩いていると、突然声が掛けられる。

「あら、魔理沙。こんな所に来るなんて珍しいわね。明日雪でも……って雪なら既に

降ってるわね」

「私が現れた時は霧雨だぜ」

「それは自虐かしら？ ……それより、貴女も人形劇見ていかない？ 今日珍しいお客がいるの」

「へえ、どんな奴だ？」

「お客より人形劇の方を気にして欲しいわね。まあいいわ、行ったら分かるわよ」

現れたのは、魔理沙が魔法の森に住み着き始めた時からの友人、アリス・マーガトロイドである。

輝くような金髪をショートにし、頭にはヘアバンドのような赤いリボンが結ばれていて、青のワンピースのようなノースリーブとロングスカートを着ている。

彼女に導かれるように森の中を進む魔理沙。目的地はアリス宅だろうと目星を付けていたが、案の定アリス宅が見えてきた。

アリス宅。魔法の森の拓けた場所に、一軒家ほどの家がある。拓けているお蔭で雨風晒されそうな気もするが、そこは魔法使い。障壁を張って、人形劇をするための場所をしっかりと確保してある。

座るための場所には雪の結晶なぞ一片も無く、かなり前から障壁を張り続けているのだと分かる。簡単に言っているが、これは実行しようとしたならば永続的な魔力が必要

になるか、魔力の回復速度が消費速度を上回らなければならない。

アリス・マーガトロイドとはそれほどまでの魔法使いだが、彼女はその魔法を自分の為に使わず、人形の為に使う。

魔法使いの同僚として勿体無いなと思う魔理沙だが、彼女がそれを望んでいるのだから仕方ない。

「こつちよ。……お客さん、相席して頂いてもよろしいかしら？」

「あ、いえ、構いません」

立て掛けてある観客席に座っている一人の少女。銀白色の髪をポブカットにし、白いシャツに青緑色のベストを着ている。しかし何よりも目立つのは、その腰に差さる二振りの大きな刀だ。

「あ、その、横、失礼するぜ」

「いえ、その、こちらこそ」

「あんたらお見合いしてるんじゃないんだから、そんな余所余所しくしなくても大丈夫でしょ。特にこの幻想郷では」

魔理沙は帽子の上から頭をガリガリと搔く。どんな奴かと興味を誘われれば、なんでもない、ただの少女だった。刀の事は気になるが、幻想郷に常識は通じないのだ。こんな奴もいるだろう。

（そういやホイホイ付いて来ちまったが、私は霊夢を救う為に冥界へ行くんだろが。クソ、こんな所で時間を潰してる場合じゃなかったぜ）

主に魔理沙の自業自得だが、興味をそそった方も悪い……と上手い責任転嫁。

魔理沙は準備をしているアリスを一瞥しながら、席を立った。

「あれ、帰るのですか？」

隣に居座る銀白色の少女が、その水晶のようなまん丸瞳で見つめてくる。帰るのか——と純粹な疑問を呈すその目は、魔理沙の沈む心には逆効果だ。

「あーそうだな。私は今から冥界の主用に用があるんで、こんな事してる場合じゃないんだ」

「冥界の……主？」

「ああそうだ。名前は西行寺幽々子っつーんだが、今からそいつを探してぶん殴りに行く」

「ほう。さいですかさいですか。貴女こそ、幽々子様の敵という訳ですね」

「あー？」

少女がゆらりと立ち上がる。心なしか先程の純粹な瞳は鳴りを潜め、敵意が滲んでいくようだ。

魔理沙はなにか嫌な予感がしたのか、片手で箒を掴み、もう片方で帽子の中から八卦

炬を取り出した。

少女は刀の柄に手を掛ける。慣れた動作だ。少女は刀を抜くことに躊躇も無いほど、刀に触れてきたのであろう。

「おいおい物騒だなあ」

「主に仇なす敵を斬るのは従者の役目」

「ほうほう、あんたは西行寺幽々子の従者って事か。なら話は早いぜ。さっさと冥界に案内しな。じゃねえと、痛い目に会わせ？」

「それは貴女の方よ。冥界へ正式入場させてあげる」

「おー怖い怖い。冥界の住民ってのはこんなに気が荒いのかねえ。えーっと、ちんちくりん」

「私はちんちくりんではない……っ！ 魂魄妖夢という立派な名があるの！」

「そんなことどうでもいいつつの。良いのか、お喋りに夢中になって。私の八卦炬はもう既に魔力充填完了しているぜ」

少女は目を見開いた。それは驚きからではない。油断をしてしまった自分を悔やんで……だ。

「貴様……名は」

「あー、えっと、レミリア・スカーレットだぜ」

「嘘ね。それはつい最近幻想郷に入ってきた吸血鬼の名よ」

バレたか……と舌を出してネタばらし。おちよくりで我を忘れてくれれば良いのだが、目の前の妖夢にはそんな様子など微塵もなく、逆に闘志を高めているようだ。

「私の真名は霧雨魔理沙だぜ」

「そう、魔理沙、では貴女を斬ります。恨む必要もありませんよ。死んだとしても記憶を失い、閻魔様の裁きを受けるだけですから！」

「あいよ、そりゃあ親切設計だなつと。『マスタースパーク』」

「無駄よ。『餓鬼十王の報い』」

八卦炉からマスタースパークが発生する。妖夢との距離は、少しだけ距離を取ったとはいえ数m。発生した時点でほぼ決着と同じなのだ。魔理沙もそれを理解して、通常よりも威力は弱めのマスタースパークを放っている。

しかし、妖夢にとってはその見立てさえ甘かった。

——時が緊張する。

止まった訳ではない。圧縮し凝縮し集中されきった刹那的な極限集中状態。

思考と認識、視界だけがこの世界に存在でき、身体は全く動かない。

時間にして一秒も満たないが、その間に妖夢はマスタースパークを横に一閃した。

マスタースパークを斬ったということは、当然必然次は魔理沙だ。緩慢とした時の中

で、刀の刃が迫る瞬間を見ていることしか出来なかった——。

「待ちなさい。ここままでよ。人形劇を見ないなら、さっさと帰りなさい。ここは闘技場ではなく、御客の場よ」

刃が鼻先で止まる。それは妖夢が手加減をしてくれたって意味じゃない。アリスが操っている人形を使つて、妖夢の腕をおさえたのだ。

「邪魔を……する気ですか？」

「邪魔をしているのはあんた達でしょ。はあ……興が覚めた。今日は二人とも、帰つて。人形劇はお仕舞い。今度近くで喧嘩したら本気で怒るから。じゃあね」

どうやらアリスを怒らせてしまったようだ。戦いの最中だったが、なんだかいたたまれない気持ちになり、八卦炉を仕舞つた。妖夢も刀を鞘に納めていた。気持ちは同じようだ。

「近くで……つてことは遠くでなら良いんだよな」

「そうみたいね」

「今日は装備も少なかった。だから負けそうになった。だが結果は引き分け。うん、そうだな、明日、魔法の森の奥に来い。霧雨魔法店つーちっさい店があるはずだ。そこで今日の決着を着けようぜ」

「ふむ……では、明日ですね」

「ああ、うっかり迷うなよ?」

「半霊が居るから大丈夫」

すると、妖夢の後ろから人の頭一個分ほどの白い塊が出てきた。それは空中にフヨフヨと浮いていて、妖夢から離れようとしな

「へーそりや便利だな。私も欲しいぜ」

ナデナデスリスリしてみると妖夢に叩かれた。痛い。

妖夢を見ると、親の仇を見るような目で見てきた。……そんなに過剰にならなくていいのによ。

「……あなたは半霊を持ってないわ。今のでよーく分かった」

「はあ?」

「じゃあね」

そう言って帰っていく妖夢の目は、少しでも涙で潤んでいたような気もするし気もしない。十中八九気もしない。

……はあ、帰るか。明日の為に用意もしなきゃいけないしな。

そして、一日が経つ。

妖夢は来なかった。

霖と咲と妖

魔理沙は激怒した。必ずやかの冥界の従者をぶん殴らなければならぬと決意した。

魔理沙には妖夢の事情が分からぬ。分かるのは、来なかったという事実だけだ。

怒りに任せ、勢いだけでとある店に来た。

「森えもくん、幽霊とか霊が見える道具、なんかないのか!？」

「魔理沙、久しく会わない内に、どこか頭を打ったようだね……」

「冗談に決まってるだろ?」

「知ってるさ」

魔理沙が訪ねたのは、森近霖之助という青年が営業する古道具屋、香霖堂である。

瓦屋根の目立つ和風の一軒家。魔法の森入り口に居を構えており、人里からの道のり

も比較的安全だが、どうもここに来るのは魔理沙を主とした特異な人間、妖怪ばかりだ。

「それで……何だって、幽霊や霊が見える道具なんか欲しいんだい?」

香霖堂の奥の店主が座る席で、霖之助はモノクルを嵌めてなにかを弄りながら魔理沙に聞いた。

普段火力やら魔法に使えるような道具やらを奪っていく魔理沙にしては、珍しい注文。

俄然霖之助に興味が湧いた。

「それが、半人半妖の奴に騙されたんだ」

「半人半妖だつて？ そりゃ珍しい登場人物だ」

「まあ聞けよ。実は一昨日にそいつと喧嘩する約束をしていたんだが、約束をすつぽかしゃがつてな。私は一日ずっと待ち惚けをくらったつてわけだ」

「それで引導を渡したい……と」

魔理沙ならあり得そうだ……と霖之助は思う。それと同時に、魔理沙に目を付けられた半人半妖にも同情の念を抱く。

「ああその通りだ。どうにも各にも霊夢の事もあるし、早く見つけて冥界に行かなきゃいけないんだよ」

「……霊夢がどうかしたのかい？」

聞いた瞬間、不味いなと悟った。

霖之助は勘の良い方だ。それは相對する相手の機敏や感情の揺れに敏感な事からだつたりする。

故に霖之助は見逃さなかった。霊夢の事を聞いた途端、魔理沙の目が曇った事を。なにか言いにくい事でもあるのかもしれない。けれど自分は部外者。ずけずけと入り込む訳にはいけないのだ。

「いや、忘れてくれ。なんでもないさ。……それで、魔理沙が欲しいものは幽霊や亡霊を察知、視認する道具ではなく、それを感知する道具が欲しいと見える。そうだね……少し待っていてくれ」

モノクルを外し、いつもの眼鏡を付けた後、弄っていた何かを時計のような物に填めた。

それは子供が使うような、時計機能もない時計。秒針のある場所には、三色の木霊が陰陽を争うかのように描かれている。

「それ……なんだ？」

「これは僕が無縁塚で壊れているのを発見した物なんだが……どうやら外界で子供が運用する、妖怪を探知する為の道具らしい」

「はえ、外界じゃ子供までも妖怪をさがしてんだな。そりゃ妖怪が幻想郷に来るわけだぜ」

「どうやらメダルを入れることで、それに準じた妖怪を呼び出せる機能もあるらしい。ま、僕はそんなメダルなんて知らないし持つていないから、宝の持ち腐れなだけだね」
魔理沙はその時計を霖之助から受けとる。どうやら腕に装着する型のように、まだまだ子供である魔理沙にとっては丁度良い大きさだった。

「で、これでどうやって幽霊や亡霊を見つuckerんだ？ レーダーでも付いてるのか？」

「えーっとそれはね……側面にボタンがあるだろ？」

「これか？」

魔理沙が側面を見ると、確かにボタンのような出っ張りがある。

「そこを押すとレンズが開いて、ライトが出る。そのライトで照らせばどんな亡霊や幽霊、妖怪だってお見通しして訳さ。実はレーザー機能も有ったんだけど、それは完全に壊れていて直せなかつたよ」

「へー！ こりゃ良い。ツケで貰っていくぜ」

「まじぞ」

魔理沙は意気揚々と飛び出し、箒に跨がった。

その様子をどこか懐かしむように見ていた霧之助。

魔理沙は昔から変わらないなあ……と呟いた言葉は、彼以外に誰にも聞こえる事はなかった。

（これであの半人半妖を見つけられるぜ！）

魔理沙とてバカではない。霖之助から貰った道具、この変な時計のデメリットくらいすぐに理解していた。この変な時計の感知機能。それはライトで照らさないと使えない……ということだ。ライト範囲は良くて数 m 。もし相手が姿を消していたり、化けていたならば効果は覷面だろう。

(ん？ 待てよ……？ そういや私は霖之助にレーダーのような物を頼んだ筈なのに、これでは意味があまり無いんじゃないか……)

まさにその通りだ。ライト範囲が数 m ということは、魔理沙は半径数 m でしか感知出来ないというわけだ。感知出来る点ではある意味魔理沙の意に叶っていたが、総合的に見てみるとただの不要物を押しつけられたようなものである。

「クソツ騙された!!」

魔理沙は時計を叩きつけるような事はしなかったが、物凄く叩きつけたい気分には陥った。蓋を開ければなんでもない。ただ魔理沙が勝手な解釈をして、勝手に舞い上がっていただけだ。

魔理沙は唇を軽く噛み、怒りを抑える。

「……考えても仕方がないな」

魔理沙は気分転換に人里へと向かった。

幻想郷に住む人間は、この妖怪が跋扈する世界で最も脆弱で儂く、それでいて臆病で

ある。それも当然の事。人間と妖怪では強さに大きな隔たりがあるからだ。その問題を打開するためにスペルカードルールなんて物があるのだが、死人が出ることさえある。遊びとは言ってもそれは妖怪の視点からで、人間側からしたら命のやり取りに等しい。

そんな人間達は妖怪の危険を回避するために、自分達が集まって暮らす里を形成している。その里の規模は幻想郷内でもかなりの規模で、妖怪に襲われる危険性を常に背負う人間にとって、最も安心できる場所でもある。

訳あつて里の中央街を避け、里の有名な団子屋に向かう。そこは値段が安く、それでいて美味しいと評判の店で、魔理沙もよく霊夢と共に食べに来ていたりする。

魔理沙は自分独自に決めたお気に入りの席に座り、店員に団子を頼んだ。

シンプルな三色団子がすぐさま運ばれてくる。この団子屋は調理時間が早いのもまた人気の理由の一つで、魔理沙はすぐに団子を口に運べる事を嬉しく思いながら、口のなかに一串分放り込んだ。

「ああ〜うめえぜ」

「あら、こんな所で会うなんて珍しいわね」

「ん!?!」

突如声が降ってくる。いきなりだったので魔理沙は驚き、団子を口の中に詰まらせて

しまう。胸を何回か叩いた後、苦しい思いをする羽目になった元凶に文句を言おうと顔を上げると、逆に自分が驚いてしまった。

「どうしたの、そんな鶴に摘ままれたみたいな」

「そこは狐じやねえのか？　なあ、紅魔館のメイドさんよ。名前は忘れたが」

そこにはいつかの異変以降、交流の出来た紅魔館のメイドがいた。

魔理沙は相手が相手だけに睨む気も失せ、すぐさまいつもの憎まれ口に戻る。

「魔法使いさんはもう痴呆かしら？　私の名前は十六夜咲夜よ」

「そうかそうか、十六夜咲夜ちゃんか。すまんね、痴呆で。どうか老後の世話もして欲しいくらいだ」

「老後になる前に、この世からおさらばさせてあげましょうか？」

「おおっと、そりや御免被る」

魔理沙はナイフを取り出す咲夜に両手を突き出す。降参の合図だ。今の魔理沙は別に咲夜と戦いたい訳ではない。団子を食べたいのだ。目的の違う事に首を突っ込む魔理沙ではなかった。

「それで貴女はこんな所にのんびんだらり。良いわね、こんな寒い時期に呑気で。……
というかなんでわざわざ外で食べてるの？　中で食べれば良いのに」

「外で食うのはは私なりのルーチンさ。なんと驚くことに三年間続いている。褒めてくれ

ても良いぜ」

「はいはい凄いわね」

咲夜は呆れるように嘆息した。この魔法使いは自分が風邪を引くことも視野に入れていないのか、と余計な心配をさせる。魔理沙はそんな視線に気づかず、次の団子を放り込んだ。

「そういえばお前んとこのお嬢様は元気か？」

「元気よ元気。またすぐにも異変を起こしそうだわ」

「ふう〜ん」

魔理沙は咲夜の手に視線を向ける。大きめの買い物袋の中に、沢山の料理の材料やらが詰め込まれていた。

「咲夜は冥界に行く方法とか知らないよな？」

「知ってるわよ。死ぬのよ」

「いや、そうじゃなくてだなあ。あー、生きた状態で冥界に行く方法だ」

「冥界への空間を弄るか、橋渡し人が必要でしょうね」

「そっかー。橋渡し人かあ……」

橋渡し人。空間を操る事なんて出来ない魔理沙には、やはり妖夢を探さねば話にはならないのだろう。

魔理沙は最後の一串を口の中に放り込むと、お代を置いて立ち上がった。

「あ、すまんなメイド。時間を取らせちゃまって」

「別に良いわよ。ちよつとした誼だし」

「最後になるが、銀白色の髪をした侍染みた半人半霊つて見なかったか？ 名前は魂魄

妖夢つて言うんだが……」

魔理沙がその名前を出すと、咲夜は驚いたように事実を告げた。

「妖夢？ 妖夢ならそこにいるわよ？」

「え？」

咲夜が後ろを指差すと、この雪の中、パンパンに詰まった大きなリュックを背負つて駆け寄ってくる妖夢の姿が見えた。あまりにも呆気ない発見で、魔理沙は口を開けて吃驚する。

「さ、咲夜さん、此度は誠にありがとうございます!! 貴女のお蔭で効率よく、それでいつもより安価で食材を買い揃える事が出来ました! 本当にありがとうございます!」
「いえ、私は少し手伝つたまでよ。後は貴女の実力。バーゲンを制する力、今後とも研ぎ続けなさい」

「はい! 咲夜さん!!」

可笑しな光景だ。毒が抜けるとも言う。思わず濁いた笑いが出てしまい、その音で妖

夢がこちらに気付いた。

こちらを見た妖夢の瞳は……なんというか、悪いことが親にバレた時のような、申し訳なさと焦りが混ざった「ソレ」だった。

「咲夜さん、すみません。少し野暮用で……」

「おつ、実は私もそうなんだ。なあ妖夢、私と野暮用で出掛けようぜ？」

「私、血生臭い野暮用にしたくないんですよ」

「私の血は消臭機能付きだから大丈夫だな」

「幽々子様を待たせる訳にはいかない。すぐに終わらせるわ」

妖夢がその大きなリユックを肩から下ろし、刀の柄に手を置いた。臨戦態勢、それを分からせる威嚇行動。

邪魔をするなどの意思を込めて、魔理沙は咲夜の方を見る。

咲夜は魔理沙の視線から何を感じ取ったのか、懐からナイフを出した。鋭い、鋭い刃。光に反射して、銀の鈍色が一つの線を描いた。

魔理沙と妖夢の間にナイフが刺さる。開始の合図だ。

——だがその表現には少し誤りがあった。

ナイフが刺さる前、もう既に魔理沙と妖夢は動きだし、元いた場所から姿を消していたからだ。

幽人の庭師

此処は空中。白銀の妖精が激しく乱舞する様子は、熱が好きな存在にとつてはまさに地獄と言えよう。

そこに紛れるように二人はいた。正しくは二人と一霊だが。

「あーあ、こんな雪の中じや妖夢が何処にいるか分からねえ。うっかり弾を当てちまうかもしれねえな、気を付けろよ?」

「問答無用。斬らば分かる」

片方は人間の魔法使いの少女。片や種族の異なる半人半霊。お互いは砲と刀を構えて対峙していた。

今から行うのは命のやり取りではない。幻想郷で定められたルールの元に行う弾幕ごっこだ。魔理沙は当然として、妖夢も自らの主からそれがどんな遊びか聞き及んでいた。

主曰く困ったら提案なさい……と。

レミリアを含む紅魔館のメンバーらが起こした紅霧異変のお蔭で、ある程度幻想郷内でも使われるようになった決闘法。妖夢のような未熟者でも主に勝つ可能性が出来ると

いう、簡易な下克上も可能にする遊びだ。

「スペルカードは三枚、被弾は一だ。妖夢、良いか？」

「スペルカードなど三枚も要らない。一瞬でけりを着けてやろう」

「良い威勢だ、ワクワクするぜ！」

魔理沙がスペルカードを取り出し、宣言した。

「恋符『ノンディレクシヨナルレーザー』」

魔理沙から五つの魔方陣が放たれ、各々が色の違うレーザーを回転しながら放つ。

レーザーというものは初速が異様に速く、油断して直線上に居ればすぐにその餌食となってしまう。軌跡にも被弾判定のある銃弾とでも言えば良いだろうか。

(……ふん、簡単ね)

妖夢は冷静に判断を下し、身体を捻って躲す。

しかし魔理沙はそれを読んでいた。

「おおっと、さつき油断するなって言ったよな？」

魔理沙は更に自分の目の前へ魔方陣を展開、そこから妖夢に向かって大小の星を模した弾を放っていく。

これには妖夢も逃げねばならない。何故なら、躲す以前に妖夢の五体を狙って幾つもの弾が向かっていくからだ。所謂狙い撃ちである。

だが、妖夢は動かなかった。それは降参の意を相手に伝える為ではない。//動く必要も無い//のだと相手に明確に示す為だ。

「刀を収納する鞘の先が、一瞬だけ動いた」——と、それだけ。
魔理沙にはそれだけしか見えなかったのだ。

「軽い。そして豆腐より脆い」

妖夢に向かっていく大小の星弾。それらは妖夢が腕を動かすだけで二つに分かれた。

「おいおいそんなのアリかよ……」

その現象の原因と結果は、すぐに理解出来た。妖夢が刀で弾幕を斬る。そして弾幕が斬れる。この二工程。たったこれだけ。

あまりにも分かりやすく、あまりにも不平。なんとも言えぬ感情が心の奥底から湧き出てくる。だが、これも弾幕勝負で有り得ること。仕方無いと考えればそれまでだが、それでも耐え難い……。

スペルカードにはその弾幕制作者の想いが詰まっている。そしてそれを見せるといふことは即ち心の開放であり、弾幕ごっこことはコミュニケーションでもある。

対峙した敵が魅せる弾幕の美しさ。そしてそれを永く見るために、永く相手の気持ちを感じるために、こちらも全身全霊をもって相手の心に応える。

それこそが、スペルカードを用いた弾幕ごっこという特殊な決闘法の解だ。

だが今のはなんだ？

斬る——斬る——斬る——斬る——斬る……。

全てを斬る。

それはまるで拒絶。寄っていく心を遠ざけ、更に斬り捨てる行い。魔理沙の中の……そう、どこか弾幕ごっこを楽しんでいる部分。そこが妖夢の拙い行為に反応し、怒りの成分を分泌する。

（「こんな奴に負けてたまるか……こんな、弾幕ごっこの真意さえ知らない奴に……!!」）

魔理沙は沸々と怒りを貯めていく。妖夢の涼しそうな顔がまたそれを加速させた。

「余裕そうな面見せてんじゃねえっ！ 魔符『ミルキーウェイ』」

スペルカードブレイク……通称時間切れはまだ先だ。しかし魔理沙に沸き上がる情動が、次のスペルカードに手を伸ばすキツカケを作った。

魔符『ミルキーウェイ』。天の川を意味するそのスペルカードは、魔理沙を中心に半時計回りの弾幕を展開。相手が避ける事に手間取っている間、更に小弾を左右から圧するように放つ。

流れるような弾幕は、まるで夜空を染める天の川。紅霧異変後、夏の綺麗な星空を見て思い付いたスペルカードだ。

「これは……追い詰められる。人神剣『俗諦常住』」

これは拙いと思つたのか、妖夢もスペルカードを宣言する。
ああ、そうだ。それで良いんだ。

色鮮やかな弾幕飛び交うこの状況。相手の気持ちを感じとるこの状況。心と心をぶつけ合うこの状況……！

これこそが弾幕ごっこだ！

妖夢が空間を一閃。するとそこから楕円形の弾がゆつくりと現れ、妖夢自身も赤みがかつた大弾を列を成すように放っていく。

魔理沙のミルキーウェイ。妖夢の剣技弾幕。お互いのパーソナル領域を侵食しながら、その二つはぶつかった。

ミルキーウェイと俗諦常住がぶつかった際、大きなエネルギーとその性で飛び散った弾幕が発生し、大気を揺らす。

魔理沙は帽子を押さえながら、慣れた飛行操作で軽々と躲していった。

経験という意味では、紅霧異変と同様に魔理沙の方へ軍配が上がる。その経験の差だろうか。魔理沙のミルキーウェイから飛び散った弾幕が、妖夢の服や肌を掠めていく。

「どうだ妖夢！　これが弾幕ごっこだ！」

「黙れ。口は災の元。今のは忠告だ」

「へっ、そういうのは勝つてから言え！」

「そうか……笑みを浮かべるところ申し訳ないが、早々に決着は着けさせて貰う」

妖夢が避ける動作を止め、刀を鞘に戻した。

——何をするつもりだ。

魔理沙は彼女の真意を考えた。

——何故刀を。

——降参？

——諦観？

——違う。

——勝てる算段がきつと。

——だったら奴が行う次の動作………。

次から次へと過ぎる思考。だがそれは途中で遮られる。それは心境の変化や突然の状況の変化による精神の不均衡等からくる内面的な問題ではない。

外部。それも背後からである。

「あつ………」

声も出せなかった。立て直す暇さえなかった。

これは……この「攻撃」は………！

魔理沙の思考を途切れさせたのは、背後から被弾した弾幕のせいである。しかしそこ

に妖夢の弾は無かった筈だ。丁度そこは何も無い空間。確実な安置である筈だった……。「それ」が現れるまでは。

(あれは、妖夢の半霊か……クソッ!!)

妖夢の半霊。魔理沙を被弾させたその存在は、魔理沙のミルキーウェイと妖夢の俗諦常住がぶつかっている間、透明化して魔理沙の背後に回り込んでいたのだ。魔理沙の不幸はこのあとである。なんと、半霊も弾幕を放てたのだから。

魔理沙は襲い来る弾幕に耐えながら、空中から身を降ろした。……降ろしてしまった。

「魔理沙の負けね」

咲夜が淡々と機械のように告げた。魔理沙の心境としては、今だけはその声だけでも恨めしい。

負けたのだ、魔理沙は。悔しくない訳がない。その悔しさと妖夢への恨みが溜まりに溜まって、今の魔理沙は爆発寸前であった。腐つてもまだ11歳。感情を飲み込む術など知る筈もなく、その感情の行き場を瞳から落としながら、言葉にも成らない罵詈雑言を妖夢に吐いて、魔理沙は逃げた。

逃げなきや耐えられなかった。あんな奴に負けた自分が情けなくて、殺したいくらいだった。

強い、強い衝動。勝ちたいという原始的欲求。

魔理沙はまた敗北を知った。

けれど、その分また強くなった。

春雪異変

辺境すら寒さに包まれ。

幻想郷に白銀の龍が現れた。

視界に写るは鱗。指先を朱くする鱗。

冬は終わらない。

人々がそう気づくのは春の訪れを過ぎて数カ月後。

いつもなら、酒を片手に花見を楽しむ。

口寂しい蜜の味。

春はまだ、来ない。

く春雪異変序章く 人里の記録より

霊夢が眠り、蓮華が代理となり、魔理沙がお誘いをすつぽかされた時からはや三ヶ月。その間、霊夢は起きることもなく。

その間、蓮華は働く事もなく。

その間、魔理沙は負け続けていた。

魔理沙はとある一件の敗北以来、ずっと妖夢を追い掛け続けていた。それは図らずしも妖夢の尾行に繋がり、冥界の入り口の特定の繋がった。しかし入り口から入る事はまた別だ。魔理沙がどれだけ攻撃を加えても、冥界の入り口はピツタリと閉じており、開く予兆すら見えない。

橋渡しし人が必要。やはり冥界に行くためには、妖夢を使わねば不可能なのだと言に刻んだ。

その想いと、未だ動かぬ霊夢の状況が、魔理沙を突き動かしている。何度も幻想郷を飛び回り、雪が降ってしようと、体調が悪かろうと妖夢に勝負を挑み続けた。けれど結果は芳しくなく、魔理沙は逃げ戻る日々を繰り返していた。

そして今日も魔理沙は出掛けようとしていた。目的は明白。妖夢打倒と、冥界の主を倒すことだ。

少しだけ状況が突飛で切羽詰まっているが、結局は日常の範囲は出ず。

……そんなある日、誰かがふと思った。

幻想郷が平和だと。

平和。幻想郷ではとても珍しい現象である平和。それはどこか歪で、どこか不自然。

そして幻想郷の住人らは気づく事になる。雪が吹雪く春の訪れの日には、既に異変は始まっていたと。

雪が降り積もる霧の湖。紅い館がある場所とは正反対に、その廃洋館は建っていた。

……その廃洋館には色んな噂がある。どれもこれも人里で伝播された信憑性の薄い物ばかりだが、共通した点が一つある。それは、音楽が聞こえるというもの。

人は知り得ない。それが騒霊の仕業だと言うことに。

騒霊は三霊。各々が楽器を手にし、思い思いの音楽を奏でている。

その中の長女、ルナサが呟いた。

「そう言えば楽団の予定ってどんな感じ?」

「今日は確か冥界に行つて演奏だったよ」

答えるのは次女のメルラン。彼女達は三女のリリカと共に、プリズムリバー楽団を結成している。激しくも美しい音楽を奏でる三霊はとある界限に於いて有名で、時折依頼が来るほどだ。

今日も彼女達はいつもと同じように依頼をこなすつもりであった。陽気で楽天的な彼女達は、現在起きている異変とこれから自分の身に降りかかる不幸に気付かないのである。

「じゃあそろそろ出発の準備を——」

リリカがそう言った瞬間だった。首元にヒヤリと冷たいナニかが当てられる。

「え……………ムグッ」

話す暇さえ与えられぬほど、その行動は速すぎた。慣れた手つきとも言えよう。他の姉妹がこちらを向いて、目を見開く。

リリカの首元に冷たい物……………そう、鋭いナイフを突き立てる咲夜は、耳もとでボソリと呟いた。

「冥界に行くって言ってたわよね……………ちよつと私に冥界の場所を教えて頂けないでしようか？」

小さな声。だが冷たい。まるでナイフのような声であった。

リリカは頷くしか出来ない。でなければ、彼女自体の命も危うかったからだ。

話とは関係ない余談だが、紅魔館の主もこの異変を楽しんでいた。しかし止まない冬にととうとう飽きたのだ。その痲癩が咲夜を動かした要因とも言えよう。

(魔理沙が言っていた冥界……………そこに春は向かっている)

咲夜の視線は遠くを。それも、天空も天空。冥界と現世を区切る『幽明結界』に向けられていた。

「あー暇だ。超暇なんですけど」

所変わって博麗神社。そこでは現在博麗の巫女代理を務める蓮華が、一人寂しく囲碁を打っていた。当然相手などおらず、一人囲碁である。ルールは知らない。

「博麗の巫女ってこんなに暇なの？　こんなに暇なのにお金貰ってるの？　あー、くっ
そ、私もここに就職しようかなーっ」と

蓮華は主に水を摂取すれば生きていける存在なので、博麗霊夢の苦勞を知らない。電気やコンロなんて良いものは無く、道具や物も最小限にしか並べられていないこの博麗神社の様子を見れば、霊夢がどんな生活をしているのかある程度察しは付くだろうが、人間と同じ視点を持たぬ蓮華には分かる筈もなかった。

「蓮華!!」

そんな怠惰な日々を送っていた蓮華を叱咤するかのように、博麗神社の襖が勢いよく

開けられた。

その人物は時折霊夢の様子を見に来る張本人、霧雨魔理沙である。

「なーに、魔理沙く。私になんか用？」

「そんな蕩けた顔してる場合じゃねえ！ 異変だよ異変、博麗の巫女として一緒に来い！」

「えーやだー」

「知らん！ だらけているのならそのままが良い。私が勝手に連れていく！」

「ぎゃーー、もつとだらだらしてたいーー！！ お外の寒いのは嫌だーー！！」

「こいつ、とうとう堕ちるところまで堕ちたな……」

駄々っ子のように騒ぎ立てる蓮華を見て、魔理沙の口からはもう何も出なかった。

炬燵という魔道具にとり憑かれた哀れな妖怪。その末路が人間に引つ張られながら箒の後ろに乗せられ、魔理沙と共に飛び立っていった。

魔理沙としてはこんな奴に頼りたくなかった。けれど今は出来るだけ人手が必要なのだ。霊夢に残された時間も少ない。もうなりふり構ってられなかった。

二つの存在が動き出した今、当の冥界の主、西行寺幽々子は扇子を取り出し、流麗な舞を舞っていた。

妖夢は正座し幽々子の舞を見ているが、その表情は綺麗な物を見るときのような、感動したような物ではなく、どこか悲痛さが伴った表情であった。

「幽々子様……」

「あら、なあに？」

妖夢の呟きが幽々子には聞こえていたようで、彼女は舞を止めて振り向いた。

「もう……お止め下さい幽々子様。西行妖は諦めましょう」

「何を言っているの？ ほら、もう西行妖は八分咲き。もうこの桜は咲くわ。満開よ」

妖夢は幽々子の顔を直視することが出来なかった。もし直視してしまえば……妖夢は幽々子にその白楼剣を突き立てていただろうから。

西行寺幽々子。彼女は冥界に訪れた霊でさえも見惚れるような容姿をしている。彼女から与えられる本当の『死』は、地獄に行く者からすれば最後の救いに。転生を果たす者からすれば未練になるほどだ。

そんな彼女が、今では見る影もない。

頬は痩せこけ、目の下には大きな隈が出来ている。心なしか顔色もかなり悪い。まるで今にでも死にそうだ。

妖夢にはなんとなく分かっていた。

西行妖を睨かすこと。それは主の死だと。

妖夢は『魂魄妖夢』として幽々子を止めたかった。けれど従者である『魂魄妖夢』は、主である西行寺幽々子に従う他ない。

こんな時ほど従者である事を悔やんだ事はなかった。

誰かに西行寺幽々子を止めてほしかった。しかし冥界と現世を分かたず幽明結界を突破する方法は生者には無く、亡霊や魂であるならばそれらを司る幽々子を止められない。

それでももし生者が結界を突破したとする。しかしここは冥界。生者が来るべき場所ではない。すぐさま幽々子に死を与えられ、この冥界の住民となってしまうだろう。

歯噛みする思いだ。誰しも幽々子を止められぬ。止めれる者がいるとするならば、それは幽明の結界さえもあやふやにしてしまう存在か、はたまた生と死を区切る事が出来る人物か。

だがそんな存在など夢物語同然。いても動かぬ。

「少し出ます」

「そうなの？ 気を付けてね妖夢。もし西行妖が満開になったら、皆で華を見ながら宴会でもしましょう」

「は……」

心もち重く、白玉楼から冥界の入り口に続く階段を降りていく。

幽明結界。大きな扉の形をした、強大な結界。冥界への橋渡しは妖夢でも可能だが、それは相手が死者の場合のみで生者は例外である。

「はあ……」

扉に手を付き、溜め息を吐く。

もう駄目だ。私はお祖父様と約束した事さえ守れぬのだ。幽々子様を託され、二振りの剣を受け取った幼い自分。その日はきつと守り通せると信じていた。

現実には厳しく……辛い。

涙が出そうなのをグツと堪えて、元来た道を戻ろうとすると、後ろからガラスが割れるみたいなの……ピシッという音が聞こえた。

気のせいかと思いい無視をすると、更にガラスに亀裂が入るような音が連続して聞こえる。

まさか……と思いい振り向くと、割れぬ筈の幽明結界に罅が入っていた。

「嘘っ、嘘っ、え、なんで!？」

焦り、不安。そして少しだけの希望。

妖夢は知らなかった。この幻想郷に結界を司る存在がいることを。

妖夢は知らなかった。界を結び、死と生を分ける事が出来る存在がいることを。

妖夢は知らなかった。その存在は、有名な大妖怪などではなく。博麗神社でだらけていた、とても脆弱な妖怪であることを。

そして妖夢は後に知ることになる。彼女を。『界を結ぶ程度の能力』を持つ彼女の名前を。

それは幽明結界が割れる音と共に、一人の魔法使いの箒に乗って、とある顔馴染みのメイドと一緒に現れた。

春雪異変は既に始まっている。そして、既に終わりを迎えていた。

隠されている怪物の正体

あー寒い。ホント寒い。なんで私がこんな寒い日に空中散歩を楽しまなければいけないのか。世は理不尽である。まあそれもこれも、私を縄で縛ってほぼ強制的に箒の上に積んだこの白黒魔法使い、霧雨魔理沙のせいだが。

クツソー覚えてろよー。私が本気出したらあれだから。世界なんて簡単に滅びちゃうから。どっかの魔王の如く世界を半分あげることだって出来るんだから。……なんて言葉に出して言ってみたーい。

正体は雑魚なんですけどね、私。もうとって捨てれるくらい。

「魔理沙ー、冥界の場所ちゃんと知ってるのー？」

「ああ、既に把握済みだ。もうちよつとで着くぜ」

「へえー、そーなのかー。………ん？」

私は魔理沙の背にくくりつけられている。流石に落つことす訳にはいかないという魔理沙の優しさが垣間見えた気がするが、縛っている時点で優しさどころではない。まあその代わり背後の様子が見えるわけだが。

背後を見れるお蔭か、その存在に気付いたのは私が先だった。楽器を持つ小さい女の

子三人を脇に抱えながら、メイド服を着た銀髪の女性がこちらに向かつてきた。……と
いうかあれ、咲夜さんじゃないか。何してるんだろ。カツアゲ？

咲夜さんが近くに来ると、流石の魔理沙も気が付いたのか声を掛けた。

「ようメイド。今日もか弱い少女にカツアゲでもしてるのか？ 素晴らしい趣味だな。
今度私もやってみたいぜ」

「じゃあ貴女は誘拐犯ね」

「お友達を遊びに誘ったらそれは誘拐か？」

オイコラ。勝手に縛って連れてってにおいて私を巻き込むな。それに第一、私と魔理沙
は友達ってほど永く付き合っていないじゃん。……いや待てよ。相手から友達のOKサ
イン貰ってるんだから、こちらも友達だと認めればそれはもう親友と呼んでも差し支え
ないのではなからうか。ああそうだ。きつとそうに違いない。じゃあもう私と魔理沙
はズツ友だね！

「確かに私と魔理沙は親友だもんねー」

「調子に乗るなよ」

「あ、ごめんなさい、すいません」

即座に謝る私。しつかり謝れる私、偉い。

というかやはりゴロゴロし過ぎたかな。この頃魔理沙がどんどん私に冷たくなって

いく気がする。いや、第一印象もかなり悪かったけども。なんだか好感度のメーターが一方通行で、相手の方はマイナス方面に振りきっている気がするのは私だけかな？

「見えてきたわ、魔理沙。あれが『幽明結界』よ」

「へへ、やつぱりありやあ結界だったのか」

魔理沙が笑ってこちらを見た。

……え、私？ 待つて、なにその目は。めちやくちや嫌な予感がするんだけど。え、縄を解いて欲しそうだなって？ いやいやいや、冗談ですよ魔理沙様。まさかそんな酷いことを魔理沙大明神様がするわけ……あ、やつぱり拒否権はないのね。

魔理沙が咲夜になにか合図をすると、一瞬にして私の身動きを封じていた縄がほどける。

よし、逃げるチャンスだ！ と思ったのも束の間、頭に強い力が加わった。魔理沙のアイアンクローである。魔理沙は鋼タイプだったのだ。

「……なに下らねえ事考えてにやにやしているのは知らんが、今から蓮華にしか出来ない大仕事だ。あの結界を壊せ」

「え、ちよつ、いやなんで私？」

「お前、初対面の時に言っただらろ？ 結界を操るって。じゃああれしきの結界、壊すのなんて簡単だろ」

「いや、だったらゆっくり近づいて作業するから。なんで振りかぶっているのか聞いていいかな、ねえ、ちよつ、ちよつとおおとおお!!?!」

魔理沙選手、1投目振りかぶりました。蓮華ボール、幽明結界にストライクウ！
バツター無し!!

……つてぎやあああああ!!! ぶつかるとぶつかると！ 死ぬつてこれ死ぬつてこれ！
感じたら分かる。これアカンやつや……。

迫る結界。突き抜ける風。私を投げた魔理沙。……最後だけは絶対に許さん。後で博麗霊夢にチクつてやる。わーん霊夢お姉ちゃん。魔理沙お姉ちゃんに虐められた。……うん、この後十中八九霊夢にボコられるね。

「わ、わわわわわわわあああ！——あぶし！」

凄く痛い。多分首が死んだ。もし死んじゃつたら絶対に魔理沙を恨んで枕元に出てきてやる。

つてちよつと待てよ。私飛べないからこのまま落ちるんじゃ……。ん、あれ、なんだこれ頭が。あれ、視界がグルリグルリ、あれれれ。

——途端、繋がった。

私は白い世界にいた。白い世界って言ったってそれは綺麗で純粋な物なんかじゃ決してなく、どこか歪んだ、濁った白色だった。

「え、何処……」

グニツとなにかを踏んだ。反射的に足下を見ると、そこには頭が転がっていた。鼻から下の無い、中途半端な顔。……一瞬で身体中の汗が干上がった。

「い、や、わああああああ!! わ、わああああああ!!」

なんだここ、何処、何処、出口、こんな所にはいけない。私はここにはいけないんだ。

焦っていたからか、初めてこの場所に来たからか、気づけなかった。

よく見るとこの世界、全て私で出来ている。背丈や服装は違えど、顔も特徴も全て同じ。どう見たって私だ。

唯一私と違うのは……生きているか、死んでいるかの違いだけだろう。

私の立つ大地は全て私の死体で。壁も、建造物も、山も、崖も。

水は無い。私が生きるために必要な水は無い。この世界に存在していない。まるでこの世界は、私の要らない物だけが存在する廃棄地のようだ。

私は歩いた。走った。死体の丘を越えた。死体の荒野を越えた。死体の砂漠を越えた。

死体は続く。光なき瞳が。胴無き腕が。四肢晒し。

いつしか私の足は、とある場所に着いていた。

そこは大きな大きな核。マントルとも呼ばれる惑星の核が、円柱上の空間に浮かんでいる場所だ。当然の如く、全て私の死体で壁が構成されている。

マントル。それは心臓のように思えた。脈打つその中には、なにか黒い影が存在する。

それが何か、私は理解してしまった。それは穢れだ。穢れそのものだ。

マントル内を満たすもの。それは怨念だ。どす黒い、全てを呪い殺さんとする怨念の液体。

私は不思議とそれを美しいと思ってしまった。根拠はない。ふとそう思ったのだ。

私はふらふらと、光源に近づく虫のように近づいていく。

ああ、それに触れたい。触れたらもつと……もつと感じられる。全てを。そう、本当の全てを。

マントルに向かって伸ばす腕。その腕を、誰かが止めた。

「……光源に集まる虫。その光源は、自分を焼き殺す熱源だとも知らずに」

「貴女は……誰？」

私の腕を掴んだ少女。その少女は、私より少しだけ背の高い……「私」だった。

「私は蓮華さ。蓮華と名前を与えられた、最初の蓮華。あんたを止めに来たよ」

「はあ？　なんだよ、蓮華は私だ。私以外が私の振りをするな」

「おいおい、その言い草はないだろ？　私の方が蓮華歴は永いんだ。仲良くしようぜ、三代目ちゃん。……ああ、でも一代目は蓮華の名は与えられてなかったっけか。じゃああんたは二代目だ」

何を言ってるんだコイツは。理解したくない。してはいけないのだと思う。私は必

死に耳を塞いだ。こんな奴の甘言に騙されぬように、と自分に暗示を掛けた。

だが、コイツの声は私の手を、耳を越えて脳に響かせてくる。

「無駄さ無駄さ、耳を塞いでも。ここはあんたの中。私が残した、あんたへの記憶のプレゼントさ。……もうそろそろ時間が無い。私が伝える事をよーく聞け」

「……………」

「あんたは付喪神。主に忘れ去られ、念を持った器物に宿る神。器物とはいわば人工物だ。だがここにいる私達は違う。付喪神じゃない。あんたは造られたんだ、私に」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「私達の目標はただ一つ。『災厄』を封印すること。地と月に眠る、全ての祖を封印す

るいつ」

「……………やめろ」

「不思議に思わないか？ 信仰心が必要な神や恐怖心が必要な妖怪の類。それらは神話を見る限り、人が生まれる前から存在していた古代の神々もそれに含まれる。疑わなかったか？ 何故それらが存在できていたのかを」

「……………おい」

「答えを教えてやろう。人間が変えたのさ、歴史を！ 歴史そのものを食べるワーハクタクが居るように。数十億人まで形成される人間が、想像と幻想を抱き歴史を造り上げたんだ。この世界での人間とは、まさに歴史変容機器。この世界の本质は、まさに人間が信仰した歴史が本物となって刷り変わる世界！」

「……………蓮華」

「だったら、もっとも信仰される存在ってなんだと思う？ なあ、おい、もうとつくとうに気付いてんだろ？ 私達はその最も信仰された存在のアバター。いや、ここで言うならば神だ」

「もう黙れよクソ餓鬼が」

私はベラベラと聞いてもない事を喋るソイツを、両の腕で押さえつけた。不思議と、無くなった筈の腕が存在している事を疑問に思わない。いや、違うか。そんな事思つて

いる暇さえないんだ。コイツを殺さなきゃ。殺して八裂きにして、内臓腸引きずり出して、ぐちゃぐちゃに分解して、再生しても身動き出来ないよう磔にして何度も殺してやる。

「おいおい一代目さあん、結構ご立腹なようでも最高だぜえ。……どうりでおかしいと思っただ。西行妖を私が封印した後、あんたは私を死に誘った」

「てめえ、話すのを、やめろ！」

私は二代目蓮華の首に手を掛ける。

「——死になさい——……ってな。死とは穢れをあんたに還元すること。西行妖と幽々子によって高められた私の穢れを、あんたが復活する糧の為に使おうとしたんだ。だがその不自然な行動が、こうやって二代目の私に『記憶の隙間』を、『対話の場の世界』を創らせるきっかけを与えちゃった」

「クソツ、黙れ、黙れえ！　ぶち殺すぞてめえ！」

「ハツハツハ、本性かよそれが。三代目ちゃんの主導権を握りたくて、アイツが生まれた瞬間に干渉してたよなあ。私が咄嗟に結界を発動させなきゃアイツ、文字通り死に戻ってたぜ」

私はコイツを殺そうと、腕に神力と妖力を込め始める。神であるコイツも同じ信仰心からなる神力でやられれば、当然効く筈だ。

三代目はてめえみたいな使えない二代目と違つて、私が復活する為の依り代となるべき存在。二代目が私を封印しておくために造つた器だとしても、それはあまりに純粹で綺麗だ。いつでもこちらの色に染め上げる事が出来る。だつたら有効活用だ。二代目を殺せば、コイツは私のもんだ。とつくに死んだ死者は黙つてやがれ。

「ぎひつ、ぐ、あ……なあ三代目。聞こえるか。……聞こえ、なくても、良い。頭の奥底に閉まつておくだけで良い」

「ぎゃはっつははははははははははははははははは！ ……ここは私達の世界！ 呪われた異空！私に乗つ取られた三代目の意識なんて既に灯火に近いさ！」

「覚えておけ、三代目。コイツの……私達の正体は……今なお人が形成し創り続けられている存在。古代の生物、初めて地球に生まれた微生物さえも、無意識下に信仰していた。だからこそ、この世界に生まれた最古で祖なる神。人の手が及ばずに創られた存在」

「死ぬ、死ぬ、死ぬえええ、死ぬ!!」

少しずつ世界が崩壊していく。残されている記憶の容量も少ない。

「そう、私達は——この大地そのもの……私、達は地……のアバターで、……古代から……月……殺し……生……」

その時、世界に輝が入った。

「よし、『幽明結界』が壊れた。私の思った通りだぜ」

誰かにおぶられる。とつても温かい布地の感触。

「おい、何を泣いてんだ？ ……あー、ま、まあ私もいきなりこんなことをやったのは悪いと思ってる。だから、今度償いって訳じゃあないんだが、団子でも奢らせてくれ？
な？」

団子、団子かあ。とつても美味しそうだ。

「魔理沙、敵さんのお出ましょ」

「ああ、そうだったな。おい妖夢、どうだ、今度こそリベンジといこうじゃねえか！」

私は箒から下ろされ、魔理沙に頭を撫でられる。

「ちよつとばかり待ってな。こっからは私達の時間だ」

見上げると、そこには白玉楼に続く階段。その先に異変の元凶がいるのだろう。

「幽々子……聞いたことがある。私の……友達」

そう、友達ならば助けなければならぬ。私は魔理沙の制止を振り切つて、階段を駆け上がった。

リベンジャー

「おい蓮華！……つち、咲夜、蓮華を頼む！」

魔理沙が叫ぶ。必死で叫んだそれは、咲夜の事の重大さを伝えさせた。

時が止まる。それを感知出来るのは咲夜だけ。しかし咲夜が蓮華を探してもその姿は見えなかった。恐らくだが、もう既に階段を駆け上がったのだろう。もしそうならば、蓮華はなんて素早い移動速度を誇るのだろうか。

時が動き出す。既に咲夜は姿を消し、それを確認し終えた魔理沙は改めて妖夢に向き直った。

「よう妖夢、今日も弾幕ごっこで遊ばねえか？」

「止めて……お願い、皆が死んでしまう。さつき進んでしまった女の子も、消えた咲夜さんも、魔理沙……貴女も」

「私がそれしきの脅しに屈すると思うか？」

「貴女達の勇氣は賞賛に値する。けれど幽々子様の能力の前では、生死を超越しない限り生き残る事は出来ないわ」

魔理沙はそんな妖夢の主張に鼻を鳴らした。

「幽々子って奴は冥界の主をやっているんだから、当然冥界を管理するお偉いさんらもその能力に対して制約を設けているだろ。幽々子も、もしその能力を使ったらお偉いさん全員を敵に回してしまおう事くらい予想する筈だ」

「違う……違う……幽々子様が危険なのではない。違うんだ……」

妖夢は必死に、懇願するように否定した。そう、妖夢は知っている。危惧すべきなのは幽々子ではない。真に危惧すべきなのは、幽々子の能力なのだ。

『死を操る程度の能力』

生物はこの地球上に存在している限り、まず真つ先に襲ってくるのが『死』である。

仙人や神霊と呼ばれる存在達は、先ずその死を回避せねばならないのである。

しかし仙人と言っても、尸解仙のような死を利用した仙人へと至る方法もあるが。

このように、人が超越者と成るためには、必ずと言っても良いほど死は付きまとうのである。

常人ならば逃げることは許されず。超人ならば最初の関門となる。そんな事象を操る事が出来るのが西行寺幽々子という存在であり、その元は『死を操る程度の能力』に帰結する。

もし……もしもだ。これだけで終わっていたのなら、妖夢はどれだけ心が救われていた事だろう。

冥界の主の姿を知っているだろうか。決して着飾り過ぎない着物を着用しながらも、溢れでるカリスマと妖艶で惹き付けられるような魅力は抑えられていない。

そんな彼女が、西行妖に春が宿っていくに比例して、痩せ細り衰えていく。

彼女の身になが起ころうとしているのか。

原因は分かっている。西行妖だ。妖夢が春を集めたせいで、今まさに開花しようとしている桜の皮を被った化け物だ。

そして驚くべき事実がもう一つある。

“妖夢は、既に一ヶ月も前から春を集めていない”……ということだ。

主観とこの事実から、妖夢とはある推測を立てた。

西行妖は既に自立しようとして独自に成長していて、今では春を自ら吸収し、そして何らかの力で幽々子の死を誘っている。いわば西行妖は、間接的に『死を操る程度の能力』を幽々子自身に向けているのだと。そう推測付けた。

西行妖が開花していくにつれ、幽々子が弱っていく。気丈に振る舞ってはいるが、彼女の身体は既に限界を迎えているだろう。

妖夢は従者でありながら、それを見ている事しか感じる事しか出来なかった。

「魔理沙……従者ってなんだと思う？」

「主に従う者なんじゃないのか？」

「では従者とは、主に対して何を従うのだと思う？」

「うーん、命令とか、そういうのじゃないのか？」

「魔理沙はそう思うのね。従者は主の命に従う者だと」

妖夢が目を伏せる。唇を噛んで、拳を強く握った。妖夢が目を伏せたのは、ただ単純な理由だ。見られたくなかったのだ。妖夢の中を流れる激情を。今にも流されてしまいうような、混濁した感情の波を。

妖夢が声を震わせながら魔理沙に問うた。

「主がいなければ、それは従者じゃないの？」

「……そうなんじゃないか？」

「そう……だったら私は従者失格だね」

魔理沙はその時に見た。

妖夢の頬を垂れる一筋の涙を。

それが見えたのは偶然の偶然だが、涙が流れている事は事実だった。彼女の言葉はどこか寂しげで、虚しく、冥界に広がる白い空へと消えていった。

そして妖夢は今までの思いを全て吐き出すように、魔理沙へと吐き捨てる。

「雨を斬れる様になるには三十年は掛かると言う。

空気を斬れる様になるには五十年は掛かると言う。

時を斬れる様になるには二百年は掛かると言う。

これは私のお祖父様の教えだ。お前はまだ……雨の足元にさえ及ばないツツ!!」

「私は霧雨だぜ? とつくに雨さ」

「ふんっ! ……さあ、掛かってこい。お前を斬って止める。そして今度は咲夜さんに追い付いて止める。あの女の子も止める。全部斬って確かめてやる! 私の未来も行く末も!!」

妖夢が腰に差してあつた刀を二振り、全てを晒し出す。刃に描かれた波紋が光に反射して、独特な軌跡を映し出す。

魔理沙は感じた。妖夢の行動全てが悩みに悩んだ末の行動ではなく、まるで自暴自棄のような……ヤケクソ染みた行動であることを。

彼女の涙の意味とは。彼女の真意とは。彼女の悩みとは、葛藤とは、望みとは。……全て、魔理沙には分かる筈もない。理解など他人には不可能なのだ。

しかし、とある行動であれば通じ合えることならば出来る。理解も分かり合う事も、生物である以上不可能だ。……けれど、"通信"ならば可能なのだ。通信し、慰め、諫める事ならば、生物である以上必ず出来る。

魔理沙はスペルカードを天高く掲げる。これは合図だ。妖夢と行う弾幕ごっこの、開始の合図。

（妖夢、てめえが泣いてる理由は私には分からない。……だから、教えてくれ。その涙の意味を）

約三ヶ月間、魔理沙は妖夢に挑み続けた。何度も試行錯誤を重ね、道具を増やし、手数を増やした。だがそれも今日が最後。今ここで決着する魔理沙と妖夢に巻き付く因果の螺旋が、幾多も続いた弾幕ごっこの結果が。

「準備は良いな？ スペルカードは三枚、残機は一だ。じゃあ行くぜ！ 恋符『ノンディレクシヨナルレーザー』」

魔理沙の周りに魔方陣が発生する。それは以前と同じ五つの魔方陣だ。その魔方陣からは案の定、色鮮やかなレーザーが発射される。

妖夢は素早い接近でこれを躲していき、魔理沙の懐へ潜り込もうとする。

「おおつとまだまだだあー！」

レーザーが変化した。変化した……というよりは、レーザーの本数が増えたのだ。

約十色。更に魔理沙からも鋭い弾幕が放たれる。妖夢は咄嗟に身を捻り、自分を狙うレーザーを回避。一旦距離を取り、態勢を立て直す。

妖夢はこの弾幕の嵐を一筋縄では突破出来ないと判断したのか、自分もスペルカードを宣言した。

「白楼剣、楼観剣。私の道を切り開け。修羅剣『現世妄執』」

妖夢が大上段に刀を構えた。隙が大きそうな構えに見えるが、妖夢の振る刀はまさに神速。妖夢に対してどれだけ隙があるように見えようとも、妖夢にとっては隙にあら

ず。
逆に刀を振る時の大上段というのは、体重も加わる為に相当な威力を誇る。それを魔理沙は知らない。知らない故に、魔理沙も攻勢に出たのである。

魔理沙のレーザーと弾幕が、大上段に構える妖夢へと迫っていった。

妖夢は目を瞑っている。それは嘲りや侮りから来る、油断の賜物などではない。感じようとしているのだ、弾幕の位置。着弾までの時間。おおよその自分の行動出来る範囲。

——時間にして数秒。妖夢から2 m以内まで弾幕は迫っていた。その時、彼女が動いた。

大上段に構えていた刀を思いきり振り下ろす。二振り故に扱い難さこそあれ、手数は二倍である。

一閃、一閃。

それだけで妖夢の目の前から弾幕が消え失せ、妖夢が通る為の道が出来る。

彼女が刻んだ空間には白い軌跡が残り、その威力を証明した。もし直線上に居れば無事ではなかっただろう。

「……ハッキリ分かったでしょ。もう諦めて」

「嫌だね、私はしつこい事で有名なんだ」

「だつたら切り刻むのみだ!」

唐竹、袈裟切り。

逆袈裟、左右薙ぎ、切り上げ、逆風——……。

披露される多くの太刀筋。人が人生で見れる太刀筋の種類なんて、全くと言って良いほど無い。まず刀を見れるだけで奇跡だ。

人間離れた妖夢が震う刀は人間の常識の範疇を優に超え、振るわれた太刀筋は弾幕となつて魔理沙に襲い掛かる。

近づけば切られる。しかし近づかねば弾幕の方が切られてしまう。

妖夢の弱点とは刀を振るうまでの時間が長いということだが、弾幕を薙ぎ払う威力に神速の斬撃の前にはそんな弱点など霞んでしまう。

(こりやあ「アレ」を使うか……?)

魔理沙は新しく発注したとある物を、帽子の中に隠していた。魔理沙が隠す物とは、つい最近に霖乃助に頼んで以前と同じ材料で作って貰った物だ。ついでに時計の文句も言っておいたが。

これを発動するとき。それはかなりの危機に瀕した時だ。まず発動条件として、マス

タースパークの二倍の魔力を使い、更に両手が塞がる事だ。これは戦闘時に置いて重すぎるデメリットだ。それを霖乃助にも指摘されたが、魔理沙は敢えてこれを使う。

理由は単純明快。パワーが出るからである。

——そして時間。多少の差はあれど、二人のスペルカードが終わりを告げた。

まだだ、まだまだ。まだ伝わってこねえ。

妖夢の想いが、感情が。

妖夢はスペルカードが切れ様にすぐさま二枚目へと手を伸ばす。

ここが魔理沙の決断時であった。

Dual.

昔々、私が幼い頃。白玉楼に春が乱れ咲く様子を尻目に、お祖父様が言った。

『妖夢……私にはもう時間が無い。幽々子殿を、頼んだぞ……』

そして幼き頃の自分には重たすぎる刀を受け取った。よろける身体を支えてくれるお祖父様は、どこか懐かしそうで。どこか寂しそうな瞳をしていた。

まるで、今まで何度も見てきた死者の諦観のような……。

私はなんだか怖くなって、お祖父様に思いきり抱き着いた。未来の魂魄家幽々子様付きである私は、決して弱味を見せるなど教えられていたけれど。

でも、その日だけはお祖父様は何も言わず、私を抱き締め返してくれた。それがとても嬉しかった。

——この時から、お祖父様は突如姿を消す。

お祖父様は私に何を望んでいたのだろうか。

私はすっかりと務めを果たせるのだろうか。

いや、もうお祖父様はいない。決断するのだ、私が。

西行寺幽々子様に、『従者』として付くか、『魂魄妖夢』として付くか。

天神劍『三魂七魄』

斬撃の余波から粒状の弾幕を形成し、それを散布。不規則的な軌道を描いた後に弾の速度が遅くなる。しかしその遅い弾幕に油断すれば、すぐさま足を掬われてしまうだろう。

この弾幕の怖い所は、遅くなった弾幕が、次の瞬間突然速度が戻るといふ点だ。遅い弾幕に目を慣らした相手の意表を突く形となる。初見では対処の難しい弾幕だ。

魔理沙や咲夜さん達は、どんな方法を使ったのか知らないけれど幽明結界を越えて、こうしてやって来てくれた。誰かに助けて欲しい……と望んだのは、自分ではなかったのか？

何故今、私は魔理沙を倒そうとしている？

……何故？ 私は誰かに助けて欲しかったのではないのか。まさか主である幽々子様より、魔理沙や咲夜さんの命の方が大切だとでも思っているのか。

いいや何か違う。

私は多分、そう……、嫉妬しているのだ。

従者として行動する私。しかしその行動の行く末には、恐らく主の死が待っている。しかし魔理沙達は？ 彼女らは自由だ。きっと主を救うことだって出来るのかもしれない。

ない。

悔しい……っ！ 貴女達が出来て、何故私は出来ない……っ。何故一步も踏み出せない……っ！

つくづく嫌になる、臆病な自分。

その自己嫌悪感も弾幕にも如実に表れ、それを心配した魔理沙からの一言で我に帰る。

「おい、妖夢。てめえふざけてんのか？」

言葉からありありと滲み出ている怒り。それは私の弾幕に対して言っているのか、それとも私にだろうか。

「ふ、ふざけてなんか……ない……」

「ふざけてるだろ？ その顔を見れば明らかだ」

「顔で判断しないでよ」

「顔は口ほどに物を言うつてな。他人である私がそう感じたんだから、妖夢がどうであれ、それはふざけてる事になるんだよ」

なんだそれは。なんて理不尽なんだ。

私がどれだけ苦しんでいると思つて……。

「あー、妖夢さ。理不尽だーとか、ふざけるなーとか、一瞬でも良いから思つただろ？」

私は何も答える事が出来ない。それを肯定と捉えたのか、魔理沙は話を続けた。

「顔は口ほどに……つてのはな、何も言わない奴ほど胸に突き刺さるんだ」

「……………」

「自分の気持ちを必死に隠して、隠して、隠して、その過程を得て仮初めの人格を形成し、上つ面を並べ立てて、自分の意見を、意思を隠す。そりやあ突き刺さるわな。だって思つてることと言つてる事が違うんだから」

「隠して何が悪い」

魔理沙は笑みを浮かべながら、まるで子供をあやすように論してきた。

「隠す事は時に美德であり、時に罪になる。それと同時に、状況を好転させる事もあるし、悪化させる事もある」

「……………」

「だけど、主張しないこととするとは別なんだ。そりや場合にもよるが、自分の意思を主張しないことは、ずっと自分に対しての状況の悪化を意味するぜ」

筋さえ通つていない、適当な理論。偽善染みた物言い。それらは私を納得させることは叶わない……筈だった。

別に納得なんてしていない。だが、憤りが湧いてきた。何が主張だ。何が隠すだ。自分の事を分かった振りして、勝手に私に講釈を垂れるな。虫酸が走る。

「嘔吐き!! どうせ言ったって状況の好転なんてしない癖に!!」

いつの間にか、口が勝手に動き出していった。これこそ、まさに私の意見、意思なのかもしれない。だが今はそんな事どうでも良かった。こいつの答えが聞きたい。ほら、意見と意思を言つてやったぞ。どうだ、状況を好転させてみる!

「妖夢、人間つてのは元から嘔吐きさ。そして私は状況を好転させる事は出来ない。結局、好転させる為には、神じゃなくて自分の力が必要だからだ」

「なによそれ……」

私は啞然とする他なかった。

期待していた。と同時に、どうせコイツじゃ……という嘲りの気持ちもあった。

なんだよ、期待とかそれ以前じゃないか。

何も湧かない。残ったのは空虚感に似た失望だけだ。結局はコイツも口ばかりだったか。

……はあ、もういい。魔理沙じや幽々子様を救えない。期待して損した。思いを断ち切る為に、斬り捨ててやる。

私は二刀の内の片方を鞘に納めた。二刀流は死角を封じ、手数を増やせる利点があるが、一刀両手持ちの威力には敵わぬ。コイツを倒すためには、二刀じゃダメだ。半端に終わってしまう。

私は意を決して最後のスペルカードに手を伸ばし、魔理沙を睨み付ける。

「スペルカード、もう切れたわ。弾幕ごっこなんて、早く終わらせてやる」

「……どうにも失望、って感じだな、そりゃあ」

「失望しないでも思ったの？ お花畑ね」

「残念、桜並木だ」

「良かったじゃない、春が訪れていて。暖かそうよ」

もう止められない、止まらない。決着まで邁進する足。跳ね上がる鼓動がリズムを刻む。

「今まで妖怪を斬って斬って鍛え上げられたこの楼観剣。既に切れぬものなど余り無し」

「豆腐でも斬れねえのか？」

ああ、ムカつく。未だ飄々としているコイツがムカつく。今まで何度も相手をしてきて、『相手』としてすら認めていなかったコイツが、自分の中でかなり躍進したものだ。

木端から、敵へと。斬らぬよう手心を加えていた者が、斬るべき敵へと。

「魔理沙、私は今まで貴女に手加減をしていた」

「おお、そうか。そりゃ悪かったな」

「もう、手加減はしない。せいぜい首だけになって黄泉を彷徨うがいい！」

「妖夢こそ私に負けて、主から従者の首を切られねえようにしろよ？」

魔理沙が変な機械を取り出した。形からして、八卦炉だ。

何度も戦っている内に分かった事がある。彼女がそうやって八卦炉を取り出すときは、大抵マスタースパークの前準備の時だ。彼女が今まで使ったのは、『ファイナルマスタースパーク』と、『マスタースパーク』だけ。しかも前者は虚仮威しときた。

いける。

勝てる。

斬れる。

「さあーって、最後までしつかりと弾幕ごっこをしようぜ？」

「付き合う気は毛頭ない！ 六道剣『一念無量劫』」

「だったらこつちも恋符『マスタースパーク』」

魔理沙の八卦炉から大きな光の奔流が生まれ、まるで暴れ狂う激流のように光が放たれる。

確かあれは二ヶ月前だったか。彼女のマスタースパークに真つ向から反抗した覚えがある。そして打ち負け、避けざるを得ない状況まで追い込まれた。

あの時は二刀で相対していたが、今回はより威力の強い一刀。押し負ける筈もない。

「そのマスタースパークは……斬れるぞ？」

マスタースパークは固形ではない。故に、一度斬ってそれっきり……という訳にはいかないのだ。

斬れば、その空間を埋めるように広がる。完全に斬るためには、斬り続けるしかないのだ。

六道剣『一念無量劫』

自分の周りを八芒星をなぞるように斬り刻み、更に斬った空間から楔弾が放たれるスperlカードだ。

だが今はそんな楔弾なんて関係ない。魔理沙のマスタースパークを斬る。それだけだ。

決意は固い……と、そう感じさせる為に、私はマスタースパークに斬りつける。

感触は重い。魔理沙らしい力強く質量の込められた弾幕だ。だが、私の決意の方が固いのだ。決して心を開かない。

斬る——斬る——斬る——斬る——斬る。

魔理沙の想いを、心を斬り刻んでいく。

弾幕ごっこの意義とは少し反するが、私は断固として自分の意思を曲げたくなかった。半端者が半端でいたら、それはもう中途半端以外の何者でもない。

既に私と魔理沙の距離は数m。斬り刻み、邁進し続けた結果だ。今はマスタースパーク

クで見えないけれど、魔理沙は焦りを感じているだろうか。

絶対的自信の上に成り立つ彼女のマスターパーク。それが真つ向から破られたら、奴はどんな顔をするのだろうか。

「チイツ、こりやダメだ」

突如、視界が暗れる。

光で満たされていた眼前は、冥界に広がる春の欠片へと変わった。一片の桜の花びらを境にし、私と魔理沙は睨み会う。

「どう？ 弾幕ごっこ、もう終わるみたいだけど」

「確かに」

私は刀を振り上げる。

「これで、終わらせる。斬り伏せて、終わらせてやる」

「なあ……」

私は刀を優しく握り、脱力の形を取る。

「これこそが、私をバカにした冥罰だ！」

「妖夢は結局何がしたいんだ？」

振り下ろそうとしたその瞬間、魔理沙の一言で私の全てが止まった。

「さつき言ってたよな？ 嘘吐き、状況の好転なんてしない癖に……って。妖夢さ、本当

は助けて欲しいんじゃないのか？」

「何を言つて……」

本当に何を言つている、コイツは。

私が助けて欲しい？ そんな訳ない。そんな訳ない。あつてはならない。有り得ない！

ふざけんなふざけんな!! 今更そんなことを言つな! 私を期待させるような事を言つな!!

魔理沙が意地の悪い笑みを浮かべる。今すぐにもコイツの顔を斬つて、その顔を恐怖に染めたかった。

普段思わないほどの怒りが、まさに今、私の中で渦巻いている。

「凶星か？ それとも胸に突き刺さつたか？ 取り敢えず、出来た隙は有効活用させてもらうぜ」

魔理沙の八卦炉が光始める。その光景で、私は今の状況がどれだけ拙いか理解した。

中途で止まっている腕。これでは刀を巧く振れない。

踏み出しただけの足。これでは更に踏み込めない。

揺れ動く心。動揺だ、冷静じゃない。

「怖い顔だなあ……。そうだ、今からちよつとしたマジックを見せてやろう。驚くぜ？」

歯軋り。魔理沙は私をどこまでもバカにしてくる。正直、彼女は時間稼ぎをするだけで勝てるのだ。何故なら、私は既に最後のスペルカードを使ってしまっているからだ。時間は20秒を切る。

勝敗が決するまで残り僅か。状況は絶望的。

こんな奴に負けたくない……！

絶対に勝つてやる……！

妖夢の心の奥底で、熱い何かが湯水の如く湧き出してくる。それは渴望。人間ならば必ず持つであろう、闘争間での生へと紡ぐ本能。

以前の魔理沙に圧倒していた妖夢ならば、思う筈も無かったであろう。

しかし、心の動揺。

追い詰められた際の心理。

魔理沙への苛立ちが重なり、半人半霊である妖夢の人間部分……その奥の奥。勝ちたという勝利への欲求が爆発した。

「見せてやるぜ、恋符『ダブルスパーク』」

魔理沙の八卦炉が光り始める。それは希望の光となるか、絶望の光となるか。

超極限集中状態。いわゆるゾーンというものに、妖夢は入っていた。

彼女の体感する時間は圧縮され、思考は急速に加速を始める。酔いしれる絶対的な自

信が、どのような原理かは知らないが妖夢を包んでいた。

魔理沙が光を放とうとする瞬間、妖夢には思い当たりがあった。

もし……八卦炉を斬ったらどうなるか。

魔理沙のマスタースパークは、主に八卦炉から放たれる。その理由としては魔力削減や魔力制御が関わってくるが、今までの戦いで魔理沙がマスタースパークを撃つときは必ずや八卦炉から放っていた。

他の魔法は魔方陣を描くか召喚しているのにも関わらず……だ。

ということは逆に考えると、八卦炉を取り出した時はマスタースパークしか撃たないということではないだろうか？

一考の価値はあった。次は実践だ。まず私にとって後戻りの道は既に途絶えている。眼前に垂らされた救いの糸。そこでその糸を疑ってどうする。

乗るしかないんだ。登るしかないんだ。今の私にはまたとないチャンス。掴め、離すな、引き寄せろ。

賭けるんだ………ツツ!!

妖夢の唇に血が垂れた。それは鼻から垂れた物。興奮からくる物か、はたまたギャンブルへの快感か。

だが方針は決まったとしても、妖夢の今の状況は変わらない。もう一度楼観剣を振る

ことは出来ない。振り上げるまでのロスタイムこそが、今の私を突き刺すナイフとなるからだ。

ならばどうするか。簡単だ。

“刀から手を離せば良い”。

空中へ置いてきぼりになる楼観剣。その光景を見て、一瞬だけ魔理沙に動揺が見られた。

私は、その動揺を見ただけでも嬉しいよ。

そのまま離れた手を腰に当て、鞘に納めていたもう一つの刀、白楼剣を逆袈裟の形で振り上げた。

弾幕と関係ない……なんて言葉は通らない。弾幕ごっこには審判もないし、ルールを破った際のペナルティも無い。結局は妖は楽しいから興じるだけだし、元々は無力な人間が圧倒的格上である妖との差を埋める為に創られたもの。そこに明確なルールは有れど、破るかどうかは両者間に委ねられる。

楼観剣よりかなり短い白楼剣。短刀に分類されるそれは、有り余るリーチを抑え、丁度魔理沙の持つ八卦炉を吹き飛ばした。

……斬れなかった。八卦炉がどんな材質かは知らないが、最低でも緋緋色金ほどはあ
るだろう。

しかし、吹き飛ばした。

マスタースパークを無効化したのだ。

ダブルスパークがどんな技かは知らないが、八卦炉さえ無かつたらそれはどんな効力も持たない。

時間は残り10秒。しかし10秒もあれば、数十合は斬り伏せられる。

勝った。魔理沙……私の勝ちだ！

「……油断つて一番の敵だと思っぜ」

「ふん、何とでも言え」

「そうかい」

その時、魔理沙の帽子から何かがズリ落ちる。そのズリ落ちた物体を魔理沙はキャツチし、こちらに向けた。

「なっ……!!?」

息が、身体が硬直した。

その一瞬の隙が、ナイフとなってまさに私を刺し殺した。

魔理沙がこちらに向けた物。

それは紛れもなく八卦炉だった。

「ダブルスパーク。へへ、八卦炉は二つ有ったんだぜ？ 霖乃助へ送った素材。それを

全額注ぎ込んだ威力を思い知りやがれ」

躲せない。

避けれない。

見切れない。

頭に警報が鳴り響くも、その事態を好転させる手段は私には残っていなかった。

半霊使えば良かったなあ……って。そんな今更な思いは、冥界の空に溶けていく。

私は負けた。最後の最後に、魔理沙のダブルスパークによって被弾したのだ。吹き飛ばしたと思つたら、もう一つスピアがあつた。うん、確かに端から見れば、それはマジックのように見えるだろう。

大の字に倒れた私の瞳には、もう何も映っていない。

『従者』か、『魂魄妖夢』か。

『主に反し、主を救うか』

『主に服し、主を殺すか』

私はどっちだったのだろう。

ハハ……。

負けたんだし、私にはどうする事も……。

「……は梅雨か？」

突然襟元を掴まれ、引き寄せられる。脱力感に苛まれていた私には、その力に抵抗する力なんて無く。むぎむぎと相手の力に屈した。

引き寄せられた先には、黄金を表すような金髪が。いや、これ、魔理沙の髪か。邪魔なだけだ。

自ら髪を退かすと、魔理沙の表情が見えた。

どこか憎らしげで、どこか勝ち誇ったような顔。

けれど、どこか不思議な魅力がある。

少女特有の幼さと、成長半ばの稀有な凛々しさが混じっているせいだろうか。

私とその顔に見とれていると、魔理沙が思いきり引つ張つて、私を無理矢理立たせる。

「行くぞ」

「えっどこへ？」

素朴な疑問だった。何故かそれを聞いた魔理沙は、少しだけ困ったような表情をしていたが。

「行くんだよ、お前の主の所へ。居るんだろ、この階段の向こうに。私の当初の目的は妖

夢を倒すことじゃなくて、冥界の主をぶん殴る事だからな」
「あつ……」

苦情も言えず、拒否も出来ず。私は半ば強制で魔理沙に引き摺られていった。

……中途半端な私には、自分か従者かなんて決めれない。答えを出せぬほど、私は弱いし幼いのだ。

けれど、共通している所が一つだけある。

それは……。

私は幽々子様を慕い、ここに居るといふ事だ。

——桜が舞う白玉楼。

まるで舞踏会のように、蝶と銀狼と神が踊っている。

誰かが言った。美とは彼女らの為にあるのだと。

美を尽くす冥界の姫。舞う姿は蝶のよう。

忠を尽くす銀の従者。それはまるで狼のよう。

我を尽くす蓮の華。その神々しさはまさに神のよう。

命を賭けて。

春を懸けて。

友を賭けて。

彼女達は闘争には最も不釣合な舞を踊っているのだ。

そこに、観客が“三人”加わる。

妖夢と魔理沙は気付かなかつた。

冥界の入口。幻想郷の至る所から幽明結界へ。

幽明結界を越えて、漏れ出てくる霧状の存在が、白玉楼に向かっていたことに。

幽々子の記憶

『お嬢様、今日も今日とて良い魂日和ですな』

『ええ、そうね。こんな日に死ねば、私の魂も天に昇り、綺麗さっぱり浄化してくれそう』

『お嬢様……』

『妖忌、貴方は私の従者でしょう？　しっかりと務めを果たしなさい』

『……………御意』

——西行邸に一人の姫と、一人の従者がいました。

姫は、それはそれは美麗で可憐な容姿をしていただけと言われております。

そんな彼女には、悪い噂が常に付きまとっていました。それはまるで仙人を狙う死神のように。

その悪い噂の一つに、彼女には死霊を操る異能があるという。

ああ、不気味。不気味だ。人々はそう囁いた。

死霊なんて縁起が悪い。転じれば悪い。転じれば天に服し輪廻転生を果たす。

死霊なんてもの、操れる奴は人間では無い。

きつと物怪、妖ぞ。

殺せ、殺せ！

殺せ、殺せ！

殺せ、殺せ！

殺せ、殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！

人々は姫を蔑み、見下し、嫌悪致しました。死霊に纏わりつかれる少女を、好き好んで好意的な干渉するような酔狂、人々には存在致しませんでした。

“人々には”。

外を一步でも出れば、石を投げられ、罵倒を掛けられ、裏で陰口を言われる日々。半人半霊の従者以外で、彼女に関わる人物はいませんでした。従者も、自分の事を半人半霊だと隠す所詮爪弾き者で。

しかし、少女は寂しくありませんでした。

何故なら、彼女には大切な親友が三人もいたからです。

親友達は姫を多くの場所に連れていき、悪戯をし、時には苛めつ子を成敗したこともありました。

姫が言うに、その時の自分はまるで至福の時を生きる天上人のようだ……とのこと。

それもまさに事実。従者も、そんな姫を見て頬を緩めておりました。

時は過ぎ。経験を経て。そう、最期。彼女の運命を変える場面がやって来たのです。

生物として、母が子を。子が母を愛する事は、太古から刻まれた遺伝子による、当然の感情であり行為であります。故に、両者間で零から無まで一つも愛せぬのならば、それは生物ではないのでしよう。

零——生の始まり。

無——生の終わりであります。

赤子を愛す者もいるでしよう。

幼児を愛す者もいるでしよう。

小児を愛す者もいるでしよう。

同年を愛す者もいるでしよう。

熟年を愛す者もいるでしよう。

人を愛す者もいるでしよう。

それで良いのです。愛すという行為は、生物として当然の行為であり感情なのですから。

愛を受けずして育つ子もおります。では愛されなかつた分だけ他を愛しましょう。

愛しましょう。

愛しましょう。

戯れ言ではありません。

世は思うより残酷で厳しく。

人は思うより悩み、苦しみ、強く、温かいのです。

もしそれを享受出来ぬのならば。

それは罪であり。

咎であり。

狂であるのでしよう。

いいえ、責めているわけではありません。

穢れに満ちた大地。状況も、環境も、場合もあるでしょう。しかし愛す事を止めてはいけません。

裏切られても。殺されそうになっても。決別しても。

愛す事を止めてはいけません。なりません。

さて、話を戻しましょうか。

姫の人生を変える場面。それは愛無き故に起こった悲劇でした。

西行邸。姫の能力によって、そこは老若男女問わず罵声を浴びせかけられる場所でした。

西行桜が咲く、とても趣深い庭園。そこには大きな桜が植えられています。曰く、春が来るごとに命を奪う化け物桜。その理由も全て、姫の能力の性にされて来ました。

彼ら彼女らは気づきません。その桜に溜め込まれた怨念を、狂い染みた穢れを。

なんと愚かな事なのでしょう。人は興味を、好奇心を持つ生物であり、それらは留まる所を知りません。夜な夜なその噂の真意を確かめようと、従者の目を掻い潜り忍び込む輩もいます。

もし忍び込んだ者が雄であれば。姫の美しい身体に飛びつくでしょう。

もし忍び込んだ者が雌であれば。姫の持つ財貨に目を付けるでしょう。

しかしどれもこれも、次の日に見つかるのです。

——死体となって。

西行邸の系譜は名だたる人物も多く在りました。

しかし、そのどれもこれもが西行邸に咲く桜の下で亡くなったのです。

姫はその事に耐える事が出来ました。何故なら親友が支えてくれていたから。辛いときも、悲しい時も、側に居てくれたから。

姫は「耐える事が出来ました。

そう、これは姫が自尽なさる日の一週間前。姫の母君が、姫に向かって刃を抜いたのです。

愛する我が子に向けられる最期の言葉は、なんとも醜く穢らわしい物でした。

姫も抵抗致します。どれだけ人生が、能力が辛くても良い。親友と共に天寿を全うするために……と。

もし母君が刃を抜かず。姫が天寿を全うしたならば。

紫は妖を愛さず。

幻を愛さず。現を愛さずにいたでしょう。

ちよつとした運命の綻び。断崖絶壁の崖の、小石が落ちるようなもの。

結局、母君は駆けつけた従者の当て身で大人しくなります。もしここで終わっていたならば。母君が狂人と言われるだけで済みました。そう、物語はここで終わらなかったのです。

従者も、姫も目を見開きました。

西行の庭園に植えられている西行桜から、一片の花びらが落ちたのです。咲いたようには見えない。けれど、それは花びらでした。

ええ、そう。その花びらが地に落ちたその瞬間、母君が苦しみ始め、そして息を引き取ったのです。

姫にとって始めての恐怖でした。その日は従者の手によってすぐさま寢床に入られますが、姫は一睡も出来ませんでした。

死の間際の顔。近親の死。桜への恐怖。

色んなものが混ざっていたのだと思います。

そして恐怖は現実へと変わり、現実が混迷へと変わり。その際の精神の不均衡のせい
か、姫の能力が変質なさったのです。

『死霊を操る程度の能力』から。

『死を操る程度の能力』へと。

そこから先は、なんとも惨めなものでした。

唯一残った従者に別れと使命を告げ。

数少ない親友に、生への懇望の念と寂しさを説き。

支えてくれた親友に、花見の楽しさを説き。

酒が好きな親友と、酒を飲み交わし。

そして、死を手繰る西行桜の下で。

——自尽なさったのです。

ええ、その時の桜を、私は見ることが出来ませんでした。親友は、従者である妖忌
は見れたと言います。

美しかったのでしょね。

私の命を糧にした西行妖は。

封印は解けかかり、生者である私と、死者である西行寺幽々子の意識は混濁し始めております。

もし解ければ、全てが終わるでしょう。

もし解けなければ、彼女は再度迷い続けるでしょう。

最適解など無いのです。

もし願わくば、もう一度貴女達と並びたい。横並びに、すうーつと並んで、星を見ながら、人を見ながら、桜を見ながら、酒を飲み交わしたい。

叶わないのです。もう、分かっております。

ただの愚か者が望んだ戯言と捉えて下さって構いません。

しかし西行寺幽々子は望んでいる。私が生きている内で唯一叶わなかった、桜の下での花見を。

……生者と死者の違いってなんなんでしょうね。

あーあ、何だかよく分かんなくなっちゃった。

西行妖の底に眠る私。

親友である——紫、蓮華、萃香。

愚か者の願いを聞き、自らも命を糧にした魂魄妖忌。

愚か者の些細な願いを邪魔しに来る、侵入者達。
次世代の子らよ。

地に埋まる生者の頼みをどうか聞いてください。
愚か者に天誅を。貴女の世に、どうか幸あれ。

友達って思ってたんだ

何故そう思ったのか分からない。

けれど、確かに幽々子の事を友達って思ってたんだ。

「あらあら、これで終わりかしら？」

「クツ……！」

私は地べたに転がっていた。というよりも、そうさせたのは咲夜さんだ。

少し前、私はこの西行寺幽々子と対峙した。そして流れるように弾幕ごっこへと移ったのだが、その時に気付いた。私、飛べないやん……と。

四苦八苦おろおろしていると、有能メイドである咲夜が駆けつけ、私の代わりに勝負を挑んだのだ。

勝負は拮抗し、あと少しで咲夜さんが勝者となる……筈だった。

——目を疑った。

咲夜さんの武器である銀のナイフ。その全てが、錆びきってしまい、仕舞いには朽ちてしまったのだ。

そう、それはまるで、ナイフに“死”が与えられたかのように。

「貴女……能力を」

「メイドさんは勘が良いわねえ。冥土の土産に答えてあげるわ。ふふ、洒落が聞いているでしょ？」

「つまらないわね、戯れ言よ」

「洒落も楽しめないなんて、嗜みさえも持っていないのかしら。好奇心が無ければどんな生物でも死んじゃうのよ？ ほら、良く言うじゃない。メイドの嗜みって」

咲夜は歯軋りをする。心底悔しいという顔だ。

「その顔、番犬みたいで可愛いわあ♪」

咲夜は言い返す事が出来ない。何故なら彼女は敗者だからだ。

ナイフが朽ちた時、最悪咲夜にも死を与える事が出来たのかもしれない。死人に口無しとは上手く言ったものか。

手加減をされていたのだ。能力さえ使わず、自らが持つ霊力だけで幽々子は戦っていたのだ。時を操る能力を全面的に使っていた咲夜さんからすると、それは酷くプライドを傷つける行為であった。

「ふんふん、さあて、銀の番犬さんが持っている春も頂きましようか。ほら、もう少
しで西行妖が咲くわ！ これで九分咲き。妖夢が持つてくるであろう春で、満開ね」

博麗の巫女もいない。紫もいない。頼みの綱は、一つもない。

私は何故だろうか、咲夜さんに駆け寄った。何か嫌な予感がしたのだ。そう、最悪の予感が。

「さ、咲夜さん……大丈夫？」

「……………下がってて」

「——え？」

耳元で声をしたように聞こえた。その瞬間、咲夜さんの姿が消えたのだ。これは時止め。咲夜さんが能力を使ったのだ。

私が唖然としてみると、横に何かが叩きつけられた。何か……という不明な存在に使う単語は、今だけ間違っている。何か“がが何かなんて、決まっている。

「う……嘘……だよね？」

その事実を口に出したくなかった。出せば私は必ずその現実に向き合わねばならなくなるから。

私は彼女の能力を知らない。幽々子がどんな能力を使うかなんて、聞いたこともない。でも、分かった。それは彼女と友達であったと、なんとなく理解できた時みたいなの。

ほぼ勘に近いなにか。

「飼い犬に手を噛まれる。噛まれる心配が有るのならば、牙を取ってしましましょう。
……飼い主じゃないけどね」

「幽々子………」

そこには、*“咲夜”*が転がっていた。

死生有命

咲夜さんは多分だけど、時を止めて春を取り戻そうとしたのだろう。しかし、彼女の能力の毒牙に掛かった。

まだ事切れてはいないようで、呼吸もしている。だがかなり浅い。

「ねえ幽々子……幽々子は何がしたいの？」

「混迷へ、混迷へ、その従者もどこかの巫女のように、迷い子へ成ったわ」

「幽々子……ねえ、違うでしょ？ そんな事、こんな残酷な事、幽々子はしない筈……」

「貴女は自分の視界に映る物を偽だと疑うのかしら？」

ああ、くそ。くそ。くそ。なんだよ、おい。なにやってんだよ幽々子。その能力がどんな能力かは知らないけどさ、人を死に足らしめる危険な代物なんだろ？

なんで、そんな平気な顔で居られるの……？

幽々子にはもう罪悪感なんて無いって言うの？

「さあ私の親友。さつきは邪魔が入っちゃったけど、今度こそ貴女と一对一の弾幕ごっこを始めましょう。大丈夫、大丈夫。貴女は殺さないわ。だって、一緒に桜を見るんですもの。満開に咲いた西行妖を」

倫理の箍が外れている。

「ふふ、怯えた顔をしないで。ただの友達同士の戯れよ。怯えるんじゃない、笑顔を見せてほしいわ」

現実が見えていない。

「そう、そうよ。その顔よ。怯えを無くしたわね。やっぱり貴女は蓮華にそっくり。いえ、蓮華本人よね？」

端的に言うのと、狂っている。

「ふざけんな」

「あら、以前の貴女と比べられるのは嫌？ ふふ、貴女も案外可愛い所が——」

「ふざけんなって言うてるんだよ幽々子！ さつさと咲夜さんと博麗の巫女を戻せ!!」

怒りだ。無辺に沸き出る怒り。私は怒っている。

こいつは……こいつは。

「怒っちゃったの？ ほらほら、後で貴女の好きな甘味を用意するから、機嫌を治して？」

幽々子はあくまで私を親友のように、今から遊ぼうとする関係のように接する。そこには罪悪感など一切無く、純粋な期待と享樂へ至る羨望だけ。

……いや、そうか、分かった。分かったよ。幽々子はここまでして、思い出に浸って

いるんだ。過去に縛られ、過去に未来を閉ざされているんだ。

だって、幽々子が話しているのは、見ているのは。私じゃなくて、前の蓮華なんだから。

「じゃあ行くわよ。亡郷『亡我郷——自尽——』」

「待った」

「あら、どうしたの?」

……もう彼女と弾幕ごっこをするつもりはない。

言葉遊びも、ふざけあいも。

するつもりはない。

「幽々子……貴女がやったことは、もうごっこ遊びの範疇じゃないよ」

「へえ、それで?」

「あんたを……元友達を止めさせてもらう。能力でもなんでも使うと良い。私は絶対に死んだりしない」

「反抗期……かしら?」

界を結んだ——。所詮ただの障壁型結界だ。咲夜を隔離し、白玉楼を囲むように張

り巡らせる。

誰にも入らせない。邪魔させない。そんな私の意思を結界に乗せて、外の全てを遮断

した。

幽々子はまだ理解していない。いや、命を賭けるといふ行為に無頓着なんだ。だって、亡霊だもの。

そこが隙となる。最初の最初。初っ端で全力。一気に目を覚まさせてやる。妄想から現実へと。

私の結界は障壁型結界を除き、その使い方が厄介だ。

何故ならば、内と外で効果が相反するからだ。しかも、結界内の効果は絶対だけど、外には絶対の効果は得られない。しかも、結界内に生物がいるとその分の力を消費してしまふ。これまで通り、『固定と動作の結界』を使つて幽々子の動きを止めるなんて到底出来ない。

今思うと、幽々子は強いなあ。亡霊で、能力持ちなんて反則だよ。

私なんて……あれ、そう言えば意外と私も生き残つてるな。片腕失つちやつたけど。

そんな風にもたもたしている、それを見かねた幽々子が口を開く。

「……来ないのね、蓮華。貴女は優しいわ。いつだつてその甘さに足を取られて転んでも、何度も立ち上がってきたのですから」

彼女は自分の事のように悦び、身体全身でその感情を表現した。両手を大きく広げ、その指先からは綺麗な桃色の蝶が放たれる。

とうか完全に思考に没頭してて、幽々子の隙を突くとかそういう次元じゃ無くなっ
てしまった。

完全な自業自得。画期的な作戦を一つ潰してしまった。

そしてそんな私の心の乱れを読み取るかのように、幽々子はその能力を使った。

「ねえ、蓮華。『今の』貴女は『死』を体験したこと、あるのかしら？」

「は？」

途端、空気が無くなった——と錯覚するように、息が吸えなくなる。これは窒息
死か……？

幽々子の奴、本気で殺しにきた。私は条件反射で首を押さえ、空気を吸い込もうとす
るが、パクパクと口が動くだけ。私には空気を出す事しか許されていないのだ。

「かつ………はっ、………はっ………うい………」

これは不味い。時間にして20秒。多分これが私に残された時間。

まだ思考は働いている。大丈夫だ、能力も健在。

幽々子、そつちが『死』なら……こつちは『生』だ。

——『生と死の結界』

内が生で、外が死。

これで窒息死という状況は回避され、私は思いきり息が吸えるようになる——答

だった。

「けふあつ！……あつ……ぐぎ……」

息が吸えない……！ ヤバい、拙い。これは不味い。なんで、なんで息が吸えないの？

いや、そうか。私の結界は内側の生を固定。いわゆる故意で死なない状況が必ず訪れるだけで、窒息という状況は治らない。むしろ死にはしない分、昏睡昏倒まで行く可能性の方が高い。

「ぐえあ……い……はあ……ひっ……ぎい……」

ああヤバイ。意識が飛ぶ。

「くえあ……ひ……」

考える事を止めるな。それこそ、思考に必要な酸素を使ったとしても。

止まるな。止まってはいけない。止まるんじゃねえぞ……。

もがき、手足をバタバタさせて窒息の苦しみから逃れようとするが、やがてそれも緩慢になってくる。

とうとう私の身体が悲鳴を上げ、活動限界に達したのだ。

くそ……。流石にこれ以上は無理か……。

う……。う……。考え……。ろ……。

……わた……………しなら……………出来る。

……………結果を……………張れえ……………っ！

——『常と止の結界』

内が止。外が常。

「ぜはあーひい、ひい……」

「流石ね。どうやったかは知らないけれど、私の能力を防いだのね」

「ぜひゆうー……………。ぜひゆうー……………。ひいひい。」

幽々子、あんた、私を殺そうとしたの？」

息絶え絶えの風体で、思っていた疑問を口に出した。彼女は私を友達と言った。けれどやったことはこんなこと。所詮人殺し未遂。人じゃないけど。

どこかおかしいのだ、今の彼女は。まるでなんとというか、実態が掴めないと言うか、彼女を操っているなにかが彼女を侵食しているような。

それを確かめる為に私は幽々子に問うた。

ついでに確かめたい事も、もう一つ有った。まあ幽々子がどんな能力を使うかって事だけだ。

「うん？ そんなわけ無いわよ。死ぬ前に止めるつもりだったもの」

「……………幽々子の能力って、まさか生死でも操れるのかな？」

「亡霊が生死を操るなんて、領分を弁えていない。ふふ、面白い冗談ね」

言葉を躲された。けれど意図して躲したのであれば、能力は私が言った言葉に近いって感じだろう。おそらくは。しかし少しだけ情報が出来た分こちらの方が有利だ。幽々子は私の能力を知らない筈。さっきの発言でも、それは見てとれる。

そして私が創った結界『常と止の結界』は、能力を阻害し、また能力を継続させる力を持つ。

内は止の効果を持つているので、現在私に掛かるあらゆる能力を無効化しているのだ。しかしそれは私も一緒。内部にいる私も、能力を発現させる事は出来ない。

この結界を出れば、また始まる。

死を体験するのだ。

「幽々子、私は絶対貴女の元へ行つて目を覚まさせる」

「うふふ、蓮華にはこの状況が夢や幻にでも見えるのかしら？」

「見えるね。幽々子が悪夢に侵されているこの状況が」

「貴女こそ、私が悪夢に侵されている夢を見ていたとしたら？」

「悪夢も、夢も、見ている人は気付けないし、気付かない。起きたらすぐに、朧となる」

「じゃあ私と貴女が目覚めたのなら、朧になるの？」

「さあ？ 一回確かめてみようよ」

ああ、怖いなあ。怖いよお。いつだって目の前に死が広がっていると、足がすくむね。古来から英雄ってのはこの一步を。死線を踏み越えた奴の事を言うのだろうね。私は踏み越えたくなかったなあ。踏み越えたくないなあ。

結局英雄じゃなくなつて良いんだよね。今の人生が楽しかつたらさ。名誉、名声が欲しいってのは分かるけど、実際人間は怠ける生き物であり妥協する生き物なんだ。

いつか越えられない壁にぶつかると、才能を羨み挫折する者だっているのさ。簡単に壁を越える奴——そう、英雄みたいな奴は、それらの人間の想いを背負わねばならない。そんなの、面倒じゃない？

でも越えねばならないんだ。英雄じゃなくても良い。勇気とか、讃えられなくても良い。でも越えなくちゃならない。

しかし決意と行動は違う。どれだけ覚悟を抱いたとしても、行動に繋がるとは限らない。

そう、私は死線を踏み越えれずにいた。

口だけと罵つてくれても構わない。というか、罵つて欲しい。罵詈雑言を投げ掛けられれば、反発心で越えられるかもしれないからだ。

人だつたら死を。妖怪だつたら、自己の否定を。その二つの終着点は、無だ。

結論はさ、生物は無に消える事を怖がっているんだ。

そして人生に絶望でもしていない限り、無に自ら飛び込む事なんて無理だろ。私だつて無理だ。多分そんな事が出来る人は、どこか狂つてるんだらうね。生物としての根幹を否定してるんだから。

時間が経過する。長い、永い時間が。

目の前の死に足が動かない。飛び込めない。

もう嫌だ。あんな怖い思いをするのは。

もう嫌だ。苦しみたくない。死にたくない。

「けふつ、けふつ、ケハアツ！ ヒューー、ヒューー」

咳———というよりは、嘔吐のような音が聞こえた。音の方向に顔を向けると、発信源は幽々子のようだ。幽々子は口元を手で押さえ、咳き込んでいる。

そして、私は見たんだ。

「幽々子の手から滴り落ちる、赤い蝶を」。

いや、それは蝶なんて綺麗な物じゃない。

夥しいほどの赤黒い血。石垣の隙間から漏れる泉のように、滾々と幽々子の口から溢れ出てくる。

パリンつと。

何処かが割れた。

それは外部ではない。内部だ。

幽々子の様子を見たシヨックか、突然の事態によるパニックか。考えられる理由ならば多々あった。しかし結果は変わらない。確かに割れたのだ。

私の中に眠る、「記憶の結界」が。

——『死を操る程度の能力』——

その能力の危険性と、起こりうる事態。

そして、西行妖——。

幽々子……………。

友達、かあ…………。

目を瞑る。

記憶を思い出したと言っても、それは幽々子の持つ能力と、それに準じる情報だけ。彼女との思い出も、彼女の素顔も、何も思い出せない。

けど。

幽々子が、私と友達だったって事はなんとなく分かったよ…………。

私は目を開け、死線を踏み越えた。

——西行妖の下に、幽々子が眠っているなんて知らなかった。

そしてその結界を、誰が施したのかも。

以前の蓮華と友達だった幽々子。

今度は今の私と、友達になってくれないか？

白玉楼を囲む結界の外。巻き込まれないように、と放り出された咲夜の指が、ぴくりと動いた。

死界と密度

妖夢との戦いを終えた魔理沙は、意気消沈する妖夢を連れて白玉楼へと続く階段を駆け上がった。

魔理沙の目的はただ一つ。冥界の主をぶん殴る事。ついでにもう一発ほどぶん殴って、霊夢を治して貰うこと。

幽明結界付近で戦っていた魔理沙には、咲夜と蓮華の様子を知る術はない。無い……が、チラリと見えた蝶の舞う姿。ナイフが飛ぶ様子。あれは多分、咲夜と冥界の主が弾幕ごっこでもしているのだろう。蓮華は飛べないらしいし、早々に負けてしまったのかもしれない。……と、そう推測付けていた。

しかし魔理沙のその予測は、階段を登りきり、白玉楼の門が見えた所で間違いだと言いかされる。

最初に目についたのは、倒れ込んでいる咲夜と、白玉楼を覆う大きな結界。そして次の光景が、魔理沙の目を釘付けにした。

結界内部。

和風建築の西行邸が見える。

その庭園の大きな桜の枝が天へと突き抜け春を掬う。
その間。

言葉に出来ないとはこの事か。片や蓮華。片や冥界の主らしき人物。魔理沙にはその人物の事を知っている。霊夢を眠らせた人物として、魔理沙の記憶に深く刻まれているからだ。

状況は拮抗しているようだった。口から血を流しながらなにかを唱える冥界の主。界を結んで界を解くという動作を何度も繰り返す蓮華。

特に冥界の主——西行寺幽々子の背。彼女は桜を背にして戦っているが、どこか変だ。そして目を凝らして見ると、魔理沙の目に今起こっている特異な現象が映った。

瘴気のような、怨念のようなエネルギー……というよりは、流れみtainな物が幽々子の背を通して西行妖に吸収されているのだ。

「一体何が起こって……」

「魔………理沙………ねえ、ちよ………つ………」

驚きで目を剥いていると、下から声が聞こえた。声の主は咲夜。だがその声は弱々しく、今にも死んでしまいそうさ。

「おい、咲夜!? だ、大丈夫か?」

「見て分かるでしょ……全然大丈夫じゃないわ」

魔理沙に支えられて腰を起こす咲夜。彼女の血の気は引いており、魔理沙にはこの症状に見覚えがあつた。

それは三ヶ月前、博麗神社で霊夢が倒れた状態と殆ど同じだったからだ。もしかすると、咲夜も幽々子の能力に当てられたのだろうか。

「咲夜……お前、その症状、どうやって緩和を」

「……自分の時を限りなく遅くしたのよ。西行寺幽々子の能力を喰らう前にね。能力に当てられた後は、自分の時を遅くした最中で解析に没頭して、今のようにその能力の効果が表れる時間を操っているのよ」

咲夜は確か、時を操る程度の能力。これならば、殊更今の咲夜の状態に納得がいく。そして、魔理沙の中に希望が湧いてきた。

その希望とは、時間の巻き戻し。時を操る程度の能力を持つ咲夜ならば、霊夢が倒れた瞬間まで戻れると踏んだのだ。

「残念だけどそれは無理ね。時は巻き戻す事は出来ないの」

「じゃ、じゃあ時を遅くするだけでも」

「無理。時を操る能力つてつたつてかなりの制約があるのよ？ 私だつて、自分のナイ

フが朽ちた事から西行寺幽々子の能力を予測して、保険として最初に掛けておいたから

出来たのよ」

「そうか………つて結構元気そうだな？」

「やせ我慢よ」

そう言う咲夜の息は荒い。確かにやせ我慢なのかもしれない。

意見を仰ごうと妖夢を見る。彼女は結界内部の様子に気を取られていた。

確かに凄いい光景だろう。

両者に神々しさや華々しさは然程なく、少女に似つかわしくない血と血の争い。

猛々しく歩を進める蓮華の進撃は、まさに鬼神。黒く濁った穢れを振り払い、幽々子による影響だろうか身体中から血を流しながらも進み続ける。

対する幽々子も、血を流す。口、眼、耳という身体中の穴の穴から赤黒い血を垂れ流す。その姿はまさに狂気の具現。はたまた大いなる意志を貫く愚者の姿。

こんなのは戦いじゃない……。戦いなんて言葉を使つてはいけない。

血みどろ、必死。然れど二人は笑っているのだ。友達と遊ぶように。旧友と再開した時のように。

そして結界に近づいてみると分かる。この結界内部に充満する死の気配。濃厚な死神の影が。

蓮華は私達を隔離するために結界を張ったのだろう。そしてこの死に包まれる結界

内で、死と生の闘ぎ合いの最中幽々子と争っているのだ。

その光景を見ている自分と、妖夢と、咲夜。

なんて無力なんだろうか。

何も出来ないのだろうか。

もし、ここに、霊夢がいたら……。

アイツならどうしただろうか。

私は知らず知らずの内に、拳を強く握っていた。

結局はこうなのか。霊夢を助けると。冥界の主をぶん殴ると意気込んでいながら、結局は他人任せなのか。

だから弱いんだ、私は。だから脆いんだ、精神も。

じゃあ私は何をすべきなんだ？ 何をするんだ？

居ても立つてもいられない性分。この時だけ、その性分が役に立った。
(私は言ってたじゃないか。ぶん殴るって)

「咲夜、空間もお前は操れるのか？」

「え、ええ、まあ普通に」

「じゃあこの結界をこじ開けられるか？」

「ちよつ、何言ってるの魔理沙！」

背後から強い力が加わった。妖夢だ。彼女は唯一幽々子の能力の危険性を知っている稀有な存在。そんな存在だからこそ、魔理沙のやろうとしていることが分かったし、理解できるのと同時にとある使命感が芽生えた。

「ダメに決まってる！　魔理沙、貴女にはあれが見えないの？　あの死が渦巻く死界。あんたじゃすぐに死んじやうわ！」

妖夢が普段見せない素と怒声。けれどそれは結界内部がどれだけ危険なのかを魔理沙に簡単に分からせる。

——魔理沙は、そんな優しさと心配で構成された妖夢の手を振り払った。

「黙ってる妖夢!!　お前だつて従者なんだろ!?　主を助けない気持ちがあるんなら私を理解してくれよ！」

「だからつて目の前のあんたを見捨てて良い理由にはならない!!」

「従者なら従者の務めを果たせ！」

「今の私は、魂魄妖夢だ!!　あんたと戦った魂魄妖夢だ!!　人を見捨てて何が従者だ!!」
魔理沙は見た。妖夢の瞳を。先程まで光の無かった、妖夢の瞳を。そこには自分を行かせまいとする強い光が宿っていた。

「なんだよお前……そんな事で覚悟決めんなよ……」

「残念だけど、私は見捨てる行為だけは絶対にしないって決めてるの」

魔理沙は折れた。折れざるをえなかった。彼女は妖夢ほど強い覚悟を抱いていないからだ。その覚悟に……負けたからだ。

腕を垂れ下げ、見守る事にした。

それがどれだけ不本意であろうとも。

今の魔理沙では妖夢を説得する手立てなんて無い。それに、自分の事を心配してくれる妖夢の気持ちが無駄にしたくはなかった。

——そんな、丸く収まる筈だった思考。

「良いのかい、魔法使い」

——魔理沙が嫌う人任せの思考。

「手立てはあるよ、^{うと}疎めれば良い」

——それら全てを霧散させる声。

「大丈夫、私に任せな。あんたにまわりつく死を散らしてやろう」

——悪魔よりもっと上。

「さあ、行こうじゃないか。そのメイドの力を使って、結界に穴を開け、あんたのしたいことをやってやろう」

——それは伝説と呼ばれた、鬼の囁きだった。

幻想郷に薄く広がっていた霧。

その一部が、
萃^{あつ}
められた。

プレイヤー

鼓動が跳ねる。まるで心臓が自分の物じゃないみたいだ。というか私に心臓って有ったんだね。

幽々子と友達になるために死線を踏み越えて早三分。約180秒という短い時間の
中で、多くの死が私の頭をよぎっていた。

窒息死から始まり、凍死、焼死、餓死、横死、

えつ死、縊死、事故死、惨死、溺死……………。

死が私を襲う度に、私は界を結ぶ。そして界を結ぶ度に私は死線を踏み越えなければ
ならない。

しかし踏み越えていく死線が多いほど私の精神は磨り減っていき、私の足を重くして
いく。

——人が死を体験しそうになり、それを回避した場合。その時に加わる精神的
心負担はどれ程のものか。

時に——車。横断歩道を渡っている際に、車が飛び出してきたとしよう。その時
人間に起きる反射行動は？

まずは硬直だ。続き、走馬燈。続き、死の予感と諦観が来る。しかし当たる直前で車が止まったとしたら？

安堵だ。思考を吹き飛ばすほどの安堵。次に倦怠感と脱力感、心労がどつと溢れてくる。鼓動は収まらず、呼吸は浅く感じるだろう。

蓮華はまさにそれを味わっていた。何度も何度も。

「もう少しよ、蓮華」

血を流しながら幽々子が言った。

「もう少しで咲くのよ」

血に濡れながらも、美しい顔で微笑笑ったんだ。

「西行妖が。本当の桜が」

……一瞬、真実を言おうか悩む。西行妖が咲けば、幽々子は死ぬんだよ——と。

そんな愚行を考えぬようと必死に頭を振った。その時、赤い液体が飛び散る。顔を拭くと、鼻から大量の鼻血が出ていたのだ。

もう少し、もう少しなんだ。もう少しで幽々子の所まで行ける。幽々子を止められる。

幽々子の命を救えるなら、私の身体も精神もくれてやって構わない。だから、進め。

私の足よ。一步を踏み出すのだ。遠い、遠い、一步を。

ふとした情動だろうか。幽々子を見た。

美しい顔は血で染まり、穴という穴から湧き水のように血汐を飛ばしている。その顔を見る度に私の顔は熱くなった。

一歩ずつ？ バカ言え。足りねえよ。

幽々子を救うためには一歩なんて少なすぎる。今の私は死なんて怖じ気づく魂か？

……もう何度も踏み越えただろうが。慎重に生きようとしてんじゃねえ。私は死に行くんだろうが！

はは、友人の為なら力が湧き出てくる。

精神って不思議だね。

私は一歩じゃない。更に二歩、三歩と踏み出していく。

私の変化を察知したのか、幽々子が自らの周りを遊泳する桃色の蝶々から弾幕を繰り出した。

それは相手を気遣う、ごっこ遊びの弾幕じゃない。相手を殺傷するための弾幕だ。

「桜符『完全なる墨染の桜——開花——』」

「本気になってくれて嬉しいよ幽々子お！ 『固定と動作の結界』ッ！」

空間を埋め尽くくさんとする弾幕。その中で蓮華が避けられぬと思つた物だけ固定させ

ていく。

次々と止められていく弾幕。自分を覆う生きる為の結界。そしてまた死を乗り越え、同じ事を繰り返していく。

止めろ！

進め！

止まるな！

前を見ろ！

吸血鬼異変の時。片腕を犠牲にして私は何を手に入れた？ 言わずとも分かる。ブランドール・スカーレット。いや、私の友達。片腕と引き換えに気付いた絆。

紅霧異変の時も、私は服を犠牲にして元旧友と出会った。私は覚えていなかったけど、別れの時の紫の泣きそう嬉しそうな顔は忘れない。紫からすれば、もう会えないと思っていたのかも知れない。

今度は何を犠牲にする？

命か。

生か。

心そのものか。

その何れかを犠牲にしたとしても、私は必ず幽々子を止めてみせる。私の方に振り向

けてみせる。前の蓮華なんて見せてやらない。私しか見えないようにしてやる。

狂気にも見えるこの思考。偏ってはいけない悪しき心。死を何度も体験した今、それだけ私の精神は歪みを訴えていた。

助からないし、救いも無い。

そんな結末を回避するために。

「うあああああああ!!!」

私は吠えた。必死に叫んだ。

固定と動作の結界によって、空間ごと固定された弾幕と結界。その結界を足場にしてい、私は飛ぶ。

既に生きる為の結界は結んでなかった。

奈落に落ちるような感覚。中天に浮く幽々子に向かって翔んだのに、その感覚はおかしいと思うけれど。その奈落こそが死そのものだと考えると、不思議と納得した。

私は生を手放し、落ちていっているのだ。死へと。

——死になさい——

ああ、訴えかけてくる。

——死になさい——

心の底の底。今か今かと私を待ち望む化け物が。

——死になさい——

クソツタレが。

——死になさい——

てめえの誘いなんかで死んでたまるか!!!

私は足に力を込めて、更に翔んだ——。

「蓮華……来たのね」

「ああ、来たさ。目覚めの時だよお嬢様」

到達した。幽々子と同じ目線まで。

望みの時間を迎えた事により、まるで夢うつつのような、ぼうつとした緩い時間が身体に染み込んでいく。

「蓮華、やっぱり私、止めたの」

「何がだい？」

「蓮華、私の所に来るまでに頑張ってくれたでしょ？ 貴女が一步一步近付いてくる度に、私は感じたの。貴女の想いを。貴女の必死さを」

「……………」

「だから誠心誠意、貴女を殺すことにしたわ。黄泉入りすれば、ずっと私と花見が出来る

しね♪♪」

それはとても素晴らしい提案だ。でも、断る。

それだと、対等じゃない。冥界の主と冥界の霊では必ず圧倒的な上下格差関係しか生まれないからだ。そこに友情なんて特別な結果、結ばれる訳がない。

「お断りさせてもらおうよ。介護生活なんて懲りごりなんでね。生きたまま一緒に下界で花見しようや」

「申し訳無いのだけれど、貴女の意見は聞いていないわ。……幾多の死を克服した勇者よ。私の望みの為、願いの為、冥界の主が最期に与える死を接受なさい！」

「嫌だね、ばーか！」

友達になる前に、喧嘩するなんてね。

つくづく私達の運命は複雑に絡み合っているようだ。

幽々子との距離、1 m。手を伸ばせば届く。拘束するまで数秒も掛からない。いける。

「人が最も弱いもの。それは摩擦と圧力」

「深海探査機なんてあるのは、人が圧力を克服したからじゃないかな？」

「幻想郷に深海探査機は無いわよ？ 人のような姿を模す貴女には最適ね」

「残念だけどそうはさせない！」

私は即座に固定と動作の結界を発動。幽々子の四肢、胴、首に至る約六ヶ所を拘束、固定する。そしてすぐさま『常と止の結界』を発動させ――。

『圧死』♪」

死神が笑顔で哭いた。

幽々子の声が聞こえたかと思うと、^ップチュン”というトマトを潰したような音が耳目を揺らした。

そしてすぐさま自分に起きた異変を知る。視界の右半分が突如黒く染まったのだ。

――勝負は一瞬だった。

何をした――と頭が情報を収集する前に、私を襲う激痛が何をしたか理解させる。

嗚呼……。

固定と動作の結界を足場に使っていた。

そんな不安定な場で、膝から崩れ落ちる。

手を伸ばそうにも、届かない。

「はは、なあんだ幽々子。私、全然貴女に近付けてなかったじゃん……」

「大丈夫、大丈夫よ。すぐさま私の園に案内してあげるから。誘ってあげるから。貴女はそこでお眠りなさい」

私はいつもより半分以上暗くなつた視界で、遠ざかつていく幽々子を他人事のように眺めていた。

いや、遠ざかつていくのは幽々子じゃない。

遠ざかつているのは私なんだ。

私が、奈落に落ちているのだ。

「あら？」

その時、霧が立ち込めた。

私の意識はそこで途切れる事となる。

「ふふ、久しい顔が見れて私は嬉しいわ」

幽々子は蓮華を仕留めてもなお、笑っていた。彼女にとっては、自分の住む家に友達を招き入れたような感覚で、そこに哀しみは無い。後悔も無い。

彼女には「見える」。

死を扱ってきたからこそ、そこに宿る魂が見えるのだ。

白玉楼に満たされた白き霧。

当然そこに宿る魂も幽々子には視えていた。

「萃香、いらつしやい。貴女も花見をしに来たの？」

智慧を多く潜ませる幽々子。これしきの言葉遊び、情に流されやすい、悪く言えば正直者で騙されやすい萃香の事だ。激情して付き合う道理も無いのだろうと何となく予測を立てていた。

彼女は気付かない。

いや、失念していたのだ。

萃香の持つ能力を。

萃香は『死』を散らしていた。当然霧の中に潜む一人の魔法使いを生かせる為もあるが、幽々子の魂識別能力を疎める目的もあった。

魂とは生死と深く関わっている。生死のどちらかが欠ければ、魂は自ら循環を始め、独自の輪廻転生を造り出す。例を挙げるならば蓬莱人だろう。

今の魔理沙は不老不死の力は持たねど、蓬莱人のような性質に魂が変化していたのだ。

幽々子の知る魂とは、地球の基本的な輪廻転生の輪に飲まれる普通の魂だけだ。独自の輪廻転生を造り出す魂なんて、幽々子は知らないし分からない。

故に、気付かない。

「おらあああああああ!!」

魔理沙が飛び出した。箒に跨がり、さながら魔法使い。足りないのは杖だろうか。

しかしそんな事どうだって良い。魔理沙は拳を握り、冥界の主に向かって腕を振り上げた。

幽々子が魔理沙に気付いたのは、彼女の眼前に魔理沙の拳が刺さる直前だった。

「雨が霧のように細かく、音も無く降ることを『霧雨』という。……だから私は、霧の中にいる貴女に気付かなかったのかしら」

魔理沙の拳が、妖夢から、咲夜から、蓮華から、霧の主から繋がって、冥界の主を穿った――。

思い出の結界

—花のうた あまたよみ 侍りける 時

仏には さくらの花を たてまつれ

わがのちの 世を 人と ぶらはば—

ぶつん——となにかが切れた。

「よつしや、もう一発——つてあれ？」

幽々子を殴った後、魔理沙はもう一度拳を振り上げた。二発殴ろうとしていたからだ。

しかし当の幽々子は目の前にはいない。消えた？ 違う。墜ちたのだ。

まるで操り人形の糸が切れるかのように、魔理沙の拳が突き刺さった後、力無く落ちていった。

「あらら、意外と呆気なかったな」

幽々子は蓮華に重なるように倒れ、果物を高所から落とした時のような、真っ赤な色

が白玉楼の地を汚す。

魔理沙も不完全燃焼感は否めなかったが、これで霊夢も元通りになるのだろうかとうち自分の中でなんとか納得した。

(そう言えば幽々子と繋がっていた変な流れみたいなのも消えてるな)

ふと白玉楼を見ると、その庭園に真っ赤な桜が咲いていた。それは何処か夢中で、しかしそれをひた隠すように色を放つ。色だ。天へ天へと、窓辺に伝う水滴が逆流するよ
うに、色は広がっていく。

——おい、魔法使い！

「あ、なんだ？」

——さっさと結界の外に出ろ！ これはまずい！

「おいおいどうしたってんだ？ ハッキリ説明してくれよ」

——クソツ、妖忌の奴め、全然違うじゃないか。

魔理沙には霧の主が言っていることが、まるつきり分かっていなかった。

唯一分かるのは、霧の主が異様な程に焦っているということ。

——紫もない。蓮華も……。チツ、逃げれるだけ逃がすか。

「あ、おい！」

魔理沙が事情を聞こうと身を乗り出すが、そこに霧は無かった。それよりも景色が違

う。

ここは何処だと見回すと、そこは幽明結界の前だと察しが付いた。

魔理沙が白玉楼に戻ろうとすると、再度霧が集まり、そこには咲夜と妖夢、そして小さな女の子が姿を現した。小さな女の子と言っても、その身から放たれる妖力は生半可なものじゃない。

「お前……誰だ？」

「話はあと！ 私がなんとかあの桜を止めるから、あんたたちは避難してなさい！」

角が二本も生えた、変なフアツション。そんな奴からまるで諭すように言われた私達は、この場に漂う嫌な雰囲気と、なにが起こっているのか分からない不安から、その綺麗な口から文句しか垂れない。

そりやそうだ。ここまで来て、後はお前らお払い箱だからと言われているようなものだから。

「あいあい、分かった分かった。じゃあ手短かに説明するよ。あの桜……西行妖は、死を撒き散らす不浄の桜。あの下には幽々子の生前の姿が封印してあるんだけど、もしあの桜が咲いて封印が解けたら、幽々子は死に、この白玉楼……いや、幻想郷中に死がばら蒔かれる」

「そんな!? 幽々子様を助けに行かないと!」

「やめとけ半人前。鬼の私でもこれ以上はキツイ。近づいたら最後……死ぬぞ?」

彼女の言葉には、どこか重みがあった。鬼という単語が出てきたのも驚きだが、それ以上に肌で感じるヤバさ。白玉楼からそのヤバさは溢れて来ているようだ。

「私が時間を稼ぐから、あんたたちは幻想郷の管理者を呼んできな。マヨヒガの化け猫でも倒せば、すぐさま従者がすっ飛んで来るだろうて」

そう言つて、その女の子は霧と成つた。もう話すことは無いということだろうか。残された私達に出来る事は、この事をいち早く幻想郷の管理者に知らせるのみ。

(確かに……これはお払い箱つてやつか)

何も出来なかつた。

三人が諦めかけたその時、西行妖が啼いた。

化け物が復活した事を報せるように。

全ての終わりを報せるように。

力強く啼き……、色が消えた。

蓮華は己にのし掛かる重さで目を覚ました。

蓮華は幽鬼のようにふらふらと立ち上がり、光へ向かった。

暖かい光。蓮華の暗くなった視界には明るすぎるくらいの光であった。

「あー……うー……」

既に言葉はなかった。身を包む激痛。右目を潰されたことにより、収まる事の知らぬ冷や汗。なんとも言えぬ不快感が身体全体を貫いていた。

血をポツポツと落としながら、その光に向かう。

赤、橙、黄。

若草、緑。

空、青、紫。

黒、白、灰、地。

多色多彩。点滅。強調。

色が溢れ、引き潮のように集まり、光を形成する。

蓮華は。蓮華という存在はそこに引き寄せられた。

色がー色が一つ足りない。

「私も、歯車の内の一つ……か」

世界を構成する色。その中で唯一欠けていた色が合わさる。

“桃色”が加わった。

——これは運命か。それとも因果か。

彼女が触れたのは西行妖に施された結界。

偶然ではない。必然なのだ。

蓮華の見る景色が変わった——。

『世界は色で出来ている』

貴女、誰？

まず、ここは何処だろうか。

周りを見渡すと、一面の砂漠。足下の砂を掬ってみると、なにかの骨が混じっていた。これは誰の物であろうか。

『やあやあ、三代目。これは初めまして……かな？』

目の前には村娘の着物を着た、すらりとした美人。その桃色の髪は腰まで届いているが、先の方で結ばれている。身長は私より少しだけ高い。

初めまして……なの？

『そうだ、初めましてだ。多分幽明結界の方でも会ったと思うけど、そっちは後々の私だからなあ。今の私が最初だよ。だから、初めまして』

二代目さん？

『そうだよ二代目だよ』

そう言つて彼女は笑つた。

まるで鏡だ。私に左腕が有つて、右目が有つて、着物を着て、髪を整えて、おめかしをしたら、身長は違うけどまるつきり私と一緒にになる。

『大分欠損してるみたいだね。やはり付喪神の性質は、器物と見定めた物の守護や封印と言つた体では強いけど、戦闘はからつきしだね。能力も万全に使えていないみたいだし』

貴女が私を創つたの？ それと、ここどこ。

『いえーす。私が製作者さ。それに、此処はあんたの心象世界。〃器物と見立てられた

〃世界さ』

この世界は物なの？

『ふふ……砂を触つてごらん？ 骨が出てきたりするだろ？ これは全部君の……今までの蓮華の骨さ。砂も実は砂じゃない。ただの細切れになつた骨片だよ』

確かに言われてみると、これは砂じゃない。異様に細く尖つた物から、歪な形をした

ものまで。どれもこれも普通の砂じや有り得ない形だ。

『心象世界って言っても、ここにはタイムリミットがある。話せる事にも、量にも制限があるんでね。取り敢えず今回の私は、君に能力の使い方を見せてあげようって主旨でいるんだ』

能力の使い方……？ 界を結ぶ程度の能力？

『そうさ。……まず君は界の結び方が雑なんだ。だから境“界”しか“引け”ないんだよ。まず結ぶつてのはね、例えば縁を結んだりとか……そうだな。いわゆる良いところや悪いところとかの、一方的な効果を輪で囲ってしまふ事なんだ』

輪で……囲むの？

『そうだよ。君が使う『生と死の結界』だっけ？ あれじゃダメだ。結界の成りをしていけるけれど、本質は境界に近い』

……うーん、言っていることが難しい。多分彼女は私に結界について教授してくれているのだと思うんだけど、如何せんやり方も知らないから、頭の中の想像にも付きがたい。

『分かった分かった。じゃあ一回実践してみるよ。よく見ててね？ ……まずこれが君の結ぶ結界』

そう言つて彼女が腕を振ると、そこには馴染みの結界が出来ていた。半透明で、地

面に接するように半球状の形をしている。

『そしてこれが本当の結界』

「またもや彼女が腕を振るうと、今度は別の結界が出てきた。形も色も変わっていない。私の『生と死の結界』と同じ風に見えるけれど……。」

『うーん、そうだね、じゃあ両方の結界に近づいてごらん?』

私は頷いて、まずは二代目が結んだ結界の方に向かう。形を成しているけれど、それは障壁型ではないので簡単に私を通す。中に入るとなんだか活力が湧いてきて、自信もみなぎってきた。

次は馴染みの結界。しかし近づけば近づくにつれ、なんだか悪寒や寒気、不快感や嫌悪感が湧いてくる。なんでかどうして、私はこの結界に近付きたくはない。

『違いは分かった?』

……私の結界になにか細工をしたの?

『いいや、してない。正真正銘君がいつも結んでいる結界だよ。そして気付いた筈だ。その本質に』

二代目が結んだやつは心地よかつたけど、私のは全然だったよ。

『うん、そりゃそうだろうね。だって私の結界には、“死”なんて要素が一つも入っていないんだもの』

……え？

『君が結んだ場合、中と外の設定をしなければいけないんだってね？ 中が生で外が死。それだとさ……自分以外の生物を拒絶してるといふようなんじゃないかな？ だって、結界内にいる存在にしか効果が無く、結界の外にいる存在は入る間もなく、内部の効果と反対の効果に襲われる』

二代目による話は続く。

『それだとダメなんだ。私と君の本質は平定者。しかしそれは暴力によってじゃない。優しさによってなのさ。私の尊敬する人物、ブツダもそう仰るだろう』

優しさ……ねえ。

『そう、優しさ。 “輪” からは “和” が生まれ、それらを優しさで “平” 定することにより、 “平和” が生まれるのさ』

じゃあ……優しくなれって言うの？ 善を目指し、花々を愛し、人を愛し、自らを愛し。それは優しさじゃなくて、エゴイスト……自己中心者じゃないの？

『違う違う、愛さなくて良い。ただ受け入れるのさ。変化を、違いを。そして結界の本質とは、それらの気持ちを結んで、一つにするんだ。そして受け入れるのさ。……私が結んだ結界は、生きる結果を与えるだけじゃなくて、自信もみなぎり、活力も湧いてきただろ？』

……確かにそうだった。私は彼女の言葉に言い返す事が出来ない。

私は自己中心者だったのだろうか？ 他を拒絶し、みずからを保守していた。

分らない。自分の事が。

私はどう「成れば」良いんだ……。

『氣負わなくて良いと思うよ。私が言ったのは結界だけで、君の本質じゃない。君はいつも通り、友を大事にすれば良いんじゃないかな？』

友……？

ああ、そうだった。

幽々子。

私はまだ貴女と友達になつていないじゃないか。

助けなきや。救わなきや。

私が決意を新たにしていると、二代目が可笑しそうに笑った。微笑むように笑う彼女は、自分と同じ容姿ながら、全くの別人で。どこか美しいとまで思ってしまった。

『やり方はもう分かった筈。後は君の想いに従いなさい。……幽々子を、どうか私の友達を救ってくれ、蓮華』

大丈夫、それなら私の専売特許だ。任せとけえ！

私の自信満々な姿を見て、彼女はどこか安心したかのような表情を見せた後、歩き出

した。

私は帰り道も分からないので、なんのけなしに付いていくことにした。

そう言えばさつき言っていた、世界は色で出来ているってどういうこと？

『ああ、あれはちよつとした比喩さ。蓮華といつたって、この世界には沢山いるだろう？
曰く多重分岐世界、平行世界。そこにいるのは蓮華かもしれないし、名前の違う別人
かもしれない。しかし必ず同じ役割の存在が居るんだよ』

へー。

『興味無さそうだね……。まあ色んな物語の主人公って存在と同じだと考えてくれば
良い。彼等は容姿性格性質性別が違えど、主人公って役割では共通しているだろ？』

じゃあ私が主人公だね！　なんてつたて、こんなに可愛いし友達思いな存在は、主人
公に他ならないよ！

『思えば上がりは気持ち悪いよ。それに忘れたのかい？　私達は平定者。主人公であつて
はならない。しかしこの世界の蓮華はちよつと歪だね』

そう言つて二代目は私を見つめてくる。

わ、私が歪つてか!?　ちよ、てめ、それは酷いぞ！　不細工でも良いじゃないか、だつ
て人間だもの。そんなこと言つてると、二代目の整つた顔について手が滑つて本気のパン
チをお見舞いしちゃうかもしれないじゃないか。

『ふふ……。ほら、着いたよ。私が話せるのはここまで。もう容量も無いんでね』
ありがとー二代目さん。あんたの事は、忘れるまで忘れないよ。

『君の場合、三秒で忘れそうだけどね』
失礼な!?

二代目が指をクルリと跳ねさせると、線が引かれた。世界を分かつ、一つの線が。そこから光が漏れ、その先の道を照らす。

『どうか善き人生を。地球の“付喪神。会えるのも後二回だけでしようが、私は貴女の事、忘れませんよ』

そう、だったら覚えておくが良い。私のこれから巻き起こす変革の旋風を。蓮華という名前を、あんたの脳髓に刻み込んで絶対に忘れる事が出来ないようにしてやるよーつ！

——私は光に飲み込まれていく最中、一瞬だけ見えた。
それはとてもとても珍しい。

この世界に来て初めて見るもの。

そう……………それは……………は……………。

二……………代目……………の……………なみ……………。

『どうかお忘れなきよう。その理由と真相を知る、古来存在してはならぬ災厄が貴女の中に内包されていることに。貴女は主人公であつてはなりません』

『——ああ、どうか辿らぬよう。友の為に、本当に星へ……………いえ、遠き宇宙そらに手を伸ばしてしまった私の末路を』

『どうか負ける事のないよう。不甲斐ない私のように、災厄に心がやられぬよう。強く、強く我を持ちなさい』

『……………ごめんね』

光が世界を満たした—————。

世界が目まぐるしく変わる。

外に出て最初に感じたのは、濃厚な死だった。

でも、もう怖くない。

結び方は刻み込まれた。

蓮華の名において、界を結ぶ。

『死』……じゃない。『思い出』を囲むんだ。

神様。どうか、私の最後のエゴを許して下さい。

誰にも触れ得ぬように、私と幽々子が刻んだ『思い出』を。

『思い出の結界』

空間が縮む。空間が揺れる。空間がぶれる。

私と幽々子の思い出を犠牲にし、新しいページを刻む。

全てを包括し、全てを内包したその結界は、死をばら蒔こうとする西行妖ごと覆い、西行妖を封印した。

ピシリと西行妖が歪む。それは、元々西行妖を封印していた結界。それが割れて、私

を光で包み込んでいった。

——それは、私が最後に思い出す。

——幽々子との記憶だった。

蓮華の追憶

『あ、ああ、幽々子、嘘よね幽々子！ いや、いやああああああああ、あああああああ
あああああああああああああああああああつつつつ！！！！』

喉が張り裂けんばかりの号哭。

それは誰でもない、紫の叫び。

友を喪った、哀しみの叫び。

朱に染まった西行妖。私と萃香はただ佇む事しか出来なかった。ああ、違うな。不粹
だと思つたのだ。永き時を生きる妖怪として、何度も失いを体験してきたであろう紫。
普段は気丈に振る舞う紫が流した涙。そこに横槍を入れるのはやってはいけない事だ
と本能が理解していた。

故に佇む。俯く。黙祷す。

私も萃香も悔しい。歯を食いしばり、血が出るほどに悔しい。幽々子の自尽を止めら
れなかった、幽々子の真の想いを理解出来ていなかった自分達が憎い。恨めしい。

けれどももう遅い。

後悔先に立たず。

『貴様ら、そこをどけい！』

だからなのかも知れない。この時ばかりは、横槍を入れようとする彼の従者の心情を汲み取る事が出来なかった。

『なんだ、妖忌よ』

『友人殿、そこを退けと言っておるのだ』

『ふむ、友人が側にいてはいけないのか。……妖忌よ、そんなに寿命を縮められたいか？』

『押しとおる！』

紫と萃香を背後に、私は妖忌の行く末を阻んだ。

この時の私は、苛立ちが強かったのだ。この従者に。

お前は知っていた筈だろうと。幽々子と最も近い位置にしながら、幽々子の気持ちを理解していなかったなどとはざく訳はないだろう……と。

刀を抜き、斬りかかってきた妖忌に向かって、私は全力を出した。

『魂魄奥義一の太刀。』ときさだめきり『時定斬』

妖忌は斬った。『私を斬るまでの時間を。』それにより刀を振り上げ、私の肉を絶つまでの時間は短縮される。斬っていないのに、斬った矛盾。その技は千を超えて生きた妖忌が編み出した、本物の技巧わざである。

コンマにも満たない時間の中で、私と妖忌は邂逅した。

『時を斬る……か。その妙技見事なり。だが、まだ遅いッツ！』

妖忌は目を見開いた。自らが時を圧縮した中で、この妖怪は着いてきている。あまつさえ遅いとまで言い放ったのだ。

どんな方法を使ったのか。

それを考える時間なんて無い。迷いは剣筋に繋がる。迷いを抱いてはならないのだ。

『お嬢様の所まで行かせてもらおう』

『神を舐めてはならない。……半人半霊風情が』

圧縮された時の中で、妖忌は逆袈裟懸けに刀を振った。振る瞬間、嫌な予感が刀の先から伝わり、痺れが手首をつんざいた。

嫌な予感。妖忌の経験から予測されるほぼ未来予知に近いそれは、ものの見事未来を讀み当てる。

『なんだとっ!?!』

刀が動かなかった。それは肉が斬れぬとか、骨が断てぬ次元ではない。

——そう、刀は届かなかった。蓮華の指によって。

蓮華は時を斬りながら進む刀を、人さし指と中指で挟んで止めたのだ。

有り得ない——との思いが反芻する。

漫画でよく見る指止め。実際それには卓越した技術と共に、掴む物体を“視”なければならぬ。

タイミングとルートを予測、一度で成功する為には更に観測も必要である。そして必須なのがピンチ力。いわゆる指の力というものだ。

蓮華は全てを満たしていたとは言い難い。しかし、彼女は結んでいたのだ。“界”を。

超小規模な結界——『遅延』と『観測』を予測ルート上に展開。更に『加速』の結界を数十に渡って展開し、『干渉』と『強化』の結界も同じように展開されていた。

既に『界を結ぶ程度の能力』を使いこなしていた蓮華には、何の気もない、ただの簡単な作業と一緒であった。

レベルが、次元が違いすぎたのだ。

けれどそれを気付く為には、妖忌にとって遅すぎた。

『妖忌、刀を離すなよ』

この言葉が聞こえたと同時に、天地がひっくり返った。いや、天地ではない。自分だ。自分がひっくり返ったのだ。

亜音速で放たれた足払い。残像も見えぬ超高速。大気はその流れにこころざしばかりに乗って、暴れ、荒れ狂う。

妖忌は見切っていた。その足払いの威力を。そしてルートを。

経験則から為る五体がその足払いに警告を発し、緊急会費を敢行。『上』に飛んだのだ。故に天地がひっくり返っているのである。

もしあの足払いを喰らっていけば、もう従者の身ではなくなるだろう。

『良い回避だ。ま、その才能を別の事に活かしてくれ』

『な、何を——』

蓮華はまるでその遊びに飽きたかのように、乱雑に刀を手放し放り投げる。

決して刀を離さなかった妖忌。その身は刀の行く方向に従い、西行邸に続く長い階段の下へと落ちていった。

『さあ掃除は終わり。紫……決断してくれ』

『……う、うう……グスツ……ひっ……ひっ……』

咽び泣くような声。悲痛を極めた泣き声は、こんな時に限って周りに溶けてくれな
い。

雨も、風も無く。誤魔化しの効かぬこの場にて、紫は決断に迫られた。

しばしの静寂は世界を支配する。まるでこの世界には誰もいないかのような……寂しく切ない静寂。

紫はおもむろにスキマへと手を伸ばした。中から出てきたのは鏡。その鏡は幽々子

を映したかと思うと、白い靈のような物が産み出される。

『……これは幽々子の魂。彼女の魂が今、この現世に留まっている事で一つの境界が出来たわ。死んで意識の無い幽々子と、魂として意識の有る幽々子。その境界を操るの。そうすれば、仮初だけど幽々子は生き残る』

『それは……っ』

萃香が発した戸惑いの声。紫が何をするのか萃香には分からない。しかし彼女のやろうとしている事は理解してしまった。

彼女は禁忌を犯そうとしているのだ。

反魂。依代。魔の世界でも呪と呼ばれるその行為は、まさに神へ唾を吐きかけるような禁忌。

それでも彼女はやった。一心不乱に術を施した。

『……紫、私は貴女に従うよ』

術もほぼ終わり掛けた時、蓮華が紫の肩に頭を乗せて後ろから抱き着いた。

『さあ紫、どうしたい？ 私の能力を持つてすれば、ほぼ万物に対し干渉することが出来る。思いのままやってっさ』

それは神の囁き。悪魔ともとれる冷たい声。

けれど、蓮華も強がっていた。親友の自殺という、彼女自身が初めて経験する死に方。

哀しみ。蓮華の心も、少しずつ壊れかかっていた。

紫に最後の判断を任せたのは、ただただ怖かっただけなのかもしれない。紫に判断を任せれば、責任は紫へと向かう。自分が背負わなくて良い。自分は無関係だと。そうやって言い訳をするために。

『……封印出来るかしら。西行妖を。依代と言つても、境界をあやふやにしたらだけ。亡霊となる彼女が生前の姿を見てしまつては、それはまた新たな死となつてしまう』
『……そう、分かつたよ』

蓮華は満開の西行妖に近づいた。触れずとも分かる。これは穢れそのものだ。生物が触れて良い代物じゃない。

蓮華は静かに界を結んでいく。だがそこには一つの迷いがあつた。

西行妖を封印した時、また誰かがこの封印を解こうとするかもしれない。その中でも大きな可能性を孕むのは、幽々子か、妖忌だ。しかし一度結んでしまった以上、妖忌が主を殺そうとは思うまい。

解くとするならば……幽々子か。

おおよそ予測が付いたのなら後は簡単だ。けれども蓮華には、界を結び、確実に封印出来る方法をどうしてもとれなかつたのだ。

確実な方法とは。それは、『思い出』を内側に収縮させる事である。思い出が無くなれ

ば、執着は生まれず、この桜への好奇心も無くなる。

だが、思い出を無くせば……自分との記憶も、全てが封じられる事となる。

食べ物も、美味しい、美味しいと泣きながら食べた幽々子。

悪戯つ子に仕返しをして、その罰の悪さに耐えられず、結局は仲直りをした幽々子。

星空を見て、想いを馳せる幽々子。

走馬燈のように思い出される日々。

『ぐっ……くう……うう………』

不甲斐ない。弱すぎる。情に脆すぎる。

蓮華は神として決定的な欠陥があつた。それは人に近い心を持つていた事だ。上から見下ろす、言うなれば恣意的観測を用いる神とは違って、彼女の見る目線は人と同じだったのだ。

———
『時定斬』
ときさだめぎり

妖忌の持つ楼観剣が、蓮華の肩越しから大きく鎖骨を斬り裂く。

『妖忌いいッッッ！』

萃香が叫んだ。それは鬼の形相。時を斬って、西行邸の蓮華を斬り裂いた妖忌に、萃

香はただならぬ怒りを発する。鬼として、正面から叩き潰す事を信条としている萃香からしたら、妖忌の背後からの奇襲は卑怯と他ならなかった。

『萃香……もういいんだ』

今まさに萃香が飛び掛かろうとした瞬間、蓮華が待ったを掛ける。

『だって……そんな、こいつは……』

萃香が自分の行いの弁明をしようと妖忌を見る。そして蓮華に斬りかかった妖忌の様子を見て、萃香は口をつぐんだ。

……妖忌にはもう意識などなかったのだ。妖忌は半人半霊だとしても、彼の肉体は老体。蓮華との戦闘で無理を湛え、更に数百にも及ぶ階段からの落下と、蓮華の足払いによる身体と精神への負担が妖忌の意識を飛ばすに至った。

『意識無くして主に忠ずる。……こんな従者、私は見たことがないよ』

蓮華はそう、ぼつりと呟いた後、界を結び終えた。

内包されたのは、『春』。これでこの西行妖に春が訪れる事は無く、咲かない桜などつまらぬ物であって、幽々子もいつか飽きを覚えて興味を無くすだろうとの思惑を持ったゆえだ。

この封印を解くには春を集める他なく、幽々子にそんな発想とやる気が有ると思えない。

『これで良いんだ……これで……』

桜が舞い散る最中、声に乗って春は消えていった。

ああ、これか。

私は思い出として、この記憶を封印したのか。

いつかの焼き増し。

けれど確実に、私は進んでいた。

幽々子……。私の我が儘を許してくれ。

それじゃあ。

これでお別『———ありがとう』れ……………え？

私が西行妖を封印する直前、声が聞こえた。

心地よい、優しい声。

右目を差し出し、思い出を捨てた私。

その声の主の感謝の言葉を聞いた時。

私はどこか……心の底で、本当に救われたんだと確信できた。

永き冬がここに決着したのである。

雪溶け

「霊夢、おい霊夢！ 春だぜ！ 桜だぜ！」

グイグイと巫女服を引っ張つてくるその親友に、霊夢は溜め息を禁じ得ない。

「はいはい魔理沙。桜は逃げないわよ」

「つい最近まで逃げてたっつーの！」

「……？ まあ、良いわ。私も暖かい陽気は好きだもの」

幻想郷に春が訪れていた。

それは、妖からすればただの変化であり。

人からすれば新たな一年の始まりでもある。

遅くはあれど桃色を照らした桜は、その身を揺らして春を告げる。数日前に春乞いと

して叩きのめされたレテイのお蔭かもしれない。

今回の異変。春雪異変と名付けられた異変は、人里の一部の者を除いて自然的に解決

された特異な異変としてその記憶に刻まれた。

冥界での小競り合いも、春を巡った争いも、全てが幻想へと帰したのだ。

これに乗じて、春を告げる妖精もここぞとばかりに活発になった。冬が続くことによ

り、今まで身体を縮こまらせていた反動だろうか。

そんな平和が訪れた時、この頃珍しい人物を見た……と。人里で噂になっている存在がいた。

彼女が有名になっているのは、その可愛らしい容姿のせいでもあるのだが、最もは身体に刻まれた痛々しい傷の数々だろう。

ラフな格好をしているが故に、左腕の袖が風に揺れている事がハッキリと分かる。

髪型も切り揃えられているが故に、右目へと詰められた、特殊なデザインを模す眼帯が目立つ。

彼女の溢れだす人外の気配に、人々は物怪の類いだと確信をしていた……が、如何せん証拠がない。

どれだけの書物を調べられようと、彼女に対しての文献は見つからない。

蓮華……と呼ばれる、幻想郷の賢者にして、創設者である人物と酷似している点から、彼女の娘かその関係者ではないかと、現在ではその噂で持ちきりである。

その噂が……どこかで特ダネを探す文屋の耳に入るのは、また別のお話。

人々は噂好きであった。それはどこの世でも同じであり、通信を常とする人間の当然なる行いで権利でもあった。そんな噂の中には、こんな物まである。

神と妖と鬼と亡霊が集まる宴会場が何処かにある……。

なんて、誰が発したのか分からぬ眉唾物。しかし噂の本質とは、偶像や妄想の産物
人との通信によって具現化するものであり、それは妖怪や神の起源にも繋がる。

そして当然、その噂も人と人との間で伝わり具現化された。

冥界、白玉楼庭園。その縁側で腰を下ろす四人の存在と、忙しなく動き回る一人の従
者の姿があつた。

無論、知つての通り四人とは蓮華、紫、萃香、幽々子であり、従者とは魂魄妖夢の事
である。

蓮華が人里で買ってきた団子や菓子を頬張りながら、萃香の調達した甘酒を啜る。そ
れだけ見れば、ただ友人同士で茶を啜る和やかな雰囲気であり、どこにでもある一風景
に他ならなかつた。

実際は少し違う。幽々子と紫は罰の悪そうに。萃香はそつぽを向いて酒を喰らつて
いる。普段通りなのは蓮華だけだ。

このような雰囲気になつたのも、如かず一週間前まで幻想郷を襲つていた永き冬を起
こした張本人と、それに関係のある人物、そして異変を解決しようと動いた人物に分か
れるからであろう。

萃香に関しては、命の危険まで覚悟したのに肩透かしを食らつたのでご立腹している

という、なんとも純粹で鬼らしい理由であったが。

「ねえ、幽々子、その菓子、取ってくれない？」

「え、ええ、良いわよそれくらい」

紫が自分の菓子が無くなっている事を確認した後、最も多く菓子を持っている幽々子に分けてもらおうと声を掛ける。両方ともぎこちなく、少し遠慮をしているようだった。

「あ、甘酒無くなった。萃香お代わり」

「……ん」

蓮華も機嫌はいつも通りとは言え、その雰囲気当てられてか、口数が少なくなっている。

頑張っているのは妖夢だけだ。

当の妖夢は、幽々子の意向でせめてもの花見にと、余った春をかき集めて白玉楼にばら蒔いている。その姿はどこか、御伽噺の花咲爺のようであった。

「……紫、怒ってる？」

恐る恐る幽々子が口を開いた。その様子は、友達というよりは悪いことをして罰の悪い子供のようだ。かなり前にも己の従者が魔理沙に向けてこのような様子をしていた事は、幽々子は知らない。知らず知らず、主従は似るのである。

「……怒ってないわ。何事にもならなかったですもの。蓮華には感謝しきれないけど」
視線を蓮華へと向ける紫。自分の元友人が菓子を口一杯に頬張り、見事な頬袋を携えているのを見ると、どこことなく吹き出してしまふ。

突然自分の顔を見て笑った紫に、なにか失礼な視線を感じ取ったのか、蓮華が菓子を頬張りながら文句を言った。

「ぐぐむ、むもぐぐぐもむ、むももむもー！」

「アハハハハハハ、蓮華ったら、まるでコブ取り爺さんみたいね。妖夢と相まって、ここは御伽噺の世界かしら」

止まらぬ笑い声。それに釣られて幽々子も静かに笑みを溢した。

その笑い声が気になったのか、萃香が向き直る。そして次の瞬間大爆笑をするのだ。向き直った瞬間、眼前に映し出される蓮華の崩れた顔。

不細工と言っているのではない。その余りにも場に合っていないなかった、馬鹿馬鹿しい顔の解れに萃香も釣られたのだ。

く、ククククク、なんだい蓮華、その顔は。まるで猿だね。猿力二合戦の猿みたいに弛みきっているじゃないか。紫の言うことは本当だったみたいだ。確かにここは、御伽噺の世界だね」

「むむむむむ、紫、萃香、めちやくちや爆笑してるじゃんか！ しかも幽々子まで笑って

るし!? くっそー、この美人どもめ、更に笑わせてやるわ!!」

蓮華が更に顔の筋肉を弛め、横に大きく引つ張った。蓮華の行う変顔によりその可愛らしい顔は鳴りを潜め、より笑いを引き起こすような、潰れたヒラメのような形相へと変貌する。

「ふっ、ふふふあはははははは！ 蓮華、やめなさいって。それ以上は無理無理！」

「ふっふーん。まだまだバリエーションはあるんだよ！ ハイ、次ー」

次に蓮華は顔を両手で押し潰す。先程のヒラメとは違った、潰れたフグのような顔。萃香と紫は変わり続ける蓮華の顔面のギャップに笑い転げた。

「アーツハツハツハ、蓮華え、それ、一種の天才だよ！ 変顔の天才」

「全然嬉しくないんですけど!?!」

いつか忘れた理想郷。忘却と化した桃源郷は、数百の時を経て、この冥界に作り出されていた。しかも——同じ人物の手によって。

「蓮華」

二人が笑い狂っているなか、幽々子が静かに蓮華へ声を掛ける。

「ん？ なんだい幽々子。笑わせて欲しいの？ 私の変顔バリエーションは後百四つあるよ」

「確かにそれは少し気になるけれど……話は少しだけ違うわ」

「んー、友達になろうって？」

「ふふ、蓮華にはお見通しね」

マジで!? という興奮は蓮華の心の中で嵐のように巻き起こっていた。表情には出してはいないが。

「私達、友達じゃないなーって、今思い出したのよ。邂逅は初では無いけれど、貴女との

“思い出”は一つも無いしね」

「……うん、そうだね。なろうよ、友達。これからその思い出を私と創っていこう」

「ええ、宜しく。私の友達」

いざ言われると心が痛んだ。忘れ去られるという行為は、これほどまでに辛いんだとまだまだ幼い頭で考える。この辛さを味わいたくなかったから、二代目は逃げたのだから。

いや、それはもう分からない。“思い出”は西行妖と共に封印され、これから先思い出される事は無いのだから。

それに私は進むって決めたんだ。何を犠牲にしても、何を壊しても。友の為に生きていくと、二代目に誓ったんだ。

蓮華が決意を露にしている中、笑い終えてひーひーと息を整えている紫が、とある事に気づいた。

それはありふれた事。誰しもあり得る事。

「幽々子、頬に菓子破片が付いているわ。動かないで、すぐに取り上げてあげる」

その声に、さつきまで感じ取れた堅苦しさはもう無い。どうはともあれ、蓮華の変顔祭により、どこか空気が緩和されたのだ。幽々子もそれを感じ取ってか、大人しく紫に従う。

「はい、取れたわよ」

「ん……『ありがとう』、紫」

「いいえ、どういたしまして」

紫がふふんと鼻を鳴らす。

その姿はいつもの友人の姿。その姿がどうしても、幽々子には輝いて見えた。どんな宝石が有っても、どんな宝が有っても、今の幽々子には霞んで見えるだろう。それほどまでに、今の関係は光を放っている。

稀有。故に人は目指す。求める。

「花見れば そのいはれとは なければども

心のうちぞ 苦しかりける――」

「あら、歌かしら」

「ええ、少しだけ昔の歌を詠んでみたの……。でも今の私には響かなかったわ。だって、

貴女達がいるもの」

西行法師は詠んだ。桜の花を見ると、訳もなく胸の奥が苦しくなるものだと
の想いを込めて。

しかし今の幽々子には必要もない歌だ。

萃香はそんな三人を見て、空に言葉を漏らした。

「……妖忌やい。あんたの主は、幸せそうだよ」

その言葉は大気に溶けるように消えていき、空へと消えた。

萃香の記憶

己の激しい動悸が聞こえた。

こんなに走ったのは何年ぶりだろうか。

「ふふ……何とも愚かしい事よ。老体である身、更に寿命を縮めようなどと……」

刀を持たぬその老人は、白玉楼の元庭師。呼ばれる名は魂魄妖忌。

彼は幽々子の命を妖夢に託し、人知れず死ぬために遠くへと足を動かしていた。

彼ほどの実力者が走っているのはどのような理由か。

至極簡単だ。

追われているのだ。

「ふうっ……ふうっ……、振りきれぬかッッ」

闇夜に満たされた魔法の森を、妖忌は必死に掛けていく。敵は闇だ。今なお月明かりさえも閉じ込める、闇そのものだ。

「アツハハー！ おじさん、そんなに私と鬼ごっこがしたいのかなー？」

「残念至極、余興や遊びは孫と主以外はお断りでな」

「そうなのかい。じゃあ、いただきませす♪」

闇が加速を始めた。今までの速度は遊びだったとしても言うのか。それはみるみる内に距離を詰めていく。

「ぐう……ふうっ……ふうっ……」

歯を食い縛り、黒き木々を右に左へと躲していく。その度に、腕が、脚が、腰が、頭が軋む。

死に体に運動での酷使とは世も末だと、どこか他人事のように妖忌は思った。

「ちよつと、動き回らないでよく。落ち着いて食べれないじゃない」

「生憎私は半人半霊。味も通常の人間より半分劣るぞ」

「じゃあ初めて食べる霊の味も、半分楽しめるって事じゃない。一度食べて二度美味しいわね」

「君は食を愛しているようだ。参ったな……」

妖忌は自嘲気味に嗤った。

現在この闇の妖怪を追い払う手段を、妖忌は持ち得ていない。説得の手段を試みても、彼女には通用しないだろう。このまま走っていてもいつかギリ貧になるのは明白だ。妖忌は諦めたかのように足を止めた。

「……………ふう。年貢の納め時……………か」

修羅を極めた。剣を極めた。精神を極めた。

歳は数千を生き、時を斬る。本来半人半霊の寿命はもつと短い筈だが、時を斬れるようになったことでそれもある程度は解決した。

けれど彼には足りぬ物があった。

それは才覚。時を斬る時点で、彼の欲す才覚とは何かを問い詰めたところだが、彼の近場に己を遥か超す才覚を持つものがあるからこそ、彼はそう思ったのであろう。

「……たつた数十年で神をも超える速さ。孫の力は侮れんな」

ふと郷愁の念に駆られる。

思い浮かんだのは主と孫の顔。

皺と老いにより弱った視力は、溢れる涙で更に歪められた。

「あれ？ 鬼ごっこはもうおしまい？」

「いいや、残念だがそうではない。鬼ごっこは今から始まるのだ」

「じゃあ私が鬼ねー」

「ああ。必死に抵抗するでしょう」

月明かりに照らされた妖忌。その瞳に映し出されるのは、目の前の闇ではなかった。

「師として、従者として。魂魄妖忌、参る!!」

眞実は闇の中。果たしてそのような言葉を唱えた輩は、それがそのまま現実に反映される事があるのだと思って唱えたのだろうか。

闇。闇。闇。そう、真実は闇の中。闇の中。

「——もう止めておきな、ルーミア」

「んう？ 貴女誰？」

「鬼さ。正真正銘の鬼」

「キャハハハ、そんなのいるわけないじゃーん。……ふふ、貴女、美味しそうね。油はのつてなさそうだけど、身はぷりぷりしてて……。あ、骨はしゃぶってもいい？」

闇の妖怪、ルーミアが言った。

美味しそうに脚の残骸を頬張りながら。

食人妖怪の悪い癖に、鬼が悪態をつく。鬼である己は、酒も飲むし人も食う。だがそこには一種の気品と礼節を持って行う行為であり、余裕という心の隙間を空けて食事に励むのだ。特に人に対しては。

人でも頂きますは言うだろう。行儀よく箸を持ち、食事のマナーを守りながら、食べ終えれば手を合わせご馳走さまだと礼を述べる。

現代では忘れ去られ始めている食への礼儀。

鬼は豪快なれど、自らを形作る物、自らの欲を満たす物に対しては礼節を重んじる種

族であつた。故に、その逆。礼節を重んじない物に対しては牙を向く。

鬼の圧倒的な力。それを振るわれても文句は言えぬだろうと、自分の中で合理化させながら。

「ルーミア……………”止めておけ”」

「ひっ……………」

ルーミアは野良妖怪だ。どこかで属するという考えを持たない為に、その身に宿した強者を避ける為の勘だけは、どこぞの誰よりも凌駕する。

ルーミアの勘が今までに無いくらいの警告を鳴らす。

”コイツは危険だ” ”逆らうな” ……と。

「三度は言わん。ここが潮時だ。去れ」

「は、はいっ!」

ルーミアは後に語るだろう。もしあの時、一度でも咀嚼音を出してもしていたら、次に咀嚼音を聞くのはその妖怪の腹の中にいる自分自身であつただろう……と。

その言葉を聞いた八目鰻を焼く店主は、震え上がり肝心のソースを忘れちゃったそう。食べる相手がルーミアだっただけに、食に愛を捧ぐ彼女からお小言を言われる羽目になつたらしいが。

それはさておき、偶然妖忌を救つた通りすがりの鬼は、下半身の半分を失つた妖忌を

近くの岩場にもたれかけさせて、自分独自の治療を行った。

「えーつと、この箇所は出血が酷いな。血を疎めて止血するか」

「む…………ぐ…………」

「なんだ、意識はあるのか。久しいな、妖忌。あれから幽々子は元気になっているかい？」
「ぬ…………その顔は…………萃香殿か。はは…………これは忝かたじけない。どうやら命だけは助かったのか。私も運が良い」

通りすがりの鬼…………伊吹萃香は、幼い顔を近づけ、思いきり言葉の毒を吐いた。

「ハッ！ バーカ。こんな夜に、地上に一人しかいない鬼と出会って運が良い？ あんたも相当頭がおかしいんじゃないか？」

「だが、そんな鬼に手当てされている。恐怖の象徴である鬼とこんな邂逅をするのは、運が良い以外で何がある？」

血の気が無くなりどことなく青白い顔をした彼からは、生来の覇気は感じられず、それも相成って萃香は出てきた言葉を飲み込んだ。

「あなたの主が心配してたよ。傷の事は私がなんとか説明しておくから、あなたは早く帰りな。それとも送ってこうか？」

萃香の予想外の提案に、妖忌は目を見開く。続けて吹き出した。

「くつ、はははははは！ 鬼に情けをかけられるとは、私も堕ちたものだ。だが、今宵の夜

には鬼で十分。萃香殿。萃香殿には伝えておこう」

「あ？ 何を？」

「私は『死ぬ』……それも近い内に」

萃香は言葉を失った。それは妖忌の言葉の意味を知ったからではない。その瞳に宿る確信の炎。妖忌自身が己の死を予見しているということ。

特段変わった事ではない。病床で伏せる者が死期を予見するのもよくあることである。ではなにか。彼の予見には常人とはまた違った視点でもあったのだろうか。

否。それは断じて否。その予見は、死ぬものが言うことだ。しかし妖忌には、死ぬだろうという一種の諦観が見えないのだ。更に先、彼は死の先を見据えて、その言葉を吐いたかのような、死を超越した予見に萃香は驚いたのだ。

「ルーミアの食される時は本当に絶望したものだ、誰かに看取ってもらえるというのなら、また話は別。私の死による想いは繋がり、紡ぎ、また新たな子孫へと受け継がれていく」

「あんた、妖夢に何を託そうとしてるんだい？」

「それは難しい質問だな。だが敢えて言うのなら……そうさなあ、託すのではない。糧としてほしいのだ。求めて欲しいのだ。己の師が到達できなかつた更なる剣の高み。求めて求めて、極めてほしいのだ。我が主……幽々子殿を救えるほどに」

「あんたの願いつてのはそれかい？」

「ああ、幽々子殿の能力、『死を操る程度の能力』。あれはまさに亡霊の領分を越す異能。幽々子殿は今もその能力に蝕まれている」

それは初耳であった。幽々子自尽により施された、幽々子が消滅しないための結界。あれは幽々子の唯一の死を防ぐための対応策であり、幽々子を死に誘わない為の処置ではなかったのか。

「蓮華殿の結界は確かに効果的だ。しかし『死を操る程度の能力』は生半可な物ではない。あの能力に蝕まれている以上、幽々子殿は自分が死ぬ未来を勝手に歩き始めるだろう。それはまるで操られるかのように」

「な……そんな……」

「萃香殿は『密と疎を操る程度の能力』を持つておりましたな？ でしたら頼みがあるのです」

「頼み？」

突然の妖忌からの頼み。萃香は首を捻りながらもそれに応えた。

「ええ。幽々子殿が今後、死の道を歩もうとするときが来るはずです。幽々子殿の死とは西行妖を解くこと。当然幽々子殿を蝕む能力はそれを狙う筈」

「……………」

「だから書を嗜めた。私の書架に西行妖とそこに眠る存在について記しておいたので
す」

「……つつ?!? そ、それじゃあ……」

「いいえ、安心なされ。固き封印を施してあるので、しばらくは解けぬ。時間にして――

――年ほどか」

「その間は安全つてことなんだね」

萃香は胸を撫で下ろした。だがまず撫で下ろす胸がなく、手は空を切る。

「はい。確実に。幽々子殿の能力は、封印が解けた際に、必ず書架の書を取ろうと動き出す筈だ。萃香殿にはギリギリまで待機。それも西行妖が開花する直前まで待つていた
だき、開花する直前に西行妖の死を疎めて欲しいのです」

「ギリギリまで待つメリットは？ ちゃんとした理由はあるのかい？」

「ああ、ある。幽々子殿が死ぬときは、西行妖が開花する時。西行妖の開花とは、生前の
幽々子殿を解放する事である。死を操る程度の能力は、幽々子殿が輪廻転生をする度
について回る呪いそのものだ」

「……」

「亡霊である幽々子殿が死する時、魂は元の肉体に戻り、通常の輪廻転生へ帰るだろう。
その時に死を操る程度の能力も元の肉体に帰ろうとする筈だ。その瞬間を狙って死を

疎めれば、幽々子殿の亡霊体を離れた能力は行き場を失い、消滅するだろう。能力とは、器が無ければ成立しない存在だからのう」

「見分け方は」

「幽々子殿の背後から特殊な流れが出来る。それを疎めてくれ」

「……はあ、分かったよ。あんたの望みは分かった。でもそれこそあんたが死ぬ理由には繋がらないだろう?」

萃香が呆れるように言った。

ここで妖忌がふざけた事を口走った時には、すぐさまおぶつて冥界まで連れ帰る気だ。死者が蔓延る冥界。幽明結界を突破する手段が萃香には無いので、その直前までに限るが。

だが予想は当たらない。妖忌の口から出たのは、萃香を驚かせるのに十分な真実であつた。

「私は幽々子殿の『死を操る程度の能力』の矛先を、その身に一心に向け続けた。それも己の命を削つてまで」

「なっ——」。なんでそんな馬鹿な真似を」

話して分かったが、妖忌は聡明だ。永く生きた経験とその頭脳から裏打ちされる推測と結果。もっと良い方法があつた筈だ。もっと他に頼れる者がいた筈だ。しかし彼は

今の今まで、たった独りでなんとかしようかと奮闘してきたのだ。

その忠義。その在り方はなんて美しいのだろうか。萃香は己の口から出た悪態を、ただただ恥じた。彼は必死に従者であろうとしたのだ。それも命を削って。死への恐怖を乗り越えて。

「無論、幽々子殿を救う為。そして、私の書架の封印が施せるまでの時間稼ぎだ」

言葉の一つ一つに重みが違った。

彼の意思は本物だったのだ。結界を施した際に斬りかかるその意思の強さは、今でも全く色褪せていないのだ。

「感動……ああ、感動したね。ここまで感動したのは、蓮華がいなくなってから初だよ。ようし、あい分かった。鬼の名に免じ、約束をしよう！」

「ふむ……破らぬと誓えるか？」

「心外な。鬼は嘘はつかん。……ちよつとだけ付くときもあるけど」

「では、約束だ」

「ああ、約束だ」

お互いが手を握りあう。これで約束は成立した。妖忌はバトンを手渡し、萃香はそれを受け取るのみ。

——だが、異変は起こった。

「お、おい！ 妖忌!？」

萃香が手を握った瞬間、妖忌の手は乾燥し、まるで枯れた木の枝のように細くなつていった。

「寿命は来たようだ。……萃香殿。どうか幽々子殿が笑顔でいられる、そんな世の中であつて欲しいですなあ」

——萃香が最後に見た妖忌の姿は。

世の理不尽を憂いながらも。

それでも主の行く末を心配する。

立派な従者の姿であつた。

『妖忌、ねえ妖忌』

『なんでしようか、お嬢様』

『もし私が死んだら……どうする?』

『ふむ、お嬢様はお戯れが好きなようです。』

無論、お嬢様が満足して没したのであれば、私はお嬢様の寝姿を看取り、生き続けましょう。

お嬢様が不条理によつて没つされたのであれば、私はその不条理をお嬢様の代で断ち切りましょう。

お嬢様が使命により没したのであれば……私は後世に紡ぎましょう。使命を全うした勇者の可憐なお姿を』

『ふふふ。それはとても頼もしい従者ね』

『ありがたき讚美の言葉でございます』

『妖忌、聞きたい事があるの』

『なんでしようか、お嬢様』

『幸せってなんだと思う？』

『ふむ、お嬢様はお戯れが好きなようです。自分と相手が楽しければ、それが幸せでしょう』

『ふふ、だったら今の私は幸せね』

『おや、御友人様がいらつしやいましたね』

『だって、貴女がいるもの——』

『妖忌、お願いがあるの』

『……なんでしようか、お嬢様』

『もし、私が死んでも、貴女は生き続けなさい。私の事なんて忘れて、どこかバカンスに行くのでも良いわ』

『お嬢様、その小刀をお離しになられてください』

『妖忌も、私の友達も……私を疎んでいたに違いないわ。ええ、そうに違いない。だって私は、呪われた忌み子なんですもの』

『忌み子でも幸せは享受出来ませぬ。今の今まで、お嬢様は幸せではなかったのですか?』

『嘘吐き嘘吐き!! 貴方だって心の中で思っているのではしよう!? この不気味な女つて。私、分かるもん!』

『お嬢様、いつか必ず私が貴女を救ってみせます。必ず……必ず……』

『うっ……うっ……嘘……吐きい……』

『今は嘘吐きでも構いません。いつか証明してみせれば、嘘吐きではなくなるのですから』

『ねえ……妖忌。何故人は、桜に焦がれるのかしら』

『桜が一年に一度しか咲かぬからでしょう。人とは欲が有る限り、稀有な物に焦がれ、求

める生き物です』

『じゃあ私は、桜足り得るのかしら』

『私の中では、貴女ほどの桜は見たことはありません』

『あら、お上手ね』

『妖……忌……』

『お嬢様、口を閉じて下さい！　すぐさま治療を!!』

『手……手を……握って……』

『お嬢様?』

『怖かった時……辛かった時……貴方、私が床に着くときに、握っていて、……くれたじゃない』

『お嬢様……もう……もう……お止めを……』

『ふふ……ああ、桜。い……つか……桜の下で……貴方と……紫と……蓮華……と……萃……と……香……と』

『お嬢様!　お嬢様!　今すぐ助けを呼んできます!　少しお待ちを!!』

——私は、

——貴女の従者であれて、

——誠に幸せでございました。

蓮華が消滅し、紫とも、幽々子とも連絡が取れない萃香。

彼女は立派な従者の亡骸を土に埋め、たった独り従者の決意を心に閉じ込めながら、月を仰ぎ見た。

『あんたの忠義、私がかと受け取った。……今はゆっくり休んでな。冥界の従者、魂魄妖忌』

季節は巡り、廻り、そしていつしかその年がきた。

冬は永いが春は来るだろう。

妖忌は……見ていてくれるのだろうか。

己が主の、春の訪れを。

閉話 悪魔の所業

墮落しきつた吸血鬼

「レミイ、時間あ——」

「ない」

「漫画読んでるじゃないの。暇よね？」

「ない」

「えええ……。漫画読んでる暇があったら、私の助手になるとか、もっと良い時間を使つた方が良くいわよ？」

「うるさい、うるさいい！ パチエ、私は意外と忙しいの！ 今は漫画を読んでいるけど、この後、すんごおく忙しくなるんだから！」

霧の湖に聳え立つ紅い館。その地下には大図書館と呼ばれた、一人の魔女が管理する蔵書保管倉庫があつた。

その名の通り、普段人が見るような図書館の規模を大きく超えて、保管されている蔵書の種類も桁違いに多い。子供が見るような童話集から、果ては未だ管理者である魔女自身も解読出来ない禁断の魔導書だつてある。

危険と力の欲とは対比ではなく同義である。危険を乗り越えれば大きく成長し力を得るだろう。逆に力を容易に得たければ、危険を犯す方が手っ取り早いとも言える。

大図書館の魔導書とは、これを体現した物ばかりである。要するにむやみやたら書を取ることは危険なのだ。

話は変わるが、大図書館には魔導の真髄をを目指す者達の研鑽の結晶が多く記される書が多数ある。

その数多ある中で、大図書館の司書であり管理者——パチュリー・ノーレッジは、使い魔を役とする魔導書を読み耽っていた。

使い魔。魔女であれば一つのステータスであり、その多くが使役する者の性格がよく表れる。偉い人の談には、その魔女の性質を読み取りたいければ、まずは使い魔を見よ……だ。

しかしこれは同時に危険な魔法でもある。性質が云々言うが、まず使い魔を制御する実力があってこそ成り立つ弁。よって、使い魔を使役している者はある程度の実力を持っていると然るべきだ。

研究と紅魔館の元主への対応に迫われ、今まで使い魔召喚の儀式を行えなかったパチュリー。異変を機にこの度使い魔を召喚してやろうと思ったのだ。

そして魔術の前準備とは、何を持ってしても時間は掛かるわけで。パチュリーは生来

きつての親友に、魔術関係の助手を引き受けて欲しいと彼女の自室へ頼みに来たところ
で冒頭に戻る。

「そんなあ……。親友きつての頼みよ?」

「親友だから断つてはいけないと?」

「いえ、そういう訳じゃないけど……(コイツ、今日は頑固ね……。いつもならこの辺りで甘味を餌にすれば食いつきそうだけど、今日は無理そう)」

パチュリーの本音などいざ知らず。ノースリーブにハーフパンツ姿のレミアは剥き出しになった綺麗な足を惜しげもなく見せびらかし、あまつさえ自分が今まで貪っていたお菓子の袋を足の指先で摘まんでパチュリーに放り投げてきた。

「あ、パチエ、それ捨ててきて」

「……………(殺す)」

自分がレミアに頼む側なのだ。機嫌を損ねてはいけないと心の中で必死に反芻し、なんとか口から出そうになった怒りを押し込めた。

もしここで感情に任せて暴れてしまえば、全てがゼロだ。魔女として感情を制御する事は出来て当然。こんな怒りも簡単に飲み込む事が出来る。

深呼吸を数回。よし、落ち着いた。

「分かった、分かったわ。これはゴミ箱に捨てておくわね」

「うんー、よろしくー」

気の抜けた返事を聞きながら、パチユリーは渋々お菓子の袋をゴミ箱に捨てる。そしてここぞとばかりに助手への勧誘を始めた。

「それでね、レミアア。もし私の仮契約助手になってくれれば、貴女にも私の使い魔を役する権利を一部譲渡するわ」

「そうねー」

「それに、助手と言ってもすぐに終わるわ。貴女の自由な時間を、ほんのちよびつと削つてくれるだけで良いのよ」

「そうねー」

「しかもしかも、日陰を一部遮断する魔法だって教えてあげる。これを使えば、多少の魔力は使うけど日傘なんて邪魔な物は要らないし、魔力消費だってレミイの内包魔力に比べれば少なすぎるくらいよ。どう？ 悪くない話でしょう？」

「そうねー」

「……………」

「そうねー」

「転移魔法展開」

突如レミアアが持つ漫画に魔方陣が浮かび上がり、パチユリーの短い詠唱と共にその

漫画は消え去った。

「あああああああああああああ!!!?!?」

「ほら、これで暇になったわね! 行くわよ」

「くあwせd r f t g y ふじこi p!!」

「何を言っているか分からないわよ」

ワナワナと肩を震わせ、漫画の消失という失意の極地を味わう悲劇のヒロイン、レミア・スカーレット。

その瞳から溢れる涙はなんなのか。完全に自業自得なので、どこ吹く風のように無視を決め込んでいたパチュリー。すると無視を続けるパチュリーに対して痺れを切らしたのか、勢いよくレミアが掴みかかった。

「私の、漫画、返し、なさいよっ!」

「嫌よ」

「何だよ!?! あの漫画は美鈴と共に人里でこっそり買った、最・新・刊なのよ!?!」

「知らないわよ」

「クツ、なんて悪魔……。私の親友は魔女じゃなくて悪魔だったみたいね。してやられたわ」

レミアアの言われもない罵倒に、パチュリーは首を横に振りながら否定の言葉を述べ

る。

「悪魔じゃないわよ。それに転移させた漫画は、ちゃんと人里の古本屋の店頭に並べておいたし」

「悪魔よね!? それ、めっちゃ悪魔の所業よね? じゃあぐずぐずしていると買われちゃうじゃないの!」

パチュリリーは次第にこの時間が凄く無駄に思えてきた。この親友……いや、墮落しきった吸血鬼と言った方が良いのか。墮落吸血鬼・レミリアは、漫画の心配をするだけでちつとも助手になってくれそうではない。

(美鈴に頼んだ方が良かったかしら)

「取り敢えず、私は古本屋に行ってくるわ。パチュリリー、後はよろし——」

「いや逃がさないわよ?」
体の良い理由を付けて逃げ出そうとしたレミリアを、パチュリリーは床に敷いてあるカーペットを操って転ばせる。レミリアは咄嗟の事で受け身を取れず、諸に鼻っ柱から固い床と激突する。

「ん~~~~~~~~つつつつ!!」

鼻を押さえながら悶えるレミリア。そこにカリスマなんて四文字はどこにもなかった。

そんな親友を見下ろしながら、パチュリーは冷たく言い放つ。

「新助手、一名様ご案内」

痛さに耐えるレミリアを尻目に、パチュリーは何の慈悲もなく転移魔法を展開させた。

「……で、何すれば良いのよ」

大図書館に付随する、埃を少し被った部屋に転移させられたレミリア。部屋の中央には床を埋め尽くす程の魔方陣が所狭しと描かれており、既に召喚の為の準備は整っているかに見える。

「あら、観念した？」

パチュリーが勝ち誇った顔で言った。

「観念した観念しました観念しちゃいましたー」

「うっさいわよ」

「悪魔に言われたくないわ」

「やめなさい。悪魔を呼び出したらどうすんのよ」

適度な軽口を交わしながら、パチュリーは規定の位置に着く。そしてレミリアに行つて欲しい作業の内容を告げた。

「レミィは魔方陣の維持をお願い出来るかしら。魔力を込めるだけで良いんだけど、多すぎるのも少なすぎるのもダメだからね」

「難しい事言うわ……」

召喚の儀式が始まった。

現存の魔女の中でも格別した実力を持つパチュリー。そんなパチュリーがレミリアに魔方陣の維持を頼んだのは、その儀式の複雑さからだつた。

使い魔を召喚する魔術と使役する魔術。これらを複雑に絡み合わせた魔方陣を同時に展開しながら、更に操作せねばならないのだ。

しかも使い魔が応じてくれるかは、使い魔となる存在の許諾が必要となる。上手にすれば丸一日。下手すれば数年規模でこの魔術を維持し続けなければならない。

喘息持ちのパチュリーにとっては、長時間の魔術詠唱と操作は心身共に負担の掛かる行為であり、魔方陣が複雑である分疲れは尚更だ。

魔方陣維持をレミリアに任せているとはいえ、既にパチュリーの額には珠のような汗が伝っている。

(チツ、手強いわね……)

使い魔召喚と使役は苛烈を極める。言うならば箸で豆を掴む作業を延々と繰り返しているようなモノだ。

「パチエ、大丈夫？」

「シャラップ」

心配してくれるレミリアの声をはね除けても尚、パチュリーは召喚の魔術を操作し続ける。

儀式を始めて十数分。とうとうその時が来た。

「キタ、キタキタキタ、レミィ、維持をしつかりね。私の使い魔が召喚に応じるわ！」

「むー、親友遣いが荒いのね、パチュリーは」

頬を膨らませながら悪態をつくレミリアだが、その視線は魔方陣に集中している。彼女も楽しみなのだ、使い魔が召喚される瞬間が。

胸がドキドキと張り詰めてくるのを感じる。今だ、今だとその瞬間への期待が高まる。限界まで抑圧された期待と好奇心は、使い魔召喚の合図である、魔方陣の発光によつて解き放たれた。

「我が使い魔——」

「その身を主に捧げ、契りを結び——」

「今ここにその身を顕現させよッーッーッー！」

パチュリーの詠唱が終わり、魔方阵の発光と一際大きくなる。そしてその中心から、人型のような形をした影が浮かび上がった。

（人型!? 神獣や幻獣では無いにしろ、ある程度格は高い。流石私ね）

そして光がひとりでに収まり、その使い魔の姿を見た途端、二人の空気は固まるのである。

「どこかの誰かさんの召喚に应じました、小悪魔です。悪魔が召喚に应じるなんてレアだねレアだねやったね最悪のケースだね。ケヒヒッ！」

パチュリーの儀式に应じた使い魔。それは、二人が最も忌避していた悪魔その人であった。

何をしでかすか分からない悪魔

「どうもどうもー、悪魔でーす」

悪魔。幻想郷で嫌われものと名高い種族だ。その多くが傲慢不遜で自己中心的だと
言われている。

だが人々に受け継がれた伝承が伝承だけに、強大な力を持つものが殆どと、怨霊と同
じように嫌悪されているのが悪魔だ。

その悪魔を目の前にして、レミリアとパチュリーは溜め息を吐いた。

「ふん、悪魔と言えどこの程度か。他愛ない」

「そうね、レミィ。これじゃあ悪魔じゃなくて熊レベルよ」

彼女達は魔法使い、妖怪という種族の中で、実力は大きく抜きん出ている。片や花曇
の魔女。片やカリスマの具現。悪魔にも劣る小悪魔程度の存在など、歯牙にさえかけて
いない。……表面上では。

（やっべ、悪魔とかアカン。これ私が立てたフラグのせいかな。いや、待てよ。私の二つ
名もスカーレット・デビル。デビル……ハッ、まさか私が引き寄せてしまったのか？

悪魔とデビル、同じ意味だから……）

「ほう……ならば良かった。仕えてもらう身、喜色を示してもらわねば呼んだこちらも面目が立たないのでな」

（この子の名前どうしようかなあ。スカーレット・デビルから因んでスカちゃんとか？

いや、咲夜に笑われそう。それだけは嫌だ）

「へえ、使い魔になる気満々ねえ。従順な子は嫌いじゃないわ」

（ああああああ、とうとう契約の時になっちゃったあ！ ハッキリ断れ、私！ 悪魔と契約するほど私の身体は安くないわよって）

「使役の魔術は既に施してありますよね？」

パチュリーが心の中で必死に雄叫びのような叫びを上げている最中、小悪魔がそう聞いてきた。心なしか瞳も爛々と輝いている。

「使役の魔術ならもう施してあるわ。後は契約だけね」

（いやあああああああああ!!

いやあああああああああ!!）

使役と契約の魔術は実は少しだけ違う。使役魔術とは召喚された使い魔を使役可能にする魔術で、効果としては、使い魔は主からの魔力供給や恩恵を受ける事が出来るということ。その逆に、主の方は使い魔から絶対的信頼を強制的に受ける事が出来、更に使い魔とのテレパスによる受信送信。そして位置情報が分かるようになる。

「では、私はもう主様から魔力を受け取り可能という事ですね！」

「……まあ、そう言うことになるわね」

「そうなんだそうなんだあ……ハハ……」

——じゃあ遠慮せず喰らって下さい——

小悪魔の服装は少し堅苦しい。赤のチューニックを併せた黒めの服を着ている。

そして見栄なのかどうかは知らないが、恐怖心を煽るような模様柄のコートを上に羽織る。

小悪魔はコートの内側に手を入れた。その動作はまるで手品師がこつそりとタネを仕組むように、会話の最中で流れるように行われた。

幻想郷には異界含め、現実では見えないような世界が内包されており、それは博麗大結界と幻想郷の管理者が敷いた幻と実体の境界に依るところが大きい。妖怪から人、はたまた神や物まで、忘れられれば漂流物のように幻想郷へ辿り着く。

小悪魔が持っているソレ。魔界の闇市にて少量だが流通していたそれは、鈍い色を放ちながらパチュリーへと向けられる。

「安心してください。殺しはしません。四肢をもぐだけです。痛みは最初だけ」

「……『コルトローマン』それも、弾は『357マグナム弾』ね」

「流石主、ご名答。外の世界では数十年前に流行っていた代物です」

自動拳銃であるコルトローマンは、小型でありながらもマグナム弾を発射することが出来、ローマン法執行人の名に恥じないよう警察が使いやすいように設計されている。

外の世界……日本では警察に使用されたとの例は無いらしいが、この小悪魔はどこからそれを手に入れたのか。パチュリーは銃口を向けられているにも関わらず、冷めた頭でそう考えた。

「撃たない方が良いわよ？」

「撃たない方が良いと言われて、撃たない輩がいます？」

「必然的にいるわ。人は覚悟が途中で終わっている奴等ばかりだもの」

「私は悪魔です」

「あ、そうだったわね。魔力量が少なくて勘違いしちゃった」

銃口から瞬間的な火花と、同時に乾いた音が木霊する。葉莖が床に跳ねた――。

「……私には撃たないのね」

落下傘のように落ちる天窓の破片。

それは大図書館に併設された観測機器を使うために設置された大きな天窓から降り注いでいた。

天窓はパチュリー独自の魔力を流せば、いつでも開ける事が出来る。湿気や溜まった

埃の影響で身体を壊さぬように……と、今は亡きパチュリーの父が空気清浄の役割も考えて設計したものだ。

小悪魔は服の中に隠していた羽を解き放ち、跳躍の勢いを以て飛翔した。

「それじゃあ私は幻想郷観光でも行つてきますねー！」

「……………」

天窓から光が溢れる。その光は大図書館の日陰までも隅々と照らし、背後にいる親友を焼いた。

「ぎゃあああああああつ……！」

——という親友の悲鳴を聞きながら、パチュリーは展開していた魔法を解く。

（アイツ……意外とやるわね）

パチュリーが展開していた魔法は「はねっ返り」の魔法。主な効果はその名の通り、放たれた魔法や攻撃をまんま対象に跳ね返す魔法。術者の技術、魔力によつて魔法の硬度や跳ね返せる威力を調整する事が可能。

パチュリーは魔力を読み取る「眼」でもつて、小悪魔が万が一魔法や攻撃を放つてくる場合や、銃弾を発射した場合を想定した魔法を展開していた。

「熱い、熱い、いいいいいい……ツツ!!」

小悪魔の意思は本気であった。

悪人善人等しく見てきたパチュリーにとって、相手の意思が真か偽かを見抜く審美眼を持つていて当然である。

「あつつ、ちよ、あつつ、助け、パチエツ」

“もしパチュリーが侮っていたら”

“もしパチュリーが魔法を使わなかったら”

その何れの未来も、パチュリーを殺していただろう。

「つて話を聞けええええ!!! 私メチャクチャ焼かれてるんだけど!」

思考を一時中断し、背後にいる親友へと向き直る。親友のレミリアは、身体の一部を焦げさせながら目を吊り上げていた。あれは怒っているサインだ。分かりやすい。

「レミイは七面鳥の丸焼きを食べたいと以前言ってたわよね?」

「私が七面鳥の役ってか?」

「ええ、小悪魔程度に料理こちされそうになる吸血鬼。新しいジャンルじゃない?」

「どんなジャンルよソレ!? しかもすつごく面白く無さそうだし!」

「つまらないレミイにお似合いじゃない」

「お前後で表出ろ」

そろそろ頃合いだと見て、パチュリーは指を鳴らす。するとレミリアを覆うように膜が出来て、レミリアから漂う焦げ臭さが無くなった。

「あ、これが直射日光を防ぐ魔法？」

「そうよ、じゃあ表に出ましようか、レミィ」

「え、マジで表に出るの!? い、イヤだなあ……冗談だつてば、パチエ。喧嘩とかしない
しない」

「何言ってるのよ、追いかける為に決まってるじゃない」

「え、何を？」

当然の事をさも分からないかのように聞いてくるレミリア。レミリアは直射日光に
焼かれていて、小悪魔が天窓から出ていったことを知らない。

ゆつくりと間をためて、パチユリーはレミリアに言った。

「……あの何をしでかすか知らない悪魔を、に決まってるでしょ」

「……生憎、主は使い魔の所在地が分かるのだから。」

家に帰りたいた魔女

「ふんふーん久しぶりの外、良いですねえ。風が気持ちいいです」

小悪魔は魔法の森上空を呑気に飛び回っていた。

「ふんふ、ふんふふ、ふふふんふん！……おつ、あれは！」

晴れ晴れ愉快的な天気、視線を凝らすと自分と同じように地獄鴉の妖怪が上機嫌みたく飛び回っていた。なんと悲しきかな。今の小悪魔は幻想郷を骨の髄まで楽しみたかったのだ。

「おーい！ 妖怪さーん!!」

「んうー？」

流石鳥妖怪。頭も鳥頭だ……と心の中でほくそ笑みながら、無防備に近づいて来る地獄鴉の妖怪に向かって手を出した。

「私の手の上にあるものなーんだ？」

「……なんにも無いぞお？」

「うふふふ、私の手の上には夢が詰まっています」

「うん？」

言っている意味が分からないようだ。だから分からせよう。この馬鹿な妖怪さんに教育って大事だと思うの。

私は自分の手に釘付けになっていいる鳥妖怪へ、折り畳んだ膝を喰らわせる。

ぶげえええええええつ、と面白い悲鳴を響かせながら彼女は森の中に落ちていった。

「クヒヒヒヒ、騙されるのが悪いんだよ。バーカー！」

私はその時、満面の笑みをしていたと思う。私の可愛らしい笑顔を見れるなんて、鳥頭妖怪さんは運が良いのだろう。美少女に蹴ってもらえたのだ。感謝してほしいね。

嗚呼、良いことをするのって楽しいな！

「どんぶらどんぶらどんぶらこーい、さてさて次のターゲットは誰かなあ？」

鳥頭妖怪を蹴落とした私は、良いことしたがてら、今度は魔法の森に降りたって標的……じゃない、ターゲットを探し回っている。

「桃食ベ犬食ベ猿を食ベ、残った雉はフライドチキン。……あ、丁度良いところにお家があるね。入ろう入ろう、いろいろ食ベたい」

鍵はかかかっていない一軒家。なんて不用心な。これでは私のような盗つ人兼悪魔に泥棒されてもカムヒアという事だろうか？

きつとそうだろう。この家の主人は私のような者でも受け入れてくれる優しいお方だ。そんなに違いはない。ということでお邪魔します。

「金めの物金めの物〜つと」

片っ端から引き出しを開けていき、売ったら金になりそうな物を探し当てていく。しかし出てくるのは毛糸とかシヨールとか下着とか……下着は売れるかな。

下着から見てここの主人は女性のようだ。縫い針も置いてあるところから、ここの主人は縫い物や人形作りが好きなのもかもしれない。

「ここにがある人形だつて、こんなにか愛く……」

私とその人形を指で摘まもうとすると、何処からともなく槍を出してこちらの目と鼻の先に穂先を向ける。

あらやだ怖い。前言撤回、全然可愛くねえわこいつら。暴力的な女の子は、小悪魔的にアウトだよ。

私？ 私は女の子じゃなくて悪魔だから。アウトライン余裕で守ってるよ。

「コラコラ人形ちゃん、お痛はダメでしゅよ〜」

私の愛くるしい言動に苛立ちを覚えたのか、すぐさま穂先から光線を放ってくる始末。

照れてるんだな。なんとも初々しいヤツ……と思いつつながら、軽く首を捻って光線を躲

す。そして金髪の青い服と真っ白なエプロンを着込んだ可愛らしいお人形さんに向かってデコピンをかます。

轟音が響いた。小悪魔がコルトローマンを抜いたのである。小悪魔にとってデコピンとはイコール、ダイなのだ。死である。

「イヒヒ、私つてば教育の才能もあるのかも知れませんか」

銃弾がお人形の顔を貫き、壁を貫通した事で一部の壁板がめくれ上がり、目も当てられぬような状況だ。小悪魔は何に満足したのか、満面の笑みを浮かべてウンウンと頷き、その場を後にした。

良いことも出来て、指導も巧いなんて、私つてば完璧美少女かな？

「真っ赤な嘘のく浦島さーん。開けないって約束しておいて、すぐさま箱開けぽけろーうじーん。エヘヘ、面白いな、流石幻想郷。さーて次のターゲットはー？」

「いやナニよあんた」

今度のターゲットは、現在お食事中的金髪妖怪だ。黒いロングスカートを身に纏って、とても可愛らしい。食べている物を除けば……だが。

「人間、おいしい？ ねえねえ、おいしい？」

「邪魔しないで、木端悪魔風情。小悪魔程度、私みたいな野良妖怪でも軽く消せるのよ」
「貴女の言う吹き飛ぶ紙のような存在に態々関わってくださいるなんて、なんともお優しいお方。結婚してください」

「はあ？ 冗談言ってる暇があるんなら、自殺するか視界から消えてくれない？」

この妖怪はとても怒っているようだ。

しかし私には効果が無いようだ……残念……。

その食人妖怪は、私を無視してまた人間を食べ始める。そのあと、私は何度声を掛けても無視し続けた。私は声を張り上げて更に声を掛け続けた。食人妖怪は私を無視し続ける。

ここは魔法の森。鬱蒼とした樹林の下は光が漏れず、昼であつてもまるで夜のよう。

そんな絶好の人間を襲える環境には、沢山の妖怪が蔓延っているのだ。

底辺妖怪は、人間を襲つても恐怖という存在を維持し続けなければならぬ。

彼らは底辺に漏れず、名も知られていないような奴等ばかりだからだ。

そうやって人間を襲おうと頑張っている奴等の近くで、美味しそうに人間を食べる野良妖怪がいたら、彼等はどう思うだろうか？

あちらこちらで唸り声が聞こえる。

私の声を煩く思ったのか、それとも横で人間を食う野良妖怪が羨ましくなったのか、

それとも両方か。

結果的には、私は沢山の妖怪を呼び寄せることに成功したのだ。

「あんだ……もし次会う事になったら殺すわ」

「負け犬の遠吠えですかね？ では、頑張つて下さい」

妖怪が嫌悪する悪魔か、食べかけの餌を持つ野良妖怪か。どちらを襲うかと聞かれたら、答えは自明だろう。

私は白々しく空元気ばりのエールを送つて、その場を後にした。

もうそろそろこの遊びも終わりかあ。

駄々こね、通じるかなあ？

私は自分を追ってくる者の気配を感じとりながら、魔法の森の中を高速で飛んでいた。

視界を横切る樹。右に左を進路を変更しながら、追手が億劫になるよう意地悪を続ける。

「距離はちよつとだけ離れましたね」

小悪魔は少しだけスピードを落とした。あちらは魔女。捕まえられるのであれば、幾つか策を労してくるだろう。それまでに後一人くらいは遊ばねば。

私がそうボンヤリしながら思っていると、先の方から悲鳴が聞こえた。

……何処かで聞いた事がある気がする。

「おーい、どなたか困ってるんですかー?」

「た、たすつ、助けて下さい!」

「ああ、なんだ。聞いた事があるなど思ったら、さっきの地獄鴉の妖怪ですか」

「ひっ! あ、あなたは……」

青髪の女の子を担ぎながら腰を抜かしている地獄鴉の妖怪が怯えてくれたので、少しだけ私の頬が緩む。そして満面の笑みを見せながら自己紹介をした。

「はあい、私は人妖問わずの嫌われ者、小悪魔でーす」

「や、やつぱり悪魔だったんだあ! うわああああああん! チルノだけはだずげでえ

ええええー!!」

「え、いやいやまてまて、何が起こってるの?」

現在小悪魔の頭の中はこの地獄鴉を苛める事で一杯だった。よってこの妖怪が泣いて懇願する理由が分からない。まるで私が敵みたいじゃないか。私は至って健全、ただただ弱き者を虐め、ただただ強き者を蹴落とす、全うな弱き者の味方である。

鳥頭妖怪は、私が近づく毎に泣き声を大きくしていく。そして私の手が届くか否かと言ったところで、ピタリと泣き声を止めた。

彼女は理解したのだろう。泣いては何も解決しないと。

唇を噛み締め、涙が流れまいと堪える姿は、子供さながらの強がりがあつて可愛いと思う。けれど幼い涙腺は、防壁を張るには脆すぎて。

……声を出さずに泣いてる。

はあ……鼻水も出てるし。

汚いなあ、つたく。

「あーもう、鼻水この紙で拭いて、ほらー！」

「……え……でも…………」

「んー、さっさと受け取りなさい！」

私は無理矢理ポケットに入ったティッシュを取り出す。このティッシュは先ほど魔法の森の中の一軒家でこつそりと拝借したもの。魔力が込められているのか、袋から取り出しやすくなっている。こんなことで魔法使うなよ。

「うーん、えーつと」

「ああ、不器用なの？　じゃあこつち向いて、ほら、チーンね」

鼻にティッシュを被せ、鼻水を出させる。何故悪魔である私がこんなことをしなければ

ばいけないのか。

それもこれも全部この妖怪を泣かせた奴のせいである。弱い妖怪を虐めるのは私の役目だつてのに。

「ほら、綺麗になつたね」

「お姉ちゃん……ありがと……」

私は目を逸らす。感謝の言葉なんか言いやがつて。こちとら悪魔だつっの。

えーつと、地獄鴉の妖怪はこちらに走つて逃げてきた。ということは、彼女が怖がる要因が向こうにいるということか。

私は自分のプライドをとぼしめたクソヤロウをぶつ倒す為に、鳥頭妖怪が怖がる要因の元に歩を進める。

全く、私のおもちやに感謝を述べられてしまうとは。全然愉しくない。正直つまんない。

これは恐怖の要因を直々にぶつ殺して、悪魔の怖さを見せつけるしかありませんね。「へーい、へーい、隠れている奴でーておいでー!」

標的の姿は見えない。こちらの都合としても早期決着が望ましい。あの性悪魔女がこちらに来る前に。

「出てこないとー、ここに居る女の子二人、殺しちゃうよー?」

反応は無し……か。ならばこちらからアクションを起こさせてもらおう。私は種族的にそこまで強くないからね。勝つには奇策妙計立てないとね。

「じゃあ殺しま——」

「待ていお嬢ちゃん、オレは奴等を傷つけようとしたんじゃないんだ」
いる。

標的がいる。

気付けなかった。多分——背後を許したか。

不味いなあ。私、能力以外は大了たことないんだよなあ。ええと、魔力は魔女と繋がっている。これなら魔力が切れることも無いし、ある程度回復速度も早くなるだろう。クヒヒヒヒ、イイコト思い付いた。

「その前に……名前を聞かせて頂けませんか？」

「オレか？ オレの名前は易者だ」

「そうですか、それはそれは良い名前ですね」

「ああ、それでオレが何をしていたかつつと——」

「興味ありません」

「ナニツ!?!」

驚いた声の後頭部辺りに聞こえてきた。

口はそこか。身長も大体把握した。

元々プライドを傷つけられたから、私は戦う事にしたのだ。どんな理由であつても、どんな過去があつたとしても、私が戦わない理由には敵わない。

私は悪魔。他人の人生なんて興味がない。傲慢不遜、自己中心的。私が良ければそれでオールオツケーなのだ。

キヒヒヒヒ、精々悪魔の所業に悶えるが良い。

私は静かにコルトローマンを取り出し、弾を装填。

そして銃口を自分の口の中に入れて、引き金を引いた。

遊び疲れの紅魔館

コーコルトローマンに込められたマグナム弾とは。

・ 357マグナム弾と呼ばれたそれは、第一次世界大戦後に出現し始めたボディーパーマーを唯一貫通できる、優れた護身用の弾として知られている。

他にもストッピングパワー、もとい弾が命中した生物を、どれだけ行動不能に陥れるかの指数的概念も、究極の基準として高く評価されている。

そして人間が口に銃口を入れ、引き金を引くときに自害できる可能性は、ほぼ確実にある。もし何らかの奇跡が起こったとしても、これからの人生はベッド無しでは生きれないだろう。

小悪魔は口内に入れたコルトローマンの引き金を引く。激しい銃撃音が易者の耳をつんざいた後、易者は彼女が何をしたのか理解した。

「お……オイオイオイ！　じよ、嬢ちゃん！　しつかりしろ！」
易者は心底焦った。

自分はただ占術を更に昇華させ、世界の外を観測しようとしていただけなのだから。作業をしていた丁度その時、空から降ってきた幼女が儀式を破壊。魂を込めて製作した

儀式を壊された事で、易者は激怒した。

烈火の如く幼女を叱っていると、何を思ったのか近くを通り過ぎた青い妖精が突然割り込んできた。彼女の言い分をかいつまんでみると、なんと自分が幼女を苛めていると勘違いしているらしい。

勝負を挑まれ、軽く青い妖精をいなすと、つい力が入ってしまったのか強く妖精を吹き飛ばしてしまった。

“己を助けようとした見知らぬ恩人が、自らの身を犠牲にして自分を助けようとしてくれた。”

幼女にはこう映ったのであろう。幼女は青い妖精を抱えて脱兎の如く逃げ出してしまった。

易者は誤解を解こうと幼女に追い縋る。そして小悪魔と出会ったのだ。

ぶつちやけ、易者はただの被害者である。

小悪魔の方も、別に勝負に白黒付ける気など更々なく、ただただ自分の種族としてのプライドを傷つけるきっかけを作った易者に対して嫌がらせをする気しか無い……というところが、易者の不幸具合に拍車を掛けているのだが。

そして、不幸はまだまだ続く。

——易者は小悪魔の銃声を聞いた後、腹部に大きな衝撃を受けた。

「ぐうツツ……が……なんだ……？」

腹部……身体をすっぽり覆うロープの中心部には、はぜたように穴が空いて、触つてみるとそれは身体の奥深くまで届いている事が分かった。

続いて、肉片が顔に当たる。

「あ……ああ……」

自殺……。顔についたのは、小悪魔の肉片。口内で引き金を引いたことによる、後頸部付近の爆散。

易者には訳が分からなかった。自分は何にもしていないのに、恐怖に当てられたのか、罪もない彼女は自害してしまった。

「なんで……なんで……」

悔み。

後悔。

人を捨てた易者だが、心はまだ捨てていなかった。

故に、彼は嗚咽を漏らした。

——それらを全てぶち壊す銃声が鳴る。

「なっ……!!」

視界が低くなる。

それは小さくなったとか、そんな特異なものではない。

足を撃たれた——……と分かったのは、自害し、死んでいる筈の小悪魔の瞳が、

悪戯が成功した子供のように歪んでいたからだ。

小悪魔は立ち上がり、更にもう一度引き金を引く。

先程は足に一発だけであったが、今度は数発。残弾が無くなるまで撃たれたそれは、

小悪魔のロープの内側にある弾薬で補充される。

「おまつ……生きていたのか?」

「く……? く……く……く……く……く……く……?」

「すまん、聞こえねえ」

小悪魔はおちやらけるように片眉を上げた。

口内で撃つたせいとか、喉もやられており、声すらも発することが出来ないのだ。

易者の言いたいことは分かる。彼女は一体何者なのか、と言外で聞いてきているのだ。

その易者の問いに答えるために、小悪魔はロープを下ろし、服を少しだけ下げた。

向けられた背には、小さな黒い羽が一对。それは、彼女が普通の人間ではないという証左だった。

「お前……人間じゃ……」

驚いた表情をする易者に向けて、小悪魔は意地の悪い笑みを見せる。

小悪魔は背中に生える翼を除いて、ほぼ人の姿を模している。だがその翼も服に隠れて見えていないときた。占術を極めた易者だが、まだ魔力を探る事を極めてはいなかった。よって、易者は小悪魔を普通の人間だと勘違いしたのである。

その勘違いが功を奏したのか、小悪魔と対峙していた易者は小悪魔が口の中で引き金を引いた事を、*「彼女が恐怖に負けて自害した」*と思い違いをしてしまったのだ。

「あ、ああ、うう、あ、ああ、あ、……よし、結構戻ってきましたね。流石主の魔力。回復に専念すれば、すぐにこんな大きな傷も元通り」

「騙したな」

「騙してませんよ？ 勘違いした貴方が悪いんじゃないですか。誤解を騙りと言うのなら、この世界の全員がまんぢやくしや瞞着者ですよ？」

「クソ！ だったらお前が撃つた足を治せ！」

激昂する易者。しかし小悪魔はその勢いに怯懦を感じる事もなく、薄笑いのような表情を浮かべながら、易者の言に従う。

「仕方ありませんねえ、もうっ」

「ああ、それで良い。……全く、両足を撃ちやがって。これじゃあ動けな——」

「よいしょっ」と

小悪魔はローブの内側のポケットをまさぐり、ついさつき奪ってきたとある物を易者の頭に被せた。それはまるで元からそこにあつたかのようにぴたりフィットし、流石の小悪魔も頬を緩める。

「これでよし……っ」と

「これでよし……じゃねえよ!! なんで誰とも知らぬパンツを被せてるの!?!」

「パンツじゃありませんよ。シヨーツです」

「もつとダメだろ!?!」

似合ってますよ、と笑いを堪える小悪魔に、流石の易者も堪忍袋の緒が切れたのか、雄叫びを上げながら残った両腕で襲い掛かる。

小悪魔は易者の反撃を予測していなかったのか、小さな悲鳴を上げて易者に押し倒される形となった。

心なしか、押し倒した易者の息は荒い。怒りと疲れ、焦りのせいだろう。しかし今の状況では、明らか別の意味に感じ取られてしまう。

「フー、フー、貴様、絶対に許さんぞ」

「あー、そうまでしちゃいますかあ。あまりオススメは出来ませんよ？ ほら、今の私、翼を見せるためにはだけちやつてますし」

「それがどうしたあ！」

「…… 誤解される”って言ってるんですよ。とびっきりのこわーい魔女に」

「はあ？ それってどういう……」

ぶうん、とハエが横切ったような、重い機械音が鳴る。それと同時に魔方陣が展開され、その魔方陣から幾多もの鎖が飛び出した。

「ほら、きたきた♪」

鎖はまるで意思を持っているかのように易者へと向かっていき、大柄な体格を持つ易者を絡め取った。

易者は必死にもがくが、どうしてかその鎖から逃れることは出来ない。その様子を面白がりながら見ていると、横に噂をしていた主が突然現れた。

「あら？ 人違いね」

「人じゃなくて妖怪違いだと思えますよ。あと、転移魔法が出来るとか主はすごいですね」

「ちやつかり話に混ざるんじゃない。元はと言えば貴女を捕まえるために用意したんだから」

「アハハー。幻想郷、とつても面白かったですよ」

「そう、ならよかった。じゃあ小悪魔、帰るわよ。うちの優秀なメイド長が美味しい昼食を作ってくれているわ」

その一言に、小悪魔が目を丸くする。

「ご一緒してよろしいのです？」

「なにいつてるのよ。あんたは私の使い魔でしょ？ 使い魔に餌をやらぬ魔女がどこにいると思って」

「使い魔をペット扱いしている魔女はいますけどね」

苦笑。それ以上言うなとパチュリーは目で語っていた。

小悪魔はひと息溜め息を付く。なにはともあれ、自分のプライドを傷つけた相手を辱しめに陥れたのだ。結果はオーライだろう。

易者を見る。可哀想な怨霊。彼がああ鎖から解き放たれるのはいつになるだろうか。主の魔力はほぼ無尽蔵だし、勝手に魔力切れで鎖が消滅するなんて事は万が一にも無いだろう。

小悪魔が憐れみの目で易者を見つめていると、奥の草影から姿を覗かせた一人の幼女が駆け寄ってきた。

「お、お姉ちゃん……」

「ん？ ……なあんだ、さっきのバカ地獄鴉じゃないですか。どうしたの？」

「その……さっきはごめんなさい。お姉ちゃんに怯えちゃって」

そんなことか……と小悪魔は独りでに嘆息する。特に期待していた訳ではない。お礼として数円貰おうとか考えていた訳では決して……無いハズ。

「そんなことですか。私は悪魔ですよ？ 怯えられるのは大好物です」

「じゃあ、えつと、あの」

「無理に取り繕う必要はありません。ただ純粹にこう言えば良いんです。この、パーカ！ ……つてね。それじゃあ気を付けけるんですよ。悪魔は何処にでも潜んでいますから」

踵を返して、パチュリリーが用意した転移用の魔方陣に足を踏み入れると、背後から大きな声が返ってきた。

「今日蹴ったことは絶対に許さないし忘れないっ！！ でも助けてくれた事も絶対に忘れないから！！ お姉ちゃん、ありがとおっっっ！！」

パチュリリーと小悪魔が転移魔法で消えていく最中、必死にそう叫ぶ幼女。

「……小悪魔、ほら、ああ言ってるわよ」

「フン、悪魔にお礼を言うとか、私が嫌悪することをよく熟知しているじゃありませんか」

「そう？　意外と嬉しそうな顔してるけど」

「そおんな訳ありませんよお！　全く、主は冗談が巧いなあ」

「……そう言うことにしておくわ」

あちら側から見えなくなり、こちらもある幼女の事が見えなくなってきた頃。

「……………この、バーカ」

何故かその眩きが、あの幼女に届いた気がするの、小悪魔の気のせいではないのか
もしれない……。――。

「――あれ？　パチエ？　何処に行ったの？」

魔法の森、置いていかれた吸血鬼が一日中森の中を彷徨う事になったのは、また別のお話で。

1119季 星と冬と金の年 宴の章
鬼の証明

異変に気付いたのは、ふとしたきつかけであった。

「存在が……薄くなっている」

その細い二の腕を見た。普段ならばきめ細かい肌とその幼い容姿による艶が見える筈だ。否、それは然程変わっていない。だが薄いのだ。艶も、肌も、まるで消えるかのように大気と同化していつている。

理由は明白だった。鬼の証明が成されていないのだ。

萃香は地上に唯一居住する鬼だ。その力は計り知れない程に大きく、妖術も達者である。しかし妖怪である以上、存在を否定されれば当然消えていく。妖怪の死とは、存在の完全否定なのだ。

「紫、幽々子、蓮華、後は旧地獄にいる勇儀……。これだけか」

一人一人指を広げながら丁寧^{ていねい}に数えていく。使ったのは片手のみ。たったそれだけしか自分の存在を知らぬのだ。名ならば聞いたこともあるだろう。どこかの伝記に載っている筈だ。しかし幼い容貌や豪胆な性格、名以上の事は書からは読み取れない。

忘れ去られた者だけが集う幻想郷。

伊吹萃香という鬼は。

いつのまにか、幻想郷でも忘れ去られそうになっていた。

草を蹴る。悩むのは自分らしくもない。行動せよ。頭を使うのも、気分が陰鬱と化するのも、鬼が嫌う事ではないか。

如かずは眼前に聳え立つ紅の館。一度異変を起こした有名な吸血鬼の懷で暴れば、少しは気分も晴れるだろう。

その日は満月が綺麗な夜であった。

蒼く輝く月は、どこか朧気で。少しでも触れれば湖に溶けてしまいそうだった。

「くく……これも異変になるのかねえ」

外壁が苔や植物の蔓に覆われ、ここを通る奴は掃除がされていないのだと勘違いしてしまうだろう。

紅魔館の門壁。そこを守る門番はガーデニングが得意なそう。いつの間にか世話をしていた雑草が、彼女を求めるかのように外壁へとへばりついている様子は、どこか滑稽だ。

「その女の子、止まりなさい。これ以上はアポ無しでは通れませんよ」

「えーっと、確か紅美鈴だっけか。私は貴女を知っている」

「……何者？」

門番は間髪入れず戦闘体勢へ移り変わる。早業だ。戦闘に慣れてる者だけが出来る、無意識に近い戦闘意識。萃香は朱に染まっている唇を、さも愛しそうに舌で舐めた。

「私は鬼の四天王が一角、伊吹萃香さ。覚えておきな」

「鬼は地上を去つたと聞きます」

ああいやだいやだ。結局信じてくれないね。

「じゃあ地上に上がってきたんだ。これで納得出来たかい？」

「天邪鬼、餓鬼と同じく紛い物ですね。純粋な鬼が、こんな場所を彷徨うろついていてたまるか！」

「主の住む場所をこんな場所扱い……。そして鬼である私への侮辱……。従者として不敬を知れ！」

駆けた。地にある石、砂が大きく跳ねる。

今日、この時、珍しく紅魔館の周囲は無風であった。

その珍しさが、月を映す湖を、幻想的な雰囲気の様変わりさせていた。

風は無い。しかし風が無いことは、今この場に於いて異常だった。

一撃、二撃と拳が交わっていく。

華やかな弾幕ごっこではない、泥臭い殴り合い。

美鈴が手を流れるように滑らせ、高速と威力を持って迫る萃香の拳を受け流していた。

「何か目的がおりですか？ えと……鬼の萃香様？」

「特に明確な目的なんて無いさね。ただ自分の名を知らしめる。敢えて言うならそれが目的かな」

「それはなんとも迷惑な」

美鈴が防戦一方から打って変わり、肉付きのよい美しい脚から繰り出される蹴りが萃香を襲った。

だが萃香は足を半歩ずつずらし、難なく躲していく。ナイフだと錯覚するような鋭い脚撃。一度でも当たれば痛いでは済まない。

「おっおっ、流石だねえ」

「それは、皮肉、ですか？」

「そんなに陳腐じゃない。骨ぐらいは有ると思っっているさ」
そして遂に美鈴にとって最悪の時が来る。

萃香の鼻先を狙った、的確な一撃。噛みつく寸前の蛇のように思えるそれは、萃香の鼻先に当たる直前に、カンフーシューズごと容易に掴まれてしまう。

渾身の強さと速さを込めた蹴りを、意図も簡単に掴まれたのは、美鈴にとって大きな

衝撃だった。

試しに脚を引こうにも、彼女が相当な力で掴んでいるのかびくともしない。

「美鈴とやら、心して聞け。……頭を守れよ」

「——つな!?!」

美鈴の頭にその言葉が吸い込まれるまで。

視界が曲線のボヤけを描き、無風であった風が己の頬を叩いた。意識が追い付くまでに要した時間はコンマに満たない。しかし先程の萃香の言葉だけは理解していたお蔭か、すぐに眼前へと迫る地面に対し、頭を守れたのは運が良かった。

「次!」

腕に地面へと叩きつけられた感触を感じた瞬間、浮遊感が身体に染み渡る。

まさか——と思ったのも束の間、次に襲ってくるのもまた地面であった。

地面。地面。地面。地面。間に挟まれる浮遊感に酔いながらも、必ず地面へと衝突した衝撃が脳天を揺さぶる。

「次!」

まだ続くのか——。美鈴がその声に絶望したとしても無理はない。思考が働いてい
るこの瞬間も、美鈴は萃香によって振り回され、地面へと叩き付けられているのだから。

幼い容姿、小柄な体格。華奢な細腕。そこからは想像も付かないような怪力。俄にわかに信

じ難い、彼女の鬼という証言に真実味が増してきた。

砂煙が舞い、風が荒れ狂い始めた最中、美鈴は虎視眈々と萃香の隙を見極めていた。冷静さを取り戻してきた頭で観察する。平衡感覚がどれだけ狂わされており、今の自分の位置はどこにあるのかと。

その時、浮遊感の流れが変わった。風が縦向きに当たるのではなく、横向きに変わったのだ。

(これはまさか……よし、今が好機ッツ！)

風が変わったのは風向きによるものではない。萃香の叩きつける向きが変わったのだ。それを理解した美鈴は、横向きに叩き付ける場合の、最も良い障害物を考えた。

美鈴と萃香は紅魔館の門前で戦っていた。もし叩きつけるのであるのなら……効率と面倒を考えて、紅魔館の外壁が妥当だ。

「次！」

萃香が大きく腕を振った。これがラストチャンスだと自分に言い聞かせ、美鈴は「脱」した。

「おろ？」

「裸足」になった美鈴は、外壁へと当たる瞬間に空中で一回転。地面より垂直に立ち並ぶ外壁を加速装置として、美鈴は力を込めて壁を蹴った。

長い髪を靡かせて突進する様は紅き弾丸。減速せぬよう風を受ける面積を最小限に、身体を限界まで伸ばして萃香へと迫る。

一方萃香は美鈴を投げた動作のまま啞然としている。まさか靴を脱ぎ捨てるとは思っていなかったからだ。

「面白いな」

躲す事は体勢から考えて無理。叩き付けるにも足は踏み込むし、意識もそちらへ行くのだ。反逆の美鈴に身体が対応してくれないのはその為だった。

よって萃香に出来る事は受ける事。正面から、正々堂々と衝突すること。

「私は勇儀とは違うんだけど、ねえ!!」

美鈴の脳天と、萃香の額が衝突した。

鉄骨と鉄骨が同時にぶつかりあったような、重い衝突音が辺りに響き渡り、体格、体的にも劣る萃香の方が押し負けて吹き飛ばされた。

美鈴の狙いは此処だった。戦いの最中、力の差は歴然。萃香の方が一枚も二枚も上手であったのだ。そんな萃香に勝るもの。それは体重と体格だ。

正面から受けるという行為は、どうしても筋力量、体格、体重という物が大きく関わってくる。力という面では勝てる事がない美鈴であっても、体重と体格差では勝てること確信したのだ。

「ぐう……つツツ！」

「まだまだあつ……！」

起き上がりは美鈴の方が速い。

吹き飛ばされ呻く萃香。美鈴は彼女に向かって大きく地面を蹴り、この戦いの幕を下ろそうと止めを放った。

萃香が額を押さえてのたうち回る中、月光に照らされて、いざ自分に止めを放とうとする美鈴の姿が網膜に反射する。

脚に力を入れた。無論躲す為だ。

——しかしそれは叶わない。

「なにツ!？」

「読んでいるぞ!!」

脚が美鈴の足先によって押さえられていた。立ち上がりから近接までのロスタイム。萃香が美鈴を目視するまでの間、美鈴にはこちらの行動を読む時間が大量にあった。追いつめられた萃香の思考は、美鈴にとって読みやすい事他ならない。

「奴ならば咄嗟に感知して躲そうと動くだろう」と。腕の長さから、反撃は考えない。

呻きのたうち回る萃香が躲す為にはどうするか。それは地の利を活かしたローリン

グ。

中国拳法を深く修める美鈴にとって、躲した場合、反撃してきた場合でも、相手の体勢を崩すことは出来る。

まず萃香はこちらに気付いている様子は無かった。憂いは絶っておくべきだと思い、ローリングを前提として萃香の脚を押さえたのだ。

「クソッ！」

萃香が反撃覚悟で拳を握る。

美鈴も同様だ。だがここで決定的な差が生まれた。

(腕の長さが足りない……！)

鬼である萃香。瞬時にその思考へと至ったのだが、同時に後悔も襲った。今この幼い容姿が仇となり、美鈴の一撃をカウンターとして反撃する事が出来ないのだ。出来たとしても軽い一撃に終わるだろう。

萃香は来るであろう衝撃に耐えるため、歯を食い縛る。

今か今かとその衝撃を待った。だがどれだけ経っても衝撃はこない。反射的に細めた瞳を開けると、そこには拳を萃香の顔の前で止める美鈴の姿があった。

「はい、遊びはこれでお仕舞いですよ」

彼女はそう言って、萃香の頭をあやすように撫で始める。

「筋は良いですが、どこことなく一つ一つの動作がお粗末に感じました。貴女がこれから大きくなれば、決着は分からなかったでしょう」

「ぐ!! 離せっ……!!」

自分の頭を撫でるその手を勢いよくはね除け、萃香は逃げるように走り去った。

屈辱。屈辱だ。萃香の心を占める圧倒的敗北感と、鬼である自分にとつて辱しめに近い屈辱。

(クソっ、クソっ、クソっ!!)

鬼というプライドを投げ売って、半ベそをかきながら萃香は暗い魔法の森に消えていった。

さいきよーの実力

ああ、ダメだ。これでは弱すぎる。

萃香は美鈴との戦闘から逃げ帰った後、魔法の森の中で己の失態を悔やみに悔やんでいた。

あれは萃香の敗けであつた。それは否定しない。しかし手加減されたこと。これだけは我慢ならないのだ。

今でも思い出す屈辱感。記憶に入れておくだけでも恥ずかしい。無意識に火照る頬をなんとか治めようと、もう一度湖に向かう。先の門番も湖に近づく程度なら許してくれるだろう。

今は夏の中盤を越えた頃。凍らされた湖は現在ではほぼ溶けてしまい、冬の頃より少しだけ水嵩を増しているかのように思える。

そんな湖で独り。パシャパシャと水が跳ねる音を響かせながら、顔を冷やす。

ふと顔を上げると、大きな光が灯る紅魔館とは対照的に、小さな光が灯されている半球上の氷の塊を見つける。

(あそこは———確か氷の妖精の住処か)

妖怪である前提で、寝所を探すというのも可笑しな話だが、やはり夜風は寒い。今が夏であろうともだ。萃香は寒さに身体を震わせながらも、能力で顔に付着した水滴を拭き取った。

(ちよつとだけお邪魔しようかね)

迷惑だと捉えられるかもしれないが、それで良い。恐怖心でも、鬼としての萃香の存在を広めれるのならば、この力の弱体化も防げるであろう。

妖怪の中には、恐怖心を食べ物に出来る存在が居ると聞き及んだ事がある。もし自分が恐怖心を食べ物に出来ていればなんとも楽なのであろうか。

妖怪を千切っては投げ、千切っては投げて戦かせれば、鬼という存在も維持され、更に腹も満たされるのだから。

萃香は手持ちの瓢箪を持ち上げ、勢いよく中身の酒を飲み干す。中に生息する酒虫の、酒の生成速度を上回る飲みっぷり。何処に行っても、鬼という生き物は酒が無いとダメなのである。

「ぷはあー。さーってと、鬼がかまくらに着きましたよーつと」

小さな灯りが漏れるかまくらは、ほんのり暖かい暖気が外まで感じられる。そして外せないのが喧騒だ。件の氷の妖精が友人でも連れ込んでいるのだろうか。

「お邪魔ーってあれ？ 蓮華じゃないか」

萃香が呼んだ人物。意外と広さのあるかまくらの中で、端っこを陣取る桃色髪の付喪神。そして中央には氷の妖精であるチルノが居座り、彼女を囲むように三人の童女が座り込んでいた。

萃香が知る限り奥から大妖精、紅魔館現当主の妹フランドール・スカーレット、そして……初めて見るが地獄鴉の妖怪か。

「おー、萃香。どうしたの?」

萃香を初めて見る者は、否応なくこちらに敵意を向けてくる。楽しい時間を邪魔した者を、即刻排除足らしめんとする意思がひしひしと肌を叩いた。そんな剣呑とした雰囲気の中で、唯一知りあいである蓮華は暢気な声を上げながら萃香に聞いた。

「いやあ野晒しで寝たくない性分なんでね。ちよつと寝所を貸して貰いに来たのさ」

「あー、ごめんね萃香。今日はフランちゃんとかちゃんとチルノちゃん、そして新しい友達のお空ちゃんを交えたお泊まり会だから、萃香が余裕を持って眠れるスペースは無いんだ」

「そうか……。それは残念だ。それと、地獄鴉が地上に居るなんて珍しいね。不可侵協定は破られたのかい?」

萃香の視線は、地獄鴉である霊鳥路空に向けられていた。萃香の知る範囲では、地獄に関する妖怪は萃香の同族である鬼や爪弾き者の妖怪を多数引き連れて地獄に――

現在では旧地獄と呼ばれる場所で新しい生活を興じているハズだ。

紫と地獄の妖怪とで結ばれた不可侵協定。それは地上の者が旧地獄——通称地底に侵入しない代わりに、妖怪らを殺す能力を性質として持つ怨霊の封印を任せるというもの。

萃香は当事者では無いため勘違いしているが、これは地上の妖怪が地下世界に侵入してはいけないだけで、意外と地下からの来訪は許されているのである。しかしその事に地下世界の住民は良い顔をしていないが。

「あんた、誰？」

「伊吹萃香だ。さっきその蓮華が私の名を呼んだハズなんだが、もう忘れたのかい？
それとも察しが悪いか……どちらにせよ鳥頭かな？」

「なんだと!？」

萃香が口八丁に挑発を始める。それに乗せられてしまう空も空だが、どこかおかしい様子の萃香に蓮華が言葉を発した。

「ねえ、萃香。なにか嫌なことでもあったの？」

それは分岐点であった。

端を発した心配の言葉。ここで萃香には、その言葉にすぎるかはね除けるかの道を選べる権利が出来る。

もし今起こっている深刻な状況を告白したら？

友達思いの蓮華ならば、何を犠牲にしても助けてくれるだろう。それこそ人里を襲撃して幻想郷を追放される事態になってしまったとしても、彼女は私と共に運命を共にする。そんな奴だった、蓮華という人物は。そんな真つ直ぐな性格をしているから、昔の自分は蓮華になついたのであろう。

けれどそんな結末は許せない。鬼としてのプライドが断じて許さないのだ。

鬼は強い。そんな純粋なイメージが固着するほど、鬼とは強い存在なのである。そんな存在が、自らを犠牲にするような奴を巻き込む？

絶対にあつてはならない。

鬼は他人に頼り、迷惑をかけるような下賤な存在なのではないのだから。

「いや、これがいつも私の私さ。幻滅や失望するなら勝手にしていれば良い」

溜め込まねば。溜め込まねば。恨みを。怒りを。そして恐怖を。鬼という自分を維持するためには、存在を認めさせなければならぬ。最も効率が良いのは恐怖だが、最悪畏怖や尊敬でも可だし、敬う気持ちであつても何でも良い。

存在を認めさせれば、それだけで萃香の力は全盛期へと戻っていくのだから。

「そうなんだ……萃香、もし辛かったらいつでも言つてね？」

「ああ……」

「話しているところ悪いけど、私に暴言吐いたよね！ 私、超傷ついた。謝って、謝って！！」

蓮華との話の折り合いが付くと、今度は先程の地獄鴉が話を蒸し返してきた。

萃香はそのしつこさに呆れ返りながらも、嫌々返答を返す。

「すまないな。だが事実を言つて謝れとは。主義主張の境界つてのはあやふやだと思つねえ」

「うっさいうっさい！ 全然誠意が籠つてない！」

萃香は頭を掻いた。駄々をこねる空の瞳には大粒の涙が溜まり、大妖精やフランと言えばおろおろと現に戸惑っているだけだ。

「はあ……さっさと寝所を寄越せ。これは鬼のお願いだ」

「それお願いじゃなくて脅しなんじゃ……」

大妖精が怖じ気づきながら突つ込む。だが萃香にとって聞くに値しない言葉だったので無視した。

次第に剣呑というよりも嫌な雰囲気漂い始める。居心地の悪い、重たい空気だ。

そんな空気をぶち壊す存在が一人いる。その存在は萃香が来てからもずっと黙りこんでいたが、流石に見かねたのか立ち上がつて口を挟んだ。

「ねえ皆、あたいを忘れてない？ 萃香つて奴も、このかまくらは元々あたいの住処なん

だし、喧嘩売るならあたいに売って。全力で買ってやるわ!」

そう自信満々に言い放ったのである。

「へえ……あなた、強いのかい?」

「うん! さいきよーよ!!」

萃香はその可愛い顔からは想像も出来ないような、獰猛な笑みを浮かべる。

最強。そう聞いて、彼女に流れる鬼の闘争本能が疼いたのだ。

「じゃあちよつとだけ私と勝負しない? 勝負内容はそっちが決めたら良い」

「じゃあ弾幕ごっこね。あたい、妖精の中じゃあ負けなしなのよ!」

「ふんふん、井の中の蛙つて言葉を聞いたことがあるが、さしずめ森の中の妖精つてところかな」

チルノはかまくらから出て、ポケットの中に入れてあったスペルカードを取り出し宣言する。

——弾幕ごっこの開始の合図は基本的に当事者間で決められる。チルノにとって弾幕ごっこを承諾した瞬間こそが、弾幕ごっこの開始の合図であったのだ。

「凍符『パーフェクトフリーズ』」

チルノが使ったスペルカードは、チルノお得意のパーフェクトフリーズである。お得意であるだけに強化もされており、以前とは弾幕の密度が違っていた。弾は小さく

り、その分隙間が無くなるよう多く敷き詰められている。

「ハッ、面白い。符の参『追儼返しブラックホール』」

萃香もスペルカードを宣言する。

そのスペルカードは少し異質であった。まず弾幕が一切展開されない。不思議に思つた蓮華ら面々は、次の瞬間そのスペルの恐ろしさを垣間見る。

放たれていた弾幕が動きを止めた。ぶるぶると弾が震える様子は、なにかに抗つていくかのように見える。

「圧倒的密度の応用、ブラックホールに潰されな」

抗つていたのも束の間、すぐに弾幕は萃香のブラックホール内に吸い込まれてしまふ、この場の弾幕は全て跡形も無くなつた。

「なっ!? それすつごくズルいわよ!」

「狡いだと? 鬼の力を狡きに例えるか!」

萃香は目にも止まらぬ速さで肉薄、チルノの襟元を掴む。

「ならば鬼である私の、純粹な力を見せてやろう。萃符『戸隠山投げ』」

軽い身体のチルノは、弱体化しているとはいえ鬼の力を持つ萃香に勝てる訳がなかつた。手足をばたつかせ必死に抵抗するも、萃香は襟元の手を動かさない。

そして大きく萃香が振りかぶる。狙いは霧の湖。全身を力が行き渡り、それを逃がす

かのようにチルノを放り投げる。球を投げるとか、そんな次元ではない。まさに豪速。湖の水を切りながらチルノは霧の湖を横断し、更に奥の森にある大きな木にぶつかって止まった。

「二丁上がり」

「あんた!」

埃を払うように手をパンパンと叩いていると、かまくらの中から一部始終を見ていた大妖精が駆け寄ってきた。愛らしい顔に浮かぶ、怒りの形相。さっきの怖じ気はどこへやら。大妖精は萃香に詰め寄り押し倒した。

「チルノちゃんにあそこまでしなくても良かったでしょ?」

「弾幕ごっこをするんだろ? 他ならぬあの妖精が望んだことだ。お前なんか非を論ずる権利なんてない」

「それでもっ……。それでもチルノちゃんはあなたを傷つけるような事は絶対にしなかった」

「相手がしなければこちらもしてはいけないと? はは、甘言だね。甘すぎるよ、あんた」

大妖精の問い詰めを、のらりくらりと躲していく。その様子が、更に大妖精の怒りを誘発する要因となった。

心なしかかまくらからも幾つかの視線を感じる。これは自分への敵愾心と怒りだろ
う。

これだけじゃ足りない。もっと、もっとだ。

「萃香」

親友が名を呼んだ。私は鬼との区別をつけるため、敢えてこう返す。

「蓮華。私は鬼の四天王、伊吹萃香様だ。敬意が足りないんじゃないか？ あんたなんか、私にとって吹けば飛ぶような存在。実際に飛ばしてやっても良いけど」

「あんたねえっ！ チルノちゃんを傷つけて、お空を馬鹿にするだけじゃ飽き足りず、
ちゃんにも……っ！」

「……………」

萃香は興が冷めたのか、掴み掛かっている大妖精を力づくで退かし、森を飛び越える
かと錯覚するような跳躍で場から姿を消した。

残された者達も皆それぞれの反応を見せるが、重苦しい空気だけは同一である。

「なによアイツ！」

大妖精が怒りをかまくらにぶつける。それが突然だったためか、中にいたフランがビ
クツと身体を震わせた。

「大ちゃん、チルノちゃんを回収出来る？」

「アイツめ、アイツめ、……え？ あ、うん、回収してくる。場所は覚えてるし」
大妖精が思い出したかのように瞬間移動をする。チルノの事になると、大妖精は行動が早くなるようだ。以前は迷惑がりながら付き合っていたのに、今では大きな進歩である。

「なにか……おかしい気がするんだよなあ……」

背中を這いずり回るような不安と、何かが蠢く恐怖。

蓮華は萃香が放った言葉が、どうも本当だとは思えていなかった。

噂

この頃、とある噂が流れているんだ。

え？ 聞きたいって？ しょうがないなあ。

ちよつとだけだよ。

この頃弱いものイジメが流行ってる。

ああ、分かっている。分かっているさ。噂なんてこの程度じゃ流れやしない。本当はもうちよつとだけ深いものなんだ。

んー、そんなに早く真相が知りたいのかい？

まあまあ待って待て。話にや起承転結つてのがある。面白くなるのはこれからだ。

そうだなあ……噂が広まり始めたのは数週間前だ。最初は妖怪ヒエラルキーの中でも、中層から下層の連中が何者かに襲われるって感じだった。

その中層やら下層やらの連中はね、まあ結構人里にも迷惑を掛けている連中でね。人里のお偉いさんは妖怪どもに誅罰でも決まったんだらうと、胸を撫で下ろしながら言うていたよ。

ああ、その通り。お偉いさんにとつちや妖怪なんて目の仇。消えてくれるだけマシになるもんらしい。

それで終わってくれたら、まだ噂にもならなかったんだが。

うん、そうだ。このまま話は続くんだ。

あんたさ、八目鰻の店主は知ってるかい？

知らないのか……そりや残念。じゃあ説明しようか。

昼夜のいつか、リアカーを引いてソイツは現れるのさ。夜雀の妖怪、ミステイア・ローライ。遠くから見ると蛾にも見えるんだが、ありや真正銘鳥の妖怪だね。

それで、ミステイアは人妖問わず八目鰻を中心とした屋台を開いているんだ。おでんとかもあるが、やつぱり八目鰻が格別だな。ほつぺたが落ちそうになるほどだよ。……比喩だからね？

そのミステイアが、襲われたんだよ。

ミステイアも妖怪さ。当然人間よりは強いから、そこいらを闊歩する人里の連中が襲えるとは限らんねえ。

そしてミステイアを皮切りに被害は段々増えていく。有名どころでは、あの食人妖怪のルーミアさえ襲われたらしいんだ。

“振り返り、ではなく襲われたんだ” 私は確実に妖怪のせいだと思うよ。

……うん？ 襲った奴の特徴？

あー、そうさね。なんでも「鬼」って奴らしい。この人里じゃあ聞いたこともねえかも知れねえが、私は知ってるさ。そいつらのことを。

おいおい、疑うのかい？ 私はあんたよりも大分年上だよ。年長の言は聞いておくべきだ。

兎も角、鬼がそんな事をするとは思えんわけよ。

何でかつて？ 鬼は殊更勝負事に誇りを重く置いていてね。卑怯な戦いはしないし、勝敗の賭け事は絶対に守る。

今回の襲撃は底辺や野良妖怪らが襲われている。鬼は強いんだから、こんな存在もあやふやに近い底辺共を襲う訳がない。鬼のプライドすらも擲つような状況じゃ無きやね。

ん、もう少し詳しく？

へへ、欲張りだなあ嬢ちゃん。特別プライス、人参三つでどうだい？

……え、人参を持つてない？ ……ちえつ、じゃあタダで良いよ。けど今度会った時にや、しつかりと払うんだよ。私は耳を尖らせているからね。

あつ、こら！ 私の耳を触るんじゃない！ 敏感なんだよ、そこ。

ウサミミ可愛いって？ だからって触って良いことにはならないさね。あんたが犯

したのは猫の尾を摘まむ事と同じだよ。……まったく、素直に謝るのはよろしい。

その「鬼」の特徴はね、なんでも女の子らしいんだ。それも頭に二本の角を生やして、身体には三つの分銅を付けている。

いつも瓢箪の中の何かを飲んでいる、変な格好の鬼さ。そいつの名前？ さあ？ 知らないね。鬼なんて、人間に幻滅して地下世界に行つたつて聞いたんだけどねえ。

じゃあなんで鬼と分かつたかつて？

そいつは当事者がそう嘯いているからだよ。

真偽不明さ、けれど驚異はある。

ハハ、予想としては、多分そろそろだよ。

何が……つて、知らないのかい？ この人里の連中だつたら持ちきりなんだけどね。噂を私に聞いてくる辺り、世俗に疎い輩かと思つたんだが……若しくはあんた、この人里に住んでいないはぐれものだったり……？

いや、詮索は止しておくよ。私も命は惜しい。あんたの背後からぶんぶんと匂う濃厚な気は、決して良いものじゃないからね。

人里や、幻想郷全体で驚異とみなされた場合、とある人間が動くんだ。

その人間くらいは知っているだろう？ ああ、そうだ。博麗の巫女だ。なんでもこれは聞いた話なんだが、彼女、以前の異変でしくじつたらしい。それで決意を新たにした

らしくてね、いつもの彼女とは思わない方が良い。

おう、約束してやろう。

巫女が本気を出した今、その鬼とやらに勝ち目は無い。鬼といつても、そいつは自分より格下の奴等ばかりを襲っている。きつと弱いんだらうねえ。

だからこそ、一段と力を増した博麗の巫女に退治されるのがオチさ。

そうだね。うん、うん。人參はいつでも良いさ。あんたが返せる時で良い。

博麗は出動したのかだつて？ ああ、したさ。多分今は妖怪の山にでも行ってるんじゃないか？ 目撃情報がそこにあつたらしいし。

へえ、行くんだね、あんた。怖いもの知らずか、はたまた愚か者か。それとも……世話焼きか。

気を付けなよ？ くれぐれも天狗の領域になんて入っちゃいけない。山の麓を迂回しながら進むんだ。

うーん、不安かい、その表情。

そうさなあ。じゃあこれを貸そう。

うん？ お察しの良いことで。その人參のペンダントは当然普通のペンダントじゃない。私の『幸運』が詰まったありがたーいペンダントだ。

それを付けてりゃ、『運悪く』天狗に見つかることも無いだらう。しかも、その鬼に

会えるかもしれないねえ。

ククク、馬鹿言っちゃいけない。奇跡や幸運つてのは怖いもんさ。

精々驚くと良い。体験すると良い。『幸運は何度も続けて訪れる』のさ。

——それと、あんた、妖怪だろ？

なんで分かったって顔してるなあ。

面白い。出血大サービス。

私は噂にならないよう、自分に幸運を掛けてここに来たんだ。実際、あんたには見つかっちゃったけど、あんたも見えていないじゃないか。ふふ、不可視の結界でも張ってあったのかいさね。

なんで聞こえるのかって？

なんで話し掛けたのかって？

ククク、幸運の白兔を舐めちゃいけない。

ウサギの耳は地獄耳なんだよ。

ま、正直言ううと私も少々物寂しかったのさ、口が。

ストレスの溜まる環境なんでね。

あんたと話せて、まあまあこっちも楽しかったよ。

じゃあ、あんたも頑張りな。

「あんたね、この噂の元凶は」

妖怪の山——マヨヒガの近く。

猫の里と言われるほどのこの場所は、いつもは猫の音楽が奏でられている。

猫の間の抜けた合唱は、聞いていてどこか和んでしまうが、今日という日は、猫の声ひとつしかない。いや、猫がいらないわけではないだろう。彼らは物陰に隠れて息を潜めているのだ。それは恐怖によるものか、はたまたこれから起こる戦いへの予知か。

夏の若葉が生い茂る場に、どこか場違いな色の服を着た巫女が乱入する。

そしてそこに腰を下ろしている人物に向かって一瞥。文句を吐いた。

「人里に流布されている噂……知らないとは言わせないわよ」

「……知らないね。でも噂になったんなら上出来ってもんさ」

「反省する意思は無しって訳ね。じゃあ殺すわ」

「物騒じゃないか。その顔に仏頂面は似合わない。せめて般若が良いところだ」

その鬼はこびりついた泥を落としながら立ち上がった。

生憎幻想郷では昨日は雨。夏に珍しい、激しい風雨が直撃していた。人は家の中で身体を縮こまらせていたから知らないが、妖怪の山は酷い有り様だった。

道は泥で泥濘^{ぬかる}み、激しい風でそれらが木や建築物に打ち付けられた。立ち上がった彼女の身体には、まるで打ち付けられた泥が直撃したかのような、そんな様子だ。

しかも、うつすらと見える血の痕。

霊夢には彼女がここで何をしていたか、すぐさま察しがついた。

「そういえば……ここを治める猫の式神は知らない？」

「ああ、殺してはないよ」

「そう……殺して『は』ないのね」

両者は不敵に嗤った。片方は憐れみを。片方は焦りを隠すために。

「スペルカードは三枚、被弾は二回よ」

「分かっているさ」

「なら良いわ。頭を擦り付けさせて、泥んこまみれにさせてあげる」

「私の額は泥とキスするためにあるんじゃないんだけどなあ」

「妥協なさい」

人がいない。夢もない。想いも無い。

ただただ一方的な理由で、その決闘は始まった。

人の鬼退治

大地に亀裂が走る。

鬼の足が踏み込みに使うだけで、泥濘んだ土など紙吹雪同然。大きく泥渋きを上げ、萃香は姿を消した。

噂されるようになったことで、力を少しだけ取り戻した萃香。その身体能力は目を見張るばかりだ。

「博麗の巫女は人間って聞くじゃないか！ 鬼と人の対決なんて久々過ぎて血沸き肉躍るなあ！」

霊夢の背後の木が割れた。萃香が足場として使ったのだ。

「私は迷惑よ。勝手に頭を沸かせておきなさい」

木が割れる音が響く。

「鬼に挑む者は、ある種頭が沸いてるくらいが丁度良いんだよ！」

響く。

「じゃあ蒸発でもしてなさい」

響く。

「気体になりや良いのかい？ お茶の子さいさいだね」
響く。

「大気と同化して一生姿を現さないで欲しいわ」

音が止んだー。

次の瞬間、霊夢が飛翔。天高く舞い上がる。

身体が動いたのは無意識だった。所詮直感というものだ。春雪異変の油断を反省し、気を張り詰めていたのが功を奏したのだ。

(もし「アレ」を喰らってちゃ、楽に死ぬるなんて夢のまた夢ね)

霊夢は眼下に広がる状況を天から見下ろす。

その光景は先程までの静かな場所とは思えないほど、凄惨な事になってしまっていた。
た。

萃香が霊夢の居た場所に深く拳を埋め、その周りには弾幕の嵐が渦巻いている。

左右どこに逃げていても大怪我は免れないだろうそれは、霊夢の命を確実に刈り取るうとした死神の鎌そのものだ。

「流石！ 直感だけは良いね」

「直感はまだ前菜よ。メインディッシュはこれから」

「ハッ、鬼は嘘を嫌う。口だけだったらその口を裂いて殺してやろう」

「あんたこそ私を殺せない癖に、嘘ついてんじやないわよ。神技『八方鬼縛陣』」

霊夢を囲むように目が痛くなるような赤い弾幕が射出。円型状に展開され、回る。さながら陰陽玉のようで、紅白の巫女服を着ている霊夢にぴったりな弾幕だと萃香は思った。

次に弾幕が下を向く。弾幕ごつことは通常空中戦なので、三次元空間の密度を上げるように展開されるが、今の萃香は地上にいる。この時の天の利を見逃す霊夢ではなかった。

空中を埋めるように展開されるはずだった弾幕が、まるで打ち付ける雨のように、直下へ落とされる。

数の暴力は圧倒的だった。すぐさま爆風と噴煙、弾幕の赤い光で地上が覆われていく。

弾丸のような速さで迫る弾幕。悪くなる視界。二次元的な運動しか出来ない地面。これらの要素から、萃香の残機を確実に奪えるだろうと鷹を括っていた。

「甘いよ。甘酒よりも甘い!!」

萃香は首に下げている三つの分銅の内、二つを片手に持ち、上に掲げて振り回した。

独楽のように回るそれは、萃香に降り注ぐ雨のような弾幕を弾いていく。分銅に繋がれた鎖の間を弾幕がすり抜けても、もう片方の手で持っている瓢箪で丁寧に叩き落と

す。

「あんた、やるわね」

「鬼を舐めるな、人間風情が」

「鬼、鬼、鬼って……。あんたは妖怪でしょ？」

「巫女も落ちたね。鬼を普通の妖怪だと認識してる限りじゃあ、あんたに勝ち目は無い。そうだ、鬼の力の一端を見せてやろう。数で計ることなど烏滸がましい、圧倒的密度を！」

「計る気なんてさらさら無いわ。面倒」

「言つてな。符の壺『投擲の天岩戸』」

萃香の合わせた両手の中に、そこらに散らばった小石やら岩石やらが吸い込まれていく。

「大は小を兼ねる」

「そうね。お金は多い方が良いもの」

「いや、それはちよつと違う気が……」

萃香の手の中ですっぽりと収まるような丸い石が一つ、広げた掌に乗っていた。

その石に使われた小石、数百。岩石、丁度百。大小問わぬ大ききさであった筈なのに、萃香の手には石が一つしかない。霊夢は何がしたいのかと首を捻る。

「あんた……お団子遊びでもしたいの？」

「おい、今どこ見て言った。博麗のあんたも同じようなもんだろが」

「私は、成長するのよ」

「貧困窮まれりな巫女が、大きくなるとは思えないけどねえ。豪快に生きろ、豪快に。我欲を持つんだ。あんたは我欲が足りない」

「うっさい。陰徳あれば陽報あり、よ」

霊夢の言葉に、萃香は鼻を鳴らした。そんな絵空事、食えるような物でもない。

人間の心は汚いもんだ。この巫女は人間の道徳心なんて物を信じてそうだが、ならば何故鬼が地上から去ったのか、何れ答えを聞いてみたい。

心の中で自嘲した。期待はもう飽きている。嘘吐きは信用するな。嘘は麻薬だ。一度嘘に沈んでしまえば、特別な存在でない限り、それ以上上がる事は不可能。

故に、嘘に覆われたこの時代。

人と鬼が共存することは……もう、無い。

「お喋りは終わりだ。喰らいな!!」

投擲ホームをとり、全身の力を効率よく運用しながら、その石は投げられる。

霊夢は自前の直感による、石が辿る筈のルートを予測。既に回避運動へと移っていた。

生憎石は湾曲したり、消える事もなく、ただただ直線上の道筋を描いていった。

(まさかこれで終わりじゃないでしょうね)

霊夢は石を避けたのだとどうしても思えなかった。明確な理由は無いが、鳴り続ける甲高い警告音が、頭から離れないからだ。

背後。光が満ちた。

「散れ」

爆発——続いて爆音。暴風が髪を揚げていく。光に隠れて現れたのは、小さな丸い石に圧縮された岩石片であった。

「後ろを気にしてて良いのかあー」

「くっ!!」

萃香が妖力弾を放つ。その数は一目で計れぬほど。まるで蜂の大群のようだ。

妖力弾は小さい。人の顔よりも小さく、朧気に光る。しかし萃香が展開した数は、妖力弾の美しさを「そんなこと」だと断じてしまうほど、激しく、多く、霊夢に襲い掛かる。

背後から迫るは大小の岩石片。

目前に迫るは萃香の力。

背後に迫った弾丸のような小石を、顔を捻るだけで躲す。次に来るのは、萃香の妖力

弾。お祓い棒と陰陽玉を使って軌道を逸らしていくが、相殺した際に発生した小規模な爆発に、視界が包まれる。

見えるのは煙。灰色に濁った視界の中で、霊夢は全神経を集中させた。

躲す。

躲す。

躲す。

躲す。

身体を捻り、躲す。

お祓い棒を使って、受け流す。

舞踏のように、それでいて一つ一つが鋭く磨かれた、格闘技の御披露目のように。

未来を見ているのか……と錯覚しててしまうような、まるでそこに弾が来るのが分かっているような動き、動作。

萃香は目の当たりにする。霊夢の直感という、未来予知にまで匹敵する神技を。そして博麗の巫女と呼ばれるだけはある、その実力を。

「はは……りや面白い」

「ふう……まだまだ隙間もあつて避けやすかつたわ」

額につく汗を拭いながら、粉塵を纏わせ、博麗の巫女は降り立った。

同じ場。同じ大地。

萃香は嘲った。この博麗の巫女は馬鹿なのかと。鬼と同じ大地に立った人間が、どのような末路を辿るかなど、今の幻想郷ではその史実さえ消えている。故に、博麗の巫女を無知だと嘲った。

だが史実が消えた今、状況を制するのは勇氣。鬼の前では簡単に霞みそうになる己との実力差。それを理解してなお、立ち続ける勇氣が、今の場には必要なのだ。

実際、靈夢は目の前の鬼との実力差を把握などしていない。靈夢は、迷惑な妖怪は倒す——以外の思考理念を持ち得ていないのだ。そのせいか、彼女は無知であり。そして無知であるがゆえに、鬼との実力差を知らぬけれども、鬼の場に立ち続ける事が出来たのだ。

「どうぞ、私はこの距離からも避けれる余裕はあるし、好きに弾幕は撃ってくれば良いわ」

「じゃ遠慮なく。符の式『坤軸の大——ぶげっ！』」

萃香の視界が回った。最初に映っていたのは、靈夢の透き通るような瞳。次に、青い空。次に、背後の景色。最後に、泥濘んだ地面。

萃香は重力の赴くままに、地面に顔から激突した。

「どう？ あんたの額の使い方、分かった？ それと……被弾一よ。まさか卑怯とは言

わないわよね」

霊夢が萃香にしたことは簡単。萃香がスペルカードを宣言しようとした直前、顎に向かつて宙返りをしながらの打ち上げ蹴りを放った。まるで強いアツパーを打たれたような感触、萃香の軽い身体は簡単に浮かされてそのまま一回転、地面に激突したのだ。

萃香は震えていた。

それは恐怖か？　　――否。

武者震い？　　――否。

それは――喜び。

久々の人間、しかもその人間が未だ目の前に五体満足で立っており、今では自分が被弾してしまう事態。

存在の確立云々以前の、鬼として原始的な喜びに、萃香は打ち震えていたのだ。

「見直したよ、あんた」

「それは、どうも」

萃香は泥に身体を濡らしながらも、立ち上がる。

「スペルカード、残機ともに一つずつ。そしてあんたはスペルカード残り二枚なれど、残機は一度も減っていない。絶体絶命、ほぼ私の負けだ」

「そうね。……言つとくけど、あんたが負けても治療費は払わないからね？」

「博麗の巫女は私をなんだと思ってるんだい……。そしてそれはあんたにも言えるんじゃないか？」

「私は払わないけど、欲しいのよ」

「分銅ならやろうか？」

「売却金次第ね」

萃香は髪の毛を掻いた。

どうせ逃げられる手段なんてないのだ。そんな下賤な考えは、頭から捨てろ。

「知ってたかい？ 熱が萃えりや爆炎となるんだ」

「知ってた？ 現金が集まると幸せになれるのよ」

「おい、なんだか話食い違ってないかい？」

まあいいや、と萃香は吐き捨てる。

今から宣言するのは正真正銘最後のスペルカード。そして、その危険度合いは今までの弾幕よりも一線を画する。

萃香は霊夢の表情を見た。凜々しくも、怯えない真つ直ぐな表情。その顔は、萃香に挑み敗れてきた猛者と誰一人合致しない、新しい顔。

化け物つてのは人間に退治されるのが常だが、人間ならば、対峙したときに瞬間的に気付く。己が今日の前にしている存在との、種族の差。恐怖、戦慄、何れも種族として

の本能が警告を鳴らすのだ。

だが、違う。彼女は違う。博麗の巫女で、人間で、それでもその顔に怯えは見つからない。

どこか、彼女は怯えという感情からも浮いているのかもしれない。

「これで最後だ。受ける覚悟はあるかい？」

「あんたも、泣きべそかく準備は出来た？」

「言うねえ言うねえっ!! 鬼火『超高密度燐禍術』」

「私に、現金を分けてくれ。宝具『陰陽鬼神玉』」

森羅万象、自然界のエネルギーが、幻想郷のとある一角で渦を巻き始めた。

エネルギーを集める元は、霊力であるかもしれないし、または圧倒的密度かもしれない。

創る――。それぞれの手段で導きだした、相手を殺す術。これは一人の人間が演じる鬼退治。鬼はそれを受ける義務がある。

これは弾幕ごっこという遊びの範疇であるがゆえ、本気で相手を殺そうとする意思は感じ取れないが、もし二人が構成した術がどちらかに当たれば、それは簡単に命を奪えるほどの代物となっていた。

大きな球体が二人の掌に浮かび上がる。

片や霊夢の方は、陰陽玉を模した巨大なプラズマを携えている。

片や萃香はまるで太陽のような、流れる焔が渦を巻き、一つの小惑星に近い存在を形成。

紫電を纏わせながら、霊夢はその球体を萃香に投げる。そしてそれは萃香も同様だ。二つの球体がぶつかりあつた途端、二つは激しい光と熱を発生させ、見るもの全ての眼を焼く。

雷と焔がじゃれあうように絡みつき、遊び、殺しあい。その戦いが苛烈を極めていく毎に、外へと及ぼす影響も更に激しいものへと変わっていった。

大地が暴風に巻き上げられ、地を打ち付ける雷によって、地面が抉りとられた。

焔と雷。災害にも例えられる二つがぶつかった結末は、それはそれは良いものなんてものではなく、「破壊」という二文字だけがマヨヒガに残った。

幻想郷の一角を占める妖怪の山。その一部が、強烈な光と音を伴って、消え去った――。

「ふう、避難が間に合わなかったらかなり不味かったわね」

その惨状を見下ろす霊夢は呟いた。

マヨヒガの猫の里。長閑で恒久的なその場所は、妖怪と人によって、見るも無惨な姿になっていた。

「これならアイツも簡単には生きていないわね。重傷か、最悪死んでるかもしれないけど。ま、自分を恨む事ね。さあて、帰って緑茶でも飲もうかなあーつと」

マヨヒガから去る博麗の巫女。その顔は清々しく、一仕事終えたという感じだ。

——彼女が見えなくなった後、影で戦いの行方を見守っていた桃色髪の神様がその姿を現す。

彼女が结界を張ったかと思うと、驚く事に壊れた小屋から倒れた樹木まで、全てが元の通りに戻っていく。

まるで今までの戦いが嘘であったかのよう。

彼女は土砂の下で埋もれていた萃香を見つけ、引きずりながら小屋の中に入っていた。

萃う。抱く。想う。

「――紫、――香はち――保護してるよ。今は――の奥で――つてる。それで、萃――暴――てた理――て？」

声だ。

「端的に――、鬼の存在の――立が成さ――いのよ。『ラプ――の魔』で見た――ど、――は確実ね。だから――、――しな――」

声。

「それでね、紫――んだ理由は――事にあるん――。妖怪の中でも忘――去られそ――なっている――怪もいる。だから、人里で――を開くんだよ」

懐かしい声。

「うん……そ――良い方法ね。分かった。里主にこちらで掛け合っておくわ」

それは徐々に鮮明になっていき。

「うん、了解。じゃあ私は萃香の様子を見てくるよ。そろそろ傷も癒えただろうし」

誰かの足音が、地面を伝って聞こえた。

それはこちらに向かって駆けてきているようで、その時になって私は寝かされている

のだと気付いた。

所々破けているが、私の全身をすつぱりと覆う暖かい布団。そして、私を覆う変な膜。それは不定形で、私の動作によって、その膜は形を変えていく。

バサツと、襖が開いた。声の聞こえた彼女だろう。

私は反射的に元居た位置に戻り、早鐘のような鼓動を聞きながら、彼女が起こそうとするその時まで寝ているふりをする。ちよつとした悪戯心だろうか。彼女を知っているからこそ企んだ悪巧みである。

「萃香萃香萃香、萃香ーをー食べーるとー甘いー!」

なんだその歌は。

閉じた瞼の先で、私の名前を使った変な歌を歌う友達存在に、心の中で苦笑する。

手がー触れた。友達の手が、布団の縁に差し掛かる。服と布団がそれぞれ擦れる感触を感じながらも、早く、早くとその友達が私を起こそうとするのを待っていた。

「あ、布団温かい」

そいつは一言発して、私が入っている布団の中に潜り込んでくる。

全く、私を起こしにきたんじゃないのかい「蓮華」。

様子を見てくるよとの言葉はどこへやら。しばらくそのまましていると、隣から寝息が聞こえてきた。

私はゆつくりと目を開ける。

そこには案の定、桃色の旋毛が見える。蓮華だ。桃色の髪なんてこの幻想郷にはそう
そういないからね。分かりやすい事この上ない。

それよりも、ここは何処だろうか？

どれだけ記憶の中を探っても、あの博麗の巫女に吹き飛ばされた時の瞬間が最後の記
憶のようだ。そこから先は覚えていない。

勝敗がどうなったとか。博麗の巫女は無事だったとか。現状と現在地はどうか
……とか。

取り敢えず寝ている蓮華をそのまま寝かせておいて、私は襖を開ける。

そこには誰も見えず、少し首を捻った。

意識が覚醒したばかり、まだ朦朧としていた。そのお蔭で声の主が誰か、判別出来な
かったのだ。

(寝ている時間が仇になったか。まあ良い)

己の拳を見下す。

強く握られた五つの指。

だがその強さは仮初。自らのプライドと引き換えに手に入れた、叛骨の力。

このままじゃあダメだということは、自分がよく分かっている。なにが鬼だ。馬鹿

じゃないのか。

既に博麗の巫女と戦った時の力はほぼ消え去っている。奴が私を倒したと、人里にでも触れ回って噂の火消しを行ったのであろう。

今の私は最強の鬼であるが、最弱の鬼である。鬼であれば弱き者を甚振らない。鬼であれば正々堂々と。鬼であれば……自分より強き者と相対する。

博麗の巫女には感謝しきれない。

弱き者を強者面をして圧倒する、最低の鬼を彼女は討伐してくれたのだから。

(ごめん、蓮華)

彼女「達」が私を保護したという事は、既に何らかの策を講じてくれているだろう。

蓮華にも感謝している。とつても、とつても。

だからこそ。感謝しているからこそ、彼女とは共に歩めない。

鬼とは人の敵。

鬼とは倒されるべき存在。

鬼とは強き者。

強き者は孤高だ。頼るプライドなんて持ち合わせてはいないからね。だから、プライドを引き換えになんて出来ない。

私はもう一つの襖を開けた。光が漏れ、陽射しが強く私を刺す。

玄関に置いてあつた靴を履き、私は蓮華を置いて、その小屋を後にした。
たった一人。然れど一人。

「私は伊吹萃香。……弱い鬼さ」

忘れ去られようとしている妖怪の力は、脆く、弱い。

ならば、ほぼ全ての妖怪が自分より強いということだ。

「萃え。強き者よ」

下剋上だ。鬼の強さを示してやる。

「最強を以て、最弱を制せ」

ここからだ。ここからなんだ。

「私は最弱を以て、貴様ら最強を制そう」

萃う。

夢を抱く。

想う。

たった一人で形成される百鬼夜行。

背には屍。彼女が切り開いた道には、多種多様の死の山が出来上がるだろう。

終わりはない。

一日という概念が続く限り、百鬼夜行は終わらない。

「轟かせよう、鬼の息吹を!!!」

萃夢想は、たった独りの鬼の号令で始まった。

妖怪の山——哨戒地区。

通常は多くの哨戒天狗達が見張る場所であり、天狗の長、天魔様の御殿に最も攻め入り易い場所。

それ故に、他の地域よりも固い警備となっている。

そして哨戒天狗の中の一人、白狼天狗である犬走権は、その異変に気付いた。

(なんだあれは……)

権にはとある特殊能力が備わっている。それは千里を見通すという力。文字通り目を媒介にして、妖怪の山全貌を見渡す事も出来るとか。

しかも武芸にも秀でている。

その力故に、哨戒天狗の中では監視役としても一目置かれており、幾つかの班を纏める立場でもある。

そしてその千里を見通すとまで言われている権の目が、とあるものを捉えた。

それはかなりの速度でこちらに向かつており、止まる様子は無いようだ。

権は大声でこの地区に属する哨戒天狗に警戒命令を出す。武器を携帯させ、いつ戦闘が起こつても良いように。

「権様、速度ニ一ゴーマル！ こちらに到着するまで残り数分です！」

その物体を捉えた部下が、大声でその報を発す。

残り数分。たったそれだけの時間でこの拠点に到着する。それぞれの哨戒天狗達の頬に、汗が伝った。

（これは拙いな）

これではダメだと権は感じた。それぞれの肩に力が入りすぎている。どうにかして肩の力を抜かせたいが、時間は刻一刻と迫っていく。

時間がどうしても無い。そう決断した権は、大きく息を吸い込んだ。

「貴様らツツ！ そんなに怯えてどうするツツ!!」

普段の無口な彼女とは思えない、大きな声。

その容姿から可愛らしいとも評され、哨戒天狗達の中でも人気が高い犬走権。そんな彼女が声を振り絞っている。

哨戒天狗は見た。そして、魅た。

凛々しく鼓舞する彼女の、なんて強かで美しい事か。

集団の中の、一人の哨戒天狗が雄叫びを上げた。

そしてそれに呼応されるように、それぞれが声を張り上げていく。

「そうだ、それで良い!! 相手はたった一匹。そして我らは数十。怯える必要などない!! 数とは力!! 我らは弱くとも、集まれば幻想郷の一角でもある天狗の誇るべき先兵である。誇れ! 誇れ! 自らで自らを鼓舞せよ!!」

「ああ、俺達ならやれる!!」

「ぶっ殺せ!!」

「怯えてる奴は後ろに下がれ!! 俺がやるぞ!」

「それは俺のセリフだろうが!!」

場が燃える。喚きなんかでは到底ない、激しい炎。声が力となり、声が恐怖に打ち克つ武器となる。

「来るぞ!! さん、に、いち——」

観測班が吠える。来るのだ、何らかの敵が。この地区——いや、皆とも評されるべきこの場所を襲撃するとは、ほぼ確実に天狗への宣戦布告だろう。

どんな奴かは知らないが、ここで天狗の力というモノを見せつけなければならぬ。うだ。

それぞれが武器を構えて身構えた。

待った。

待った――。

待った――。

待った――。

待った――。

だが、いつまで待っても目標は来ない。

「観測班、どうなってる!」

「す、すすすすいません!! 今こちらも確認を行っているのですが――」

「ですが……?」

「その申し上げ難いのですが……」

観測班のメガネの男が、困ったかのように頭を掻く。

「対象が消えました!」

「なんだと?」

椀は目を疑った。

姿が消えただと?

そんな、有り得ない。今も目は展開している。上空にも、妖怪の山全域にも、そんな生物は見当たらない。

ということは……信じたくないが、確かにその生物は“消えたのだ”。

「椀班長、ど、どうします?」

近くにいた気弱な哨戒天狗が声を掛ける。それは切羽詰まった声ではなく、この不始末をどう片付けるかに傾倒を置いているようで……。

そして、椀がその哨戒天狗の顔を見た瞬間。

ここから先はコマ送りのようだった。

まず、空間が揺らぐ。その現象を視認し、手を伸ばしかけた所目の前にいた哨戒天狗が消えた。

そして一瞬の悲鳴。それは背後から上がった。

——何っ!?)

背後で待機していた哨戒天狗。その悉くが舞い、手足が空を切る。

椀は呆然とするしかなかった。消えた哨戒天狗は武器として、その存在に振り回され、身体が歪んでいく。

一瞬の間が空き、臨戦態勢へと入った他の哨戒天狗らも、その存在の速さに翻弄される。

とある者は首を絞められ。

とある者は関節を外され。

とある者は振り回されている哨戒天狗に当たり。

とある者はゴム毬のように跳ねて。

それは地獄だった。

勇士が。強き兵らが。

天狗の一部隊が簡単に壊されていく。それはまるで幼い子供が、好奇心で積み木の山を壊すように。

悲鳴と怒号が交差し、場は声に溢れた。

それは先程のように力を与えるような物ではなく、見る者、聞いた者を恐怖へと陥れる阿鼻叫喚の讚美歌。

それはたった一匹の、その存在によってもたらされたものだ。

——足が勝手に動いていた。

——喉が勝手に泣いていた。

同胞を打ち倒すそいつに一矢報いる為に。

そして哨戒天狗の部隊がほぼ全滅仕掛かっている時、その存在が動きを止めた。

突然足を止めたので、杖も咄嗟に足を止めてしまう。

「あんた……強そうだね」

その存在がこちらを向いて呼び掛けた。そしてそれは思っていたより高く、透き通るような声だ。

「……子供？」

「子供じゃないやい！ 伊吹萃香だ、覚えておきな！」

伊吹萃香と名乗った童女。顔は哨戒天狗の血に濡れ、ぼろ雑巾のようになった先程の気弱な兵士は、萃香が手を離すと力なくずり落ちた。

「その伊吹萃香様が何用で？」

「言う必要があるのかい？」

「ええ、こちらも理由次第では丁重にお帰し致します」

椈のその言葉に、萃香は目を細めただけであった。

「丁重に、ねえ……目を見りや分かるよ。現世に帰すつもりなんて無いくせに」

「で、理由は？」

既に会話を切り捨てている椈。萃香はその様子から、必要な事以外は自分と話す気は無いのだと悟った。

「そつちの長、天魔に会いに行くわけよ」

「それで？」

「あー、まあ、力を示すために戯れるって感じかなあ。ちよつと激しい戯れだけどね」

「そうですか、分かりました。では、排除します」

「おうおう、早速かい？」

椀は足を踏み込んだ。そして踏み込んだ音が萃香の耳に届いた時には、既に椀の姿はない。

(流石天狗の集落。速い)

萃香は口笛を吹きながら、*“振り下ろされるであろう刃”*の切っ先を、指で摘まんだ。驚きの声が背後から聞こえる。それに対して萃香は笑みを返す。

「これくらいなら、まだ余裕だね。最弱の鬼にも敵わない」

「くっ……………」

一度椀は距離を取る。見切られるとは思っていなかった、必殺の奇襲攻撃。一旦態勢を整わせる為に、数歩間をおく。

だが、それを待つてくれる萃香ではなかった。

「なあに逃げてんの」

盾を介して眼前に姿を現した萃香。椀は身の危険を即座に感じ、紅葉の描かれた盾の前に力の限り押し出した。所謂、シールドバツシユの形である。

——が、萃香は微動だにしなかった。

激しい警告が鳴り響く。

柩は更に距離を取ろうとして、萃香の足払いを避ける事が出来なかつた。

「逃げててどうする？ それだからシールドバツシユにも力が入らないんだ」

まるで彼女に手の中。自分を覗き込むその視線には落胆と失望が混ざっていた。

……確かにそうじゃないか。自分は恐怖していたのだ、この童女に。足を縮こまらせ

た踏み込みなんて、そりゃあ奇襲も盾も使いこなせる訳がない。

この童女の言う通りだ。私は今まで何のために戦っていたのだろうか。恐怖か？ それとも逃げ道を作ろうとする自分自身を鼓舞していたのか？

「違うでしょ」

「おう、良い眼になった」

泥を払い、立ち上がる。大剣と盾を拾い、もう一度構えた。

「来なさい、もう怯えないから」

「恐怖を克服したか。流石つてところだね」

倒れ、呻く哨戒天狗の中にも、意識が有る者はいる。彼らはただ一言も発さず、彼女ら二人の戦いを固唾を飲んで見守っていた。

白狼天狗

劍と拳が交わる。その度に火花が散った。

棍の攻撃方法は一つ。盾で攻撃を防ぎ、劍で相手を倒す。それのみ。しかし、妖怪として長年鍛練を続けたその技は、見事と言う他ない。

盾は微妙に逸りがあり、中央で受ける場合は頑丈な盾となる。当然、それ以外――受け流すという動作にも、その盾は対応する。曲線状に少し逸りがあるお陰で、受け流す際にも無駄なく力の行き場を感わせる。

今も、萃香の蛇のようであり弾丸のようとも取れる左の一撃を、体捌きを活用しながら盾で受け流す。

力を振り絞った際の攻撃が外れる事は、存外苛立ちが募るもので。拳を放つ萃香も、自らの頭の中で沸騰していく間欠泉のような苛立ちに、少しばかりの不安を感じた。

そしてそう間も無い内に棍の反撃が行われる。

次に振るわれるのは大きな劍だ。棍の背の丈ほどありそうな黒鉄で出来た大劍。それは劍のようでありながら、斬ることに特化されていない。どちらかと言えば、押し潰すに良きを置いたような形状だ。

初めて見る者には、その剣が剣だと判別しにくいだろう。対峙している萃香も、さながら鉄塊のようだと認識せざるを得ない。

「フンツッ!!」

強い掛け声と共に、大剣が地面を割った。

それは萃香が大剣の振り下ろしを躲かしたという結果であり、同時にその大剣の威力を示す機会にもなった。

土が、堅く硬く固められたその大地が、まるで西瓜割りの西瓜のように、弾け飛んだ。砂利が飛ぶ。泥で水つ気を帯びた泥の飛沫が、萃香の可愛らしい顔を汚す。

打ち付ける雨のように顔へと当たる泥飛沫。その中の一つが眼球へと刺さった。視界が、一瞬だけ泥によって塞がれる。

それを当然見逃さぬ楯。地面に食い込んだ大剣を、力強く引き抜くと同時に萃香へと振るう。

萃香は予測していた。そして振るわれる直前の風の動きや音によってある程度のルートを絞り、足捌きでは避けられぬと判断、咄嗟に地面へ倒れ込む。

空気を裂いた「ー」なんて軽い表現じゃない。更の上、空間を裂いたのだ。実際には、空間を裂いたと勘違いするほどの音と剛速で大剣が振るわれただけが、少なくとも萃香はそう思った。

「意外とやるじゃないか、あんた」

「どうも」

萃香は棍が大剣を振り終わった瞬間を見定め、地面に手を付き、そのまま力強く両の足を突きだした。狙うは顔。有り余る力を利用した、ほぼ死角からの両の脚蹴り。

萃香は決まると確信した。何故ならば、棍はこちらに一度足りとも視線を向けていなかったからだ。彼女は気付いていない。そう思ったからこそ、萃香は確信出来たのだ。

「……だが。」

「なにっ!？」

萃香の放った蹴りは、棍に直前で避けられ、しかもその強靱な牙を以て噛みつかれてしまう。

（奴はこちらを見なかったはずだ。何故分かつ……っぐう!!）

痛みが、思考を打ち切る。何が原因かなど考える暇などなく、振り回された際に起こる視界の点滅を、まるで他人事のようにぼうつと眺めながら、現実という名の地面に打ち付けられる。

小さい血が飛んだ。それは自らの鼻から出たのだと気付くには、一拍遅れる。

「ぐ、畜生っ!!」

電流が迸るかのような痛みが、萃香の顔を焼く。

多分、鼻が折れた。そして、遅れてくるように噛みつかれた脚の部位が悲鳴を上げる。白狼天狗は、他の天狗と違い牙があるのだ。それは狼としての血が混ざっているお陰か、それとも進化の系譜か。何れにしても、その牙を活かすように白狼天狗の多くは下顎の力が強い。椀ほどになると、噛み付いたまま一人を軽々と振り回せる強さを持つ。

そして振り回すということは、当然振り回される側の人間にも負担が掛かる。主に遠心力や重力などがそれに当てはまる。萃香もそれについては例外ではない。鬼としての元々の強靱な肉体を持つからこそ、脚ごと噛み千切られてはいないが、それでも痛いものは痛い。

足をばたつかせて抵抗するも、椀は離さない。

痛みに耐える萃香に対して、椀は止めを刺そうと、今度はプロペラのように振り回し始める。

これには鬼と言えど堪ったもんじやない。

風圧による視界の圧迫に加え、遠心力と激しいGによる一部身体の機能の低下、そして最も不味いのが込み上げてくる吐き気である。

普段、こんな状況に陥る事なんて滅多にない。故に、慣れ以前の問題。耐性なんて付く筈もないのだ。

痛みが。不快感が。吐き気が。身体中を芋虫のように這い回る。早く開放されたいと残された思考で必死に考えるも、主導権は楯だ。例え無様に許しを乞うても、例え萃香が身体中の体液を撒き散らしたとしても、この地獄は終わらない可能性だってある。

途端、顔が青褪めた。

いつ、いつ終わるんだ、これは。

まだか、まだなのか……！

手放しそうになる意識。だが、もし手放してしまつたら、萃香の敗けが確定する。強くなると誓つた矢先に、だ。戦いとは、闘争とは想定外と理不尽の連続。地力で相手が勝っているのならば、漫画のように逆転劇など起こる筈もなく、ただ蹂躪されるのみである。

嫌だった。負けるのは嫌だ。

それは純粹な本能。

人の負けず嫌いという性格からも見て取れるが、生物は負けるのが嫌いである。古来、闘争という生存競争に身を置いていたからか、生物の根底には勝利への渴望と敗北への恐怖が見え隠れしている。

鬼というのは、その性質が極端に拗れてしまった者の末路……とでも言うべきか。

とにかく、鬼は勝負が好きで、負けるのは嫌いなのである。そしてその遺伝子は、忘

れ去られた鬼である萃香も身に宿していた。

「ぬうっ!!」

弓のように身体をしならせ、椀の服の裾を掴む。

掴めたのは垂れた袖裏。上半身の衣装と分離していたのが僥倖だった。けれど、椀はそれを理解して尚振り回すのを止めない。

鬼の腕の力。白狼天狗の下顎の力。その二つが拮抗し、二人は同じ体勢のまま固まって動きを止めている。この状況、一見同じ均衡を保っているように見えるが、圧倒的不利なのは紛れもない萃香の方であった。

無理な姿勢、不安定な力、脚部に突き刺さる鋭い牙。しかも脚部の方は、激しい痛みと血に濡れている。

萃香は長期戦は拙いと思った。けれど今の状態ではどうすることも出来ない。

絶体絶命。

言葉で簡単に表せるほど、分かりきった状況であった。

その時、椀が動いた。なんと盾を落とし、空いた手に潜む原始的な武器――所謂、爪というもので、自分の袖を引きちぎったのだ。

萃香は直感で理解した。この後に起こる、地獄を。

汗がどっと吹き出た。まるでスローモーションに出来事が移り変わっていく。今は

椀が袖を引きちぎった事で、自分の手が虚しく空気を切ったところだ。

(ああ……嫌だ。私は鬼だ。こんな犬ところに負けるなんてあつてはならない)
途切れぬプライド、自信。

(畜生、畜生！ 私は弱いけど……強いんだ！ そう、強いんだよ!!)

手が椀から離れ、椀が下顎に再度力を入れる。

(まだまだ、ここで終わるような私じゃないだろ？ 考えろ、考えろ！ 打開策を！ こいつが私を振り回す時の弱点を突くんぞ。弱点、弱点……あつ)

萃香の服装は、白のノースリーブに紫のロングスカート。伊吹瓢と三つの分銅は戦闘に必要無いと思い、既に疎めてあつた。

萃香は分銅の中の一つを萃め、今まさに振り回さんとする椀の首回りに放り投げた。また地獄が始まる。

終わりの無い不快感と吐き気が交互に責め苦を強いてくる。だが分銅については気付かれていない。重さと存在感を極端に疎めているからだ。

廻る。廻る。

世界が廻る。

ああ……何か思い出しそうだ。

『私は独自の輪廻を持つているんだ』

『輪廻……輪廻転生の輪のことかい？』

『ああ。だから、私は死なない。存在の領分を超えて、輪廻を狂わせない限り』

『蓮華、あんたは凄いな』

『……萃香の方が凄いな。種族としての生を全うしようとするその姿勢、尊敬に値する。

二代目の私は、仏陀の一人、『ゴータマ』に会って種族としての生を否定しちまったからね』

『ゴータマ？ 誰だい、そいつ』

『偉大な方だよ。如来と言えば分かるかもしれないね』

『如来……そりや凄いな。蓮華は一体何歳なんだい？』

『秘密。でもきつと、驚くよ』

『ハッ。いつか私があんたに勝った時に、その秘密を包み隠さず喋ってもらおうかね』

『ああ。心から望んでいるよ』

『皮肉か？』

『いいや期待だよ、萃香』

蓮華……………。

もう、あの時のあんたはいない。

私はあんたの思い出を糧にして、幽鬼のように戦わせてもらうよ。

「ぐうえつ……………」

突如回転が止まった。そして虫を潰したかのような、短い呻き声が下から聞こえる。とうとうその時が来たのだ。意識を失うかの勝負だったが、どうやら私の勝ちのようだ。

「なんだ……………これば……………ぐうぶつ」

「呂律も回らないのかい。食い込んでるもんね、首に」

棍を苦しめているのはたった一つに分銅。最初、首に巻き付けられたそれは、萃香を振り回していく内に蛇のように食い込んでいき、ついに常人ではほどけない程の強度を以て棍の首を締め付ける。

喉を搔くように分銅をほどこうとする棍。噛み付いていた萃香の脚の行方を気にしてる暇などなく、ただただ酸素を求めようと分銅を動かす。……が、まるで意思を持つ

ているかのように、中々離れない。

彼女が落ち着いていけば、案外簡単に分銅による拘束は解けるのだが、如何せん彼女は焦っている。もたつく指は更に分銅の鎖を複雑にしていき、まさに自分で自分の首を絞めている。

焦り。それは息を吸えないという状況下では仕方のないことだ。普段無意識に息をしている人妖にとつて、突然息が吸えなくなる状況は、意図も容易くパニックに陥れる。椀も例外ではない。彼女は今まで体験したことのない死への恐怖と、着々と迫る自分の身体への限界に焦りを募らせていた。

それは明らかかな隙。既に萃香の脚は見当たらず、椀の「能力」を使っている余裕さえ無い。

苦しむ椀。振るわれる脚。笑みの萃香。

状況は逆転し、それを裏付けるように萃香の無事な方の脚が、椀の顎を蹴りあげた。地面から足が離れる。脳内に生成される、痛み緩和の快樂成分に酔っていると、椀はまた現実に戻される。息の吸えない、という生き地獄に。

萃香が拳を放つ。それは椀の鼻つ柱に当たり、大きく吹き飛んだ。ある程度吹き飛ばば、萃香は自分の腰に巻き付けられた鎖を引っ張る。それだけで、標的が戻ってくるのだ。全くのノーガードで。

一撃——二撃——三撃——と何度も同じ工程が繰り返される。

その度に柩は夢に浸り、現実には浮上する。

「能力は使わないんだね」

「……………」

「声も出せない……………か。ま、それでも良いさ」

交わった拳と蹴りはそれぞれ二桁に上り、柩の意識もそれに比例するように、深く、深く沈んでいった。

(強い……………強い……………)

今度は腹、次に脇腹に大きな衝撃を受けて吹き飛ばされる。

「ぐおえ……………」

(意識がボヤける。ああ、皆……………天狗の皆……………)

今までの恨みを晴らすとでも言うように、萃香は攻撃を止め、今度は柩を振り回し始める。当然、柩の首を絞める鎖の根元を持って……………だ。

「ぎ……………ぐ……………え、あ……………」

(私、まだまだだ。未熟だ。だから守れなかった)

廻る。廻る。

柩の世界が廻る。

『千里先を見通す程度の能力』を使って、こいつの死角からの一撃を読んだとしても）彼女らの戦いを観戦していた哨戒天狗らは、皆一様に絶句していた。

その戦いがあまりにも凄惨で、あまりにも無慈悲だったからだ。

（勝てない。勝てなかった。皆……ごめー）

鬼の動きが止まる。それに連動するように、棍が物理法則の流れに従って地面に落ちた。

身体は力なく脱力し、その瞳には既に生氣は灯っていない。

あまりにも最悪な決着に、哨戒天狗らは一言も言葉を発せずに行った。いや、発せなかったのだ。もし発せば、次はきつと標的が自分になってしまう。その恐怖が、喉に栓をしていた。

そしてあろうことが、天狗らは憐れんだ。

部下への攻撃を止める為に単身で勇猛果敢に挑み、そして散ってしまった棍を見て、自分はあるなりたくないとの心の底の底で安堵してしまった。

「ふう、満足した。さて、天魔の所まで行こうかな」

彼女の言葉がキツカケだった。この場を離れる旨の発言。もう被害は広がらないという安心感。

それが、漏れたー。

「フツ」

固まる哨戒天狗の団体。その中の誰かが発した、安堵とも憐れみとも取れる一つの呼吸音。

その単音は萃香の耳に届き。

また新たな悲劇を生み出した。

「今、てめえらの上司を見て嘲った奴は誰だい？」

哨戒天狗、重要警備拠点。

最も統率され、最も練度の高い人員で構成された大部隊。

その大部隊が今日のこの時、鬼の怒りを買った者を含めた全員が重傷を負い、全滅した。

天狗部隊

「ーっハ、ーっハ、ーっハ、ーっハ」

規則的に息を吐き出す。

急いで足を動かす度に、噛まれた方の脚が痛みを訴える。妖力は、哨戒天狗が己に感じた恐怖によりある程度は回復したが、治せる速さは限られる。

そして、今の私には悠長とした時間なんてないのだ。

背後が爆ぜる。

「クソッ、まだ追ってくるか！ しつこいぞ鴉風情が！」

それは妖力による妖術……等では断じてない。

現在萃香は追われているのだ。それも天狗のエリート部隊によって。

彼らは私が空中に至る方法が無いとするや、空中から攻勢を仕掛け、一方的にこちらを消耗させてくる。

哨戒天狗からの畏怖を受けた事による、力の増加。しかしそれは妖怪として、強者としての確立であって、鬼としての確立はまだまだだ。如かずは先程の戦いで売名行為でもしておけば良かったと少し後悔する。

思いきり身体を捻った。

秒という時間さえも置いていき、風を纏ったナニかは萃香が今いた場所を横切っていた。

目視など到底出来そうもない、視認不可な飛来攻撃。十分な数が合わさった今の天狗にとって、これほどの有効打は他に無い。逆に考えれば萃香にとって最悪の状態という事だが。

「負けを認めろ、名無し妖怪。貴様は現在空中で包囲されている」

知らねえよ！……と心の中で精一杯の悪態をつく。空中戦に突入できる妖力は無い。突入出来たとしても、空中戦に特化した天狗数十体相手に立ち会えるとは到底思えない。今は逃げの一手。目指すは天狗らの泣きどころ、天守。

更に加速を続ける。自分自身の存在感を極限まで薄め、天狗らに罫を踏ませよう。

「卑怯だぞ、妖怪！ さっさと姿を現せ！」

「そうだそうだ！」

「卑怯だぞ、妖怪——！」

卑怯なのはあんたらだろうに。

自らが絶対に安心だと思えるような位置に居座り、何も出来ない私を見下している。

元はと言えば、この山を仕切っていたのは四人の鬼だ。私は蓮華と一緒にいたかった

から統治を半ば放棄していたが、それもここらで終わらせよう。

今こそ鬼の恐怖を取り戻す為に、一から始める。

まずは天魔だ。アイツを倒さなきゃ話にならない。既に代替わりはしているだろうが、天魔の血はどの天狗よりも優先される。

天魔とは個人に与えられる名称ではない。天魔とは、一つの種族名なのだ。

代々脈々と受け継がれる天魔という種族の血。なんの因果か、どれだけ天魔の血を引いていようと、選ばれるのは一人のみ。そして選ばれた者には、今まで天魔が受け継いできた技術と共に知識も受けとる。それを呪いと取るか、祝福と取るか。

天狗にとっては祝福らしいが。全く集団心理つてのは怖いもんだねえ。

「いたぞー」

マズイ、見つかった。

妖怪の山に植えられている樹木林の影から見える、黒い翼。太陽の光さえ遮るそれは、数十体の天狗らによって大きく展開され、真正銘闇が訪れる。

妖怪の山に射し込む光が奪われたー。

その瞬間、びゅう、と風が打たれる音。

「良い手だ……まさか私の視覚を奪おうなんてね！」

来る……ツツ！ 文字通り風を切つて奴等が来る！

暗闇。真つ暗な世界の中で時は進む。

耳を凝らせ。聴こえるはずだ。レーザーのように加速する天狗らの息遣いが。

——瞬き。

そして、痛み。

そして、地面に叩きつけられた。

腹部の辺りに何かが当たった——と思った瞬間、不意に浮遊感が訪れ、数秒の時間の後、地面と思わしき物に叩きつけられる。

(目視でも天狗の突貫は見えない。視界が防がれるとこれか！)

瞬間的な痛みは、今では鈍痛のように重く芯に残る。これが繰り返されるのか。ただただなじられるように、何度も何度も。

溜め息が出た。それは、先の白狼天狗によって付けられた右足の傷に起因する。今では先程の集落を襲うときのような速さは出せない。右足の機動が痛みによって奪われているからだ。故に、いつか追い詰められる。いつか、この理不尽を打ち破らねばならなくなる。

鬼とは理不尽なもので、当然その報いのように、今まで虐げてきた奴等に理不尽な目に遭わされ死んだ奴を知っている。名前はもう覚えていない。鬼にしちや優しかったから、大江山占拠の時には連れていかなかった。

死んだら、いつか忘れられる。

偉大な功績を後世に残した者ならいざ知らず、野たれ死んだ奴にはなんの手当もない。

それが普通で、生物共通の唯一平等な規定であつた。

——吹き飛ばされる。やはり見えない。

「ごほつ、ごほつ、チクシヨウ、くそー」

私だって、元は死ぬ運命だったさ。

源のなんとかつて名乗る変な奴に罾を仕掛けられ、大江山が墓場になるところであつた。

それを救つたのが、何を隠そう蓮華だったのだ。

多分あそこだな。未来が変わつたのは。進むべきレールが方向転換したのは。

——脇腹に強い衝撃。

私の軽い身体は、勢いの止まない独楽のように回った。狙われたのは右側。私の右足が怪我をしている事を見抜かれたのかもしれない。

「ぐうっ、く……ふう、ふう……」

大江山以前にも、実は私と蓮華は会っている。

確かあつちが私に勝負を仕掛けてきたんだっけな？

都で暴れる悪名高き鬼に興味が湧いたとかなんとか。ふふ。力比べは私の惨敗だった。あの時からだろう。私の運命が狂い、また新しく始まったのは。

——右足に激しい痛みが駆け抜ける。

鋭い、鋭い痛み。滑空してきた天狗の一人が、足が弱点だと分かり早速攻撃でもしたのだろう。

手探りで右足付近を探ると、固い感触。それは下に下がれば下がるほど、固く鋭くなっていく。

これは……大振りのナイフか。天狗の野郎、私を地面に縫い付けやがった。「こん、なもの……!」

力を込めて、一思いに抜く。ぬるりとした血がナイフの先から水滴のように落ちて、地面を汚す。

この正確性、仲間の中に夜目が効く者がいるのだろう。鳥だから鳥目だと侮っていた私のミスか。

蓮華はその頃は武芸が達者で。見たこともない武術を幾多に渡って披露してきた。その度に私は翻弄され続けたものだ。今となつては懐かしい。

味わつた事のない敗北。私の目頭はそれに耐えきれず、蓮華が目の前にいるのに泣きじやくつたんだつたか。

流石に可哀相だとも思つたのか、それとも見かねたのか。蓮華は私を優しく慰め、一つ一つ技の解説をしてくれた。

今思えばなんて無様な事だったのだろう。

泣くどころでは留まらず、負けた相手に教えを乞う。鬼として許せない。……だが、確かに学べた事は多々あつた。

そうだ、確かこういうとき、有効な技を覚えてくれたんだっけな。なんだったっけ。私の能力と相性が良いと言っていたはず。確か……やり方は……。

風向きが変わった。また来る。

今度はどこを狙う気だ？

突進。目で追えない。

暗闇。

風。

柔い。

軽い。

ああ、そうだ。

思い出した。

羽根のように、なるんだった。

一介の鴉天狗は、上司である大天狗に頭が上がらない。それは、天狗の徹底された縦社会が関係していた。

天狗の縦社会で最も頂に立つのは、天魔その人である。そこから大天狗。エリート階級。と下がっていき、最も下に位置するのが哨戒天狗である。

序列は主にどれだけ上の者に気に入られるかで決まり、そのせいか強さと階級が釣り合わない事もしばしば。

現在数百の単位で構成されるこの大部隊を取り仕切るのは、大天狗と呼ばれる存在。しかしこの部隊には下っ端といえど、大天狗の力を上回る者だっているだろう。

その中の一人。大天狗の力を上回ると揶揄されている一人の青年が、他の天狗のように黒きドーム状の空間の中へと突っ込んだ。

彼が大天狗から言い渡されたのはただ一つ。

『目標を殺せ』

短く、それでいて大きな意味のある一言。

青年は強い。そして智恵もある。故に、一言で全てを理解した。

腰に下げた細身の剣を抜く。それは外界でレイピアと呼ばれている突きに特化した剣で、見ることにさえ許さぬ剛速を持った天狗からしてみれば、一度突進しただけで一瞬

で相手の首をもぎ取れる便利な武具だ。

しかしその流通は少なく、認められた者くらいしか帯刀する事を許されていない。音をも置き去りにして、跳ぶ。飛ぶ。翔ぶ。

空気抵抗を最小限に。

そして速く。鋭く。直線に。

対象はこちらを見てさえいない。

勝った。

つい頬が緩む。もし今回の任が終われば、大天狗に昇格できると大天狗様直々に許可と許諾を頂いている。

こんな女の子一人殺すだけで良いなんて、なんて楽な仕事なんだろうか。

「討ち取っ——」

剣先が、目標の首に刺さった。

——確かに、突き刺した。

——確かに、殺した。

——確かに、その感触がした—— 筈だった。

「自身に対する反影響力を疎め」

滑空と突貫を終え、螺旋を描きながら飛翔する最中。

「自らを羽根のように、自らを風以下に」

聞こえた。確かに、声が。

「中国拳法では、『消力』シヤオリって言うんだっけ。本当は技術と長年の鍛練が必要だけど、私は能力でそれを補い、更に昇華させた」

その声は忍び寄る蛇のように、優しく呟いてくる。

「自らに掛かる影響力を高めて、逆に留めようとする反影響力を疎めれば、ある程度どんな姿でも模倣は可能。それこそ、風に吹き飛ばされる羽根より自分を軽くする事だっ
ね」

「うわあああああああ!!!」

奴は俺が滑空時に発生させた風の流れに身を任せ、まるで空中に漂う羽根のように俺の攻撃を避けた後、俺の位置をそれで大体把握したのか羽を掴んで背後に付かれる。

天狗にとって羽は一種のステータス。その神聖なモノを汚す輩は絶対に許さない。

「離せ、離せええええツツ!!!」

大声で喚き散らし、俺は無理矢理上空へと飛行する。漆黒の翼で塗り潰されたドームを抜け、青空輝く空に身体を預ける。

ドームは天狗以外を通さないように囲んでいる。あのドームさえ抜ければこっちのもんだ。

「ふ、ふふくあはは、バカめ、もう一度地獄を味わってろ!!」

「味わうのはあんただけどね」

「えっ——ぶぎゅ!」

顔を掴まれ、更にその上から拳を叩きつけられる。

それがきつかけとなった。

墜落していく一人の仲間を見て、突入部隊の面々はそれぞれ一様の反応をしていた。

ある天狗は驚き。

ある天狗は悲しみ。

ある天狗は義憤に駆られ。

ある天狗は嘆きを溢した。

そして反応をした面々も、次に起こる出来事を予想する間も無く、次々と墜ちていった。

「何が起こっている! 状況確認はまだか!」

「確認しても意味無いよ。今の私は影が薄いんだからさ」

「なに!?!」

迫っていたのは小さな手。

こんな小さな手でも、その威力は桁違いだ。

鉛弾がひしやげるような衝撃音。何事かとそちらを見た天狗らは、その光景に絶句した。

自らを率いる大天狗。その大天狗の鼻が吹き飛んでいた。一瞬の出来事。速さを謳う天狗でさえも、萃香の放ったパンチは見えなかった。

「ハハッ……そろそろ力戻ってきたね」

「たっ、退避いーいー!!」

「……までやって逃がすわけないよ!」

空中に陣取る天狗達は次々と地に落とされていく。それは大天狗やエリート階級も関係なく、ただ平等に萃香の鉄拳は下された。

墜ちた天狗達は、多くの仲間が下で展開していた漆黒のドームに雪崩れ込み、精密に計算されて形成された陣形を破壊していく。

悲鳴を上げる者。勇ましく剣を拵む者。

守ろうとする者。逃げ惑う者。

既に上司の命令に強制力はなく、皆がてんでバラバラに掛かってくる。

「さて、……もクライマックスだ」

崩れかけの陣形。

チームプレーの体を為していない協力戦。天狗達を縛り付けていた鎖は解けてしま

い、今度は己の目的の為に行動し始める。

こうなってしまうては、天狗らに未来はない。高い身体能力と、それぞれの欠点を補う陣形戦術。その前提が崩れてしまったのだ。

天狗の中で突出した能力の持ち主がいるのであれば、チャンスはあっただろう。しかし大天狗が落とされた今、その殆どが戦意喪失。脱兎のごとく逃げ出していく。

鬼と天狗。先ほどまでの立ち位置が、今度は逆になっていた。

追う側と追われる側。

攻める側と逃げる側、受ける側。

いや、これは異常なものではない。

そして変化でもない。

ただ戻っただけ。

鬼と天狗の関係が、一昔前と同じになっただけである。

逃げる、逃げる。私は逃がすつもりはないけど。

拳が振るわれた。暴が振るわれた。

たった一つのワンアクション工程。

それだけで恐怖が伝染していく。

「さあて、逃げる先は強き者かねえ。天狗ども、私を案内しておくれよ!!」

無邪気に、残虐に追い掛けていく。

これが鬼だと。

これこそが鬼の姿だと、声高に示すように。

残酷な力は振るわれた。

「あやや？　鬼がどうしてここに？　ここは天狗の集落。故人はお帰り下さいな」

確かに萃香の目論み通りだった。

逃げ行き、追い付く先には。

強者がいた。

清く正しい鴉天狗

「あんた……私を知っているのかい？」

「ええ、それは勿論ですとも！ 偉大なる鬼の四天王様ですよね？」

彼女はそうハッキリと答えた。ハツタリではない。名も知らぬ目の前の天狗は、私の事をハッキリと四天王だと言いつつ切ったのだ。

鬼についての文献はこの幻想郷に残されていない。よって今日の前に佇む少女は、鬼が地上にいた頃を知っている天狗というわけだ。

「天魔のお付き？」

「な訳ないでしょ。……そうですね、知らないと思いますし自己紹介でもしておきましようか。私は射命丸文。清く正しい文々。新聞の編集兼記者です」

射命丸文。そういうえば風の噂で聞いたことがある。一ヶ月に五度、人里で新聞を配る天狗。その内容は記者の印象に偏っており、信用性はほぼ無いと言われていた。

文々。新聞か……蓮華がいなくなる前にもそんな新聞があつたな。この天狗は、かなりの年月を生きている天狗なのかもしれない。

「で、あんたは鬼の私になんかようかい？」

「いやいや、そんな恐い顔しないで下さいよう。私はただ良い記事が書けそうな種がこの近くにあるってことを嗅ぎ付けて、ここに来ただけですから」

「……種とは誰の事かハッキリと言ってもらって良いかな？」

「プライバシーですのて」

「妖怪に人権があつてたまるもんか」

「差別ですよ？」

「差別じゃない、区別だ。まず種族自体違うだろうに」

私をおちよくってクツクツと笑う文。

……全く、嫌だねえ。

この天狗、実力を隠している。それも巧妙に。

飄々としながら、その視線は私の首をしつかり狙っていた。油断は出来ない。

それに一つ気掛りな点がある。

「この天狗に私は勝てるのか……という単純明快な気掛りだ。まず文が現れた時、私にはその姿が視認はおるか感知さえできなかつた。気が付いた時にはそこにいたのだ。」

天狗は種族的に速度が速い。けれど大抵の天狗は鬼の反射神経、視認可能速度に於いてほぼ見切る事が出来る。意識していなくとも、私には感じる事が可能なのだ。

もし見えていなければ、先程の天狗包圍陣を打ち負かすことが出来なかっただろう。まあ見える事と感ずる事は別で、更に躲す事となればもつと別だけど。

「そういうえば鬼の萃香様は、犬走椀……という天狗を知っておられますか？」

……名前、知ってるじゃないか。こいつ。

私はこの天狗を警戒しながら質問に答える。

別に質問に答えなくても良いが、この天狗にだけは慎重にいききたい。なにせ文字通り今までの天狗と格が違うのだから。

「知らないね。どんな天狗なんだい？」

「紅葉柄の盾を持った、大剣使いの白狼天狗です。ついさつきこちらの集落に瀕死の状態で運び込まれました」

「……ああ、思い出した。そりや災難だったね。あんたの友達だったのかい？」

「……いいえ、友達なんかではありません。仲は結構悪い方ですよ。だから清々していません」

「おお、そりや良かった」

「でも、寂しいんですよねえ」

私は後ろに手を回しながら、見えないように分銅をもう一つ萃める。いざという時の武器だ。

私が突然分銅を萃めたのは、一応理由がある。

その理由とは、鬼の直感から導き出されたもの。

鬼とは生粋の戦闘種族で、戦闘に関わる技術や才能は元から備わっている者が多い。故にその強さは、経験や能力に傾倒する傾向にある。

直感もその内の一つ。曰く相手との力量差を見極めたり、戦闘の流れを掴むためにも相手の初動や機敏を見抜く為に鬼が備えている能力だ。その直感が、けたたましく警笛を鳴らしていた。——逃げろ、と。

私と文の力の差はかなり離れている。私の全盛期には遠く及ばないが、今の私ではかなり手に余る状態だ。

そして私の直感が告げる。文が戦闘態勢に入った……と。多分きっかけは白狼天狗の件。あそこでこの天狗の目の色が変わった。仲が悪いなんて嘘。本当は心から信頼しあった関係なのだろう。

「それで？ ……あんまり時間も掛けたくないんだ。そこを退いてくれないかい？」

「おーっとと。もう少しだけお時間を下さい。どうです？ 私とお茶でもしませんか？」

「一人で茶柱でも立ててな」

「そんな殺生な。数分で終わっちゃいますよ」

「へえ。『茶柱を立てる程度の能力』でも持つてそうだね」

「残念、惜しいですよ」

「惜しいんだ……」

身体の状態を確認。

切傷。身体全体に十数ヶ所。血は止まっている。

打撲。腹部や太腿、腕や身体の各部に数カ所ずつ。

咬傷。右足脹脛。傷は深く、かなり内部まで及んでいる。血はまだ収まっていない。

刺傷。右足の甲。貫通しており、靴には穴がぽっかりと空いている。歩きにくい事と

機動力減衰の為、集中して治療中。

各部箇所には傷は見られるが、なんとか戦闘は可能そう。脚に力を萃める。いつ掛かってきても良いように、私は警戒を高めた。

「それで、椀の事なんですけど。アイツ、泣いてたんですね」

「……………」

「不甲斐なさで心が一杯なんでしょう。あんな姿見たくありませんでした」

「……………」

「私はもう見たくないんです。悪夢に出そうですし」

「だから、仇討ち……って感じかい？」

文は勢いよく首を左右に振り、まるでどこか悟りを開いたかのような、諦めの混じった笑みを浮かべる。

「そんな高尚なもんじゃないです。私はただ文々。新聞を仕上げたいだけ。だからこそ、鬼が破れたって号外は一面になると思いましてね」

「私は鬼として知られていないんだ。それ以前に人里で鬼を知るものはいないんじゃないかな?」

「良いんですよ。妖怪の山の奴等だけでも分かってくれば」

「不毛だ」

「不毛かどうか決めるのは私だよ、鬼」

様子がガラリと変わる。

本性を現したか……と自分勝手に決めつけるが、そういえば天狗つてのはこういう奴等だったな。久しぶりに会ったから忘れていたよ。

上の者には媚びへつらい。

下の者にはここぞとばかりに蔑みを向ける。

どこも間違っていない、ちゃんとした天狗の姿だ。

私は屈む振りをして、少しだけ靴を脱いだ。踵だけ半ば靴からはみ出ている状態だ。

分銅も既に持った。これで十分。逆に言えばこれしか無いんだけどね。

「私をどうするつもりだい？」

「そりゃあ決まってるわ。裸にひんむいて、十字架にでも縛り付けて、人里か天狗の館にでも展示しようかなって。鬼としての存在も広まるし、私も新しい記事が書けるし、どっちもwin winの関係よね」

「残酷だね。それこそ天狗だ」

「褒め言葉だとー受け取って置きますよっつー！」

消えた。

そして次の瞬間、私に見ていた景色が切り替わる。さっきまで栄養分たっぷりの雑木林だった光景が、一瞬の内に岩肌へと変わる。

腹部への痛みから、喰らったのは突進か拳か。何れにしても文はかなりのスピードで私に攻撃を加え、私の身体を大きく吹き飛ばした……という事実は変わらず、結果どれだけ警戒していても、文の速度には直感でさえ追い付かないと確信した。

「ぐっ……へ……えっふっー！」

体内の内容物が競り上がってくる。

速いー重い。嘔吐なんて情けないことは嫌でも見せたくなくて、能力を使い吐き気を疎める。

背後には岩肌。これは激突か。

私 が 身 構 えて いる と 不 意 に 横 腹 へ と 痛 み が 走 る。

「ぐうっ……っ……」

「余所見してて余裕がお有りです？」

速 さ が 伴 っ た 蹴 り を、思 い き り 横 腹 に 叩 き つ け ら れ た。文 に は 然 程 筋 肉 が 付 い て いる と は 思 え ない。し か し そ の 速 さ を 支 え る 身 体 は、相 当 な 鋼 鉄 そ の も の だ ろ う。

私 は そ の 後 も 地 面 に さ え 触 れ る こ と も 叶 わ ず、文 に 蹴 り も の に さ れ る。

「ほらほらあ！ 鬼つてのはこの程度!」

深 く、深 く 下 腹 部 に 文 の 足 の 先 が 突 き 刺 さ っ た。

意 図 せ ず し て 喉 か ら 呻 き が あ が っ た。

チ ク シ ョ ウ、私 で も 分 か る。こ の 速 さ は 凶 器 そ の も の で あ り、文 を 守 る 盾 そ の も の だ。こ ち ら が 一 方 的 に 蹴 ら れ 続 け、逆 に こ ち ら の 攻 撃 は 一 切 当 た ら ない。

攻 防 な ん て 欠 片 も 成 立 せ ず、蹂 躪 と 呼 ば れ て 差 し 支 え る か ど う か。

私 は が む し や ら に、踵 だ け 半 ば 脱 い で い た 靴 を 思 い き り 飛 ば す。鬼 の 純 粋 な 脚 力 は、他 の 妖 怪 の 追 随 を 許 さ ない。ま さ し く 弾 丸 そ の も の。大 き さ を 考 え れ ば、砲 丸 が 弾 丸 の よ う な 速 度 で 飛 ん だ と 言 え ば 良 い の だ ろ う か。

私 に 再 度 追 撃 を 加 え よ う と し て い た 文 は、直 線 上 に 加 速 を 続 け て いる。こ れ で は 避 け き れ ない。

当たればそれでよし。躲す為に速度を緩めれば、そこを一気に攻める。

私は薄く笑む。私は空中で思い通りに動けないが、隠し持っていた分銅がある。これで白狼天狗の時のように絡めとれば、後はこちらのもんだ。

私はその瞬間を待った。奴が……文が止まる瞬間を。

私の靴は特に風の影響を受ける事もなく、ただ一直線に進んでいく。その威力たるや、然りとて文も無傷ではあり得ない。

文の速度を考えると、着弾時まで一秒もない。

さあ選べ。受けるか、躲すか。

そのどちらも、お前の終わりだと知らずに。

そして靴は真つ直ぐ文に着弾。

「……………しなかった。

「はあ?」

萃香が見えたのは一瞬。それも飛ばした靴が不自然に文を避けて曲がる瞬間。それはまさしく超常現象、靴が直前で曲がるなどと。

私が気の抜けた声を出すのも仕方のない事だろう。風の影響も受けていなかった。なにか仕掛けが施してあった事もない。では、何故？

「……いや、なんとなく分かった。『風の影響を受けなかった』、『仕掛けも無かった』」。

「……多分そうじゃない。逆だ。」

これは推測の域を出ないが、多分文は能力を使ったのだ。それも一切悟らせず、高速で。

文は先程言っていた。『茶柱を立てる程度の能力』に惜しいと。

更に仮説だが、茶柱とは生半可に立つものではない。

時には風、時には強い芯……軸が必要だ。そして今起こった私の靴の不自然な方向転換。恐らく文の能力は、『軸をずらす程度の能力』または『風を操る程度の能力』ではないのだろうか。

これなら説明がつく。……まあでも、天狗つてのはすぐに嘘を吐くからね。信用性はかなり低い。

私はまた腹部に強い一撃を貰い、今度は吹き飛ばされる。吹き飛ばされた先は地面

だ。空中での鬨りはもう終わったようだ。砂煙を上げて、私は固い地面に叩き付けられる。

「ゲホッ、コホッ、ふー、ふー……」

砂塵が舞い上がっている今なら、多分天狗はなにもしてこない。文は慎重だ。万全に万全を期す。何故なら奴は鬼を知っているからだ。鬼つてのは純粋に強い。今まで良い流れだったものが、ちよつとしたミスで大どんでん返しを喰らうなんてのはベタだ。目標が確実に視界に入らないと、攻撃は一切しない。今少し戦ってみて、思ったことだ。

私は痛む身体を必死に動かして、砂塵の中を進んでいく。一旦身を隠さねば。これ以上のダメージは不味い。

ああ、歩きにくいなあ。片方の靴が無いから尚更。いや、脱げば良いか。

その時、文を倒す良い方法が一つ浮かび上がった。しかし首を振って忘れる。その行為は騙し討ちそのものだからだ。

「私は……正面で勝つて決めてるんでね……」

そのまま歩いていくと、少し開けた場所に出た。

開拓でもしていたのだろうか。まあ良い。今の私には丁度良いくらいだ。

私はその開けた場所の中央に陣取り、胡座をかいて体力の快復を待つ。右足の甲は靴

下ごと血に濡れて、少し気持ち悪い。そしてこれを見られれば一瞬で理解されるだろう。私はここが弱点だと。いや、それで良いのだ。あの天狗は新聞記者をやっている身故、理解が速いだろう。そして必ず私の足を甚振ってくる筈だ。そこを突く。

ここから先は運否天賦。だが運くらい、天狗の速さを破れるのならば幾らでもくれてやる。

その間に身体の節々へ刻まれた痛みを消さねば。

「あややや？ こんな所にいたんですか。探しましたよ伊吹萃香様」

来たか……。

「身体も痛そうで、なんとも皮肉ですね。今まで見下してきた天狗に下剋上をされるとは」

……奴の視線を見る。ああ、予想通り私の怪我に気付いたようだ。文の事だ。今頃優位に浸っているのだろう。機動力が無い鬼。危険なのは腕力だけ。しかし自分に速さを以てすればそんな危険など無いようなもの。

勝った……と心の中でほくそ笑んでいるだろうて。

「どうです？ 負けを認めませんか？」

「ふう……」

「今なら土下座でもすれば、私の溜飲も下がるかもしれませんよ？」

嘘だ。溜飲が下がるだけで、後ろ手に構えているカメラは逃さないだろう。

「……すう」

「それとも私の髯りものにもなつて、裸にひんむかれ——」

「ごちゃごちゃ煩い！ 私を怖がっているのか？」

天狗は小言を続けた。このままではダメだ。焦りを、怒りをこいつに与えねば。冷静になられると、狙い通りにいかないかもしれないからだ。

だからこそ、私は一喝した。

「なに？」

「止めを刺せば良いものを、口八丁で時間稼ぎ。ハッ、鬼への下剋上？ その程度でちや

んちやら可笑しいな」

「貴様……」

「さあ、射命丸文!! そちらから行かぬなら、こちらから仕掛けてやろうぞ!!」

文は涼しい表情を崩さなかった。しかし私には分かる。今の文の心は、業腹で煮えくり返っている頃だ。天狗は下の者にはここぞとばかりに蔑みを向ける。そうやって見下していた相手から、逆に見下されたのだ。ここまでプライドを傷つけられて、笑顔でいられるほどの天狗は聖人ではない。

「分かりました。止めがお望みなのですね。しかし私には新聞を発行するという仕事も

あります。半殺しで勘弁してあげましょう」

「……………はあ」

「……………」

「この腑抜けが」

「お前ツツツツ!!!」

とうとう本性を現した。

奴は即刻狙ってくるだろう。文が消える瞬間、見ていたのは私の右足だった。

「……………全神経を集中させろ!!」

「……………直感で相手の攻撃の矛先を感じろ!!」

「……………目を瞑るな! ……怖がるな!!」

「……………奇跡を、掴めええつつ……………!!」

振り下ろされる踵。通称踵落とし。それは真っ直ぐに萃香の右足へと落ちていく。文は確実に破壊するつもりであった。その傷付き、血に濡れた右足を。

そして、文は気付く事になる。

「掴んだ」

「なっ……………!?!」

自らの自信。誰にも追い付けないと自負していた、己の速度の敗北を。

萃香は直前で胡座を組み直し、肘と膝で文の足首を挟み込みように押さえた。鬼の全力を以て押さえられた足首。プチプチと何かが千切れるような音を聞きながら、文は絶叫する。

文はその速度故、何者かの攻撃によつて傷付いた事が殆ど無い。その為か彼女は痛み慣れていないのだ。

脳をつんざくような痛み。押さえられた足をグリグリと押し込まれる度に痛みは剣となり、文の身体を足先から順に切り刻んでいく。

目から漏れ出る涙は止まらず。

口から漏れる悲鳴も止まらず。

足と脳に痛みが津波のように襲い掛かり、身体全身には電流が迸ったかのような錯覚を受ける。

「離して、離してえ……」

首を何度も振つて懇願をするが、萃香は意地の悪い笑みを浮かべて更に力を強める。

身体が痛みで仰け反った。もう全身が痛い。

痛みの嵐に晒されている。

「どうだい？ 格下だと思つていた鬼に下剋上される気分は」

「ぐう……く、……ふう……」

鬼は嗚咽を漏らす天狗を不憫とでも思ったのか、優しく足を解放する。

先程より一気に痛みが引いたからか、文の頭は元の冷静さを取り戻しつつあった。

（くそ、クソウ！ バカにして……っ！）

涙が滲む目を凝らしながら、歯を食い縛った。

自分を見下す鬼に対して、沸々と怒りが点つていく。それは痛みの不平等さから来る理不尽な怒り。なんで私が必要な目に……という吐き出しようもない、霧のように霞んで朧気な不満。

こんな気分は、数千年前にも一度味わった事がある。

文は天狗として自分の産まれた種族を誇りに思っていた。彼女が新聞記者をする上で、天狗の速さは必要不可欠だからだ。

とある昔、彼女はその誇りを汚される出来事があった。

天狗にとって天魔という存在は自分達が仕える絶対な王であり、アイドルや神のように信仰する程の神聖な立ち位置であった。

幼い頃の文も、当然天魔の事を慕い、憧れていた。天魔の存在と強さとは、まさに種族に於ける天狗としての誇りそのものである。

だがその幻想もすぐに壊された。

その世代の現天魔が鬼によって殺されたと聞いたときは、耳を疑ったものだ。

天魔を殺した者の名前は……もう覚えていない。覚えているのは、山の四天王と呼ばれた鬼の誰かが殺したということ。

怒りを覚えた。そしてもやもやとした言葉に出来ない不快感と不満を知った。

鬼は卑怯を嫌うということは知っている。

だが奴等は、天狗の生きる指針である天魔を殺した。その理由がどうであれ、相手の生きる指針そのものを消すなんて、それは卑怯そのものではないか？

天狗という種族のウィークポイントを狙った、紛れもない卑怯ではないのか？ ……

と、幼い頭で義憤に駆られたものだ。

久しぶりに思い出した。だから私は鬼が嫌いなんだ。

今日の前で私を傷付けた奴はなんだ？

鬼じゃないか。

鬼なんだ。あの、鬼なんだ。

射命丸文は普段力を抑えて生活している。全速力と言ってもそれは全速力ではなく、良くて本来の力の六割……といったところか。

文自体負けず嫌いが祟って、本気を出せばもう後が無いという思考が必ず片隅にある。

よって、彼女は本気を出さない。出さなくても自分に追い付ける奴なんて居ないのだから、出す必要さえ無い。……そう思っていた。

ムカつく。苛立つ。この鬼だけには負けたくない。

「どうだ。射命丸文。負けを認めるか」

「ふふ……な訳、無いじゃないですか……。勝つのは私ですよ」

痛みは引いた。どうしてか分からないけど、多分怒りに押し潰されたのだろう。

私に出来ることはもう殆ど無い。睨むか、精一杯の抵抗か。……だが、もう私にはそれで十分だ。

見せてやる、天狗の速さを。射命丸文の底力を!!

無事な右足に力を込める。

自分の能力である『風を操る程度の能力』を全力で応用、活用し万全を期す。もう負けない。負けたくない。

天狗は思いきり地を蹴って、萃香に突進した。

音を置き去りにし、光の速度に接近する。

生物が再現出来る限界速度を優に越し、数mという短い距離を瞬間的な速さで翔び抜

ける。

その速さはコンマにも満たない。秒間などでは測る事など不可能で、当然生物が視認できる事など確実にあり得ない。

自らを速さを纏った武器へと変換し、鬼打倒を目標に文は全速力を出した。

(勝つのは私だ。鬼を打倒するのは私だ……！)

萃香は反応できない。文にはそれがなんとなく理解できた。いや、理解できたからこそ、勝率の高いこの方法を使ったのだ。

例えば今まで速い物を見ていて、それより少しだけ遅いものを見ると、感じかたが違うらしい。実際はどちらも速いのに、目が慣れたお陰か反応出来るようになる。

だがその逆もあるだろう。目が慣れないからこそ、反応できない。

今までの文の出していた速度は三割も良いところ。本気の全速力を見たことがないこの鬼には、見切ることなど不可能。

故に防御態勢に入る間もなく、文は鬼と接触した。

勝った事を確信する。流石の鬼と言えど、光の速さに迫った人間大の物体に耐えることなど無理だ。

所詮勝つべくして勝った勝利。普段ならば虚無感に苛まれるそれは、今回だけは虚無感の欠片もなく、もっと別の感情。……そう、達成感に溢れていた。

「私の勝ちだ!!」

そして萃香は消え去った。

光速に耐えられる筈もない。かの鬼は耐えきれず四散したのだろうと勝手に決めつけた。

勝利が確定し、一瞬速度を緩めたその時。文の頬に拳がめり込んだ。

「ぐえあつ!!」

その拳は小さかった。

その拳は痛かった。

その拳は強かった。

「……なつ、なんで——」

拳を放った張本人である萃香は、大きく跳躍し、もう一度拳を振り上げる。

「鬼の直感、友から習った技術、天狗という種族の理解度。私にはその三つが有った。だからあんたは負けるんだよ」

萃香が使ったのは『消力』^{シヤオリ}という技術。文が速度を上げる度に、その分空気抵抗は増す。その空気抵抗に萃香は自らの影響力を萃めた。

文の頭頂を基点として大気が切り裂かれていくと、空気は横に流れる。その影響力を受けた萃香は、空気に乗って文の突撃範囲から脱け出したのだ。

全速力も出した。それは全力だった。

しかし最後の最後、文は気付く。

(そうだ、そうだった。怒りに燃えて気付かなかった)

(いつもの私なら必ず行う行動、それを怠っていたんだ)

(“情報収集”。鬼には知識があった。私に足りなかったのはそれだったんだ)

どこか清々しい表情をしながら、一人の鴉天狗は鬼の拳によって地に沈んだ。

鬼の狂宴

「ぜえ……ぜえ……もう」

最後の最後、文との対決で、天狗部隊に使った影響力を疎める技術を発揮したが、どうも消費が激しい。

違うか。これは受ける影響力によって消費量は変わってくる……と考えれば合致する。

「あまり無闇に使える能力じゃないなあ……」

しばらく歩いてみると、山の頂付近に大きな割れ目があった。下を覗いてみると、まるで崖だと錯覚するくらい深い。耳を凝らすと水の荒れ狂う音が聞こえるので、大方崖下には水が流れているのだろう。

そして向こうの崖壁に、大きな屋敷が見えた。断崖絶壁に沿うように建てられたその場所の下には、幾つもの邸や建物が見える。あれが天狗の集落だろうか。だとしたら、私はやっと天魔に会えるのである。

幾度戦ったか。そしてその数少なくともは言え、得れた物は多かった。

既に日暮れに入っている。山登りで時間が掛かりすぎだと一人でこちた。

そのまま大回りをするのもなんだかと思ひ、両足に力を込めてひた走る。靴を履いていないので、靴下の布越しに伝わる砂利が痛い。

だが今はそんな事を考えている暇などなく、ある程度助走をつけたと思ひ大きく跳び上がる。飛行なんて言えるようなもんじやない、お粗末な跳躍。

数十m……いや、百あるのかもといった崖の幅を優に飛び越し、一気に天狗の集落に到着した。

「うおっ！ き、貴様は誰だ?!」

突然女の子が空から降ってきたら、そりや驚くだらう。私でも驚く。この天狗の雑兵はよく教育されているようで、こんな私にも敵意と警戒心を露にしてきた。

「私はそうだね……山の四天王の一人、とでも言えばいいかな?」

「だから誰?!」

山の四天王を知らない……。そういえば鬼が去ったのももう数百年も昔になるんだね。こいつが新米だとしたら、その事を知らない可能性もある……。か。

「あー、新米か。なら良いや。取り敢えず天魔のところに案内してよ」

「あつ、天魔様のお知り合いでしたか?」

「うん、まあそうだね。天魔って言っても、多分先々代の知りあいかな?」

「そ、それは失礼致しました!! 天魔一族のお知り合いとは知らず、名を二度も尋ねてし

まうなんて!!」

天狗は深々と頭を下げる。その勢いは今すぐ土下座に移行してしまいそうな勢いだ。私はなるべく事を波立たせたくなかったので、頭を上げてと優しく言いながら、その天狗に天魔の所まで案内を頼んだ。

天狗とは縦社会故、それぞれのプライベート、または友人関係などを知らない事が多々ある。よって、例えば見たことがない部外者であっても天狗に案内されている、仲良く談笑していると他の天狗に姿を見られれば、コイツ、こんな友達がいたんだと納得してしまう脆さがある。

天狗は他に興味が無いからこそ、他人に関しての真実のような薄っぺらい嘘に騙されることもあるし、逆に自分の事ならば最後まで真意を確かめるという用心深さ、強かさも持ち合わせているんだが……この天狗はかなり大雑把なようで、私と天魔の関係や目的について根掘り葉掘り聞くこともなく、私の方もこの天狗と談笑していたので怪しまれずに済んだ。

唯一の懸念としては……私が伸した天狗がこの集落で休養を取っている事だが、どうやら天は私に味方したようだ。一度もそんな奴等と顔を合わせる事もなく、天魔の大きな屋敷に着いた。

「ありがとう、あんたの事は覚えておくよ」

「そ、そんな！ 萃香様が俺の名前を覚えてくれるなんて……」

初々しく照れる天狗。敬われる事に少しだけ嬉しさを感じたので、ちよつと悪戯をしてみることにする。

「あんたも来るかい？ 天魔の屋敷へ」

天狗は目を丸くした。誘われると思っていなかったのだろう、次の瞬間唾を口から出しながら思いきり首を横に振った。器用だね、コイツ。

「いやいやいや!! 俺なんかじゃ入れないですつて！ 天魔、天魔ですよ!! 俺ただの警備係ですし！」

「ハツハツハ、面白いねあんた。冗談さ、冗談。私もあんた自身の領分を越えろなんて酷な事は本気で言わないさ。まあ……そうだね。あんたが偉くなったら、今度は一緒に入ろうや」

「あ、は、はい!!」

「良い返事だ。返事が良い奴は偉くなるぞお！」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

私は天魔の屋敷の門に手を掛け、さっきの天狗に別れを告げる。全く、私はこんなに怪我をして怪しいってのに、一言も言及しないなんて間抜けなんだか優しいんだか。それよりさっきの天狗にここから先の展開はあまり見せたくないんでね。奴が遠慮した

のは助かった。

「入るよ」

一言だけ声を掛けて、中に入る。

中は外観に比例して広い。だが豪華絢爛という訳でもなく、どこかがらんどろとしていて寂しい雰囲気を感じた。奥には天魔の座。そしてその両脇にはそれぞれの大天狗の座がある。

いつもなら数人近く大天狗がいるはずだが、今回は誰もいない。いや、居たのは一人だけだ。

「お久しぶり……いや、初めましてか。元気にしてるかい、天魔」

「……………」

天魔は私の声に気付かないような振りをして、ずっと背を見せ続ける。

「おいおい反抗期か？ 少しくらい顔を見せてくれても良いじゃないか」

私が何度か声を掛けると、天魔は初めて口を開いた。それは今までのような嗚れた声ではなく、まだ若い声。

——代替り、という単語が頭に浮かんだ。この天魔はまだ天魔という座に就いたばかりなのだろうと推測する。

「何故……」

「ん？」

「何故墮ちた駄族が、我ら天の種族に声を掛けている？」

「……おい」

その言葉はまさしく鬼全てを見下す発言。私の声にも自然と險が入ってしまった。

「私は天魔。天狗という種族を治める王だ。その王に何のようだ？」

天魔がこちらに振り向く。

意外や意外、まだ若そうな男じゃないか。やはり代替りつてのは本当だったようだねえ。

だがその眼光は以前の天魔と変わらず鋭い。

けれど代替りで鬼の恐怖が薄れちまったようだ。これは後々面倒だね。

……ということでも理由付けは出来た。

さあ、戦いだ。天を仰ぎ見るその頂点、一時返却してもらおう。

「……どうやら貴様は勘違いをしている」

「ん？ 何がだい？」

「いつから天狗が鬼に劣ると思っていた？」

「なんだ——ぬうあ!!？」

天魔は背後に出現した。そう、出現したとは思えない速度で私の背後を取ったの

だ。その証拠に風が私の髪を乗せている。

——予想以上。冷や汗が背中を伝った。

これは勝てるかどうか私にも分からんね。

「天魔という種族は、鬼の四天王と呼ばれる四人に速さ以外及ばない。故に脈々と受け継がせた。知識を、技を、速度を!!」

天魔はそのまま私を抱えあげ、屋敷から飛び出す。気付いたときには幻想郷の雲の上。私はその目まぐるしい変化に、口を開けながら唾然とするしかない。

「どうだ、良い景色だろう。しかと見ておけ。これが貴様の仰ぎ見る最期の天空だ!!!」

その大きな両翼を畳み、抱えている私ごと天魔は身体を捻り出す。

一回転。二回転。と回転速度を上げ、螺旋を描きながら更に上空へと飛翔。空に映る色が濃くなつていき、反対に酸素が薄くなつていく。

「くそっ！ 離せ!!」

流石にこの高さは異常である。私はなんとか脱出しようともがくが、がちりと身体を拘束されており、体勢も悪いせいで思うように力が出せない。

「……む、そんなに離して欲しいか。ならば仕方が無いな。降ろしてやろう」

「うわわわわ、降ろすのは地面に着いてか——」

「秘法『解脱飛翔・開天闢地』」

天魔が下降を開始した。優に音速を越え、超臨界状態に於ける気体の層が天魔と萃香を包む。高さは数万m。豆粒のように見える幻想郷の地。その中心に位置する霧の湖に向かって天魔は加速を続ける。

風切り音、そして風圧が、動けない萃香を無慈悲に襲い、言い様のない鈍痛やナイフで切り裂かれたかのような切傷が所々走っていく。

既に目を開けていられるような状態ではなく、目を瞑ってその時を待つ。だがそれはまだ見ぬ痛みから逃げたと同時に、襲い来る痛みへの恐怖が沸々と沸き上がる悪手。

痛い、怖い、苦しい。

三つの解が萃香の心を支配した。

「今すぐ全てから解放してやろう」

距離は残り数千。通常通りに落ちれば二、三分ほど余裕があるその距離で、天魔は止まった。

「えっ……………」

手を大きく広げ、天魔はピタリと何の抵抗もなく止まってみせる。

普通はあり得ない現象。

それを天魔はやってのけた。

天狗とは一線を画す飛行速度、技術。流石頂点に立つ者だと再確認させられた。そし

て明らかに先々代よりも強さが増している。この天魔はどのようにこれほどまでの力を手に入れたのか。

——なんて、現実逃避をしている間にも、萃香は落ちていく。

天魔と違ってこちらは止まる方法がない。私は自分の髪の毛を何本か抜いてミニ萃香を呼び出す。

せめてものクッションだ。ミニ萃香には悪い事をする……と思う。だが今更そんな事を言っている暇なんてなかった。

目が開けられないから分からない。

どこに墜落するか、そして自分がどうなるか。

萃香は歯を食い縛り、少しでもダメージを和らげようと頭を両腕で守る。

高高度からの落下は、流石の鬼であろうとただではすまない。きつと物凄く痛いんだろうなあ……と希望的観測をしながら、萃香はその時を待った。

紅魔館。最上階の端の部屋。そこは紅魔館の主が住む部屋であった。

紅魔館の主……レミリア・スカレットは、優雅にモーニングタイムを楽しんでいた。

夜行性である吸血鬼にとって、日暮れとは朝だ。紅魔館の主として、優雅に、そして豪華に始まるレミリアの朝は一種の楽しみになっている。

「ふう……今日も咲夜の朝食は美味しいわね」

自分のメイドが、少食であるレミリアの為に調節した栄養分のバランスが取れた完璧な食事。食後のトマトジュースも忘れない。

グルメであるが為に舌の肥えたレミリアを唸らせるほどの料理の腕前。興味で始めたスイーツ関係での料理しか出来ないレミリアにとって、その才能をどこから取ってきたのかと咲夜に問い質したくなる。

「流石咲夜。紅魔館のメイド長ね」

不敵に笑うレミリア。その姿は普段面影の欠片もないカリスマの具現、そのものであった。

その時、レミリアに電流走る。

（なにか、本格的にヤバイ予感がする……。これは悪寒？ それとも変革の予兆？ それとも虫の知らせかしら。私吸血鬼だけど。……ハッ、まさか！）

これが『運命を操る程度の能力』の力!? ……と、ありもしない自分の能力が目覚めた事に、喜色を示すレミリア。この吸血鬼、ただ見栄が張りたかった為だけに能力をでっち上げているのである。

だが現実とは全然そんなことはなかった。

幾ら待ってもその時は来ない。ありもしない幻想に、レミリアは胸が締め付けられる。

「……………これが漫画にあった『ちゅーにびょー』ってやつかしら」

ふう、と息を付いて伸びをする。

分かっている。レミリアは分かっていた。そんな漫画みたいに突然能力が覚醒するなんて話、幻想が集まる幻想郷でもあり得ないって。

「朝食が冷めちゃうわ。早く食べましょう」

仕方なく席に着き、朝食を食べようとしたその時、なにかが横切った。

「……………え?」

そのなにかは、部屋の壁を突き抜けてそのまま朝食類に当たり、勢いの衰えぬまま、反対側の壁に激突した。

紅魔館の主、放心。

というか全く展開に付いていけない。

「どうしたのお姉様ー!!」

「ぎゃああああああ!!」

愛しの我が妹が扉付近の壁を能力で破壊しながら、レミリアを心配し抱き着いてくる。

それ自体は嬉しい。嬉しいのだが……如何せん妹の力が強い。首に回された腕は容赦なくレミリアの首を絞めて、意識を刈り取ろうとしてくる。

「ちよ、ギブ! ギブ!」

「Please give me?」

「そつちのギブじゃねえ!! あと流暢な英語ムカつく!」

多分仲良く戯れている姉妹。その姉妹がいる部屋に向かって、とある男が入ってきた。

いや、それは入室とは言えない。轟音と暴風を伴って穴が空いた壁から侵入した男は、その速さによって生まれた衝撃で、残りの壁を木端微塵にぶち壊した。

「失礼するぞ」

「ぎゃああああああ!!」

当然壁が木端微塵になるのであれば、中にいるレミリア達も無事ではすまない。フランは能力で自分に吹きかかる暴風を破壊したが、レミリアはそうはいかなかった。荒れ

狂う風の流りに流されて床に頭から衝突する。

「ふむ……被害は少なめに、と思つたがそうは簡単にはいかなかつたようだな。鬼も生きてゐる。運命や因果とはどうしてこうも私の邪魔をしてくるのだ」

少しだけ掻いた汗を拭う。流石に大気圏近くまで飛翔するのは天魔と云えど体力を使うようだ。

「いきなりなによあんた」

そんな天魔に臆せず詰め寄るフラン。それを天魔は軽くないました。

「どうしたどこぞの小娘。お楽しみを邪魔されて立腹か？」

「私のお姉様を傷つけたから怒つてるの!!」

「そうか、それは悪かつた。非礼を詫びよう」

「なにそれ。謝る気あるの？」

どこか見下した雰囲気。二人の間に険呑な雰囲気の流れようとしていた。

そんなこともいざ知らず、レミリアは痛みから立ち上がった。その瞳には少しの涙と怒りの炎が灯つている。

「誰よこんなことしたの！ すつごく痛いんですけど!? 落とし前着けて上げるから、ちよつと面貸しなさい！」

「ほう、姉君が起きたぞ小娘よ」

「お姉様、大丈夫!？」

すぐに自分の姉の安否を確認するフラン。

三人が一喜一憂している中、反対側の壁に衝突した鬼が朦朧とした意識の中、目を覚ました。

妖怪の皮を被ったナニか

視界がぶれ、意識がはつきりしない。何が私に起こったんだ。

「う……………あれ？」

身体は不思議と痛みもなく、力も簡単に込められる。しかし立ち上がれない。腕も無事だ。痛みもない。でも動かせない。

「あれ……………？ なつ、なん、なんで……………？」

動かない箇所一つ一つを順に見ていく。

「ああ、これのせいか」

身体の至るところに魔方陣が出現していた。それは侵入者を捕縛する魔方陣。

——萃香の預かり知らぬ事ではあるのだが、紅魔館には結界が張つてある。それは図書館の本をどこかの本泥棒が盗み出さないよう張られたモノであり、その効果は結界を通り抜けた者に問答無用で捕縛の魔方陣を展開するという代物。勿論製作はパチュリーである。

萃香は結界の張られていない門からではなく、空中から紅魔館に突っ込んだので、当然この魔法の餌食となっている。

「チツ、腕、足、胴、首に二つずつ。なんてここの警備はしつかりしてるんだい。門番要らずじゃないか」

途端に馬鹿馬鹿しくなってきた。

それは諦めから来たのかと言われれば、ノーと答える。しかし現状この魔方陣はかなり複雑に造られており、生半可な力じゃ壊せそうもない。……そう、それが鬼の力であつても。

「おい鬼。いつまでそこに寝転がっている!」

瓦礫の中から見上げると、天魔がこちらを睨んでいた。血の滴るような真つ赤な袈裟と、篠懸と言つた法衣を纏うその姿は、荒々しさを表現しながらもその威厳を保たせている。

王。彼は生まれながらの王なのだろう。もし意思が強固でない者が彼の面に立てば、たちまち平伏してしまいそうな、そんなオーラが滲み出ている。

「久々の再会なんだ。そんなに急かさないでくれよ」

「……貴様、何が久々か。私は貴様と初対面ではないか」

「そうだね。『あんた』とは初対面だね」

天魔は勢いよく萃香の首根っこを掴み、締め上げる。その瞳は憤怒に迫っており、萃香への軽めの敵対心は既に消え失せ、仇を見るような目で怨嗟と憤懣を募らせていた。

「はは……そんなに怒るなって」

「何故か」

「？」

「何故貴様がその秘密を知っている!!」

「え？」

「天魔の出生とは、天狗という種族の禁忌にして最秘匿事項！ 何故貴様がそれを……!!」

「ヤバイ。そろそろ落ちそうだ。天魔は私の口を割ろうとかそんな思いは一切無いよ
うで、ただただ殺意をその手に込めて私の首を締め上げる。」

「正直言つて、今この状況を打破できる方法が思い付かない。どうすればこの天魔を倒
せるだろうか。」

「ああ、そういえば言つてなかったっけ」

「萃香は一泊間を置いて言った。」

「私の名前は伊吹萃香。山の四天王であり、鬼の四天王。……あんた、私の事を普通の鬼
だと思つてたろ？」

「ぬううああああ!!」

「天魔が咆哮と同時に、腕を私の顔に叩きつけた。天狗の長というだけあって、力もそ

これらの妖怪じゃ比にならない。私は流されるまま壁をぶち破つて、紅魔館に併設された細長い建築物に突っ込んだ。どうやら私がぶつかった所は天窓のようで、そのまま窓も突き破り落ちていく。

「ふう……くそ……ただの鬼ではなかったか。忌々しい奴等め」

天魔が追い掛けようとして翼をはためかせたその時だ。

「何の礼も無しにお客さんを返すなんて、失礼だと思わない？」

「何ッ！　ぬおう!!？」

天魔が振り向いたと同時に、どこから現れたのか深紅の槍が肩を貫いていた。視線の先には、投合した姿のままのレミリア。

天魔の憤怒に染まっていた表情が、みるみる内に青く染まっていく。それは青褪めた——という表現ではない。怒りのあまり赤を通り越して、酸欠状態のような青に変わったのだ。

「——この無礼者があッッッ!!」

踏み込みの音だけが聞こえる。天魔の一撃が届くまで秒間も無いと察知したレミリアは、瞬時に二つ目の槍を生成、迎え撃つ。

小規模の旋風を五指に纏い、極微量の砂塵を集め鋭い爪と化す。曰く鎌鼬……と呼ばれるものを指に纏わせたのだ。

『鎌鼬の戯れ』

『スピア・ザ・グングニル』

真つ直ぐ一直線に伸びてくるその爪を、レミリアは槍の柄で受け、その反動を利用して穂先ごと振り下ろす。

天魔はもう片方の腕でそれを直に受けた。すると針で刺したかのような痛みと共に、焦げ臭い匂いが鼻をくすぐる。

「バカね、わざわざ受けるなんて」

「っ！……チイツ」

両腕を大きく振り上げ、空いた隙に一度距離を取る。天魔が自分の腕を見ると、先程穂先を叩き付けられた箇所だけが大きく焼き爛れていた。

「……どうやらその槍は高温のようだな」

「高温なんてもんじゃないでしょ。事実、今貴方は味わったはずよ。己が身を焼く赤熱を」

空気が変わった。熱のある場の空気が、冷たく鋭いものに。下手に手を打てば、逆手で首を取られるような。

両者とも油断は出来なかった。レミリアの方は、改めてこの男の実力に気付き戦慄する。

片や天魔の方は、己より劣ると思っていた雑種が自分の実力に迫るものを持っていると知り、油断を捨てた。

「少しだけ舐めていたようだ。姉妹、名を何という？」

「レミリア・スカーレットよ。それでこっちの妹はフランドー……あれ？ フラン？」

視線をあちらこちらに向けるが、フランはいない。レミリアは途端に不安になった。こんな非日常的な状況で、あの子を放しておくわけにはいけない。万が一暴走する危険性もあるし、何より怪我でもしたら……と姉としても心配になる。

（まさか、あの変な女の子と一緒に？）

「よそ見をするな!!」

意識が、敵の声によって深い思考の海から戻される。目の前には天魔が迫っていた。

「……………マズッ!」

即座に翼を出して上空に逃げる。

だが、それは愚策。相手は空の王者、天狗なのだど気付いた時には一步遅い。いつの間に関り込んだのか、後ろから抱きつかれるように手を回され、動きを封じられる。

「どうだ？ 楽土の夢を見ないか？」

「お断りよ!!!」

「そうか。答えはイエス以外選択肢にないがな」

天魔はレミリアを抱えあげたまま、大きく天空に飛翔。翼を折り畳み、回転しながら直下に加速する。

「秘法『解脱飛翔・開天闢地』」

萃香の時とは違い、今回は距離が少ない。故に能力を使って、大規模に展開する旋風をその身に纏わせた。

回転する天魔に合わせて、風も回転速度を上げていく。次第に風は高く、大きく、広く展開され、粉塵や瓦礫を巻き上げながら回転する姿は台風そのもの。

紅魔館の一部を削り、抉り取りながら、天魔とレミリア。そして台風は地面に突き刺さる。勢いの衰えないそれらはまるでドリルのように掘り進み、大穴を開けていった。

「フハハハハハハ!! さあてこの地獄にいつまで耐えられるか、レミリア・スカーレットオ!!」

日が落ち始めた幻想郷。

湖の水を。

紅魔館の壊れた瓦礫を。

そして数ある命を。

天魔はその全てを巻き上げ、刈り取りながら、レミリアにしつかりと止めを刺さんと爪を形成した。

どんな生物であろうとも、頭を吹き飛ばされればほぼ確実に死ぬ。レミリアを吸血鬼と知らない天魔であるが、もし彼がレミリアの頭を抉り切り裂きでもすれば、頭部だけは再生不可であるレミリアの命運は尽きるだろう。

しかしそれで良い。

一人の鬼によって陥落しかけた天狗の集落。ここでまた新たな歴史と偉業を打ち立てれば、それも帳消しとなるだろう。上手くすれば、美談にまで発展する可能性もある。「フハハハハハハハ……あ？」

そしていざ決りとうとした時、天魔は違和感に気付いた。

その違和感とは、悲鳴。悲鳴が聞こえないのだ。

いや、悲鳴じゃなくて良い。苦悶の声、痛みに喘ぐ声。どれでも良い。何故かレミリアは声をあげていない。これだけの衝撃と摩擦、ただグツと堪えるなんて次元はとつくに過ぎている。

「まさか……」

嫌な予感だ。それは確信にも近い。

レミリアの方に視線を向けると、レミリアの脇腹から上が消失していた。

消失部分は紅い霧で覆われており、明らかにその現象は故意に起こされたのだと分かった。

「クソ！ やはりか！ では奴は……？」

その瞬間、天魔が見たのは光。まるで自分ごと全てを飲み込んでしまいそうな、巨大で真つ赤な光。

——空を裂いて、紅の紫電が天魔を貫いた。

雷だと見まごうそれ。神槍スピア・ザ・グングニル。脇腹から上だけのレミリアが投げた槍は、一糸乱れず天魔の心臓を貫通。それだけでは足りないと言わんばかりに、続けざま第二、第三の槍を投合。元から刺さっていた肩を含め、約四ヶ所の刺傷。

顔、右肩、腹部、左足。縫い付けるように地面に刺さり、やがて天魔は動きを止めた。残っていた身体が複数の蝙蝠へと変換され、レミリアの元に集まり身体を形成していく。

「貴方の敗因は、そうね。私を吸血鬼だと知らなかった。……ってところかしら」

レミリアは天魔の技を受ける直前、上半身上部だけ蝙蝠に変化させ、上空にて姿を形成。天魔を一撃で屠れる一発逆転の技を溜めていたというわけだ。

（さて、こっちは片付いたしフランを探さなきゃ。確かあの変な奴が落ちていったのは、パチュリー専用の天文台よね）

レミリアがフランを探そうと翼を広げる。

——頬を何かが掠めた。

「……あら。まさかまだ息があるのね？」

レミリアは感じていた。生の躍動を。まだ敵が生きているのだという確信を。すぐさま槍の生成に取り掛かる。息があるのであれば、止めれば良い。それでもまだ生きているのであれば、死ぬまで殺せば良い。

吸血鬼に眠る本性。その残酷なまでの戦闘心。紅の瞳が解き放たれると同時に、その本性が露になる。

「さあ、何度でも殺して——え？」

だが、目の前で今起こっている光景、状況を見た途端、高ぶっていた気持ちは一瞬で萎んでしまった。

「あんた……本当に妖怪なの？」

「妖怪に決まっているだろう。妖怪以外に何がある？」

「そりやおかしいわねえ。これは人間にも言えるけれど、誰も持つ能力は一つだわ。逆に持たない者の方が多いくらい」

「……で？」

「妖怪だつて多くの能力が使える者がいるけれど、それは起源となつた能力の派生であつて、別々の能力という事はありません。あり得ない筈なのよ」

「そうか。まあ覚えておくと良い。永き生に於いて、自らの思想、考えを根底から覆す例

外とは存在するのだ」

天魔は槍を無理矢理身体から引き抜き、役目を終えた槍をそこらの地面に放り投げた。

噴水のように溢れ出る血液。痛々しい傷痕、槍の熱により焼け爛れた皮膚。それらは天魔が指で触れると、まるで怪我など無かったかのように出血は収まり、傷痕はその姿さえ無くなった。焼け爛れた皮膚も同様である。

『風を操る程度の能力』『速度を操る程度の能力』『負担を無くす程度の能力』『治癒する程度の能力』『耐性を得る程度の能力』……まだまだこの程度では収まらんぞ?」

「バケモノめ」

「勝手にほざくが良い。12代も受け継がれ続けた天魔の禁忌、そして秘法。今に始まったことではないのでな」

「……………」

レミリアは無言で槍を構える。

その様子をさも愉しそうに見るのは天魔。

「さあ、第二ラウンドを始めようではないか!!」

先程とは打って変わった展開。

レミリアは確実に意識せざるをえなかった。

今日の前に佇む男は、妖怪ではない。
妖怪の皮を被ったナニかだと。

小悪魔ミスチーフ

「いつつ……なんとか生きてる……」

萃香は天窓を突き破り、十数mはある天文台の中を落下した。魔法陣で身体を拘束されて受け身も取れず、もろに全身を打ち付ける事になった。

「う……何処なんだろう、ここは」

芋虫のように這って進む。

……何故だか本が多いなあ。

ここは図書館なのだろうか。

中央に大きな天体観測器。そしてそれをぐるりと囲むように本棚が並べられており、本棚にはところ狭しと本が入れられている。一体ここには何万もの本があるのだろうか。

「あれあるえ？ めっずらしいお客さんだあ！」

ふと上を見ると、山となつて積まれた本を器用に戻していく黒い翼の赤髪女。その身体から漏れ出しているのは邪気そのもので、鬼としての本能が近寄るなど囁いている。

「これまたちっこいのが。おーい！ パチュリー様あー！ 変なお客さんがいるんです

けど、摘まみ出しますー?」

その女が叫ぶと、下の階からか細い声が聞こえてきた。

「丁重にお帰り願いなさい」

「はーいー!」

「ちよちよちよ、ちよつと待ってくれ! 私だつてこんな所から早く出たいさ! けど

この変な魔法陣が私を拘束していて動けないんだよ……」

流石にこの状態のまま摘まみ出されるなんて真つ平だ。それに天魔との勝負も控えている。この多くの蔵書を持つこの主はさぞ魔に長けているのだと一寸の望みを掛けて、私は多分部下である赤髪女に頼みと懇願を聞かせた。

「ですつてパチュリー様あー! どうします?」

「その魔法陣は、多分侵入者用に起動する魔法陣よ。その子は紅魔館に無理矢理入ろうとしたんでしょうね。丁重にお帰り願いなさい」

「だつて」

「話聞く気ないね!? ……頼む!! この体勢でこんな事言うのは変だと思うけど、どうかこの拘束を解いてくれないか?」

「嫌よ。丁重にお帰り願うわ」

いつの間にかその声の主は私の目の前に立っていた。鬼の直感も一切反応しない、一

瞬の移動。もしこれが転移魔法などではなくて、身体能力による賜物だったら頭が上がるらないね。それとこいつはどんだけ私に丁重に帰って欲しいんだよ。

どうにもこうにも、目の前の少女は私の意を汲んでくれなさそうだ。私がどれだけ助けを乞おうと、固く拒否し続ける姿が目に見える。

うつすらと自分の妖力を疎めて散らし、彼女の起源を探る。……ふむ、魔力が感じられるね。十中八九彼女は魔女だ。

そうと決まれば話は早い。魔法使いの興味と関心を高める方法なんて、鬼からすれば簡単である。

「そうだなあ……あんたは魔法使いかい？」

「そうよ」

「じゃあ鬼の秘術とか……聞きたくない？」

「鬼ってなにかしら？」

「古来地上を去った伝説上の妖怪さ」

「小悪魔、もてなしなさい。最高級の紅茶で」

いつの時代も魔法使いとは探究するもの。

故に彼女達は『魔』を、『神秘』を追求する。

鬼の秘術なんてもの、現在では完全に失伝している。そんな眉唾ものに常人が置く信

頼なんて無きに等しい。しかし「私」がいる。鬼である私の存在そのものが鬼の存在の肯定であり、鬼の秘術の肯定でもある。

今じゃその萃香の存在証明さえ危ぶまれているが。

パチュリーが指を鳴らすと、あれほど難儀していた魔法陣がパキンと音を立てて崩れ去る。

流石魔法だ……と、少しだけ感心した。

「……で、鬼の秘術を聞かせてくれないかしら」

パチュリーに案内されたのは、天文台を出た先。大図書館と呼ばれる巨大な蔵書管理所。その中に置かれた来客用のソファに座らされ、眼前の机には既に紅茶が用意してあった。

この様子から、煙に巻くことは不可能そう。

「……私は魔法体系を知らないんだが、分身とかの術は魔法にもあるのかい？」

「ハッキリとした分身は、かなりの高位魔法としてなら存在するわ。後は幻術とかかしらね」

「そうか。鬼の秘術の一つとしては、媒介を使ったものなんかが一般的だね。例えば……これかな」

萃香は自分の髪の毛を二、三本抜いて、息を吹き掛ける。するとその髪の毛がみるみ

る内に肥大し、次第に萃香とそっくりな分身が出来た。

萃香が分身に向かって手を振ると、分身は満面の笑みで手を振り返してくる。自分とは思えない、なんとも純粋な姿だ。

「……凄いわね。贄や媒介を使った魔法なんて、黒魔術に近似した何かを感じるわ」「勿論意志疎通だつて出来る。命令も同様さ。鬼は基本魔法の手続きとかは知らないからね。打ち出の小槌やら……頼つぺたに出来たコブやらを媒介にしないと魔法は使えないんだ」

「応用範囲も高く素晴らしいわ。錬金術のホムンクルスやゴーレムにも通じるわね。

制約がある故の創作性……。参考になるわ」

「地底では身体能力強化に長けた鬼を知っている。えーつと能力は……『怪力乱神』だつたっけな」

「それも興味深いけれど……私にとっては鬼の存在が気になるわね」

「鬼の事を知りたいのかい？」

「ええ、是非教えてちょうだい」

「あいよ」

(急がなきゃいけないんだけどなあ)

萃香はパチュリーの頼みについて返事をしてしまいが、その実かなり焦っている。何故

なら彼女は、天魔との戦いがまだ終わっていないからだ。何となく察するに、あの男は執念深そうな気がする。

だがここで話さなければ、パチュリーは私を帰そうとはしないだろう。最悪怒らせてしまえば、もう一度魔法陣をはめられてしまうかもしれない。

——萃香は喉を潤す為に一口紅茶を飲む。紅茶特有の甘ったるさを感じながらも、濃厚な味わいが口の中に広がる。萃香自身紅茶を飲んだ事はないのだが、まだこれならなんとか飲めるなと思った。

一気飲み。酒を飲むようについ飲み干してしまった。これは悪い癖だろう。

それを見ていたパチュリーは、良い飲みっぷりねと一言だけ漏らした後、小悪魔におかわりを持ってこさせる。

冷たい紅茶で喉を潤した萃香は、鬼について話し始めた。

「鬼って言ってもそんなに個体数は多くないのさ。所詮は妖怪の一端。恐怖や畏怖を用いて存在を証明し続けなければならぬ。」

昔の鬼は……そうだね。一言で言うとは暴れ者だね。傲慢に、自己を中心として振る舞いながらも、勝負事に至っては律儀で、嘘を吐く事を良しとしない。そんな純粋な輩さ」「でも何処にも文献は存在しない」

「ああ、そうとも。だってそれが地底と地上の約定だからね」

——鬼に関しての書物は全て隙間に消えたのさ。

萃香がそう話している際の目は、どこか寂しく。どこか怖く感じた。

そろそろお開きか——とパチュリーは感じた。四つの魔力反応が近付いてくる。そのどれもこれも濃厚な魔を孕んでいて、これが分身の高位魔法か……と呆れた。

「本当はゆっくり話したかったけど、そろそろ貴女が時間のようね」

「……そう？ 解放してくれるのならありがたい。遠慮なく行くとするよ」

紅茶を小悪魔に片付けさせ、パチュリーはその場から逃げるように立ち去った。もう少しであの妹がここに来る。面倒事は嫌なのだ。

体よく鬼を追い出して、パチュリーは大図書館の奥で惰眠を貪る事にした。

「ひひッ」

「小悪魔、あなた紅茶に何入れたのよ？」

「……分かってらしたんですか。確かに紅茶、飲んでいませんでしたね」

「貴女が何もしないわけじゃないでしょう？ 短い付き合っただけですけど分かりますわ」

「おおっとつと、変な方向に信頼されてますね。確かに入れましたけど」

頭が痛い……と頬杖を付く。この使い魔は尽く性格が悪い。それゆえに扱いやすい

面もあるのが救いだらうか。

「それで、何を入れたの？」

「媚薬」

「オイ」

今なんて言った？

すごく嫌な単語が聞こえたのだが。

「あれ、知りませんか？ 媚薬——」

「それくらい知ってるわよ。私が聞きたいのは何故それを入れたのかってことよ」

「だってだってえ、気になるんですものお。生娘っぽい鬼が悶える姿、さいつこうじゃありません!」

この小悪魔。

悪びれもなく最悪の言葉を吐きやがった。

「最低ね」

「罵倒は褒め言葉」

「あんたを召喚したことをこれほど後悔する日は無いわ」

パチュリーは毛布を召喚し、ソファベッドに横になった。どうでも良い、勝手にしろ。

……と。彼女がこの件をここで終わらせたのは、そういうことだろうと小悪魔は勝手に解釈する。

「じゃ、妹様に襲われて興奮してる鬼を拜謁してきまーす」
「……………」

パチュリーは答えない。関わりたくない意思がハッキリと感じられた。

ノリが悪いなど主を心の中で諫めながら、小悪魔はこっそり付けておいた発信器の反応を見る。

「まだ遠くには行っていないようですね」

懐からとある物を取り出した。それは紅茶に含ませた媚薬の原液。名を『竜殺し』^{ドラゴンキラー}という明らかヤバそうな品物である。だからこそ買ったのだが。

「これ、高かったなあ」

秘蔵と称されるその媚薬は、飲食物に混入させた際の味の変化が起きないという、非常に特殊な性質を持っている。だからこそ、混入に気付かれない。萃香が飲んだ紅茶は、まさしくロイヤルな味だったのだろう……と。そのロイヤルな紅茶が、まさに今からその牙を向くとなると興奮が収まらない。

「即効性、無色透明、無味無臭、持続性。どれも最高級！」

だからこそ買ったのだ。

……………だからこそ買ったのだ。

反応は近い。そして小悪魔自身が感じる魔力反応も、また別の反応を感じていた。

「これは妹様の反応……全く、妹様つたら。フォーオブアカインド使ってますね。どうやら相当怒っているようです。……いひひ、クヒヒ、笑いが止まんねえや」

小悪魔は知らない。

この館で、もう一つの戦いが起きていることを。

小悪魔が知らない。

萃香とフランの実力を。

小悪魔は知るはずもない。

この後に起きる争いを。

フォーオブアカインド

許せなかった。

あの時、蓮華やチルノちゃん達とお泊まり会をした時から、私はどうしてもそいつを許すことが出来なかった。

痛みで呻くチルノちゃん。

心配の声をあげながら、瞳から安堵の涙を流す大ちゃん。

激昂した空ちゃん。

私は怯えているだけだった。

何も出来なかったのだ。

495年。これは大妖怪にとっては短いもので、妖精や人間にとってはとても永い時間らしい。

その間、私はずっと幽閉されていて。涙も枯らし、怒りも枯らし、恨みも枯れてしまった。

空っぽで。私に残されたのは永き時に培った狂気だけ。暗闇の中、私はもがき。深い泥を、私は泳ぎ。

生き残った先には、何もなかった。

認めてくれる人がいない。

抱き締めてくれる人がいない。

肯定してくれる人がいない。

自己満足を知らない私には、何も残らないのは自明だったのに。空っぽな私は、それに気付かない。気付く道理なんて夢だったのだ。

『じゃあフランちゃんね！ よろしくー！』

だから……だから。

『だって私とフランちゃんは名前を教えあつて、一緒に遊びあつた。そう、友達、友達よ』
やめろ。

『あたいはチルノ！ あたいはさいつきよーなんだから！ だからフランはあたいの子
分ね！』

やめて。

『え……えと、私は大妖精。よろしく……ね？』

やめてよ。

『ふーん、フランっていうのね。私は霊鳥路空。ま、よろしくね』

希望だった。それは私に熱を持たせる、唯一の存在。

『ほら、フラン。こつちにいらつしやい』

そんな私の希望を。友達を。お姉様を。

『へえ……あんた、強いのかい?』

『ならば鬼である私の、純粋な力を見せてやろう』

『私は伊吹萃香だ』

傷つけるのをやめてってば!!!

フォーオブアカインド。

分身の高位魔法。吸血鬼の膨大な魔力と、持つて生まれた魔道に対しての才。それらを巧く組み合わせさせて発動させる、フランの奥の手の一つ。

分身の三人は、オリジナルであるフランとは似て非なる存在だ。その何れもが幻影という訳ではなく、それぞれが意思を持った存在。有り体に言えば自己を証明する存在である。故に、嫌いな物から得意な事まで、どれもフランとは違った感性を持つている。

だが術者はオリジナルのフラン。魔力が切れると分身は消えてしまう。だからこそ分身はフランに従うのだ。

魔力を人質に、戦闘力を求める。それがフォーオブアカインドの意義だ。

そして当然の事だが、自己を持っているからこそ、三人のフランは別々の思考を展開

している。

オリジナルがどれだけ痲癩を起こそうが、彼女らにはどこ吹く風。他人事のような感覚に近い。

だが、一部例外があった。普段三人はフランの対内を巡る魔力の中に居住しているが、驚くことにフランの思考を覗くことが出来る。

そして写った。三人のフランの瞳に一人の鬼の姿が。

それが初めてだ。初めての恐怖であり、初めて四人の思考が合致した瞬間だった。

怖い。助けて。 ——— ■■■ちゃん。 ——— ■■ちゃん。

——— ■ちゃん。 ——— ■■ちゃん。

踞る。怖いから。目を背けたいから。

それが私の最善だと、信じていたから。

「ねえフラン、どうすれば良いと思う?」

「フランには分かんない。お姉様の助けを待と?」

「フラン、ねえフラン。それで良いの?」

「——— //殺してやれよ」

「私達フランは、なんでも破壊できる」

「壊して、壊して、破壊尽くして」

「狂わせちゃいなよ。今まで自分がやられたみたいに」

フラン。フラン。フラン。フラン。

反響しあう声。名前の木霊。

私はそれが聞きたくなくて、耳を塞いだ。でもそいつらは私の中にいて、私の行動に関係なく声を響かせてくる。495年一緒に居続けた三人の私。皆は破壊を望み、私は安息を望んだ。

嫌だ。見たくない……。消えて……。っ！

私はフランドール・スカーレット。

何者でもないフラン。

狂気を孕んだ少女。

『友達だから——』

心地よいと思つたその言葉。

ねえ、蓮華。貴女ならこんなとき、どうする？

友を傷つけられた私は、どうすれば良い？

「破壊だよ」

——こんな時はいつものように、お姉様に助けてもらうことにした。名前を優しく呼んでもらって、頭を撫でてもらって。抱き締めてもらって。一緒に寝てもらって。

それだけで良いんだ。これだけで、私の狂気は収まっていく。

だから、私はお姉様の私室に足を運ぶ。

だがそんな私を邪魔するように、乱入者が現れた。そいつは背中に大きな黒翼を持っていて、覇気や宿す魔力も桁違いで。

でも、お姉様を傷つけたのは我慢ならなくて。

喧嘩を売った。私の心が騒ぎだした。

けど。今じゃそんなのどうだって良い。

その後に乱入者が声を掛けた人物。私はその人物に見覚えがあり、決して忘れないだろう。

「伊吹……萃香っ!」

その名を言葉に出して反芻した瞬間。騒いでいた私の心が爆発した。

「殺せ!」

「フランを馬鹿にしたこいつを殺せ!」

「殺せ、殺せ、殺せ、殺せ!!」

パチュリーの所に落ちていく萃香。その無様な姿を見ながら、私達は大図書館に大急ぎで向かう。

随分前にパチュリーから教えてもらった魔力探知を上手に使い、萃香の持つ微量な魔力を拾う。

萃香は大図書館を出て、不自然に動きを止めている。罨か……？

「いた」

「いたね」

「いたよ、いたよ」

しばらく様子を見よう。動きが当分無かったら、こちらから向かえば良い。

ごめんね、蓮華。やっぱり私には無理だ。貴女みたいな良い人にはなれそうにないよ。

人の子が人であり、神の子が神であるように。狂気からは狂気しか生まれない。私達は狂気に浸かりすぎた。

しばらくして、萃香は立ち上がり歩き出した。

襲うなら今しかない。

「伊吹萃香ああああーっつっつ!!!」

四人同時に壁越しに叫んだ。ビリビリと大気が震え、壁に亀裂を入れた。そして私達

は、その壁の“目”を掌の上に呼び出し潰した。すると壁は簡単に砕け散る。突然の襲撃に、“そいつ”は驚きを隠せないようだ。

「……な、なんだいあんたら」

「死ね！」

「死ね！」

「消えろ!!」

恐怖を感じさせられた、プライドを傷つけられた際に生まれた憎しみ。全てが増幅し、萃香に私達は襲い掛かった。

現在萃香は、謎の現象に襲われていた。

身体が火照り、汗は滴り落ちる。意識は朦朧とし、頭がくらくらした。

(あの魔女、なにか仕掛けたな)

なんらかの魔術を仕組まれた前兆は無い。恐らくあの紅茶だ。あの紅茶に何かが混入していたのであれば、辻褄が合う。確実にあの小悪魔という奴も共犯だろう。

(してやられたよ、チクシヨウ)

視界が回る。息が荒くなる。

相当な猛毒だ、これは。こんなコンディションでは天魔との戦いも危うい。

能力を使つて疎めようとするが、どうにも力が入らない。私はとうとう壁に手をついた。

「はあ……っ！ はあ……っ！ ああ、くそ」

ずるずると背をもたれかけて座り込む。今日一日で私はどれだけの妖怪と戦つたんだ？ 弱小妖怪から始まつて、博麗の巫女。天狗の舞台に斥候や白狼天狗に鴉天狗、そして最後に天魔……か。

「俗に落ちた私にしちや、頑張つた方じゃないか」

自分で自分を褒める。そうしないとやつてられない。妖怪を倒すこと。それは蓮華や紫を裏切る事と同じだ。信用していないのと同じだ。

蓮華や紫なら、私の存命。はたまた弱小妖怪の脆弱性について懸念している筈。そして既に手を打っているだろう。

はつきり言つて、私のやることはほぼ無駄なのだ。

ただの自己満足。自己陶酔なんだ。

「何してるんだろなあ、私つたら」

いつからだろう。私の精神が弱くなつたのは。

昔の私なら、高笑いをしながらこう言つただろう。

「それがなんだ」……と。

鬼のプライドを一番に。無駄にも意味を見出だし、鬼として強く勇ましく振る舞っていたあの時の私はまさしく鬼だった。

でも、今の私はなんだ？

プライド、プライド……なんて言っても、思っても。私の心は満たされていない。ただ着飾って振り撒くだけだ。それこそ鬼である私が一番に嫌った、“嘘”の姿なのに。「何も強くなっていないなあ……」

人知れず涙が出た。

私がこうなったのも元はと言えば蓮華のせいだ。あいつが私に関わらなければ、私はこんなに弱く……。

『あんたが伊吹萃香かい？　ちよつと私と喧嘩しようや』

『なんだお前。鬼に喧嘩を売って、五体満足で帰れると思ってる？』

『良いパワーだ。元気がある』

『チツ、私の負けだ。ほら、首を獲れ』

『鬼つてのは皆、萃香みたいな強情な性格してるの?』

『気安く私の名を呼ぶな、野良神風情……! それに強情だと? 鬼は気高いんだ。馬鹿にすることは絶対に許さんぞ!』

『じゃあ鬼に勝てば、私は萃香の物をなんでも持つていけば良いんだね?』

『ああ』

『じゃあ“萃香”を頂戴』

『ああ………つてなんだと!?!』

『何か変? 私は伊吹萃香が欲しいの。首なんて要らない』

『なっ………! 私の存在を売り渡せ、とは大きく出たな。それは流石に私の範疇を超えている』

『じゃ、後何回打ち負かせば貰えるんだい?』

『いや渡さないから!』

『何回?』

『う……ぐぐ……じゃああと五回』

『分かった。じゃあ早速やろうか』

『もうやるの!?!』

懐かしいなあ……ハハ。その時からだっけ。私が蓮華に勝負を挑んで、負けて、また挑んで、負けて……いつか友達になっていたのは。

そして大江山で命を助けてもらって。死んだ仲間たちを弔う時に、初めて蓮華に涙を見せた。

そこから……そこから……紫や幽々子っていう友達が増えてすぐ暖かくて……すぐく心地よくて……友の死を一緒に悲しんだ。

結界を張ったあと、紫と幽々子を二人きりにして。

そして階段を降りる私と蓮華。その時、初めて見たんだ。声を押し殺して泣く蓮華の姿を。強いと思っていた、彼女の静かな哀しみを。

瞳から流れ出ていた冷たい物は、いつのまにか熱い物に変わり。私は誰にも聞かれないうよう、小さく嗚咽を漏らした。

酔っている時のような、何をやっても恥ずかしくない万能感。それが身体を優しく包み込んで、強き鬼に弱さを見せた。

数少ない紅魔館の窓。そこから月明かりが覗いていた。

もう涙は要らない。十分だ。

私は袖で瞼を擦り、鼻を吸った。

「鬼が弱気になっていてどうする！」

頬を叩き、濁を入れる。この後には天魔が待っているから、泣き顔じゃあ締まりがつかない。

確かあの部屋は結構上の方だった筈。ここでぐずぐずしてはいられない。

私は立ち上がって歩き出した。さっきよりは体調が良くなっている気がする。

これなら大丈夫だ、戦える！

その時声が聞こえた。地を震わす怒りの声だ。

「伊吹萃香ああああーっつっつ!!!!」

瞬間、壁に亀裂が入り、衝撃が吹き荒れた。

「……な、なんだいあんたら」

「死ね！」

「死ね！」

「消えろ!!」

それは悪魔か？ ……と一瞬錯覚するほど。

三人の少女は殺意を瞳に宿らせ。そしてもう一人はどこか哀しみを込めた視線を灯らせながら。

四人は紅き大剣を私に振り下ろした。

正義の味方

『向かってくる対象が多い場合は、少し視界を広げるんだ。二次元ではなく三次元で見極めろ』

蓮華の言葉を反芻する。

私は向かってくる四つの紅に拳をあわせるようにして逸らす。熱が手の甲を焼くが、痛みにはもう慣れた。

今じゃあこうやって言葉を体現出来るが、蓮華つたら教え方が下手すぎると前々から思う。

なんだよ視野を広げるって。無理だよ。

「当たらない！ だったら“眼”を潰して——！」

「無駄だよ。あんたの能力は私に効かない」

消力。武術としての消力とは程遠いが、これはこれでよく使う。

私に及ぼす影響力を疎める。たったこれだけで干渉系統の能力を無効化出来るからだ。

フランの手には予想通り眼は現れない。

思った通りだ。あれは干渉系統。相手に及ぼす影響力が無ければ機能しない。

フランはいつまでも現れない「眼」を見て悟ったのか、開いていた掌を強く握り締めた。

「殴り合いか、良いね」

「殺してやる」

「覚悟は良いよね」

「死んじまえ、餓鬼！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

金の絹だと錯覚してしまいそうな髪が、月明かりに反射して僅かに光の粒子を蛍のよう放つ。

淡く朱を帯びたフランの拳が私に迫る。

——速い。吸血鬼という種の特徴か、そこに技術は無けれど素の身体能力は高いようだ。もし技巧を極めていたかと思うと、ゾツとする。

粗削りの拳。一撃は確かに強い。だが向かう先は一直線なのだ。

『相手の力を利用しろ。小で大を制せ』

全く、私は大で小を兼ねる派なんだけどねえ。

肩を迫る拳に当てる、回転。相手のパンチスピードと遠心力を利用した裏拳で、フラ

ンの側頭部を打つ。

「くあつー！」

側頭部を打たれたフランは一瞬動きを止めた後、ふらふらと数歩よろめいて、固い床に横から倒れこむ。

「まずは一人」

私の宣言に、残りのフランは戦いた。その顔には一様に怯えの表情が張り付いている。

やっと気付いたか。私との差を。

感じるぞ、その恐怖を。

4対1という圧倒的な数の利。最初は厄介に思ったが、一人を倒した事で立場が逆転したようだ。

そして彼女達の反応から察するに、四人のフランの連携は完全とは言えない。

それぞれの殺意は見え隠れするものの、勝敗を決める決定打は持つておらず、所詮意思だけが一人歩きした状態だ。

慢心、増長、過信。

なんだ、こいつも私と一緒にじゃないか。

己の種族としての特性を過信し、勝利に酔い、意思に溺れ、増長し。そして敵の脆弱

性を省みて慢心する。

フランのその姿は、ひと昔前の私を想起させるに十分だった。

「おい、いつまで固まってる！ 私はいつまでも待たないよ！」

「……ッ！」

棒立ちしている己に気付いたのか、咄嗟に前にいた二人が駆け出す。

一人は大きく踏み込み、もう一人は上体を低くし掬い上げるように下から剣を振り上げた。

私は半歩身体を逸らし、まずは紅の剣を回避。そしてすぐさま襲い掛かってくる吸血鬼の鋭い牙を、上体を大きくずらし躲した。

がら空きになったフランの横腹。そこに向かって思いきり拳を放つ。腰を落とし、体重を掛けた、全身全霊の右突きだ。

吸い込まれるように横腹を穿たれ、フランは呻き声をあげながら吹き飛ばされる。

剣を持つもう一人のフランは、突然起きたその事態に呆然としていた。あんぐりと開けられた口を視界に収めながら、がら空きになった顎に向かって蹴りを放つ。

人体の急所とも言われる喉。そこを蹴られたフランは、くぐもった声を喉から放り出して悶絶する。

「あ……うう……」

「ぐえ……あつ……かふつ……げえ……」

「ほら、もう終わつちまつたよ。最後のあんたはどうするんだい？」

「え……あ……」

最後のフラン。剣を杖のように使いながら、終始一貫して震えていた。既に声も出な
いくらい怯えているようで、その瞳が定まる事はない。

「なんだい、あんた。膝が笑つてるよ。それで本当に戦えるの？」

「たつ、戦えるもん！ あんたみたいな悪い奴は絶対に倒してやるんだから！」

「『悪い奴』と来たか……。はは……。あながち間違っていない。確かに私は悪い奴だ
よ。で、そんな悪い奴に正義の味方はどうするつもり？」

「た、倒してやる……！」

「その震えた腕で？」

「震えてない！」

顔を真っ赤にしたフランの顔は不覚にも年相応で。そんな些細な変化にも、戦いの間
でしか気付けない私自身に呆れた。

正義の味方……。か。懐かしい響きだよ。

私の親友はどこまで突き詰めても、正義の味方だった。昔の私はそんな親友に嫉妬
し。同時に憧れもしていた。

「震えていないなら、もう杖は要らないだろう？ そのか細い腕で剣を持ち、伝記で語られるような勇者みたいに悪を討ち滅ぼしてみよ！」

「う……ううあああああ!!！」

フランが咆哮を上げた。自らを鼓舞する勇気の咆哮を。彼女は足を纏れさせながらも必死に足を動かし、歯を震わせながらもその剣を大きく薙いだ。

私はその勇気に応えるように、敢えてノーガードでその剣を受ける。

剣のような美しく鋭い刃は無いその大剣“のようなもの”。それは長い業物というよりは、業火を焼き付けすりおろす為の塊。横に薙いだその大剣は、軽い身体を持つ私の身体を大きく吹き飛ばした。

——答である。

「う、嘘!? 受け止めた？」

「フウー、フウー、つたく、重いね」

萃香の弱点とは単純明快。その小柄な体型そのものである。小柄であるが故に体重が軽く、重い一撃に対しては簡単に吹き飛ばされてしまう。今までの戦いでもそうだった。重い一撃に対しては、彼女は為す術も無かったのだ。

『大地を使え。足を支えにするんだ。そうすれば、萃香の軽い身体は強硬な柱となる』
ミシツ、と輝が大剣に刻まれる。

身体を柱に見立てて、足を基点に根強く大地に打ち付ける。後は鬼の力を以てして衝撃だけを受け止める。

剣を打ち付けたフランからすると、まるで固い柱に向かつて剣を振るつたのだと勘違いしてしまう感触。じんわりとした痺れが、指の先から身体の芯まで伝わっていく。

「経験つてのは結構大事だよ」

「うう……くっ……」

服は剣によつて燃え千切れ、包まれていた萃香の柔肌を露にした。丸見えである。

傷も見えない美しい身体。傍目に見れば戦いに適していなさそうな身体だが、その柔肌の下はまさしく凶器。鬼の有り余る力を制御できるように設計、無駄の無い肉と骨によつて構成されている。

その姿は一種の芸術。盛り上がる筋肉も、美を害する傷も無い。女性としての形を整えながら、闘争へと適す身体の機能。これこそが、幼き妖美と闘争への性質が組合わさった完成形だろうと、万人へ容易に分からせる。

だが丸見えである。

「ほら、まだあなたの力は生きているだろう？　まだ立ち向かえる筈だ」

「……………」

「……………どうしたの？」

フランは、無言で剣を落とした。

その様子に、萃香は戦意喪失したのだと推測付けるが、どこか様子がおかしい。心なしか表情は沈み、どこか暗い印象を受ける。

数秒の無言。何も語られる事の無い空間には、萃香の息遣いだけが妙に大きく聞こえた。

「……………ねえ」

どれだけ時間がたったのだろうか。

空間を打ち破るように、フランが口を開いた。

「何か言いたいことでもあるの？」

「うん」

「そっか」

萃香も釣られるように、拳を下ろした。

萃香は感じ取ったのだ。戦意喪失以前の話。フランには元から戦う意思など無かったことを。

「ねえ……………萃香」

「なんだい、フランドール」

「もう……………止めよう？」

「あつ——」

その一言は、今までのどの攻撃よりも、私の胸に深く突き刺さった。

その言葉は、私の行動が無駄だと諭すように。静かに心の底へ浸透していった。

「私、嫌なんだよお……もう傷つけたくないよお……」

顔を上げるフラン。そこには大粒の涙が浮かんでおり、どこまでも儂げに。そしてど

こまでも優しそうに、私の身を案じた。

彼女の願いは元から一つだったんだ。

「友達を大切にしたい」

己の中に潜む三人の狂気が、一人の女の子の純粋な願いを許さず。いつまでもいつま

でも、彼女自身で彼女自身を蝕み続けていた。

だがその三人は萃香に破れ、今は床に倒れて動かない。よって目の前の残されたフラ

ンは、彼女の狂気の底に眠る純粋な気持ちそのものを体現しているのだ。

「……………」

「う、ええ、空ちゃんが怒って……えう……チルノちゃんが傷付いたのはとっても悲しい

けど……ひつく、……だからって私が傷付けて良い理由にはならないよ……」

「……………」

「ごめん、ごめんううああああ」

泣きじやくるフランを見て、萃香は何を思ったのか。その視線は遠くを向いていた。

『蓮華はさ』

『うん？』

『正義の味方……だよね』

『うーん、萃香がそう思うんならそうかもしれないけど、私は結構悪い奴だよ。人間に仇なしてるし、見殺しにしてきた奴等も多い』

『それでもさ！ 蓮華は救ってるじゃないか！ 困ってる人間には手を差し伸べて、困ってる妖怪にも力を与えて、それに私だってあんたに救われた……。蓮華は立派な正義の味方だよ！』

『そうかなあ』

『ああ、私が保証する。鬼は嘘を吐かないよ』

『それは嬉しいね。でも私になれるなら、萃香はもつと凄い奴になれるよ』

憧れだった。

羨望した。

私の夢は、仲間と共に仲良く暮らす事だった。

隣にいる奴が笑っていれば、私も笑えば良い。

隣にいる奴が泣いていければ、私も一緒に泣けば良い。共存し、共有し、分かち合う。そうやって夢見てきた。仲間を捨てざるを得ない時のことを、私は忘れることが出来ない。結局優柔不断で、仲間を更に死なせたことも忘れない。

そんな中で仲間を全て守って。尚且つ己を他者の為に擲つ事が出来る蓮華に憧れの念を抱いた。

どうしたらこんな女性になれるのかと、私は蓮華の背を見ながら常日頃考えていたものだ。

憧れを抱くと同じく。追い付けないと思った。

こんな私じゃ無理なんだって。

でも、彼女は叱咤激励続けた。そうやってまた想いを募らせていき、いつか私にもなれるだろうって。仄かに淡い幻想を胸に思い描いた。

だがその幻想も、幽々子の死と共に瓦解した。

『幽々子……なんで、なんでえ……』

おい、おかしいだろ。なんで正義の味方が泣いてるの？ 彼女は正義の味方なのに、

なんで悲しむの？ 彼女だったなら救える筈だ。だって正義の味方なんだから。正義の

味方の結末は、ハッピーエンドなんだから。

私は彼女を目指していた。雄々しく猛々しい生き様は、尊敬に値する。そんな彼女が、喉を震わせて涙を押し殺していた。

彼女でも無理なのか？ 仲間を全て守り、仲良く暮らすこと。簡単そうで、とても難しい事。彼女なら、「蓮華」ならそれが出来ると思っていた。

ああ……私は何を目指していたんだろうか。

彼女も一人の存在だと言うのに。

己の理想を押し付けていただけじゃないのか？

蓮華のこなす正義をあたかも自分の事のように誇る。それは正義の味方なのか？

私が目指すために心掛けていた姿勢なのか？

私は何がしたかったんだ？

もう仲間はいないじゃないか。蓮華は本当に消滅してしまったじゃないか。

険の裏に焼き付くあの光景。己の手が届かない、宇宙そのものを掴んだ代償による消滅。忘れることが出来ない悪夢そのもの。

仲間と仲良く暮らす？ もう仲間は死んだよ。

蓮華を尊敬していた？ その蓮華は死んだよ。

結論それは建前であって、私が欲しかったのはまた別の物なのだ。

「フラン……」

私が泣く少女に向けて声を掛けた時だ。

耳が捉えたのは、遠くから徐々に向かってくる爆発音。それは幻聴ではない、確かに聞こえる音だ。その証拠にフランも辺りを何事かと見回している。

考えたくはない。本当は分かっていた。

そろそろ奴が来ると。何となく本能が感じていた。

「フラン、下がってな」

私は崩壊する天井と共にこちらへ飛来する「天魔」に向かつて、これ以上ないくらい睨み付けた。

覚醒

身体も、身に纏う物も、何もかもぼろぼろ。

唯一気高いのは精神だけか。

「ふはっ、ようやく見つけたぞ四天王！」

「そつちから来てくれるなんて大胆だねえ。天狗の長はせつかちかい？」

「ハッ、好きに言え」

ある程度挑発してみるも、流される。これは想定内であったが、今一番想定外なのがフランの存在であった。

傷付けたくないと彼女と言った。戦意を手離れた日和見だと断じても良いが、決してそこに悪意が在るわけではなく。彼女は心の底からそう思っているのだ。

純粋な考え、気持ちは、時として最も価値の高い精神となる。

生物としてのの本能に類似した、取り繕った理性が解放された際の、一種の告白。

私はその言葉に少しだけ突き動かされたと言つても良いだろう。

破壊を司る妖怪が、傷付けたくないと宣言したのだ。その前へと進む思考、私は嫌いじゃないんでね。

幾度の戦闘を越えてきたからか、然程天魔の速度は速いとは思えなかった。それとも私の目が順応したのかもしれない。

しかしまだだ。まだこの天魔は余力を残している。

——その事実を知ったのは、私が山の四天王と呼ばれていた時。

天狗を支配していた鬼は、その傲りと油断から天狗達が着々と築く秘密兵器を見破れなかった。

気付いたのは鬼神様だ。そしてその『禁忌』に対し下した判断は抹殺。これが『天魔殺し』と言われた事件の全容である。

天魔の音を置き去りにした突進を、紙一重で躲しながら萃香はその禁忌に触れた。

天魔との戦いに於いて、萃香は好奇心や興味に似た何かを抱いていた。それは仮初の山の四天王であった弊害による、知識の不足から来るものだ。萃香は天魔のその口から、真実を聞いたかった。

「なあ、その体は何年持つ？」

「天敵足る鬼にそう易々と言うと思うてか？」

「固いなあ……今更だし良いじゃないか」

「甘言を……。私達は貴様らを殺すためにこの秘術を編み出した。それを再認識しろ、鬼ツツ！」

「秘術を編み出した……って。ただ転生の魔法に魅入られた愚かな天狗ってだけじゃないか。いや、違うな。『天狗じゃなかったね』」

「黙れ」

「黙らないよ。言うのは私の自由だ。口を封じたいならさっさと殺してみな」

その一言を皮切りに、天魔の攻撃が苛烈を増した。直線的な突進から、能力を交えた戦闘に切り替わり。

肉薄したその攻撃は、能力も相まってか鬼の四天王に匹敵する程だった。

「ぬうううう！ 貴様らに分かってたまるか！ 天狗の屈辱を、地獄を！」

「そりや分らないさ。だって私は天狗じゃないからね」

「ならば死ね！ 毛根も残さず私の前から消えろおっ！」

「まだ死ねないね！」

風で造られた鋭い爪は萃香の肌を切り裂いていき、逆に萃香の攻撃は当たらない。速さが段違いだった。そして偶々当たったとしても、天魔が持つ回復能力ですぐに治癒されてしまう。

（これは拙いね……）

消耗するのは体力だけ。天魔の使う能力の全貌が掴めぬ今、迂闊に肉弾戦に持ち込むのは不利とみた。

萃香は一度距離を取り、莫大な妖力を集めた妖力弾を前方に放つ。その動きは緩慢と
していた。だがそれで良い。通路を埋め尽くすほど膨張した妖力弾は、ゆつくりと天魔
を追い詰めていく。

(一旦距離を取って、体勢を立て直す。四人のフランも避難させないとね)

「行くよ、フランドール。傷付けたくないんだろ？ 私もあんたを傷付ける理由はない
んでね。だから休戦だ。避難するよ！」

フランにはもう涙は見えなかった。

立ち直ったのだろう。ああ、強い子だ。私とは大違い。

私は三人のフランを抱えあげ、元来た道をひた走る。背後で大きな爆発音がした。時
間が無い。最悪私が迎撃することになるか……。

「萃香ああああああっつ——!!!」

地の底から唸るような、重く響き渡る怒声、咆哮。

間違いない、天魔の声だった。

「フランドール、先に行きな」

「えっ、でも！」

「早く!!」

「うう……」

フランの脳内は、迷いで占められる。彼女は優しいから。そして狂気に浸されながらも、心の奥底で善くあることを願いつづけているから。

自分を逃がそうとしてくれる萃香の力になりたい。けれどこの鬼はフランの敵であり、友達の仇だった。

でも、どれだけ恨みは深いとしても。フランは知っているのだ。恨みは忘れなければ無くならないと。恨みを恨みで消そうとしても、末にあるのは虚無感だけ。

フランは495年の歳月で、無意識的にその境地に辿り着いていた。

「ごめん、私は逃げたくない」

「はあ？ あんた、傷付けたくないって」

「傷付けたくないけど……傷付くのはもつと嫌。萃香は敵だよ。絶対に許せない。でも、萃香が傷付いちやうんだったら、私はその光景を見るのは嫌なの！ 私は臆病者だから、何も出来ない、無力感に苛まれる自分が嫌なの！」

「フランドール……」

「だから、私は傷付きたく無いために傷付ける。私の有り余った力は、それくらいしか使えないから」

「そりゃあ……なんとも滑稽で、偽善で、浅はかで、狂ってる」

「うん、私は狂ってるもん！」

「ああ。だから良いんだ。さつきまでのフランドールより、今のあんたの方が断然良いよ」

萃香は三人のフランを背後に降ろし、天魔を迎え撃つ準備をした。私がこの異変を起こしてから、私の隣には誰もいなかった。でも、今は違う。敵ではあるが、隣にはフランがいるのだ。

誰かが隣にいるって事実は、蓮華がいるときから何度も経験した。あの誰にも負けなと思える勝利への陶醉、自負。それが湧水のように溢れ出てくる。

「——見えた。天魔だ。」

爆発により舞った土煙。その中を突っ切って彼は加速し続ける。シユミレートは無し。一発本番。ここで仕留める……と決意、考えを新たに萃香は拳を握った。

赤い閃光が天魔を横から貫いた。よく見るとそれは、紅の槍によつて形成された一筋の閃光。

波のように天魔を飲み込み、その奔流は紅魔館を超えて霧の湖まで一線を描いた。

「——っつ！……お姉様！」

フランが突如として駆け出す。彼女の向かう先には、青と淡紫の髪色をした紅いドレスを着る少女が立っていた。身体は煤汚れ、至るところに傷が出来ている。

そんな彼女へお構い無しに抱きつくフラン。その顔には安堵の色が浮かび、少女の方も愛しさを込めた表情をしながらフランを抱き締めた。

「怖かったでしょ、フラン。もう大丈夫よ。お姉様が付いてるから」

「お姉様……お姉様あ……」

「ふふ、今日は甘えんぼうね。でも残念。今からお姉様にはやることがあるの。だからフランは私室に戻ってて。仮眠でも取ればその時には私の用事も終わっている筈よ」

「うん……」

「良い子ね、フラン」

「お姉様………死なないでね」

「吸血鬼は不死よ。そんなに甘くないわ」

フランは、一緒に戦うと申し出る気だった。でも、そんな軽い覚悟は、お姉様であるレミリア・スカーレットの前では簡単に崩落してしまう。

安心感、麻薬のようなその感情。敬愛すべきお姉様にそう言われてしまつては、フランは引き下がる他なかった。

「そののあんた、あんたもフランと一緒に逃げなさい。幸い大図書館は近いわ」

「いやいや、そいつの目的は私だ。私が責任を持って相手するよ」

「はあ……。分からないのかしら、あいつとあんたの実力の差が。もし相対したら、あんな

た死ぬわよ?」

「今、死んでないじゃないか」

「それは運が良かったからよ」

「運命かも」

「無為に死に行く運命なら、私は尚更あなたを止めるわ」

「それはなんともお優しいね。でも私に見えている運命は、別に死ぬ運命じゃない。勝つ運命だ」

「運命は見えないわ——つと、来るわ!」

レミリアは、天魔が吹き飛んでいった大穴に向けて手持ちの槍を全て投げたあと、今度は無数の紅槍を出現させた。

一つ一つが純度の高い魔力で形成されており、もしそのどれかに直撃すれば無事ではすまない。

『スピア・ザ・グングニル・フォークス』

そして詠唱の後に、無数の紅槍は天魔が吹き飛んだ方向に一気に加速した。まるで全ての槍が集束するように、倒れている天魔の身体を目標として進んでいく。

「まだよ!」

レミリアの周囲に魔方陣が出現。魔力を込められた魔方陣は光輝き——放出。

圧倒的光の群体を解き放った。荒々しいが、確実に効果は高い。放たれる魔法の何れもが、何らかの状態異常を引き起こすような仕様で作られており、一度当たれば後は雪崩式に当たっていくだろう。

確かに、彼女の言うとおり。

彼女は強かった。それこそフランドールの戦力差を削ったとしても、それを補うくらいに。

だが運命とは残酷で。

「……あれでも死なないなんて」

「天魔は普通の妖怪と一緒に……だと思っちゃダメだ。あいつは魔法生物だからね。魔法には一定の耐性を持っているし、三代目の能力である『耐性を持つ程度の能力』が更にあいつを保護しているだろう」

「えっ、それってどういう……」

「前！」

萃香が叫ぶと同時に、レミリアは肩から上が無くなる。力無く胴体が倒れる様は、少し空しい。だが消滅した訳では無いのが幸いか。死に目なんてあまり見たいものではない。それより彼女の、妹の為に自分を犠牲にしたことに対して敬意を表したいくらいだ。

そして瞬きをする間も与えず、天魔は萃香の前に姿を現した。

「どうしたんだい天魔、いつもの余裕が無さそうじゃないか」

「ほげげ。……全く、流石に死ぬかと思つたな」

「その割に傷は無さそうだけど？」

「治癒しているのだ、バカめ」

「確かに……その能力、結構便利だよな。それは今代の天魔が持つ、先天的な能力だろう？」

「お見通しか。ハッ、先代の杜撰な情報統制もここまで知られると笑つちまうな」

「〃先代に聞こえてる〃と思うけど、良いの？」

「別に構わん。どうせ何も出来ん」

天魔が両腕から妖力弾を連続発射。既に瓦礫と砂埃の戦場と化した紅魔館の廊下を、更に高密度の妖力弾で視界を防ぎにくる。

すぐに頭に浮かんだのは、彼の目的。先程拳を交えた際、彼ならば気付いた筈だ。肉弾戦ならば圧倒出来る……と。自分の力が、とつくに鬼の四天王の実力を上回っている事を。

そして予想通り、〃来た〃。

「これを防げるか？ 『暴風扇』」

身体を回転させながら、放たれる五度の連撃。

一つは腹に突き刺さり。二つは両肩。もう二つは両足を穿った。

「ぐううう………っつ！」

刺さったのは、細長い、硬質化した葉。

多分これも能力の一つか。近接攻撃が来ると思っていたからこそ、不意の五撃。動体視力は常の妖怪程度では収まらない萃香だが、その萃香でさえ攻撃の切っ先を捉えるには至らなかった。

痛みに顔を歪めた、その一瞬間の間。そこから拳で顎を打ち抜かれた。

「くふっ——………」

あ、マズイ。意識が——。

『おい、萃香。私達は地上を去る』

『なっ………何言ってるんだよ勇儀。地上を去るってそれは………』

『嫌気が差したんだ。人にも、天狗にも』

『だったら……だったら鬼の国に来れば良いじゃないか。あそこは鬼にとつての楽園で……』

『萃香は知らないだろうけど……あそこはもう楽園なんてものじゃない。狂った鬼神の圧政によつて、今じゃあ強制収監施設さ』

『う、嘘……だ。嘘だ嘘だ、勇儀、鬼は嘘を付いちやいけ——』

『黙れよツツ！ あんたは良いだろうねえ！ 友達と地上で楽しくやつてんだからさ。あんたが里でなんて言われているか知ってるか？ 娘にしたい女の子ナンバーワンだつてよ、馬鹿馬鹿しい！ いつでもあんたと違って、私達は除け者さ、チクシヨウ』

『そんな……そんなつもりじゃ』

『じゃあな、伊吹萃香。あんたは私達と違って、地上で仲良くやるんだよ』

『待つて、待つて勇儀！ ねえ待つてよ!!』

ねえつてば——』

ああ、嫌な事を思い出した。

私が地下に行かなかつた理由。それは合わせる顔が無かつたからだ。地上の楽土を

興じ、それで最後にはノコノコ逃げてきましたって？　はは……わらい話にもならないね。

でも、本当は行きたかった。寂しかった。

今でも、皆で平和に暮らせたらなって——焦がれる夢を見る。

大江山で変わったと思った。俗的感觉を、人としての幸せを自分みたいな奴でも感じられるって。

実は違ってたんだ。甘えだった。人に溺れて、鬼の事を考えなかった。私は結局、どちらでも失った。鬼でも、人でもない。ただの半端者だったんだ。

それでも友達を大切にして、悲しみを越えて……それで、何だろう。

『皆を守りたい』

『皆と共にいたい』

『皆の笑顔を見たい』

——何が正義の味方だ。

正義の味方だったら、鬼と人との関係を取り持とうと、少しでも努めるだろうに。

私は自分の事しか考えていなかったんだ。

私が欲しかったのは共感だけで。

他には何も望んでいなかった。

何も……………。

何も無い。空っぽだ。

私の気持ちを考えてくれる蓮華がいて、安心した。

私の事を褒める幽々子がいて、安心した。

私が悲しいとき、慰めてくれた紫がいて安心した。

違う。違う……………。違う!!

これじゃダメだろ！ 違うだろ！

私は……………覚悟や思想だけ一丁前で行動と伴わない、最低な奴だ。何が正義だ。お前は偽善だろ。何が何も出来なかっただ。何もしていないだろ。

憎い、憎い、憎い!! こんな自分が憎い！ こんな自分が嫌だ！ 吐きそうだ!!

友達におんぶに抱っこ。

私が望んだのはそんな姿じゃない。私が抱いたのはそんな情けない姿じゃない！

私は……………私は……………。

私は正義の味方になりたかったんだ!!

蓮華の雄々しい姿に憧れた。

幽々子の施しを与える姿に憧れた。

紫の自己犠牲に憧れた。

ああ、私は友に憧れているんだ。もう甘えない。もう重荷にならない！

私は伊吹萃香だ。鬼の四天王の伊吹萃香だ！！

こんな所で、寝ている場合じゃないだろうがっつ！

「とどめだ」

意識を失い、背から倒れこんだ萃香。

身体中からこれ以上無いほど血液が流れ、既に命も灯火のようだ。

初代から続く呪いのような怨念に促されるまま、天魔は萃香に近付いていく。

彼にとって親とは天魔だ。親の言うことは絶対なのだ。

「我が天狗の意思は……天魔と共に」

爪を形成し、最後の命を刈り取ろうと萃香の身体を持ち上げた。そこにある。念願の鬼の命が。彼はどれだけこの瞬間を待ち望んだだろう。

息苦しくなるような先代らの怨念。怨嗟。それらは代を増すばかりに募っていき、今代の天魔の時にはもう、はち切れそうなほど膨張していた。

この呪縛から解放されるために。

この呪いを断ち切る為に。

憐れな魔法生物は、導かれるように爪を萃香に突き刺した。

「残念、だったね。私はまだ死ねないんだ」

その声に気付いたのは、爪が半ばから折れたことを見た時だ。

驚きに天魔が距離を取ろうとしたその時、彼の視界が反転した。

ホムンクルス

私が最初に見た光景は、何かの液体に浸されている自分と、ガラス越しに見る埃の積もった研究室だった。

何故そこで私が自我を持ったのか。それは私にも分からない。少しだけ意地悪な神様が、私に悪戯でもしたのかと最初は思っていたくらいだ。

「。」。声が近付いてきた。自分には理解の出来ない言語。それは二つ分反響し、自分の呼吸と重なって泡が吠えた。

大きな翼を生やす二人の研究員が何かの機械を弄ったかと思うと、すぐに円い瞳をこちらに向けて、奥に駆け出した。

何の言語か分からない以上、私はただ液体の中で浮いている事しか出来ない。

経ったのは数刻だろうか。今度は研究員とはまた別の大きく覇気のある老齢の男と、まだ年端も行かぬ少年がやって来た。どちらも大きな翼を強調するように揺らしている。

大男が何か研究員に話をしていると、不意に少年がガラスにべったりと張りつき、こ

そして殺された——彼らの記憶。

彼らの生の意義。培った経験とたゆまぬ努力。果てに手に入れた力と暴力。

約12人。その全ての人生が、私の身体に、記憶に、脳に、——いや、私の存在そのものに刻まれた。

いつしか痛みは止み、床には大男が転がっていた。既に命は無いと直感的に感じたが、それは真実だろう。

ガラスケージがひとりでに開き、私は産まれて初めて“地面”というものを体験した。

「おはようございます、天魔様。よくぞ痛みを耐えて下さいました。私めらは酷く興奮を覚えております」

大男の隣にいた少年が、恭しく頭を垂れて謝辞を述べた。彼が言った、『天魔』という単語。私は初めて聞いたはずだが、何故かそれは以前から知っていたかのように頭の底へ流れ落ち、理解となった。

私は『天魔』を知っている。その“使命”も、何故私が誕生したのかも、そして私の“正体”さえも。

「……私の能力はなんだ」

「『治癒する程度の能力』でございます」

「そうか。マルス、良くやった」

「お褒めに預かり光栄です。」

被検体ホムンクルス―20034……いえ、それは昔の名でしたね。今の貴方は天魔。天狗を治める事に意味を感じ、天狗に仇なす敵を排除する。そう、貴方こそが天狗の秘密兵器、奥の手、秘蔵！」

マルス……と呼ばれた少年は、興奮するように天魔を讃えた。いや、実際興奮している。頬は上気し朱が差し込んでいる事からも明らかだ。

「どうです？ 初代から受け継ぎ続けた記憶の奔流、そして実感する力の躍動感。最高でしょう？ 至高でしょうっ！ ふふふ、それで良いのです。存分に酔いなさい。貴方は全天狗にどんなことをやっても愛されるのですから。そのようにプログラミングされていますしね」

このマルスという人物。端的に表すと狂人という言葉が似合う少年だが、どうしても私には嫌いにはなれなかった。これもプログラミングのせいかもしれない。

そんな事は置いておいて、私には使命があるのだ。天魔を今後とも継続させるために、更に天狗の社会を強固に、そして大きく発展させなければ。

「はは……天狗もバカだなあ。何も気付けないし聞こえないなんて。俺みたいな愚者に取り込まれた時点で、この種族は終わりなんだけどね」

「はは……天狗は凄いなあ。俺だったらそんな堂々としてられないや」

確かに私の今の姿は全裸だ。流星に気恥ずかしい。すると気を利かせたのかマルスが肌を隠す布を持って来て、着させてくれた。

「さて、王の凱旋ぞ——」

——それは夢だったのか。夢だとしたら、随分と懐かしい夢だ。

「あの一撃を受けてまだ立ち上がるのかい……」

目の前には敵。そう、天狗を降す敵。名は伊吹萃香。

朦朧とした意識が徐々に鮮明となっていく。私は一体どうなったのだ？

確か……そうだ。萃香をこの手で殺したと思ったら、何故か私の視界が反転していたのだ。

その後、すぐに暗転。鼻頭から感じる痛みを察するに、私は何らかの手段で地面に叩きつけられた後、重い一撃をその顔にくらった……というわけだろう。

「はは……残念だが、私は負ける訳にはいかない」

身体を立たせようとするが、うまく動かない。視界が波のように揺れて、私の平衡感覚を奪っていく。

「一応言っておくけど……脳を揺らしたよ。立つこともままならないだろう？」

確かに……彼女の言う通り。私は立つ力さえ膝に籠らない。立てなければ——
彼女の土俵にも立てない。そうなれば、私が敗けを認めた事と同義だ。

笑う。

何に——なんて理由はない。ただ笑みが零れた。

「楽しいな」

「そうかい？　なら良かった」

「己をぶつけ合うこの行為。以前の俺ならば鼻で嗤っていただろうが……存外に悪くはない。善き高揚感だ」

「私は血が過ぎ過ぎて高揚感高めになっちまってるけどね」

「ふん、ならば丁度良いだろう。続きだ。殺しあいの。——決着を着けるぞ」

「私はこんなところで止まってる暇はないんだ。無理矢理そこを退いてもらう。殺しあいもする気はない!!」

「ではその気にさせてやろう——!!」

——鬼と天狗の、最後の戦いが始まった。

何度も繰り返された近接戦。それが再度行われる。

天魔は自慢の速さを以て萃香を翻弄し、萃香は鬼としての圧倒的力を以て天魔を狙う。

ダメージの蓄積を狙う天魔。効率を考えると、一撃一撃を狙って打たねばならない。無駄な行動を無くすよう、一発一発丁寧に。

反対に一撃必殺を狙う萃香。だが相手は天狗の長である天魔だ。無闇に攻撃をして当たるとは思えない。だからって狙い打ちをしようとしても、相手はそう甘くはないだろう。効率を考えると、萃香は一撃に意味を持たせなくてはならない。その一撃には意味が無かったと、無為な結果にしてはならない。

「ぬうううー！」

「——くっ、まだまだあつー！」

耐久力には、萃香に軍配が上がる。硬質化した細長い葉を両肩両脚、更に腹部へ貫かせても、未だ彼女が戦闘継続が出来る時点でかなり異質だ。

だが、彼女でも痛みは感じるだろう。その証拠に、天魔を狙い、拳が空振る度に、その端整な顔を苦悶に歪め、血は通りの悪い水道管のように時折鋭く噴き出す。

時間の問題——。天魔はそう思った。

（いずれは失血により意識を失うだろう。萃香は私と戦っているのではない。時間と

戦っているのだ。そこに付け入る隙はある)

痛み、歪み、傷み——憤り。

萃香の脳裏には、まるで走馬燈のような現象が起こっていた。それは死の予兆か。はたまた生への渴望故か。

『伊吹の姐御お！ さっさと村を襲いましょうやあ！ 俺達鬼にとつちや、人間なん』お
 いしい、少女一匹でうちの縄張りに入るって……死ぬ覚悟と遺書は用意し『喧嘩するぞ、
 萃香——』ま、またかい!? か、勘弁してく『あんたが源頼光か。どうだい? 酒の
 一杯でも飲『ぎぎ……ぎぎ……ヂグジョウ……許さねえぞ、酒に毒なんて……』私の友を
 襲う不埒千万な輩とは貴様らかツツ! 『ああ、それでいい。伝えろ、蓮華は妖怪の味方
 だと。ほら、見逃してや『なんだよ、蓮華。ふざけんよ……チクシヨウ……チクシヨ
 ウ……泣かせんなよバカあ……』私は蓮華の友さ、それ以外でもそれ以上でもない。何
 か文句が『幽々子!? 『勇儀……待って、ねえ……』蓮華もいない……紫もいない……幽々
 子には会えない……鬼は地上に私独り……ハハッ、とうとう私は、独りぼっちになつち
 まつたねえ……』

一瞬で駆け抜けた記憶。

永いようで……とても短かった。素晴らしくもあり、汚れていた、濃密な人生だった。私は……まだ何もやっていない。私を支えてくれた皆に、何も報いていない。

（私はまだ——自分の正義を貫いていない!!）

「まだ終わらない！ 私はもつと先に行きたいからだ！」

「戯れ言よ、ここで死ぬのだ。潔く世から去ね！」

また一撃——萃香の拳が空を薙ぐ。

当たらない……——いや、必ず次は当てる。

当てる。

天魔は計略を編んでいた。苦痛と獄が伴う、闇の最中へ萃香を引きずり下ろそうと。目を付けたのはその傷だ。誘導されている点も否めないが、けれど甘美。もし刺さっている葉を強く押すだけで、萃香は痛みにもがき崩れ落ちるだろう。

その傷は反撃のチャンスでもあり……ウィークポイントでもあるのだ。

（そちらがわざと狙わせる算段であるのなら……乗ってやろう。そして、圧倒的速度を以て叩きのめそう）

天魔は加速を始める。萃香の死角を見つけようと、虎視眈眈としながら。

既に数十を超える旋回。萃香は気を張り巡らせている。背後を取ってもそれは死角ではない。視角だ。

(まだだ……まだ引き付けろ……)

加速——加速——加速——。

眼球運動を超える速さ。萃香でも追い付けない、未知の領域。覚醒しようとしているのはなにも萃香だけではない。この天魔もまた、天狗の領域を超えようとしているのだ。

声は天魔の後ろを通り、姿は緩慢に見えてくる。それは速度が速いが故の残像。

生物という枠を——天魔は今まさに乗り越えようと。

いや、もう既に——

「乗り越えたぞ、伊吹萃香」

狙われたのは腹部と右足。天狗部隊との戦いで、右足の甲に付けられた傷を見た天魔は、右足の動きが左足より微妙にずれている事を確認。賭けに出たのだ。

予想は的中だった。萃香は反応も一切出来ず、腹部と右足への攻撃を許してしまう。

コンマ以下の時間。〃秒〃が〃時間〃になるほどの圧縮された時の中で、萃香の傷が

広がっていく。

底の無い沼のように、ズブズブと沈んでいく。

天魔はすぐに離脱行動を敢行。危険なのはここからだからだ。彼は知っている。数多の天魔の記憶の中で、死に瀕した獣は最も強くなることを。

——瞬間、 “反応した” 萃香の腕が鼻先を横切る。

……危なかった。あと数瞬間判断を遅らしていたら、その拳は天魔自身に返ってきた。「流石だ、それでこそ鬼の四天王だ!!」

褒めてはいるが、その実驚いている。二本でこの鬼は止まると思っていた。だが違う。想定外を越し、この鬼にとつては想定内。

二本じゃない、更にだ。更に深く、多く。

動くと言っても、深く差し込んだ部位についてはあからさまに動きが鈍くなっている。天魔の有利は動かない……が、油断もしてはいけない。この鬼には常識が通用しないと思え。

(次狙うとしたら……左肩と左足)

右脚と腹部を損傷した事で、萃香の動きは自然と最小限になる。攻撃の手数も減り、防御に回っていく。こうなると攻撃を仕掛ける側としては厄介だ。

奴は警戒しているのだから。左足、左肩、右肩のどれかを。

（ではこうしよう）

天魔が再度萃香に肉薄すると、案の定萃香は左半分を見せないように防御を固めた。視線から察するに、防御が左半分に傾いてるといつて右肩を狙っても、重たいカウンターをくらうだろうということとは、容易に想像出来る。

だから、今度は蹴りを放った。右脚と腹部、血が滲んでるその部分に深く食い込むように。

「いゝ……ううゝあゝ……」

鬼でさえ流石に傷口への追い打ちは堪えるようで、喉からくぐもった声を絞り出す。そして痛みで防御が開いた隙に、左肩の葉を深く振り込んでおく。

これで三つだ。奴の先程までの威勢のある顔は鳴りを潜め、もうそこに覇気はない。苦悶に表情を歪め、瞳から涙が滲み出そうだ。

「はは、ハハハハッハハハ！ 所詮貴様も女つて事か！ 涙脆く、誘う表情は僂げで弱々しい。なんとも脆弱で、懦弱に尽きる!!」

「……………ッ！」

「もう言葉も無いか鬼よ！ せめて何様な姿を残さぬよう、細切れにしてくれる！」
天魔は残りの二本を突き刺そうと加速を始めた。

後二本。それが私のタイムリミット。

既に拳を振るうのさえ痛みが走り、倦怠感が付きまとう。このままでは本当に殺されてしまう。いざとなったら霧状になって……いや、あれは卑怯だ。

絶体絶命。その単語が一番似合う状況だ。

天魔の速さに私は付いていけず、ただ防戦一方。どうすれば勝てる……？ カウンター？ 腕を捨てるか？ ……どれも机上。私はこんな賭けに出ないとこいつに勝てないのか。

——力が足りない。

度重なる戦闘の末、全盛期に戻りつつある私の身体だけど、まだだ。もし全盛期に戻ったとしても、まだ足りない。天魔に勝つにはもう一条件必要なのだ。

なんだよ、一条件って。分かんないよ、どうやって勝つんだよ。死にたくないよ……。

『まあ、そうだな萃香』

これも走馬燈か。蓮華の声が頭に響いていた。

だが不思議と不快ではない。まるで抱擁された時のような感覚。優しい温もり。

『最後の最後、もうダメだと思っただらさ』

私は声に従うように、導かれるように——
『直感に頼れ』

拳を突き出した。

「ぐぐうあつつつ!!」

眼前にあつたのは天魔の顔。そして確かな感触。

「……分かった、掴めたよ。自分の限界の先の先に至る方法が」

「ちい、まぐれ当たりとは不幸な!」

天魔が消える——しかし私には分かる。

今度は右肩だ。私は右斜め上方向に思いきりパンチを放つ。骨を砕くような感触。そしてそれは見事に天魔の鼻を穿っていた。

「がああああああああツツツ!!」

絶叫。驚きと痛みが混じった不可思議な悲鳴。天魔の頭は混乱していた。見切られたのか……と。それとも誘導されている? はたまた何か種が?

天魔が行動を迷っている間にも、萃香は動きを止めない。吸い込まれるように腹部へと放たれた拳は、天魔を数m浮かす。

臓物が掻き回される——とはこの事かと、他人事のように天魔は思いながらも、

地に落下する途中、意識を覚醒させた。

「ヌウあつー！」

上昇、旋回。

唯一の安全地帯である上空に逃げ、一旦体勢を立て直す。

「何故だ……何故奴の拳は私に当たるのだ」

「そりやなんでだろうね」

「チツ、黙れ！ 貴様には聞い……て……い……な……」

「やあ、天魔。この空を見るの、最後にならなかつたようだね」

背後を振り返ると………「いた」。

気配も何も感じない、元からそこにいたのだとつい錯覚してしまいそうな気配遮断。

萃香は消力を使って、ただ自分への影響力を疎めただけなのだ。そこには気配感知という干渉系統は意味をなさない。

超近距離。天魔は躲すという選択肢を行うことさえ出来ず、萃香の右ストレートをモ口にくらう。

地上に落下していく刹那、天魔は見た。萃香の手に収まる物を。それは自分の服の一部。

（奴め……私が飛び立つ瞬間、私の服の端を掴んで共に上昇したというのか！）

「さあこの中天で決着をつけよう、天魔！」

「ほざけ!!」

『大江山悉皆殺し』!」

「秘法『解脱飛翔・開天闢地』」

天魔が広範囲の風を操り、霧の湖さえ内包してしまいそうな超大型台風を形成。それにより発生したエネルギー全てを圧縮し、萃香にぶつける。

そして萃香は自らの密度を極限まで高め、超高熱体となりながら落下していく。さながらその姿は燃え尽きつつある隕石のよう。

風と、熱。

宇宙創世記のような、莫大な光の放出。

まるで太陽が二つあるのだと。そう言われれば信用してしまう。

身を焦がす光の中で、天魔は見た。

天を、罪過地を、そして己さえ遙かに凌駕する、真正正銘の………バケモノ鬼を。

鬼の直感。既に未来視に近い領域へと到達した萃香の直感は、灼熱を越えて尚、迷うことなく拳を天に突き立てた。

灼熱を感じながらも、天は天魔天狗の未来を憂い。そして鬼の手によって、地に墮とされ

宴の前に

崩れかけた廊下、そこに女の子の身体を回収する一人の女性がいた。その女性は生首を抱え、文句を垂れる。

「もう……お嬢様ったらはしやぎすぎですよ。これ修繕するの私と咲夜さんなんですからね？」

「ごめんごめん……いやー、天魔って奴強かったのよ。本気を出せば大丈夫だったと思うけど、この紅魔館で暴れる訳にはいかないじゃない？」

「もう十分暴れてるんですけど」

「そんな固いこと言わないの、『小悪魔』」

小悪魔はため息を吐いた。

何故自分がこんな後始末のような事をしなければいけないのか。結論、あの鬼と天狗が悪いのである。

黒い翼が小悪魔の心情を表すように萎びた。

「良かったですね、私とパチュリー様が主従関係で。使い魔の送受信機能のお蔭でパチュリー様にメッセージを送って、四人の妹様共々回収してもらったんですから」

「ま、それは感謝するわ」

レミリアはフン、と鼻を鳴らした。その態度を見るごとに、小悪魔にもフラストレーションが溜まっていく。

小悪魔は知っているのだ。レミリアはカリスマ然とした態度をとっているが、その実プリンにも一喜一憂するまだまだお子ちゃま精神だと言うことに。

(こいつ、誰かと話した途端に服が爆散する悪戯でもしてやろうか)

——なんて腹黒い考えを巡らせている中、レミリアが事の端を発した。

「美鈴ったら、上手くやってるかしら」

「門番嬢がどうかしましたか？」

「いやね？ 咲夜をちゃんと押さえてるかなーって」

「ああ……。確かにお嬢様にぞっこんですものね、メイド長は」

「ええ、あの子ったら……。私に傷が出来るのも嫌がるのよ。だから今頃、あの鬼とかに手を出していないと良いんだけど……」

話している内に、いつの間にかレミリアの私室に着いたようだ。小悪魔は運搬時にかいた汗を拭い、私室内にある棺桶を引っ張ってくる。

それはレミリア愛用の棺桶。元は無骨なデザインであったが、今ではデコレーションされて、なんとも可愛らしい棺桶となっている。こんなの妹様にでも見られたら、即刻

彼女は自殺を選ぶだろう。

「ほら、後始末は私がやりますから。入って入って！」

「ちよ、ちよつと！ 押し込まないでよ！ あつ、痛い痛い、関節曲がつってるつて！」

「吸血鬼に痛みなんてないでしょ」

「あるから！ 私には人間と同じくらい——」

「よいしょつと」

「ふぎゅ」

小悪魔に慈悲など無かった。曲がりなりにも彼女は悪魔である。人の嫌がるのが大好きな、小悪魔である。

そんな危険思想の持ち主に、言い分が通るなんて甘い世界ではなかった。

「さて……魔力感知」

自分の魔力を薄く広げ、自分とは異なる魔力を見つけてるのが、魔力感知である。これを極めると、魔力のあるものであれば特殊な状況を除いて感知することが出来る。戦闘能力を持たない小悪魔の、確かな技術だ。

そして見つける。反応は三つ。場所は門前だった。

「おお、いるいる！ これは咲夜さんと門番嬢に……もう一人はあの鬼か」

小悪魔は現在の切迫した状況に、身震いをした。

どれだけの修羅場を見ても、これほどの一触即発した場面は中々無いだろう。各々が殺意を持ち、二人はなんとか抑えてはいるけれど、咲夜さんだけは違う。彼女はわざと殺意をばら蒔いている。物騒だなあ。

今にも鬼に襲いかかりそうな咲夜さん。でも門番嬢が押さえていてくれるから、なんとか鬼の方も戦闘をせずにすんでいる……って感じだろうか。

当事者ではないのでなんとも言えないが、場面を見た限りそれに近いはず。

「これは面白くなってきました……！」

小悪魔は急いで門前に向かった。

彼女は欲に忠実なのである。悪魔として険呑な雰囲気、悪感情を見たいが為に、彼女は飛んだのだ。

「だーかあーらあ！ 私はクツション代わりに紅魔館を使っただけだよ！ だからそこを退いてくれ。私はもうここに用は無いんだ」

「そうはいかない。貴女はお嬢様を害する敵。よって排除させて頂くわ」

「ちよ、だから咲夜さん、落ち着いて！」

ナイフをどこからともなく取り出し萃香に投合しようとした咲夜を、美鈴が止める。美鈴としてはこれ以上の戦いはしたくなかったからだ。

「おや、戦わないのかい？」

萃香が敵愾心を煽るように咲夜へと放った言葉は、今にも噴火しそうな咲夜の心を揺らすには十分だった。

咲夜の目つきが、メイドのものから狩人のそれへと変貌する。

咲夜が能力を発動。——しようとした瞬間、それを察知した美鈴が咲夜の腕を掴んだ。

「ダメです、咲夜さん。この鬼はヤバイです」

「離して、美鈴」

「いいえ、離しません」

ギリギリと握られる細腕。人間である咲夜には、この強力な拘束をほどく術を持っていない。

そして力が強くなる度に、美鈴の手が自分の注目を惹いた。力強く、熱のある指。何度も触れ合った掌。今はそれが、自分を止めようと必死になっっている。

「咲夜さん、聞いてください。あの鬼はもう普通じゃない」

「……普通じゃない?」

「ええ、実は私、彼女とは数日前に戦ったんですよ。でもその時とは大違いなんです。気の量も、なにもかも」

ちらりと横目で萃香を見た。両手を頭の後ろに添えながら、月を見ている。角が無ければ普通の女の子に見える彼女は、事実倒し続けてきたのだ。天狗達も、天魔も、フランドールも。

戦う度はその感性は鋭くなり、一寸のブレも許さない。そんな彼女に勝つためには、もう人間では手には負えないのだ。

「一旦引きましよう、咲夜さん。分が悪いんです」

「……………くっ!」

咲夜は歯を噛みしめた。目標は目の前にいるのに、寸でのところで届かないむず痒さ。もっと自分のナイフが鋭ければ。もっと自分の力が強ければ、彼女に打ち勝てただろうか。

「……やらないのか。じゃあ私は行かせてもらおうよ」

二人をすり抜け、紅魔館の門を出る。

これ以上の刺激はここにはない。用無しだとばかりに萃香は咲夜達の視線に気付かないふりをして、姿を消した。

「あらあら、結局戦闘にはならなかったんですか？」

固まる二人の元に、小悪魔が舞い降りる。その顔はつまらなさそうで、面白味もない会話に悪態をつく口ぶりは、どこか寂しそうだ。

「……面白いものでもないでしょう。小悪魔、貴女は紅魔館の修繕に向かつて頂戴」「はい……あ、そうだ。苛ついていてる咲夜さんにはこれをプレゼントします。どうぞ存分にお嬢様に使って頂けると」

渡したのは竜殺しと書かれた瓶。小悪魔は萃香に使ったのだが、彼女は耐性があるようであり効果はなかった。無駄の長物となるよりは有効活用してほしいとの事で、咲夜に献上する。出来ればお嬢様にでも使ってあげて、戸惑う姿でも見てみたいものだ。

(つまらないなあ……すっごくつまらない)

小悪魔は嫌なのだ。誰かの掌の上なんて事が。

(鬼ならこんな迷惑な事なんてしないで、適当に能力で幻想郷中に宴ブームでも巻き起こせば良かったのに)

そつちの方がもつと楽しかった……と、姿見えぬ鬼へと呟いた。

——分岐点の恐ろしきとはこういうことで。

この世界も遙か昔、何かが狂って分岐したのだ……と。誰もが一度は考えるような幻

想を、それが本気だと捉える者は常人にして誰もいない。

しかし、常人とは脳の造りそのものが違う賢者であれば、また別なのかもしれない。

「蓮華、頃合いよ」

幻想の賢者がそう告げた。

終わらない因果

「やあ、萃香」

「やつぱり、最後はあんたか——蓮華」

一本道。魔法の森の奥。無縁塚と呼ばれた場所の手前にその場所があった。幻想郷の住民は滅多に来ないためか、道は整備されておらず荒れている。

無縁塚へと続く先に、一人の少女がいた。桃の絵の具を散らしたかのような、無駄っけのない明るい髪色。背丈は小さいが、それでも萃香よりは大きい。

こんななりでも萃香の親友。そして能力だけに關して言えば、幻想郷内でも最強に近いと断言できる。

「こんなところでどうしたの？」

「蓮華……あんたがそれを言うかい」

「思い直すにはこの道が丁度良いってね。紫からさ、聞いたもんでね」

「私は進み続ける。半端はもうお断りだ」

彼女の瞳には明確な敵意が宿っている。三人目の彼女と邂逅してから、初めて向けられる類いの視線。そして今まで多くの者に向けられてきた視線。

(友達と敵からじゃあ、随分と感じ方が違うなあ)

紅魔館で一悶着を起こして、その日から三日が経った。噂とは流布されるのが早いもので、すぐさま萃香の危険性は人里全体に広まり、里を纏める代表者は決断を迫られた。退治か、封印か。

代表者達の意見はこの二つのどちらかであり、萃香が抵抗の意思を見せる見せないにしても、お情けは掛けられる隙間もなかった。——第三者がいなければ。

「進み続けるんだったらさ、私とデートしない？ そんなあちこち破れた服なんて着ないでさ。里でおめかしでもして、普通の女の子みたいに団子でも食べながら一緒に語り合ったりしてさ」

蓮華の口から出るのは毒だ。萃香の意思を弱らせる神経毒。言葉に乗って、その毒は萃香を侵食しようと近付いてくる。もし萃香がこれに屈すれば、萃香が今までやった行いの全ては無駄になり、また振り出しに戻る。友情に依存した自分に戻ってしまう。

「嫌だ……」

「おろ？」

「ごめん、蓮華。私は普通の女の子じゃない」

「へえ。私から見たら、今にも泣きそうな弱々しい女の子に見えるんだけど。……これは幻視かな？」

「蓮華……ごめん。……ごめん。私は一人じゃなかった。沢山の友がいた。不幸なんて思った事もない」

「そう言つて貰えるなんて友達冥利に尽きるね」

「でも私は——。嫌なんだ。おんぶに抱っこ。寄り掛かつて杖代り。そんなの嫌だ！ 私は鬼だ！ 鬼の伊吹萃香なんだツツ!!」

張り裂けそうになるほど、声を出した。

蓮華に伝わるように、声を出した。

想いを吐き出すために、声を出した。

表情なんて関係ない。姿形なんて関係ない。思うがまま、今の萃香を受け取つてほしかった。

「そうか。……そうだったね。萃香は鬼なんだ。その事を……忘れていたよ」

蓮華の口から出たのは、どこか諦めの言葉。そして分かりきっていたかのように言葉を止めた。

「蓮華……あんたを倒すよ。あんたを倒して、証明するんだ。鬼はここにいるんだと。そして指針になるんだ。地下に隠れた鬼達が気付いてくれるように」

「私を倒しても終わりじゃない。その後は更に血が流れるんだ。憤つた人間が。報復に業を煮やした天狗達が。人間に煽動された強い妖怪達が。皆、皆が萃香を狙うんだ！」

指針になる前に殺されちゃうよ！ だからさ……もう止めようよ。ねえ！」

萃香は無言で拳を握った。これ以上言葉はない。何を語っても、萃香と蓮華の主張が変わることはないからだ。

「意思を通したくば戦え」

「萃香……」

「それが鬼の約定だ」

——もう既に、踏み止まる時は踏み越えた。両者にとって言葉もう無意味。

萃香は己の望みを叶えるため。そして正義を高らかに謳うため、蓮華を倒す。

蓮華も萃香を止めるため。友を救おうとする身勝手な願いを成就させる為に萃香を倒す。

ただそれだけだ。

「掛かってきな。もう私は全盛期を上回った」

「ホントは嫌だけど……無理矢理気絶してもらうからね」

「私を気絶させる？ 寝言は寝て言え、蓮華ええツツ——！」

——再思の道。思い止まる事は決してしない二人が、激突した。決戦の火蓋が切られたのだ。

まず蓮華は、結界を発動させる。萃香が警戒しているのはこの能力だ。元々彼女が前世の時より『弱体化している』のは知っている。それでも尚、警戒するに足るのが『界を結ぶ程度の能力』だった。

二代目曰く、世界を創り、それを管理する神として君臨するための能力。設定された効果は、確実にこの世界に顕れる。

(なんだ・・・なんの結界だ？ でもそんなことより・・・)

「蓮華、あんたが結ぶ界は、もう境界じゃないんだね。その成長速度、ちよつとだけ驚いたよ」

「ありがと——ねツツツ！」

この時、鬼の直感が働いた。度重なる連戦で未来を感じるまでに至ったその直感は、蓮華が繰り出した初撃を確実に見切った。まずは左の蹴りだ。狙いはこめかみ。

だがその蹴りは、予想したより数段速く、私のこめかみに突き刺さった。

「なっ——」

「次っ！」

脳を揺らされ、膝が地面に吸い寄せられていく。それまでの短い時間。既に私の腹部には、二発もの拳がめり込んでいた。息が咄嗟に吐き出される。直感でも、経験でも見切れないその打撃。種は彼女が張った結界にこそあるのだろう。

(自分の力を散らして一旦様子見を……!!)

『固定の結界』

「何ッ!?!」

まるで身体が石になったかのように動かない。即座に下を向くと、肩から下が半球の形をした薄い膜に包まれている。

(まさか蓮華は、私の能力も含めて固定したのか!)

「おりゃっ!」

丁度鼻頭の部分に、彼女の爪先が当たった。軽く、小柄である蓮華。人間大の飛び蹴りは、子供程の背丈であっても当たり所によつては大きなダメージとなる。しかしそれは対象が人間である場合によるだけで、人間の身体能力を大きく超える妖怪では、人間の子供程度の蹴撃ではかすり傷も与えられない。

——— 筈だった。

「っはあ、ぐっ———!!」

枝葉をクツションにしなが、衝撃緩和に努める。

蓮華の一撃。それは子供程度の者が放った蹴り———と云うには、あまりにも威力が桁違いだった。

このままでは不味い……と頭のどこかで警報が鳴る。ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる蓮華は、いつも私が見ていた蓮華じゃない。全く別の、それこそ他人だと見まごうような少女だった。

「強い、ね。何か種でも……?」

「紫って物知りだよね」

「アイツか。魔術にも妖術にも知が及ぶ紫の事だ。何らかの術で強化でもしてるのかな?」

「秘密だよ」

一陣の風を纏って、馬鹿正直みたいに彼女が一直線で突っ込んでくる。問題はそんな直線的な攻撃も見切れないって事なんだけど。

しかし手立てはある。蓮華は左腕と右目が無い。当然左腕を使った攻撃は飛んでこないし、右側から来る攻撃には対処が遅れる……筈。

先ずは目の前の対処だ。蓮華は体ごと私に体当たりしてくる。その衝撃、威力は尋常じゃない。まるで砲弾のようだ。私は踏ん張る事も叶わず、空へと舞い上がる。眼下へ森が広がっていた。地平線の奥まで一面の碧色。そして直下から迫る桃の色。

(景色なんて見る暇も与えてくれないのか)

私は咄嗟に三つの分銅を出し、扇状に展開した。分銅は鎖で繋がっており、端の端ま

で私の思うがまま。分銅は樹林の頑丈そうな幹にそれぞれ巻き付き、私の上昇を止めた。次にギシツと張りつめた鎖によって、しっかりと巻き付いた事を確認する。

「次はこっちの番だよ！」

三つの鎖を片手に纏め、鬼の腕力で思いきり引つ張った。流石に三つの大木は鬼の力より頑丈で、根を隆起させながらも、大木は折れずにその場へ居座っていた。

生まれたのは反作用。授かったのは加速だ。迫り来る蓮華に向かって、重力を味方につけながら突撃する。

頭と頭がぶつかり、衝撃波が広がる枝葉を揺らした。お互い無事ではなく、血が額から滲んだ。

(まだまだ。蓮華はまだ倒れない)

断言した。確信では断じて無い。未来が既に分かっているような、予知に近い信用。彼女は起き上がってくる……と、まるでそれが確定事項のように盲信する。

そして萃香が立ち上がると同時、蓮華も立ち上がった。驚きも何もない。分かっていたからだ。それよりか安堵の気持ちの方が大きかった。

「いつつ……防衛力はあんまり無いのに……」

「嘘吐き。十分ある方だよ、あんたは」

「嘘と謙遜って何が違うんだらうね？」

「そりや意識の問題さ。思っているか、思っていないか。そうであるか、そうでないか。受けとる側の考え方の違いだね」

「それじゃあすつごく意地悪」

「意地悪じゃない存在なんているかい？」

まるで普段の会話をするように。淡々と行われる両者間の会話は、一時の戦闘を忘れさせ、少しだけ友人との時間を双方に思い出させた。

けれど蓮華は止める側。萃香は進む側。相反する二つの関係。これを敵対と言わずしてなんと言うか。

もしこの時どちらかが妥協していれば。

ただの喧嘩……で終わる可能性があったのかもしれない。

「蓮華、もう夜だ」

「そうだね。今夜の月は綺麗だ」

「でもあんたは敵だ」

「今は敵だね」

「邪魔する限り永遠に敵だ」

「私は何度でも言うよ。今だけが敵だって」

「あんたは私についてくるのかい？」

「紫と幽々子を置いてはいけない」

「だったら私が言うことは一つだけだよ」

萃香が告げる言葉。

それは友との決別を意味した終わりの言葉。

「我が名は鬼の四天王伊吹萃香！ 邪魔立てするなら容赦はせん！ 物の怪よ、塵の山に沈めッツ！」

「萃香……。私から掛ける言葉はもう品切れ。だからその喧嘩、買ってやるよ！ 売るのはもうゴメンだ！」

鬼の伊吹萃香は、たった一人の少女に勝負を挑んだ。

お互いを敵と認識し、闘争という形で喰らいあう。

「死にな。四天王奥義《三步壊廃》！」

「今だけのとつておき。《夢想反射境》！」

それぞれの最大奥義が、敵を倒す為に。敵を超越する為に。各々の形でぶつかった。

思いつきり

——まず、最悪を想定しましょう。

目の前の、蠱惑を体現した女性がそう言った。はち切れんばかりの胸を両手で沿え、私達に語りかける。

「妖怪と人々との決裂。戦争。人々は蹂躪され、妖怪は闊歩する。その結果、両方が倒れ、命の火を消す」

確かにそれは最悪だ。

何も産み出さぬ。いや、産み出しても徒労に終わる行為は無駄以外の何物でもない。

私達でもそれだけは避けたかった。人里の代弁者として、その代弁の意味を無くすなど、相당한痴呆でもなければやらない。

「でしよう。やはり人と妖怪は共存するべき。……ですが、今宵の鬼の大暴れには、貴方達も早急に対策を取りたいでしょう。今では危害がないとしても、今後ともそれが続くかは分からない。見えぬ恐怖からきた心を蝕む毒。先行き真つ暗。進んで暗闇に飛び込む人間はいませんわ」

今の人々の様子は、ハッキリと言って最悪だ。不安と恐怖が混線、伝播して、一種の

はその結界で萃香を覆い、妖力弾を幾つか放つ。

妖力弾は倍の威力を伴って、跳ね、跳ね、跳ね、跳ね。数を増やしていく程に萃香の居場所は少なくなり、逃げ場も無くなっていく。

紫から貫つた力。それは式神のシステムを応用した妖力ブースト。私は妖力が無いのがネックで、能力がエゴだから良いけど、今までは妖力弾さえ放てなかった。故に、近距離に持ち込むしか私に方法は無かったのだ。

「……」

萃香は一言も発さずただ躲している。彼女は何を考えているんだろう。

私は彼女を否定する事は出来ない。彼女の選んだ道は決して間違っている物だと言えるような人生なんて、私自身歩んでいない。押し付けもきつとあったはずだ。こうは思いたくないけど、自己満足と片付ける事も出来る行為だ。

「なあ萃香。萃香は何を見ているの?」

「……………」

「どこに向かっているの?」

答えない。

いや、分かっている。分かっていた。彼女は答えを言わない。言っても意味もない。真っ直ぐ視線を上げた。そこには因縁の鬼の姿。視線が交差する。逸らしてはなら

ない。逸らしたら……なんだか負けた気分になるから。

「蓮華。あんたには色々教えてもらった。こうやって敵対しているけれど、あんたには感謝しか湧かないよ。それと、ちよつとだけの期待」

既に萃香の逃げ場はない。あと一步でも進めば蓮華が放った妖力弾の餌食となるだろう。

「ここが好機。そう思った蓮華は、萃香を仕留めようと歩を進めた。

「でもあんたは変わってないね。新しくなつても、蓮華は蓮華だ」

「萃香、私はあなたの思い描く蓮華じゃないよ」

「それでも、それでもさ。私を止めるためにこうやって戦いを挑む姿、いつかの大江山と被つちまうよ」

そう言つて、鬼はどうとう進みだした。一步、一步。大地を踏み締めるように。その歩みには迷いはなく。そしてその歩みを止める何かは無い。

—— おかしい。

気づく。今萃香が行つた動作。その違和感を。

「なんで弾が避けていくの……?」

驚きを露にした蓮華。その表情が見れたことに少し嬉しさを感じながらも、萃香の足は止まらない。

そして、ついに萃香は結界の端へ辿り着き……抜けた。

蓮華の結界。それは不落と呼んで差し支えない程に固く、頑丈で、強い。中にいるものに必ず特定の効果を表す性質上、内部にいる者を閉じ込めるために生半可な出力で結界を形成してはいない。

むしろ、その中で敵を仕留める為に破れないよう幾つか工夫もされているはずだ。

そんな結界が意図も容易く。まるで散歩をするように、あっさりと解除された。

「なんで……」

「蓮華、あんたは変わってない。本当に何も変わってないのさ」

「変わって……ない？」

「結界でもなんでも、物体には一番集中する場所が必ずある。私はかなり昔、あんたと同じような技を使う奴と何度も戦っていてね。どこが脆いか、どこが集中しているか、もう完全に覚えきっているのさ」

そして彼女は。

「無意識も意識の内。あんたは以前と変わってないから私に敗れる。私の存在を疎めるだけで、結界も簡単に崩れてしまう」

そう言い切った。

「さあて歯あ食いしばれ」

自由になった萃香。その強靱な脚力で十数mもあつた距離が一瞬にして縮められる。圧倒的だった。見誤っていた。慢心していた。

伊吹萃香。彼女は決して、私との戦いで油断などしていなかつたのだ。

鬼の嵐のような乱撃が蓮華を襲う。

紫のバックアップがあるとはいへ、彼女の拳を数発でも受ければこちらだつてただではすまない。

フランの時のように、我慢しながらなんて絶対に無い。確実にその凶器は私の意識を刈り取っていくだろう。

(固定の結界、多重展開!!)

空間と同等の硬度。量ることなど不可能であり、空間内に生きている以上、空間の硬さを超える威力なんて存在しない。空間を固定したその結界は、まさしく絶対の防御。そしてそれを裏付けるように、萃香の拳を簡単に阻む。

(一旦距離を取って——)

だが、萃香は蓮華を逃がす気など更々なかつた。

「慎重だね。知っていたさ」

メリツ、と大気を震わせる程の踏みこみ。

何の意味もない、ただの威嚇。けれども蓮華には、その行為がどうしても無意味だと

は思えなかった。

「あんたは記憶を失っているけれど、別に戻らない訳じゃない。その結界の使い方が、何よりの証左さ」

「そしてあんたは知らない。私の能力の真意を」

萃香を中心として渦巻く生暖かい風。

それは徐々に、徐々に右拳へと集まっていき、紫電を灯らせた。

「これから見せるは己しか知らぬ鬼の奥義。はつきり言つて相当痛いけど気にすんな！」

確かに、萃香へと集まるエネルギー量はそこいらの妖怪を軽く凌駕する。今まで見た中でも一番、いや二番か。それほどの圧力、熱気、そして密度。

既に萃香の拳は赤へと変わり、周りの空気を融かしていた。彼女は本気だ。本気で私にその技を叩き込むつもりだ。

萃香との記憶は、まだ新しいところで終わっていた。

萃香とは初めて戦った。

萃香とは異様にあつさり友達になれた。

それは私自身もどこか懐かしい気持ちを感じていたからなのかもしれない。

彼女は知っている。以前の私と言う奴を。私の心の中に眠るお調子者の女性を。

正直に言うとは、萃香と戦うのは嫌だし、怖い。ずつと綱渡りをしているようで気が抜けないからだ。

私は笑っていたい。そして皆と笑顔でいたい。

その為にはこんな血生臭い事なんて止めたかった。

今にでも逃避して、チルノちゃんや大ちゃん、フランちゃんやお空とお茶でも飲んで談笑したい。

したい……————けど。

「———私はいここで逃げる訳にはいかないんだ。だって、萃香とも笑顔でいたいから。無理な相談だと笑つても良い。それでも一緒にいたいから。だから、こっちだつて正々堂々と受けてやる!!」

「三步で十分———四天王奥義『三步壊廃』!」

一瞬だけ見えたのは、つり上がった口角。

———ああ、ちよつとだけだけど笑ってくれた。

私は最大限の結界を幾重にも張り、萃香の奥義が放たれる瞬間を待つ。

「一歩目」

萃香が踏み出した。

「ぐ、え——、あ」

結界の数。正確に表すと100と8つ。

その全てに紫から授かった妖力を上乘せして、最大限の防御を展開していた。

……私の目には硝子が割れるように散らばった結界の残骸が映っている。

私の妖力はもうすつからかんで、今まででも一番の妖力を注ぎ込んだその結界は、私の自信と共に儂く散った。

萃香が放ったのはただ一つ。

己の拳。

肩から真つ直ぐに突き出された最大の武器。

その余波だけで、私の結界が全て霧散したのだ。

「二歩目」

結界が無くなったと言えども、距離はまだあった。

それも十数mの心許なさだが、今の私には十分だったはず。

けれど鬼の一步は容赦をしない。

二歩目でその十数mは無と化したのだ。

「は、——嘘つ、」

私を守るものはもう何も無い。

一步目の余波で体勢は崩され、妖力は使える分だけ全て使い果たした。

私にはもう道は一つしかないのだ。甘んじて受ける道しか。

激しい熱を纏ったその拳。

圧倒的存在感を放つそれは、吸い込まれるように私の腹部へと突き刺さった。

まず最初に感じたのは服の上から感じる、くつつくような鬱陶しい熱だ。まるでそれはベタついた汗のようで、服と肌に張り付いて離れることはない。

次に風だ。

私は上空に飛ばされたのだろう。

背を伝って駆け抜ける風の鋭さと冷たさが、腹部と対称的になっていたのが印象深かった。

最後に、脱力感。

全てを投げだしたい。容易に意思をへし折る身体の不調。内容物の競り上がりを感じながら、私は天空へと意識を手放した。

血飛沫が跳ぶ。

空から流れる湧き水のように、口から血を吐いた。

身体に力が入らない。意識も消えそうに消えないどこか曖昧な状態。

あー、なんかもう疲れたなー。

正直言つて戦うの私嫌いやねん。

日和見主義と言われても良いから、縁側で猫の世話をしながらごろごろしてたいねん。

落ちる感覚つてなんだか嫌いじゃないかも。

何故か恐怖は無いし逆にどこか安心感さえある。

あの母なる大地への帰還。

その悦びのせいなのかも。

なんだか口や鼻から血がどんどん出てきてる。

視界もなんだか紅い。

あ、やべ。今更だけどこれ、息出来てないやつ。

まあいいか。息出来なくても困ることなんてないでしょう。

眠たい。異様に眠たい。

微睡みが私の奥底へと侵入してくる。

メーデー。メーデー。睡魔が侵入しました。

情報中枢を突破。速やかに睡魔を駆除せよ。
……ああ面白い。エヘヘ。うひひ。

「三歩目」

力。

そう言えば、もう一つあったんだった。

「加速の結界。多重展開」

私は重なるように結界を展開する。

使ったのは、少量ばかり残っていた“神力”だった。

落ちる速度が速く、疾く、迅くなっていく。

萃香の口角が上がるのを確認する。

さあ、三歩目だ。

私の腕は一本しかない。だからどうした。

動かなくなってもいい。壊れてもいい。私の身体は貴女達の為にあるのだから――

「固定の結界」

拳を強く握って、固定した。

「重力の結界」

速度と威力を上げるために重さを上げた。

「加速の結界」

そしてもう一度。保険と言わんばかりの結界を重ねがけして、萃香に挑む。
治癒を使う暇はない。

思いつきりぶつけろ—— ツツツ!!!

負けてたまるか

「お待ちになつて？」

——そう、凜とした声で女は言った。

「どう致しましたかな？ 賢者殿。まさか……今更妖怪の味方をするなどと……妄言を口にするわけではあるまいて」

「ええ、ええ。分かつております。私は中立。然らば人である皆様に一言提案を、と思ひまして」

女はその妖艶な唇を一舐め。口を潤すその動作すらも、人間の心を強く掴む。まるで魔性だと、集まりの中の一人が思った。

「……で、提案とは？」

自然と声に陰が入る。人間とは訳が違う。目の前の女は人の形を模した化生なのだ。

けれど女にとって、自分達は家畜のような存在。すぐにでも殺せる食料のようなものだが、家畜は食べ物。無くなれば主人は生きてはいけない。

「何も何も、簡単な事でござります」

「先に言つておこう。それはあの暴れ鬼を殺せる算段か？」

もし女が自分らを刺せば、その刃はそっくりあちらへ返っていく。

だからこそ人間の纏め役は、胡散臭い風貌の女に一気呵成で叫んだ。

「我らは生半可な気持ちでここに集まった訳ではない!! 人は怯えているだけではダメなのだ。今こそ妖を討ち、人の怖さを妖怪どもに思い知らしめる契機! それだけは反故に出来ん!!」

言った——!

言つてやつた——!

……と変な達成感を感じながらも男は息を整え、所定の位置に戻る。

女はその様子を、観察するかのようじつと見つめていた。文句を言うわけでもなく。嘲るわけでもなく。ただただ、その男の様子を眺めていた。

その態度がどうも不気味で。

男衆の活気だった勢いは、彼女の視線によって冷やされた。

女が心の中で「早くお家帰りたい」などと呟いている事なんてつゆも知らず、男達は戦慄していた。

彼女が背負う危機迫った雰囲気、気圧されたのである。

「あああああああ！」

落ちる。

そう、頭が理解する頃には、萃香はもう目の前にいた。こんなこと初めての経験だった。

ぶつちやけ、かなり怖い。落ちた時にどうやって着地しよう、とか。地面に当たったら痛いなあ、とか。夢想する事しか出来ないのが私です。

「蓮華ツツ！　ここぞ終わらせてやる！」

待ち構えるは私の友人。

強い女の子だ。恐ろしい鬼だ。優しい友達だ。

印象は数多くあれ、相對するは伊吹萃香ただ一人。

私は今からこいつを殴らなきゃいけない。

止めなきゃいけない。

じやないと紫がやってくれたこと、その全てが不意になってしまう。

私に残された右腕が、一直線に軌跡を描く。

萃香の力が籠った右腕が、私を叩き落とそうと円運動のように同じく軌跡を描く。

(全く……いつからこうなったんだっけ)

衝撃が左頬を叩く。でも私の拳から伝わる衝撃はそのままだった。

やばいな、あんまり当たってない。

「げう——ッ——」

視界がチカチカと点滅した。

身体が草木の柔らかい地面に叩き付けられて、小さくない悲鳴を上げる。

「ふう、——ふう、どうだい蓮華。もう立てないだろ」

揺らぐ意識の中、そんな声が耳を叩いた。

足に力を込めても空回りしてしまう。

腕に力を込めても肘が折れてまた元通り。

畜生、ここが限界か。妖力も神力もすっからかんだ。

——大丈夫さ。

枝が折れる音が、地面を伝う。萃香が近付いて来ているのだ。

——全ての力を使ったことで、私の封印も弱まっている。

無力な私はただそこで立ち上がる事も出来ず、自分を恨みながら歯を食い縛る。

——さあ、手放してごらん。

うん……そうだね。

もう疲れた。痛いのは嫌だ。動きたくない。お家帰りたい。炬燵に入りたい。遊びたい。紫と幽々子は元気かな。コーラ飲みたい。お腹減った。何も見えない。何も聞こえない。どうしようもない。ああやめやめ。萃香は何してるんだっけ。あれ？ 萃香……誰だったっけ。萃香……萃香……えっと、えっと——。

「ねえ」

光が射した。

『何寝てるんだい』

古ぼけた思い出。

「これで終わりかい？」

新しい光。

『ほら、もう一回やるよ』

それは知らない光景。知らない景色。知らない声。

「あんたならまだやれるだろ」

——以前違和感を感じた事がある。

チルノ達とお泊まり会をしたときだったか。

萃香は顔を赤らめながらかまくらを襲撃した。けど彼女と話していく内に何となく分かった。

「萃香……酔ってない」

そう、酔ってなかったのだ。話している最中、すぐに酒が抜けたのか素面に戻っていい。そんな様子はどうにも無理しているように感じられて。

だから、お節介だけど手を伸ばしたんだ。

『萃香の事が知りたいんだ』

「萃香と分かりあいたいんだ」

『理解までとは程遠いかもだけど』

「貴女と共に、酔狂に浸りたい」

『『どうもそれだけは、変えられない』』

私はくぐもった声を漏らしながらも、何とか立ち上がる。

立ち上がった先には萃香がいた。

しばし見つめあう。

瞬間、二人同時に相手の顔を殴った。

「ぐうっ————良いパンチだね萃香」

「蓮華も……まあまあいい感じじゃない？」

近づき、殴る。

痛くてたたらを踏むけど、もう一度近付いて、殴る。

三度。

四度。

五度。

幾度も交差する拳。

カウンターもせず。あえて受ける。

そこに意義は無いけれど、確かに意味はあった。

「ハッ、流石だね蓮華。鬼の拳をこんなにもらって立っていられるのには驚いたよ」

血の混じった唾を吐き捨て、萃香は楽しそうに言った。その表情は今までと違って明らかに輝いており、伊吹萃香そのものの在り方が露出していった。

「私は、頑丈なだけが、取り柄——ヒィ、——なんでね」

——何をしている。

——萃香の奴は、能力を封印している。

——ミツシングパワーも無い今。

——あなたが有利なのよ。

——何故手放さない。

——何故殺さない。

——知らないよ。黙ってて。

視界が半分無くて、腕も半分無い私は萃香より不利。だから彼女に勝つためには、萃香の行動の先の先。裏の裏を読んで戦うしかない。

「ちよつとだけ痛いかも」

私は萃香の拳が飛んでくるのに合わせて屈み、足払いをお見舞いする。

だがそう巧くはいかないようだ。萃香は倒れず、硬直の一瞬の隙を突かれた私は、萃香に襟首を掴まれた後、思いきり投げられる。

地面をごろごろと転がって受け身を取り、すぐさま立ち上がって突貫する。

よろけそうになるも気合いでカバーし、鼻先から垂れる血を舌で一舐め。最短距離を見据え、大きく跳躍した後に蹴りを放つ。

萃香はそれを手の平で受け流し、お返しとばかりに腹部へ肘を打ち付ける。

空気が逃げた。

そして追い打ちをかけるために更にもう二発。胸と顔にパンチを受ける。

力なく地面へ沈む私。痛みに堪えながら、もう一度立つ。

立ち上がり様、殴られる。

衝撃で顔が上を向き、痛みによる硬直を味わっていると、また一発くらう。

足をガクガクと震わせながら一歩二歩後退するが、萃香は容赦しない。距離を詰め

て、今度は私の意識を刈り取ろうとその鎌を振るう。

一撃。二撃。お腹へ一発。靴で私の足を踏んづけて動きを止め、鳩尾に一打。力強い一発だった。

流石に体にガタが来たのか、もう私の体は動かなかつた。

(まだだ——)

足を体の重心ごと傾けて無理矢理動かす。

荒い息を吐いて、今度はこちらの番だと言うかのように、近付いてパンチを繰り出す。それは渾身の力を込めていたはずだった。でも萃香はピンピンとしている。

[……………]

(も、もう一発……—)

肩ごと、もう一回。

何度でも、何度でも。

萃香は避けない。耐える仕草すら見せない。

「あ、——う、ぐう——あああ！」

喉に激痛が走るも、必死に叫ぶ。

真つ直ぐに放たれた私の右腕は——。

なんとも情けなく。なんとも儂く。

萃香の目の前で、だらんと落ちた。

萃香が今にも倒れそうな私を見て。

ああ、やめろ。そんな目で私を見るなよ。くそ。

届かない。後数歩がどうしても遠い。

力が籠らない。籠めろ。

足が動かない。動かせ。

視界がボヤける。ちゃんと見据えろ。

燃えカスのような精神の残滓を原動力にして、私は体を動かす。

動か——……………あれ？

なん……………で……………地面が起き上がって……………。

あ。

偽者の饗宴

「……………分かったわね？」

賢者が提示した条件。それはまた別の選択肢として里のお偉方の頭を悩ませていた。結論その案は一番平和的であり、そして一番保守的でもあった。犠牲は出さない。けれど鬼の案件も片付けなければ、おちおち眠れない。

その旨を一人の男がおずおずと賢者に伝えると、賢者はたった一言。

「その件は任せて」

……………と。

自信満々で言い放った。

その姿に人里のお偉方は気圧され、どよめきの声を上げる。

だがその真相は賢者の口からは告げられず。

その自信にすがれば……と淡い希望を胸に抱いた男達は賢者の提案に渋々同意する。

綺麗に開かれた扇子の裏で、賢者が口角を上げている事に一切気付かず——

ハッ、馬鹿め。

意識を手放しやがった。

私を封印する妖力はすつからかん。

だが神力が足りん。

まあ萃香程度、どうとでもなるか――

蓮華が地面に伏すのを見届けた萃香は、彼女を一瞥したあと、首を振って雑念を振り払った。

もう彼女とは友達ではない。何故ならば私は彼女を傷付けて、蓮華の友達である萃香と決別したからだ。合わせる顔なんて無い。いや、彼女が生きていたとして、もう自分と関わることは無いから丁度良いか。

そのように割りきった彼女は、自嘲気味に鼻で笑ったあと、その場を後にするべく蓮

華の横を通り過ぎた。

——ガシツと。

ナニかが足首を掴む。足首を掴んだその力は、思わず悲鳴を上げるほど強く。それでいて明確な殺意が肌を伝って感じられた。

「逃げんなよ、萃香ア。まだ終わってないからなあ」

蓮華、と思わず口にしてしまった。確かに今私の足首を掴んだのは蓮華だった。蓮華じゃない。蓮華 “だった” のだ。

彼女は “ボロボロな筈” である体をまるで操り人形のように不自然な動きで無理矢理起こし、今度はこちらを睨み付けてきた。その真つ赤な瞳で。紅瞳じゃない。瞳が充血した、まさに血の瞳。

私はその相貌に魅了でもされていたのか、足首を掴んだ腕が離れていた事に気付かなかった。

「なんだよその驚いた顔。私だよ、私。蓮華だよ。あんたのトモダチさ」

自分の事をトモダチ、と詐称したそいつに喉の水分が持っていられる。

「……ははは、冗談言うなよ。——お前誰だ」

極限にまで極められた鬼の直感が、こいつの危険性を何度も訴えていた。勝てる勝てないじゃない。こいつの対処法は、どうすれば戦わずにすむか、だ。

ハッキリと言って次元すら違う不穩分子がこいつから感じ取られた。

「ちよつとだけマジックをば」

目の前の蓮華の形をしたナニかは、そう言つて服の袖を破き、無くなつていた片腕の切り口を私に見せてきた。

「それがどうしたんだい」

相手の見えぬところで思いつき力を溜めておく。もしコイツが変なことをしたらその瞬間に己の全力を叩き込んで逃げてやる。………逃げるのは凄く不本意で、恥辱ものだが、どうも既に足の方は逃げようと準備を始めている。

(こりや参つたな。勝てないや、どう考えても)

無意識にそう思つてしまった。

戦う前に思うなんてどうかしてる。本当に。

「八雲紫印の眼帯も、ほら」

彼女は更に眼帯を外し、ぐちゃぐちゃに握り潰してそこらの植木に捨てた。そしてその行動で確信した。

やはりこの女は蓮華ではない。蓮華はそんなことする奴じゃない。現に幽々子との

いさかいの後、紫から貰ったその眼帯を後生大事そうに持っていた。あの受け取った時の笑顔は、演技では出来ない。出来て堪るか。

「ひひひ、じゃあやろうか。目をかっぽじってよく見てね。《創世円環・輪廻応報》
 そして彼女は驚くべき事をしたのだ。

「腕が……………」

近くにあつた木々。その枝。葉。そして足元の地面。土。小石。泥。そして大気の窒素から酸素。ネオンに至るまでその無くなった腕と眼球に集まっていた。

まるであるべき場所に戻るように。砂時計の砂が逆流するように。それは肉を、骨を、神経を形成し、創り出していった。

蓮華に無かつたもの。蓮華が差し出した代償。

左腕と、右目。その二つが、まるで元から代償が無かつたかのように、彼女の体へと戻った。

「ふいー。これで漸く活動できる。さてつと……萃香さ。今の私は何に見える？」
 「……………大化生め」

「やめろよ。そんなちんけなものとはべんなって」

「なにつ……………ごあ——ツツツツ！——あ——」

腹部に打ち込まれたものがなんだったのか。萃香には見ることさえ叶わなかった。けれど奴が左腕を振るった事だけは分かる。

地面と平行に十数mも吹き飛ばされた萃香は、頭を守りながら木々をクツションとして衝撃を殺す。痛みは尋常じゃなかった。多分今の一撃で内部の臓物が幾つか破裂しただろう。それを有り余った妖力で回復させながら、距離を取れたことに安堵する。

「奴とは一旦体勢を立て直し——」

「立て直してどうするの？」

「うしっ——!？」

回復に回していた妖力をフル活用し、何とかその攻撃を地面に倒れ込むことで回避する。

萃香の頭があつた筈の場所。そこに桃色の軌跡が通つた。

「おっと、避けたんだ」

「そりゃ避けるさ。死にたくないもんでね」

萃香は無防備な状態で立っている蓮華に向かつて、拳を突きだす。それは今まで通りの拳を放つ為ではない。照準を合わせる為だった。

掌には髪の毛が十数本握られており、回避を取つた時に予め千切つておいたのだ。あらかじ

「取り敢えず、話を聞くために無力化しようか。鬼群『インプスウォーム』」

髪の毛を触媒として、己の力の一部を持った分身を造り出し、蓮華へと差し向けた。力を一部とはいえ、あの萃香が元なのだ。造られた小鬼だとしても、並の妖怪よりは力が強い。

それが十数匹。蓮華は何故か一步も動かず、小鬼萃香に囲まれて覆い被される。

鬼の群がうじゃうじゃと蠢き、内部で光と爆発が起こる。小鬼達の攻撃が始まったのだ。命の有無を含まない、容赦無しの弾幕が散らされ、小規模の爆発を見舞った。これでは流石の蓮華と言えど、幾らかダメージは受けるだろうと高を括つて。

(よし、ある程度回復は済んだ。蓮華もこれくらいでくたばる魂じゃなし。……いや、こいつが蓮華だと決まった訳じゃない。最悪この手で……)

ーその時だ。

爆発が起こる。

ここら一带を吹き飛ばす程の、強すぎる閃光と威力を伴った爆発が。

当然それは萃香も例外ではなく。

いきなりの出来事に為す術も無かった萃香は咄嗟に体を守ったものの、爆発の余波で上空へと吹き飛ばされてしまう。それこそ広大な魔法の森が見えてしまう程に。

つ、一体何が

直下を見下ろす。蓮華を拘束していた小鬼達は跡形も無く消えてしまい、自分達が今

までいた場所は地形が変わるほど抉り取られていた。

そして萃香の視界に映る物には、一つだけ要素が足りなかった。

「……蓮華だ。蓮華がないのだ。」

地上を見回して、妖力を探しても。今まで目の前にいたその存在が、まるで神隠しのように消えていた。

代わりに聞こえたのは、バシユつと何かを射出する音。初めて聞く音だった。

“その音は徐々に徐々に徐々に間隔と距離を縮めている” ようで、次第に未知への不安が募る。

“物体が近付いている”と感付いたのは、その音の間隔がほぼ無くなり。そして己の前髪を舞い上げる突風が吹いたのと同時だった。

「気付いた時には既に遅い」

萃香は理解した。バシユつという音。それは詰まりの悪い栓を掃除して、中に流れる物を取り出す時の音。

“姿を消した蓮華”は、どのようにしたのかは不明だが、何らかの仕掛けをして気配を消し、調節していたのだ。己の力を。萃香を殺す為に必要な力を取り出すために。

爆発は試運転。一回栓を外しただけだ。

萃香はただ、分かってしまった自分の思考を恨むように、静かに姿を消していく。

己の密度を塵以下にまで疎めて、大気と一体化する。

—— “そうしないと死ぬからだ”。

一筋の雷が空を割った——。

垂直に、愚直に放たれたソレ。

大気の塵ごと排除する意思が感じ取られた殺意の一撃は、空を覆う入道雲を貫通、一瞬にして散らし、大気圏を越えて暗き海へと突き進んでいった。

余波は小惑星を軒並み破壊し、遙か彼方の別の惑星にも多大なる衝撃を与えた。

瞬きする間に起こった一瞬の号砲。

音も無し。風も無し。人々の目には突然雲に穴が開いたとしか見えなかっただろう。

もし、萃香の対応が一瞬でも遅れていたら、彼女は今頃宇宙の旅を体験していた。

そして驚くべきは威力だけではない。

(……ハッキリと見えていた。蓮華がこちらに突撃する瞬間も。そして何をしてこうなったかも)

萃香は恐怖を感じた事は何度かある。

萃香は諦めを抱いた事も何度かある。

しかしそれら全てを越えて、今ここに萃香がいるのだ。

だが今回。萃香の胸中に沸き上がったのはそんな感情が霞むほどの…… “呆れ”

だった。

(蓮華はただ、ただ蹴ったんだ。空中で、私の目の前で、腹を抉り取るように)

大気の中に混じっていた粒子が集まり、霧状になっていた姿は元の姿を取り戻す。

……つべこべ考えている時間なんて無かったのだ。

やれることは一つだけ。

逃げることも、見なかった振りをすることも。

今の萃香の選択肢に無かったのだから。

「ちえっ、当たらなかつたか」

(蓮華は飄飄としているけど、蹴ったときの衝撃は自己にもかなりの負担を掛けたはずだ)

(その証拠に、未だ動きを見せず、蹴ったままの姿勢で固まっている)

(この瞬間がチャンスなんだ！ 力を全て使って、蓮華にとりついた悪いものを排除する——ツッ！)

自分の体を一度崩し、蓮華から見て遥か上空へと姿を現す。

「萃香あー！ なあーにしているのぉー！」

大声で叫ぶその姿は紛れもなく蓮華で。

声も、顔も、仕草すらも一緒で。

でも、友達だから分かる。

今あそこに潜んでいるのは悪意だけだ。

どうしようもない不浄物だ。

あんなもの、蓮華であるはずが無い。

——天に炎が咲いた。

——想いを形に。形を炎に。

「……鬼火『超高密度燐禍術』」

業火が渦となり、萃香に巻き付いていく。

空気を蹴り、一直線に落ちていく炎の塊。それは青空に軌跡を描く一つの隕石のよう
で—————。

「ハハッ、決着着けようって事ね！ オツケー、オツケー！ これから先萃香には居ても
らうと困るから、ここで楽に済ましてやるよ!!」

その隕石に立ち向かう一匹の蓮華。

右手には高密度の結果が張られており、それごと萃香にぶつけるようだ。

両者とも、目的は違えどすれ違う。

蓮華と萃香との始めの戦い。それが回り回って因果のように。ここで決着を着けよ

うと囁いていた。